

就職することが出来る仕事は提督だけでした。

狛犬太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大学4年生、それは就活という戦争を戦う戦士達のことである。そんな海軍大学四年生の主人公、相良航希（さがらこうき）もまた就活戦争に身を投じる戦士の一人だった。

大学での成績はそこそこ良好である航希は海軍へ就職せず、一般企業へと就職するつもりだったが来るわ来るわのお祈りメールと不合格通知の数々。

これで駄目なら来年第二新卒としてやり直そうと考えていた所、目に飛び込んできたのは採用通知！

『採用通知 海軍 提督職として相良航希を採用する。』

「絶対行かねえからなあああ!!!」

果たして彼の艦羅針盤はどのような道を示すのか!?

そして一般企業に就職できるのか!?

# 目次

プロローグ 就職先は鎮守府でした。

就活戦争1日目	4
就活戦争2日目	13
就活戦争3日目	23
就活戦争4日目	39
就活戦争5日目	51
就活戦争6日目	61
就活戦争7日目	72
就活戦争8日目	84
就活戦争9日目	95
就活戦争10日目	109
就活戦争11日目	119
就活戦争12日目	133
就活戦争13日目	145
就活戦争14日目	156
就活戦争15日目	164
就活戦争16日目	173
就活戦争17日目	184
就活戦争18日目	195
就活戦争19日目	210
就活戦争20日目	223
就活戦争21日目	233
就活戦争22日目	242
就活戦争23日目	253

就活戦争34日目	394
就活戦争33日目	381
就活戦争32日目	366
就活戦争31日目	355
就活戦争30日目	346
就活戦争29日目	336
就活戦争28日目	320
就活戦争27日目	307
就活戦争26日目	293
就活戦争25日目	275
就活戦争24日目	264

## プロローグ 就職先は鎮守府でした。

風が運んでくる磯の香り、聞こえるのはウミネコの鳴き声……をかき消す砲撃の音。

頑丈な門の先に見えるは立派な赤煉瓦の建物。

なぜこんな所にいるのかって？

それはこれから俺がここで働くから……いや、働く事になってしまったからである。

「いや、まだ大丈夫……。引き返して電車乗って、家に帰って、辞表書いたら郵送して……来年第二新卒としてどっかの企業に就職すればいいじゃん!!よっしや帰ろウボアー」

唐突に首根っこを捕まれ持ち上げられる。この圧倒的なプレッシャー……まさかっ!?

「帰れると思いますか?ここに印の押された契約書もありますし、茜(あかね)さんと藤太郎(とうたろう)さんの承諾も得てますから帰ってもまた連れてこられるだけです。諦めて下さい。て・い・と・く。」

誰かな?仲良くお手手を掴んでくる子は?……

「淀姉さん!?!待って待って!!淀姉さんがいるなんて聞いてないよ!?!オーケイオーケイ、分かった話し合いますよ。その握った手に力を込める前に!!」

軽巡『大淀』彼女の艦娘としての名前であり実名は淀川恵、通称淀姉さんである。

それにしても……親父と母さん……信じてたのに!!既に淀姉さんの手が回っていたか!!

圧倒的……っ!圧倒的制圧力……っ!!

全くもう……。と離してくれたがそもそも俺はこんな所に来る気なんて

「何処か具合が悪そうですが如何致しましたか提督?」

「滅相も御座いませぬ。本官は至って健康体であります。」

焦りすぎて候補生時代の教官との話し方になってる。具合?悪

いよそりや。だって……。

「あ、いたいた。提督、大淀さん。」

「こーちゃんだ!! 楽しそうっばい!! 夕立も交せて交せて!!」

「おぉーこーちゃん、ここの配属になったんだ。これから楽しんでねえ。」

「北上さーん! 待つてよおー! ……げ。」

「アンタ達、ほんとに騒がしいわねえ……。もう少し静かになさいよ。ほら、退いた退いた。不本意だけど私が初期艦らしいからアイツの提督姿を拝んでやろうじゃない。」

こんな風に他の連中も居るんだもんなあ。

はああく揃いも揃ってぞろぞろと……。

時雨、夕立、北上、大井、叢雲とは海軍学校高等部の知り合いだったりする。因みに淀姉さんもお家がお隣で高校の先輩でした。まさか他にも知り合いが……

「ちなみに知り合いの方々結構ここに居ますよ? 私の方で色々手配しましたから。」

淀姉さん心を読まないでほんと怖いから

「では、皆さんをぞ存知かと思いますが提督、自己紹介の方を」

ああ、助かった。このままだとメンタルが崩壊する所だったよ。なんだっけ? 自己紹介? そうだなあ……

「ええ〜本日付けでここを辞めることになった相良航希(さがらこうき)です。短い間でしたがありがとうございます。これからの皆さんのご活躍を心より願っています。…そして私の右腕が持つていけないことも願っていますうううがあああ!!」

「禁忌に触れたもの、求めすぎるものにはそれ相応の対価が必要になりますので今回は右腕を頂いていきます。」

俺は自己紹介するだけで人体錬成を行っていた可能性が微レ存……?

右腕を持って行かれると履歴書を左手で書かなきゃいけなくなるから困る…早いとこどうにかしなければ……。

「本当にアンタも懲りないわねえ……。大淀さん、もういいで

しよ。とりあえずコイツを執務室に連れていかないと始まらないし。」

叢雲おおくくく!!良い奴になったなあくく!!ちよつと目付きが悪いなくとか回し蹴りが強烈だなあくとかお尻が3つになりそうだったくとか色々あつたけどやっぱり成長してるんだね!!

「でも胸は……。あ、やべ」

いや、まだ間に合う、フォロー出来るはず。俺は数々の企業で数々の面接を受けてきた就活エキスパートだぞこれぐらいの事「釈明の余地は無いわ。合否通知の代わりに酸素魚雷食らわせてやるわ。有難く受け取りなさい!!」

爆音が響く。死んだと思ったけどどうやら演習弾だったかあ。ささやかな優しさを感じるけどそれならもう少し手心加えて欲しかったなあ。いのちはだいじに。

空はこんなにも青いのに：いや、今日結構曇ってたわ。俺の気分はこんなにも青いのに……。

俺はただ、色んな世界が見たかつただけなのに

普通つてものを満喫したかつただけなんだけどなあ。

どうしてこうなった俺の人生……。

## 就活戦争1日目

俺の名前は相良航希22歳、大学四年生。まあ就活生って奴なのさ。

大学は海軍直属の学校だ。高校、大学と海軍学校を進んできた。何? 『軍隊学校じゃ出会いも無いだろぶつぶくぷー!』だって? はっ倒されたいかゲフンゲフン。

いやそんなことは無い、一応女子もいるんだよ。

これが俗に言う艦娘候補生って奴なのさ。

まあ一般にも僅かながら女生徒いるんだけどな。

学校は学科ごとに分かれていて、普通に海軍の士官になるための普通科、大半の奴らはここに所属しているな。

他には少数ながら整備科、給糧科。給糧科はまあほぼ安全な連中だけど整備科の中には偶にマッドな奴らが紛れてる。

そして真にやべー奴らの集い、憲兵科。もうやべーのなんの、筋肉モリモリマッチョマンの変態だ。もうすぐ空手の稽古の時間だからさらばだ。

んんっ、話が逸れたな。そして彼女らが所属する艦娘科だ。艦娘適性のある奴らが全国各地から集められ、高校大学と進学し艦娘になる。小さい奴らは10代前半から大きい奴らは 20代前半まで。

艦娘達は一般の学生とは違い年規定の年齢内であれば飛び級または戻りで学校へ入学する。

高校では若干の誤差はあるが駆逐、潜水、軽巡グループ

重巡、戦艦、航空母艦グループでクラスが分けられ授業が行われ、大学では合併を行い、より実践的な授業を受けるというシステムだ。

そして最後に提督科である。これが海軍学校の中でも人員が最も少ない学科だ。

何故かって? 答えは簡単、提督適性のある人物はそうそういるものではないからだ。年に見つかって3人、ひどい年は0人の時もある。

艦娘、提督には適性検査というものがある。これは国民の10代から20代前半までの男女全てが毎年受けるものであるものが見え



るか見えないかというものだ。

それは妖精だ。この妖精が見えるか見えないかで適性検査は行われる。そして適性があるものは海軍学校へと入学または編入という形だ。

この適性検査、女性の割合は低いがまあ毎年一定数いる。多ければ100名前後、少なければ半分程度だ。

しかし、男性の妖精確認率はまあ低い事低い事、さっき言った通り多くて年に3人程度だ。

とりあえず最初の出会いがあるかと言えばイエスだ。

まあそれが恋愛事に発展するかはさておきだがな。

なんで俺が語ってるかって？そりゃ……俺が提督科の人間で体験したからさ。だから出会いはあるよ、提督候補と艦娘候補の関係としての出会いはな、うん。

『じゃあ卒業後はそのまま提督になるのか、羨ましいな。艦娘達に囲まれて鎮守府で暮らすのかクソツタレめ！』って言うんだろ？

一応、憲兵や上手いこと配属されれば整備、兵糧の男が来るからふへへ!!艦娘に囲まれてるぜ!!なんてことは多分無い。というか逆に男が他にいない状況の方がヤバそう。

考えてみるよ、女子校に1人男子生徒放り込んでみる？

めちやくちや肩身狭いだろ？そこから女の子に囲まれてるとか考えてなおかつ手を出そうとか相当な奴だよソイツは、もうある意味尊敬と畏怖の対象だな。

そして俺が提督になるって言うのは否だ。

確かに提督適性はある。今も目の前で妖精さんが俺のエントリーシートに落書きしようとしている。

おいやめろマジで。

なんで提督やらないかって？質問が多いねえ。まああれよ、高校大学と軍隊学校で生活していると憧れんものよ周りの奴らがつまらないとか普通って言う生活に。

普通に共学の学校に行ったり、バイトめっちゃ掛け持ちしたり、友達とカラオケ行ったり、彼女とデート行ったりとそういうことを夢

見たり、夢見たり!! ああ、それでもコツコツと生きていく為には踊りましよう! 歌いましょう! 泣きましよう! 笑いましよう! おおー!!!

…また話がズレたな失礼。このままいくとспасибо(スパシーバ)してライライライ言いそうだ。

まあもう就職だから学生は難しいけど軍隊生活をしなくても良いのさ!

朝早くラッパの音で起床したり、やたら厳しい規律を厳守したり、体がバッキバキになる筋トレもし無くして済むのさ!!!

あ、ブラック企業は勘弁な? ちゃんとその辺は調べてあるからね。下調べは重要。

前置きが長かったけど今俺が何をしようとしているか、

『就職活動の為の書類作り』だ。

現在は4月、下調べは3年生からやってきたからその辺は抜かりない。

後はエントリーシート、履歴書、一般知能などの準備。

インターネットから提出だったり、郵送だったりするから気をつけろよ。

ともかく、これで狙っている企業に合格出来れば晴れて軍隊生活とはおさらばだぜ!!

こうして俺はガンガン書類を送り、面接試験や筆記試験をやり遂げてきた。正直、自信しかない。仮に何社か落ちていたとしても幾つかは引つかかっているはずだ。

後は結果を待つばかり……。フッフ、これで普通の生活が送れるのか……。胸が熱いな!

そして月日は少し流れ10月……

俺は寮の自室でウンウン唸っていた。

「……………何故だ。」

これまで受けた企業100以上、絶対どっか採用してくれると思っていた。

しかし、結果はこうだ。

スマホのメールには大量のお祈りメール、届く書類には不採用、不合格通知の文字。

そんな馬鹿な…これが社会の辛さってやつなのか…？

は、敗北者…？取り消せよ！その言葉、取り消せよ！

「100社以上受けて1個も受からないとかメンタル死ぬってまじで……。」

ガツクリと膝をつき項垂れる俺。

そこにインターホンのなる音が響いた。

『郵便です。』

アハハ、またお祈り文書が1枚増えるのか……。

「はいはい、今出ますよーつと…つてなんだ淀姉さんじゃない。」

淀姉さん、俺が小さい頃からの知り合いで今は軽巡大淀として海軍大本営で働いているはずだ。

「じゃないとはなんですかじゃないとは！」

「ごめんごめん！んで何用なの？」

淀姉さんが尋ねてくることはちよくちよくあつたから驚きはしない。恐らく母さん辺りが様子見て来てくれと頼んだのだろう。

「言ったじゃないですか、郵便がポストに入ってたから届けたのと茜さんから様子を見てきてつてね。」

はーやつぱり母さんかあ、今度電話すつかな。

「とりあえずはいこれ、郵便ね。」

もうお祈り文書は見たくないわ。確実にメンタルやられる……。ないと思うけどこれ合格してたら速攻判子押すわ。

「あー淀姉さん、悪いんだけど俺の見えないように開封してくれる？もう俺にはそれを見れる元気はもう残ってなくて……。」

航希死す！デュエルスタンバイ！

「結構元気そうに見えますけどね。まあいいですよ。」

御丁寧にペーパーナイフで封筒を切り、中身を確認する淀姉さん。

「えーと、相良航希 貴殿を……。」

溜めないで溜めないでその焦らしは今の俺には大ダメージだ。どうせ落ちると分かっただけでも心が痛い。

「採用する事をここに通知する。」

……………ん？

「……………淀姉さん、もう1回言つて貰える？」

「相良航希 貴殿を採用することをここに通知する。」

聞き間違いじゃ、ない……………？

「こうちゃん採用ですつて!!おめでとうございます!!茜さんと藤太郎さんにも教えてあげなくちゃ!!」

「よっしやああー!!!判子判子!!もうそこありがとう大好き!!100パーセントそこ行きますよ行きます!!」

うおおおー!!!テンション上がってきたああー!!!もう今日はお赤飯炊いちゃう!!!

「これが契約書で名前と印鑑の欄、ここですね!」

「はいはい!相良航希…印鑑つと!!」

はあ~~~~良かったあ~~~~人生に絶望しかけたけどやつぱ捨てる神あれば拾う神ありつてね!!

「いや〜良かったですねえ〜!これでこうちゃん達と一緒に働く事が出来ますよ〜!こうちゃんが海軍に来てくれるつてお父さ…元帥も知ればきつと喜びますよ!!」

うんうん!良かった良かった!これで将来も安泰だ。

株式会社海軍で働く……………海軍?いやいや無い無い。だって俺、海軍に履歴書とか送つてないし、あれだよ海軍じゃなくて貝群とか言う名前の貝の殻とか剥いたりする漁業系の会社だよんうん。

「……………淀姉さん、因みにその仕事漁業系の仕事つて書いてます?」

うーんと唸りながら淀姉さんは考え込む。考え込む顔も可愛いなこの人。この人の事なんも知らない人がいたらこれだけでワンパンですよ。

「そうですねえ……………秋頃になると秋刀魚漁とかやるらしいですよ?」

そっかあそっかあ秋刀魚漁かあ。まあ海軍学校の生活で漁業

系の仕事にも近いものは感じるしきつと大丈夫でしょ。へーきへーき。

「秋刀魚漁ですかあ、因みに他にはどんな事をやると?」

「後はくそうですね、総合職なので同じ職場で働く方達に指示を出す立場だったり、資材や経費の計算もするらしいですねえ。少し大変かもしれないけどこうちゃんならきつと大丈夫よ!」

総合職かあく!!きつと将来的にはその会社の軸になっていく人材になるんだな俺は!!ちよつとやる気出てきちやつたぞお!!

「こうちゃん!こうちゃん!見て見て!お給料も結構高いわよ!?月収50万スタートですって!!」

……………うん。

「……淀姉さん、もう一度最初から採用通知読んで貰ってもいいですか?」

大きく息を吸って吐いて

もう一度吸って吐いて

「えく、相良航希 貴殿を採用する事をここに通知する。」

「淀姉さん、最初から・会社名・採用職を教えてください。」

淀姉さんの表情が曇る。何だか見たことある様な…

「……………君のようなカンのいいガキは嫌いだよ。」

「やつぱりじゃねえかあボケエエエー!!!早く!!その書類返して!!海軍なんですよ!!絶対行かねえからなああー!!!」

なんか途中からおかしいと思っただよ!!まだ間に合う!!シユレッダーにかけるなり燃やすなり対処法がある!!おい何妖精さん達と話してるんだ!!妖精さん早く契約書を!!

「いやくこうちゃん説得するの大変でしたく。去年から提督として働こうって言ったのになかなかOK貰えなかったので良かったです。」

「提督なるって言ってくれなかったから不安だったけどこれで一安心だよねー。」

妖精さん達……まさかっ!お前っ!?

「こうちゃんがなかなか提督になるって言わないので私達の方で

履歴書出しておきました。」

「中々の仕事ぶり」

「どうせなら建造とか開発したいよねー?」

こ、コイツらはあああー!!!

ってこんな事してる場合じゃない!!淀姉さんから契約書を!!

そんな時淀姉さんはどこに持っていたのか超絶嚴重そうなケースに鍵をかけ自らの手とケースに手錠を掛けている始末。

あ、詰んだわコレ。

「じゃあこうちゃん、4月になったらまた迎えに来るからね!それまでに実家に帰って茜さんや藤太郎さんにも提督になりましたっ報告してあげてね?きつと喜びますよ!」

それではまたくと足早に帰って行く淀姉さん。

そして真つ白な航希の頭の中に1つの答えが浮かんだ!

「……あ、そうだ京都、行こう。(逃避)」

中学の修学旅行以来行ってないし、京都で晩年まで過ごすってのもありだな。少し早めの隠居生活…うん、ありありオオアリクイ。

「こうちゃん京都希望ですか?!良かったあく今、舞鶴鎮守府の提督が今年で定年だったので来年からこうちゃんが舞鶴鎮守府の提督ですね!!これから楽しくなりますよ!!」

扉が勢いよく開く音と共に舞い戻ってきた淀姉さんめっちゃ心臓に悪いわ。

なんなんこの人なんでこっちに向かって歩いてくるのこわ「ポント」え?ポント?何?何ですかその謎の笑顔こわいこわいこわいどーする?どーする?俺?落ち着けクールになれ。某CMを思い出せ、微分・積分・二次関数!!

微分・積分・二次関数!!俺は!!やれば!!できる子だあ!!俺はやればできる子だあ!!俺はやれば出来る子なんですうう!!

圧倒的問題力と徹底的添削力は伊達じゃありません。

あ、てかヤバイ。巫山戯てる場合じゃねえ。

このままいくと4月には提督にされてしまう。

そしてね、一番ヤバイのがね、目の前でハイライトを消した笑顔

の淀姉さんが放つプレッシャーなんですよねこれが。

眼鏡の奥にある瞳がね、笑ってないんですよ。

「……逃げたら、分かりますね？」

「……ハイ。」

……もし、キュ○ベえがここにいるなら、俺の願いを1つ叶えて頂けませんか？

どうか、どうか俺を生まれ変わらせても頂けませんか？

魔法少女になってマ○る方がこれからのことを考えるまだ楽に逝けるかもしれない。

あ、魔法少女じゃなくて魔法青年か……。まあどっちでもいいわ今更……。

神さま仏さまキリスト様に閻魔様、誰でもいいです。

この運命を変えて頂けるならこちらの番号までお電話お願いします。

まあテロップなんて出ないけど。

汚ねえ花火が床を汚すことはなかったが、悲しみで鼻水と涙で床が汚れることとなったのは内緒な？

お兄さんとの約束だぞ！

来週もまた見てくれよな!!





## 就活戦争2日目

……悲しいなあ。

何をそこまで悲しんでるかって？

淀姉さん契約書ハイジャック事件が起きたあと俺は持ち前のなにくそ根性で最後まで足掻いてやるって心に決めてたのよ。

10月以降からでも採用してる企業探して色々転々としてみたんだよ。

そしたらどうなってるんだよ、行った企業の先々で淀姉さんがいるんですわこれまた驚き。

挙句の果てには最終手段としてハローワークにまで行ったんですよ。

そしたら何が起きたと思う？

ハローワークの案内員として淀姉さんが出てくる始末、

そして紹介されるのは海軍 提督職のみ……。

俺には思想の自由と労働の自由は認められていなかったのかと改めて思ったね。

ワンチャン淀姉さんの前では人権すら危い。

権利侵害も程々にしろ!!ふざけるな!!

裁判だ!!

……まあ裁判に持っていつても、なんか色々理由付けて

「異議ありッ!!」って言われてGAME OVERすんでしょ?知ってる知ってる。

時は3月中頃……

そんでね、今どこにいるかって言うとな、

なんと……実家に帰って来ていまああす!!!いえーいゝはあゝしんど……。

今回帰ってきた目的としては淀姉さんから両親に顔ぐらい見せに帰れって言うのと、こっちが本当の目的で淀姉さんから海軍就職について話されてないか確認するために来た。問題はこの両親という事だ。

まあうん、俺の両親悪い人達じゃないんだよ。

というか身内に悪い人いたらちよつとどうしよう。

いやまあ、いい人達なんだよ、いい人達なんだけど…

癖がありすぎて笑う。

笑うを通り越して笑えない。

話になるかどうか…。

まあそこは一応両親を信じてしかないか…。

めっさ帰りたくないけどしようがないから入るかあとと思った矢

先、

「こうちゃん帰ってきてたなら早くお家入りなさいよ！びっくりしたじゃなく！ん？何よそんな顔して？」

勢いよく開いた扉が俺の顔面に打ち付けてきたらキレたくもなるし、そんな顔にもなるわ。

何を言ってもこの親には通用しないがな。

とりあえず家に入ると親父も居た。

ここで俺のクレイジーな家族を紹介するぜ！！

まずはマイペースで人を振り回す事に定評のある俺の母親！！相

良茜ー！！！！

まああれよ、玄関での下りを見れば何となくわかるよね？

歳の割には活発で明るい雰囲気の母親でその辺は元気そうでありがたい。もう少し大人しくなってくれてもいいんですけど？

そして次の家族！！めっちゃ渋いまるで某スニーキングゲーの色

んなもの食べては『美味すぎるッ！！』って言う方に似ている我が家の

大黒柱、相良藤太郎ー！！！！

体も鍛えられてるし声の方もなんか大塚○夫さんに似てると来

た。まあ基本無口な方です。

最近はや○キャン△を見たらしくキャンプにハマっているという。

松ぼっくりは優秀な着火剤です。

ゆ○キャン△はいいぞ。

あと何人か家族いるんだけど今はいないからまた今度な。

「こうちゃんたまには家に顔見せなさいって言ってるのなかなか帰ってこないから心配してたのよ？少し痩せたんじゃない？電話しても空返事ばかりだから、ちゃんとご飯食べてる？」

「あーもーベタベタと顔を触るなつての…。俺もガキじゃないんだから飯も食ってるし大丈夫だよ。」

そして妖精さん達は俺の横腹を掴むな!!こそばゆいわ!!

妖精さん達は俺が出かけようとするといつの間にかバッグの中やポツケ、服の中に忍び込んでいる。置いてきても置いてきてもいつの間にかいるから諦めた。まあ基本大人しいし、たまに手助けしてくれるからいいけどこうしてイタズラを働くこともある。

まあ可愛いイタズラだと思っしかなない。

服を少し持ち上げ軽く払うと隙間からポロポロと妖精さんが：ポロポロ：いや、多い!!多いんだよ君たち!!一体何人いるんだよ!!いつも5人ぐらいだったのが3倍ぐらいいるじゃねえか!!どうしたのこの子達!?

「道中で出会って、もうじき提督になると説明したらついてきてくれました。」

「よろしくお願いします。」

「お給料はお菓子類で。」

「なんなら前金も受け付けてますよ。」

「金平糖で手を打ちましょう。」

あーもーうるさいよ!!ハイハイ!!分かった分かった!!飴ちゃんあげるからはい、整列ー!!!

一瞬で辺りを飛び回っていた一気に机の上に整列した。

全く、現金な奴等め……。

元からいた妖精さん達用に持っている飴玉イチゴ味を取り出し手のひらに乗せるとワーツと群がってきた。

「こうちゃん、今そこに妖精さんがいるの!?!」

「ああ、なんか数が増えたけどいるよ。」

両親は俺が妖精さんが見える事は知っている。

しかし、二人とも妖精さんを見ることは出来ないので俺の行動を

見て妖精さんの存在を認知している。

そして始まるのが……

「妖精さ〜んお母さん特性。パンケーキですよ〜!!」

「……肉、食うかい?」

そう、餌付け祭りである。

妖精さん達は飴玉を放り捨て、パンケーキと肉に猫まつしぐらならぬ妖精まつしぐら。

散らかすならたかるんじゃないよもう……。

飴玉を拾い集め袋に戻す。

……改めて考えると不思議な光景だ。俺には妖精さんがパンケーキと肉を貪り食う姿が見えるが両親にはこの姿が見えない。となるとどういふことかと言うとパンケーキや肉がだんだんと無くなり、空いた皿やフォークなどがフワフワと浮き、丁寧に洗われていく。

この両親も最初はこの光景に驚きこそしたが直ぐにいつもの調子でお菓子を振舞ったり、ミニカー等で遊び始めた。

今考えるとこの人達が俺の両親で良かったなと思った瞬間だった。

世の中にはこの不思議な光景で周りの関係がギスギスすることもあるから……。

妖精さん達は皿を洗い終わると「一宿一飯のお返しはせねば」とあちこちに飛び回り、電化製品を整備し始めた。

前にも家に帰ってきた時に似たような事があり、調子が悪いテレビや寿命が近かったエアコンがまた元気よく動き出す等、見事に整備されていた。

俺の寮の部屋の電化製品も整備してくんねえかな。エアコン変な音してるし……。スーパリーの安売り3連プリンとかで交渉してみるか……。まあ妖精さん達ならこれぐらいで等価交換成立するよな? ?

「やっぱり良い子達だね〜!お皿も洗ってくれちゃったし。また家の物直してくれてたりするのかな?」

「らしいね。まあ妖精さん達の特技のひとつだし、一宿一飯のお礼だとき。」

「あらあら、いつもこうちゃんの面倒見てもらってるのに……ほんとに良い子達ねえ〜!」

いや、面倒見てるの俺の方。そこんとこ忘れないで?

俺は忘れない。

「みんなありがとうね!これからもうちゃんの事、見守ってあげてね!」

「勿論です。」

「おつちよこちよいだし私達が見てないとまだまだ危なっかしいです。」

「お守りのお礼にお菓子のグレードアップも受け付けてますよチラチラ。」

「駅前の限定ケーキセットでもいいんですよチラチラ。」

ちくしよーー!!!散々いいやがってえええーー!!!

俺も見てたけど学生身分にはなかなか手が出しづらい額じゃねーか!!

なら俺が食べたいわ!!

「そうそう、こうちゃん就職はどうしたの?妖精さん見えるし、やっぱり提督さん?」

おおそうだ、本題を忘れるとこだった。

「いや、海軍には行かないよ。実は、本当に悪いと思ってるけど今年の就活には失敗したんだ…。連絡をなかなかしなかったのもこの話を切り出せなくて……。」

母さんが少し心配そうな顔をし、親父もこちらを見つめている。そりやそうだよね、息子の就職失敗聞いて不安にならない親はそうそう居ないだろう。

「…海軍に行くのは駄目なのか?」

親父が少し寂しそうな顔をしているのも分からなくもない。今年定年で一線を退いた身だが元々海軍で働いていた人間だった。やっぱり自分の歩んできた道を息子にも進ませたかつたって言うの

はあつたんだろうな……。

だがしかし、海軍に行く気は無い。

「…やっぱり、軍隊生活は俺には合わなかったみたいだ。それなら一般企業の営業で汗水垂らしたり、ホテルマンとか接客なんかのサービス業とかもやってみたいんだ。とりあえずここ1年間はどこかに家借りてアルバイトしながらまた就活して行こうと思うんだ。」

我ながらいい感じに本心を言えたな。流石丸1年就活続けてきただけあってスラスラ言葉が出てくる。進研ゼミで学んだ事はここに出てこないからな！経験あるのみよ。

しばらく無言の時間が続いたがその静寂を破ったのは、やはり母さんだった。

「まあ、いいんじゃないの？こうちゃんも大人になったからね。やりたい事が無くてこうしてる訳じゃないし、やりたい事が決まってるならそれを目指す事はいい事だと思うわよ私は。…海軍、私はこうちゃんに向いてると思うけどね。まあもう1年頑張ってみなさいな！」

「…お前の人生だ。やりたい事をやるといい。」

母さん……親父……。

「とりあえず、お風呂沸いたから入りなさいよ。色々あつて疲れてるでしょう？」

気を使ってくれたのか一番風呂を勧めてくれた。念の為親父の方を見ると無言で頷いてくれた。

「なら、お言葉に甘えて…。あ、そうだ。淀姉さんから俺の就職の事でなんか言われたりした？」

「恵ちゃん？いや、特に？何かあつたの？」

「いや、無かつたら別に良いんだ。就活の事で結構心配掛けちやつたからもしかしたら母さんに連絡してたりして…って思っただけ。」

母さん、不思議そうな顔してたけど特に気にしてないみたいだ。

ああ、恵ちゃんって言うのは淀姉さんの本名で淀川恵という。

実は淀姉さんの親父さんは海軍のトップ元帥であり、淀姉さんは

その元帥の一人娘だ。

「淀川さんの旦那さんにはたまに会うけど、恵ちゃんが艦娘になってからはなかなか家に帰って来れないみたいだからねえ。たまに連絡は来るけど、また会ってみたいわ〜！」

「はははつい先日にも会いましたよ。十字固めされたり、コブラツイストされたり、しまいにはキン肉バスター御見舞されましたわ……。」

海軍学校と寮、大本営はほぼ隣にあるので淀姉さんが割と突撃してくることはある。

割とマジ怖い。

とりあえずこの反応から察するに淀姉さんの手はまだ母さん達には延びていなかったようだし、一安心だ。大本営が隣にない一人暮らしが始まれば淀姉さんが突撃してくることも無いだろう。

「元氣そうだったよあの人も。まあ、艦娘になったら緊急出動とかあるしなかなか帰って来れないんだろうよ。…とりあえず風呂入ってくるわ。」

「はいはい、ゆつくり入ってていいからね〜。」

「……………って言ってるわよ？恵ちゃん？」

「ギルティーですね。」

航希は気づかなかったが隣の部屋には…修羅と化した大淀がいた。

「まあ私もこうちゃんにはああ言ったけど本音言うと海軍にいけないなら行って欲しかったからね〜。藤太郎さんも海軍出身だし、恵ちゃんや元帥さん、あの娘達もいるから親としては知り合いもいる職場の方が安心するわ〜。」

「任せてください茜さん。私もこうちゃんのサポートに付きますので。こうちゃんには立派な提督さんになって貰えるよう尽力します。」

私もこうちゃんの自由を減らす事はあまりしたくない。

しかしながら、現実はその上手くは行ってくれないのだ。

提督候補はなかなか見つからない。

去年は1人、一昨年は0人。

今も現職の提督や艦娘が頑張っているがその数はまだまだ足りていない。

対して、敵の戦力は未だに計り知れない…。

人類の敵、深海棲艦。

約30年前、世界中でその姿を現し、人間を襲う海の魔物。

日本では当時、自衛隊が防衛に当たったが、砲撃、ミサイル、機銃もあまり効果的では無かったのだ。

イージス艦による砲撃を人間ほどの大きさで海上を高速移動する深海棲艦に砲弾を当てるのは困難を極めた。

人類は深海棲艦にどうすれば有効打を与えられるかと様々な作戦を実行してきた。機銃攻撃や戦闘機による爆撃など作戦を変更したが深海棲艦に通常の武器では決定的なダメージを与えることは出来なかった。

そんな時、現れたのが妖精であった。

妖精は次々と武器を作り、妖精達が作る武器は既存兵器とは違い、深海棲艦にダメージを与える事が出来た。

妖精さんは武器を作るだけでなく、その武器を使う事が出来る者達を生み出した。

過去に沈んだ軍艦の気と人間を合成することで武器が使用出来るようになった。

しかし合成することが出来るのは女性のみであり、それが艦娘の始まりであった。

艦娘の出現により戦局を押し戻す事ができ、今に至るといのが歴史だ。

私自身も艦娘の適性が見つかり艦娘となったが、艦娘になる決心が付いたのもあの出来事から…彼の、こうちゃんのお蔭であった。

私の心はまだまだ弱い。それを支えているのは…。

とりあえず、4月から舞鶴鎮守府で働けるように手配は進めたからこうちゃんを説得しないと…。



やる事は多いけどごうちちゃんには提督になってもらわないと。  
「約束、忘れないでねごうちちゃん。私は忘れてないから…。」

――――

「ふっ……ぶあつくしよい!!!」  
んー？何やら寒気が……。

風呂に入ってるのに寒気とはこれ如何に……。

最近説明会ハシゴしたり、淀姉さんから逃げ回ってたし、色々あつたから疲れてるのかもしれないな。

葛根湯飲んで寝ればこの程度の風邪、一発よ！

……とりあえず、お湯温め直すか！

こんな時期に風邪なんて引いてられないからな。

風邪は待ってくれても淀姉さんは待ってくれない。

流石に手荒な事はしてこないと思うけど。  
……しないよね？

## 就活戦争3日目

3月31日、気温も暖かくなり、学生であれば春休み明け前日、社会人ならば明日は遂に初出勤と期待に胸を膨らませるものも居れば「めんどくせー」と大きいため息を吐く者もいる。

新たな生活、いつもと変わらない生活が始まろうとする期待と不安、気だるさ入り交じるそんな日…俺はそんな3月31日が好きだった…今まではな。

窓の外には春休み最終日とあつて遊びに繰り出す学生。

リクルートスーツからビジネススーツへと進化し、記念に家族達と軒先で写真を撮る新社会人。

就活に躓いた身としてはそんな奴らが眩しく見えて憂鬱になってきた。

そんな俺が今何しているかって言うと……

『あ、ちよい航希。重量弾余ってない?』

『お!? ゴールドウエポンキター!! あ? 弱くね?』

ゲームだった。

違うよ? 別に就職諦めてニートとかになったわけじゃない。

状況的にそうにしか見えないとか言うなって。

俺もそう感じてんだからさ。

ともかく、OPExというFPSゲームを共にやっているのが海軍大学でつるんでいた連中。

1人は俺と同じ提督候補だった神谷翔平（かみやしょうへい）。因みに重量弾は余ってない。俺もスピリットファイター使ってるから寧ろ弾が欲しい。

もう1人は海軍士官候補生だった大迫勝也（おおさこかつや）。大迫半端ないって!! そんなんできひんやん普通!! 言つといてや出るんなら…。とはなんの関係ありません。因みにそのゴールドウエポン、ゴールドの中で最弱らしいぞ。

なんで俺がゲームしてるかっていうのもコイツらとつるむきっかけてるのがゲームだった。

俺らの学年で提督候補は俺と神谷だけだったので必然的に会話するようになった。そんな時に神谷がモリオカートが得意だったり、イタリアフィールドなどFPS等のゲームをやっていることを知り、さらに意気投合した。

大迫は俺が学内に持ち込み禁止だったPS VOTAが見つかり、教官からこつてり絞られてた時、コイツも俺同様、Switchを持ってきてたのがバレたらしく、腕立て、スクワット、OKが出るまでエンドレスランニングの刑になった仲だ。

ランニング中に大乱闘スモブラで何使いか語り合ってたら夕飯抜きで倒れるまで走らされたのは今となっては懐かしい思い出。もう二度としたくない。

そんな神谷は鹿児島県近くにある佐世保第3鎮守府へ

大迫は函館の海軍基地への配属が決まった。

連絡を取るのも難しくなるのでこうしてマイクを付けてゲームしている。

『あーこうしてお前らとゲームすんのも最後になるかもしれないのかあ…。そう考えるとなんか寂しくなるもんだな。あ、1パーティー見つけたわ。ピン立てるぞ。』

『あいよ。…にしても俺は佐世保、というか実質鹿児島で大迫は函館、相良は東京でアパート借りてもう1年就活とまあ見事にバラけたな。補給物資落したから取りに来い。』

「あのさあ…分かってるけどさ、その言葉グサツとくるな。もうちよいオブラートにお願いできませんかね？今の俺にはなかなかキツイ。お、ラッキー！パープルアーマーGET！」

『そう思うならなんで海軍で提督にならなかつたんだよ…。提督候補なら100パーなれただろ。俺なんか海軍士官になるための試験とかあつたんだぞ。超高倍率じゃないけどさ。索敵したけど検知無し。』

『なんならお前の知り合いだった大淀適性のあの先輩に言って提督にしてみらえよ。提督少ないんだからウエルカムだろ。大迫、ドローン出すからライフ回復させとけ。もうすぐ円来るぞ。』

「あつさり言ってくれるねえ…。まあ俺は提督になる気は無いんだ。絶対民間企業に受かって軍隊生活とはおさらばだ。」

とりあえず淀姉さんの話題を振るな、寒気がする。

さつきからメールやら着信やらでひっきりなしにスマホが震えてるんだ。ついでに言えばスマホが震える度に俺も震えてる。

怖すぎてメールすら見れん。電話に出るなんてもつてのほかだ。

淀姉さんには実家に帰ったと連絡し、実際は寮の部屋を引き払った後、アパート借りてそこで暮らしている。

海軍大学ではアルバイトが禁止されている。国を守る訓練をするのにアルバイトする暇など無い。代わりにあまり多くはないが支給金が出る。

支給金をコツコツ貯めといて良かったと今更ながらに思う。

その支給金とは別に両親が先日、幾らか資金を下さったのでそれを使って生活している。就職したら倍にして返す。

ゲームも終盤に差し掛かり、残りは自身の部隊を含む3部隊が争う展開となった。

1部隊が丘の上、もう1部隊が向かいの建物の中、俺らの部隊も二階建ての建物に立てこもり、次の円がどうなるかという状況。

そして収縮を続ける円が最後の安全地帯を示した。

『よっしゃ!!円に入ったぞ!!俺達、なかなか運が良いぜ!!』

『丘の連中も向かいの家の奴らも円外だから収縮と同時に突っ込んでくるだろうな。シールドとライフ削られてるやつ今のうちに回復しとけよ。』

「収縮始まるぞ……3、2、1」

円の収縮が始まる瞬間、扉付近に手榴弾の警告マークが表示された。

表示された。

『来たぞ!!ラスト気を抜くな!!』

『こつちからもフラグ飛んできてから窓の傍に寄るなよ!!』

ドツと屋内になだれ込んでくる敵部隊…だが俺達はこれ待っていた。

「スモーク焚くぞ!」

ランチャーから発射されたスモーク弾が拡散し、家中がモウモウと煙で覆われた。今だ!!

「大迫やれ!!」

『ほい来たあ!!ビーストモード起動!!』

俺のキャラクター、カンガロールは辺り一帯に煙を発生させるスモークランチャーを装備している。

そして大迫のキャラクター、ブラッディハウンドは煙越しからでも敵を認知することが出来る必殺技を持っているのだ。

屋内に飛び込んできた敵は煙で俺らと出入口を見失い、右往左往するしか無かった。

そこからは大迫の操るビーストモードブラッディハウンドとサーマルスコープを装備した俺達からの一方的な攻撃だった。

「1パーティーやったぞ!」

『こっちも2人ダウンさせた!つー事は…ラストワンだ!!あ、おい!!外に逃げるぞ!!』

スモークの効果が切れ、屋内が不利と悟った敵は一目散に扉に向かって走り出していた。

「追うぞー!これで終わりだ!」

『いや、その必要は無い。』

なんで?と思った矢先、敵が外へ飛び出した瞬間神谷が操るライフレインの必殺技で要請した救援物資に敵が踏み潰された。

デカデカと画面に映る優勝の文字。

ラストキルはプロゲーマーの動画で見るような神谷のびっくりキルだった。

「はーそこまで正確だとおっそろしいな…。流石、先読みの達人。」

『ほんとタイミングバツチリで当てるよなあ…ある意味チートじみてるぞお前。』

『褒め言葉として取っておくわ。とりあえず優勝出来たし、締めゲームとしては完璧だな。』

神谷は大学で艦娘候補、先輩提督候補らと行った合同演習ではか

なり高い勝率を上げていた。

その理由はこの先読み能力の高さだった。

まるで未来が見えているかの如く、魚雷を撃てば当たり、奇襲を仕掛けた敵を次々に返り討ちにしてきた。

「流石これから提督になる奴は違うな。戦局の先を見てるってわけか！こんだけ優秀な提督がいれば日本の海も安心だな。」

『よく言うぜ！結局、俺は演習でお前から勝ち越し出来なかったって言うのによ！』

「いや、あれはほんとに運が良かっただけで。」

『思いつ話も良いけどよ、それをするなら飯食う時で良くね？もうそろ6時だし、飯くいに行こうぜ。』

もうそんな時間だったか…。集中していると時間が経つのが早い。お、そういやスマホのバイブが鳴りやんでる。淀姉さんもようやく諦めてくれたか…。

「ほんじゃ、飯食いに行きますかあ！俺のバイト先でいいか？」

『勿論、俺、あそこの鶏雑炊めっちゃ好きなんだよ。』

『神谷、お前いつつも鶏雑炊食ってるよな。』

「わーったわーった！ほんじゃいつもの所で待ち合わせな。」

『『ういーっす。』』

ゲーム機を終了させ、軽く身支度を済ませる。

財布よし、スマホよし、カバンの中で寝てる妖精さんやらポケットの中に入り込んでる奴もいるけどまあいいわ。

それじゃ、待ち合わせ場所まで急ぎますかねえ…。

と言つても

「おせーな早くしろよ。」

「まじで腹減ったわお前の奢りな。」

部屋が違うだけで同じアパートだから家出て目の前集合なんだけどね。あと神谷、奢るわけねーだろ。寧ろこれから稼ぎいいんだからてめえが奢れ。

それはともかくダラダラと歩くこと15分、俺のバイト先でもある駅前の居酒屋に到着した。

「お疲れです！親方、連絡してたとおりの3名で！」

「お、来たな！そっちの二人も久しぶりだな！少しサービスしてやるからじゃんじゃん食べてってくれよ！」

「「ありがとうございます！」」

この人は高津齊昭（たかつなりあき）さん、この居酒屋『宝船』で働く店長だ。通称親方と呼ばれ、バイト、客からも親しまれている恰幅のいいおじさんだ。

席に着き、各々で好きなものを注文していく。

俺はこの刺身の盛り合わせと揚げ物は最高だと思っている。

神谷は先程の通り鶏雑炊、大迫は串物だ。

極論、この飯は美味しいのだ。

親方からビールとお通しの枝豆を受け取る。音頭は神谷が取るようだ。

「それじゃ、明日から始まる輝かしい俺らの日々に乾杯！」

「乾杯——！！！」

「おい待て！！悪意ありすぎるだろそれ！！」

あーあ、もういいよ。実際、コイツらは輝かしい人生送れるよ。だっていつでも頭の中ハッピーな連中だしな。

まあ、俺も輝かしい未来が待ってるはずだしな！もしかしたら明日内定が貰える可能性だってある訳だし！うんうん！！

そんな事考えてる俺も頭の中ハッピー族だったらしい。

ともかく、ジョッキになみなみ注がれたビールを喉に流し込む。

「プハーツ！！ビールがキンツキンに冷えてやがるぜえ——！！！」

やっぱり最初の生は格別だな！

次々に運ばれてくる美味しい料理を食べ、酒を流し込む…これが至福のときってやつだな…。そう言えば刺身頼んだけど、どんな魚を仕入れたのだろうか。

「親方、今日の刺身ってなんですか？」

「今日のヤツはうめえぞ！！刺身の鉄板、マグロと春が旬の桜鯛、そして俺イチオシの初鰹だ！今切ってるからちよつと待つとけ！」



おお!!それは楽しみだ!!

「ほら、お待ち!マグロと桜鯛、初鰹の刺身3種盛りだ!」

綺麗に盛り付けられた刺身、色も綺麗でとても新鮮そうだ!

「めっちゃ美味そうだな」

「俺も頼んどきや良かったぜ」

すると親方は追加で刺身を差し出してきた。

「そう言うと思っていたから一緒に用意しといたぞ!お代はいらんから。まあ俺からのささやかな就職祝いだ!食べ食べ!!」

「マジすか!?!」

「うっひょー!!ありがとうございます!!」

では早速……

マグロの刺身を1切れ……美味いッ!!

口の中で広がる新鮮な魚の旨み、プリプリとした食感がこれまた堪らない!

次は初鰹だ……これも美味いッ!!さっぱりとした味わいで日本酒が飲みたくなる……!!

日本酒を追加で頼み、刺身を食らう。

やはり最高の組み合わせだ。

そして最後に桜鯛の刺身……美味いッ!!!

刺身でも美味しいがこれは……

「親方、お茶漬け貰えますか?この桜鯛の刺身にぴったりだと思っ  
んですよ!」

「うお!それめっちゃ美味そう!!」

「親方!俺にもお茶漬け下さい!!」

「神谷お前、鶏雑炊食べなくなるぞ。」

そして色々な美味しい飯を食べて腹も膨れた俺らは思い出話なんかで盛り上がっていた。

「そう言えばさつきお前ら合同演習で勝ち越したとかどうたら  
言ってたけどあれ結局なんなの?」

「ああ、それか。俺と相良で演習する事が何度かあったんだけど、  
なかなか勝たせてくれないんだわコイツ。」

「ほー相良、結構強かったんだ？」

「なんて言うか、艦隊の動かし方が上手かった。攻めと引きのタイミングが完璧でめちゃうくちゃやりずらかった。」

…なんか目の前で自分の評価を話されるとむず痒いな。

「そしてやたらと撤退戦が上手い。」

「それは何となくわかる気がするわ。相良、OPEXでもそうだったし。」

それは俺が常に逃げ腰って言いたいんか神谷。大迫、お前も分かってないわ。

「コイツと良く組んでる軽巡と駆逐の連中もなかなか動きが良くてな。なんであんなに上手く出来んの？」

「…アイツらとは高等部の時から組んでたからな。そういう事もあんじゃねーの？」

まあ腐れ縁ってやつだよ。一癖も二癖もある連中だから大変だったけどな。

「そう言えばお前高校から海軍学校だったか。まあそれを考えたら結構場数踏んでるし、付き合いの長い連中ならお互い何となく考えてる事が分かるってことか。」

「やっぱり大学からの提督候補と高校から提督候補じゃ経験の差があるって事か。」

「いや、だからたまたまだった。」

「いや、それにしても謎が多いんだよお前、やっぱり思うけど演習中のあの運の良さはなんなんだ…。」

「どういう事なんだよ？」

「…ようやくやく追いつめて、これで決まりって時になると主砲が故障したり、不発弾だったり、確実に直撃コースだったのに艦娘が転んで当たらなかつたりと様々よ。こういうラッキーが結構あるんだよ。」

「なんだそりゃ？」

「一番驚いたのは航路実践演習の時よ。」

航路実践演習とは実際の海域攻略を想定したトレーニングで、撤

退や攻略戦などのシチュエーションをスタート地点から訓練終了地点まで、燃料や残弾数を考えながら戦闘と移動を繰り返しながら行う訓練のことだ。

「相良はな、俺や先輩後輩連中がボスマス以外に到達したり、かなり大回りする針路に進んだりする中、1発でかつ最短でボスマスに到達するんだよ、何度もな。」

それに関しては俺自信が1番びっくりしてた。

でもまあ確率の問題だからそんな時たまたま上手いこといっただけだと思っっている。

だからもし俺が提督になってたとしたら戦艦や空母部隊と4連戦ぶち当たってボスマス以外のゴールマスで終わる人生になっていると思う。

「まあ不思議な事かもしれないけど、無いわけじゃないからさ。次やったら俺はおそらくスタートした次のマスでゴールしたり、戦艦空母機動部隊と連戦させられると思ってる。」

嘘くせー、信用ねー等等など散々なこと言ってくれるけどまじで分かるわけないだろ!!俺が知りたいわそのメカニズム!!

「いや、まじで思うけどなんでお前提督にならなかったんだよ? 同じ提督候補だった神谷がここまで言うんだから疑問でしかないわ。」

俺はもう軍隊生活には疲れたの!!これからは普通に働いて門限とか外出許可証とかに縛られずに金曜日と同僚と酒飲みに行ったり、有給使って音楽フェスとか行きたいの!!

「つと、話し込んでたらこんな時間になってたか!明日朝イチの飛行機で向こうの鎮守府に行かないと行けないんだ。」

時刻は11時をちょうど回ったところ。そろそろお開きの時間だ。

「提督さんは大変だな。つっても俺も明後日から勤務だから明日の昼には函館行きの飛行機の中か。」

実感するとやっぱり寂しくなるもんだな。

「…またこうして3人で酒を飲もうや。」

「そうだな！」

「とりあえずお前は就職先見つけれよな。」

最後の最後まで痛いところついてくる奴らだけ全く。

少し残っていた日本酒を飲み干し、会計を済ませる。

「寂しくなるなあ、常連客が居なくなるほど居酒屋やって悲しいことは無いぜ。」

「親方、九州からまたこっちに来た時には必ず店に寄らせてもらいますよ！」

「俺も函館の美味しい魚持ってきて親方に捌いてもらおうかな！」

「そいつぁいいや！来てくれたらまたサービスするよ！…：そういうや神谷君、提督さんになるだつてな！…：したらうちの娘が世話になるかもしれないから、そんな時はよろしくな！！」

世の中狭いもんだな。親方の娘さん、艦娘だったのか。

「へえくそうだったんですか…：因みに娘さんはどこの鎮守府で？」

「重巡摩耶の適性持ちで今は佐世保第3鎮守府で働いてるつて言ってたな。」

佐世保第3鎮守府って……

「…：それは驚いた、明日から俺の務める鎮守府ですよ。」

「ガッハッハッ!!そいつは奇遇だ!!ちよいと癖のあるやつだが根は良い娘なんだ。神谷君、娘を頼んだぞ!!そしてお前ら就職おめでとぅ!!また来てくれよな!!」

こうして、最後の最後に親方の娘が艦娘という意外な事実が発覚したが、俺達3人は『宝船』を出てアパートに帰るため住宅街を歩いていた。

「まさか親方のおこの娘さんが艦娘やってそれが俺が行く鎮守府で働いてるとは思わなかったぜ。」

「案外、世間は狭いもんなんだよな。意外なところで人脈は繋がってるんだよ。」

あ、そうだ。食パン切らしてるんだつた。明日の朝飯が抜きになつちまう。

「すまん、ちよいコンビニ寄らせてくれ。食パンを買いたい。」

「俺も喉渴いたしお茶でも買つてくか。」

「俺もアイス食うかな」

3人で途中にあるローオンへ寄り道、店内は客は居らず女性店員さんがタバコの補充をしているだけだった。

各々買いたい物の売り場へ散っていく。俺は食パンを買う予定なのでパンのコーナーで食パンを1斤手に取る。

そして少し店内を物色、店に来るとさ目的のもの以外にも目移りしてなんか色々買いたくならない？俺はある。

結局、追加で妖精さん達と食べようと3連プリンを手に取り会計へと足を向ける。

ふとコーヒーメーカーとすぐ隣のイトインスペースで先に買い物が終わらせた2人に目が行った。

大迫、なんでそんなに震えてんの？

神谷、お前震え過ぎてカップからコーヒーめっちゃ零れてるぞ、熱くないのかそれ……。

てかなんなだよお前ら、○鬼のたけしみたく震えて…。

まあいいや、とりあえず会計済ませるか。再度タバコの補充をしている店員さんに声をかける。

「すいませーん、お願いします。」

「はい、ただいま！」

えーと、財布財布…って妖精さん達なんで全員カバンの中にいるんだよ、ミッチミチじゃねえか。しかもなんかコイツらまで震えてるしホントなんなん？とりあえず財布取れないからちよつと退けつて…。

そこでポケットにしまっていたスマホが鳴り出した。

十中八九淀姉さんだろう、無視無視。

「お、おい…相良、携帯鳴ってるぞ！出なくていいのか…？」

「そ、そうだよー早くでた方がいいぜ!!」

コイツら何言ってるんだ？今会計してるところ見りや分かんたろ。じゃなくても電話なんか出るか、出たら最後魂を抜かれるわ。てかマ

ジで妖精さん退いてって！

「お客様、あの…」

ほら言わんこつちやない！めつちや不審がられてるだろこれじゃあ！

「ちよつと待つてくださいね！財布が取りづらいところにあつて！」

「それは構いませんが、携帯鳴ってますよ？よろしければそちらを…」

「いやいや、大丈夫ですよ！ほんと大した電話じゃないんで！後で掛け直しますから！」

「おい相良!!早く出る!!」

「ああ…死んだな……。」

なんなんだよこいつら…うるせえな。

お、やつと財布取れた。

「お客様、電話には出られた方が良いですよ。じゃないと、取り返しのつかないことになりますよ…?」

財布を無事に取り出し、顔を上げた先で俺を待っていたのは…：スマホを耳にあて、笑っているけど目に光のない…淀姉さんだった。

ハイライト仕事してお願い。

「……あつ、ハイ。」

そつと財布をカバンに戻し、スマホの通話ボタンを押す。

「モシモシコウキデスケド、ヨドネエサンデスカ…?」

「はい、朝からずうつと電話し続けたけど居留守され続けた大淀です。」

淀姉さんがレジカウンターから出てきて俺をジリジリと追い詰める。

「イエ、アノ、キョウハチヨットヨウジガアリマシテ…デンワニデルコトガデキナカツタンデス。」

「私の電話よりも重要な事があつたのですか…。それは大変でしたね…。それでも、掛け直す暇はあつたのではないですか?」

「ア、イエ、ナンテイウカ……戦略的撤退!!」

俺は一目散に出口に駆け出した!!が無情にも自動ドアは俺の為には開いてくれないのだった……。

「そ、そんなっ!!なんでっ!?開けよ!!頼む!!開けゴマ!!……開いてくれえええー!!!」

「無駄ですよ、今この店の出入口という出入口は完全に封鎖されてますので、ネズミ1匹出入りすることは出来ません。」

こうなったら話し合いに持ち込むしかない!!光れ!!100社落ちたけど俺のトーク力!!

「……何が望みなんです?」

「言わずもがな、と言いたいところですけどそれでは流石にこうちゃんが可哀想なので選択肢をあげようと思います。」

せ、選択肢……?

「1つ、このまま大人しく提督になる。2つ、何としても私から逃げ、一般企業に就職する。さあ、どうします?」

なんか明らかなトラップが用意されてる気がするが、罠でも進まなければならぬ。

「……因みに後者を選んだ場合どうなります?」

そんなに可愛く小首をかしげても無駄だぞ。今の俺には深海棲艦の姫級や鬼級よりもアンタが怖い。

「うーん、そうですね……。まあ私がどうなるかは分かりませんが、選肢のことだけは確かですね!」

それ、選択肢って言わなくね? Dead or Aliveじゃなくて Dead or Deadじゃん。

「提督になれば Aliveになりますよ。」

いやほんと心読むのやめて。

それは難しいですね。

なんで心の中との会話続行すんだよ止めてよ。

「無言は肯定と捉えてもよろしいですね?」

「いや今心の中で会話してたじゃん!!」

クッソ!!話し合いなんてこの人の前では無意味だ!!

少し手荒になるが淀姉さんを振り払ってでも!!!

ガッ!!? 足払いの音

ドタツ!!? 相良倒れ込む

ガシツ!!? 淀姉さんからのホールド

「それで、良いお返事は聞けそうでしょうか……?」

まだ淀姉さんのホールドに力は入ってない……。

背に腹はかえられぬ……。とりあえずここは了承して、脱出の機

会を伺うしかないか…。

「…わかりました! 提督職、引き受けます! 引き受けますから!!」  
すると淀姉さん、ポケットから録音機を取り出し

「ありがとうございます! 今の言葉はしっかり録音しておきましたからね!」

……この人の何が怖いかって確実に逃げ道を塞いでくるんですよ。

「いや〜でも良かったです。こうちゃんが了承してくれて! 手荒な方法を取らなくて済みました!」

後者選んだら手荒な方法が待っていたのか…。

「ではこうちゃん、行きましようか。舞鶴鎮守府まで!」

……え!!? 今から!?

「ちよいちよいちよい!! 淀姉さん、今からって言ったって俺なんの準備も……」

「はい! もう荷物は送りましたし、アパートも解約済みです。高津さんにもお話は通してあるので大丈夫ですよ!」

仕事が早すぎるよ淀姉さん……。

がっくりと項垂れる俺に同情と戦慄を覚える男二人の視線が……。助けてって言いたいところだけど逆の立場になって考えてみれば俺だってそれしか出来ない。

では……と俺の目の前に立つ淀姉さん。

ん? 何その手に握られた布と薬品は?

「さてこうちゃん、今日はお疲れでしょうから舞鶴鎮守府までゆっくりお休みになってください。」



あ、なんかこれOPEXで見たことあるわ。ライフラインの課金  
処刑モーシヨンじゃん。注射器が布に変わっただけじゃん。

待って！手荒な事しないって言うたやん！！話が違っ！！……あ、こ  
の甘い香り、クロロホルすやあ……。



## 就活戦争4日目

どうも、軽巡大淀と申します。以後お見知りおきを。

時は3月31日

今、私が何をしているかと言いますと、書類を捌きつつある人に電話を掛けています。

しかしながら電話はなかなか繋がりません。最近は用事があるらしく外出なさってる事が多いようです…。

あんまり電話を掛け続けるのもよろしくありませんね。

書類を1枚を片付けたら1回連絡を入れましょう…。

デスクの端には山積みになされた書類の数々…この回数電話を掛ければいつかは繋がるでしょう。

え？その量を1日でやるのかと？

そうですね、まあ年末と比べれば楽なもんですよ。

今1時なので4時間：電話を掛けることを考えれば6時前ぐらいには終わるでしょうから。

はい、そしてただいま5時半になりました。

しかしながら、折り返しの電話がかかってくることはありませんでしたね。

こいつあ、グレートですよ。

書類も終わらせた事ですし、本日予定していた『突撃！お隣に住んでた幼馴染君を提督にスカウト！』作戦に向かいますか。

彼の居場所は彼の周りに居る妖精さん達に賄賂の3連プリンと共に発信機を持って頂いています。

彼は私に言わず引越したようですが東京のアパートに住んでいるのはわかっていますので。

…：ああ、いけませんね。どうも艦娘になると合成された艦の気が適合者と同調して気が荒くなったり気持ちさがストレートになりすぎるらしいので。

私も弱い心を見せないように、と思うと彼に強く当たってしまう

のは反省しなくては…。

それでも彼にも悪い所はあると思うのです!!

この間だってお昼と一緒に食べようと思ったら『あ、淀姉さん？ごめんちよつと忙しくて…また今度!』とか、どこかに出かけようと誘えば『ごめん今日会社説明会!』とか断られるし。あ、説明会は速攻で止めに行きました。

その割にはこの前見かけた時なんか駆逐艦候補の子とご飯を食べているんですよ!!

これは流石に怒ってもいいですよね？

私だってこうちゃんとかアーンってしたりされたりしたいですし!!私がお仕事頑張ったり大変なことあったら頭よしよしされて甘えたいし、甘えさせたい!!!

…:コホン。失礼しました。気持ち熱盛してしまいました。

それはともかく、こうちゃんには提督になってもらわないといけませんので…作戦開始です。

あ、そうだ。舞鶴鎮守府までは距離あるし、こうちゃん着いてからお腹空いてるだろうからお弁当作ってあげなきゃ!

—————

綺麗な夕焼け空だった…。

ここは何処だろう…:…?

とりあえず公園だっけ事は分かる。この公園見覚えがあるよ  
うなないような…:…。

見える光景は夕焼けと遊具、後は俺ともう1人…:女の子だ。女

の子は何故か口元までしか見えず誰かは分からない。

『~~~~~!』

口元が動き何か話している。しかし俺には何も聞こえない。女の子は構わず、話し続けていく。

声は聞こえないが彼女は笑ったりしているのは分かる。楽しそうに話しかけているのだ。

そうしているうちにだんだん俺の視界が白くなり始めた。

公園と女の子の光景が薄れていき、真っ白な世界だけが残った。すると浮遊感と共に暗転

なんだなんだ何が起きてんだ!?

そう言えばなんか聴こえる……??

女の子の声……さっきの娘かな?

そんな事を考えていたらまた光が視界を覆った。今度は真っ白な世界なんてレベルではなく眩しくて目が開けられない。

光が俺を呑み込んでいく……。

「~~~~~約束だよ?こうちゃん!!」

約束? 一体何の……

~~~~~

「2つじやまだ足りないようですね、もつと探照灯をください」

「そんなものでピカピカやるのは無意味です。こんな時の為に用意しておいた96式150cm探照灯を」

「流石工廠妖精、良いもの作りますね」

何やら騒がしい奴らが居るようだな……つてうお!!

めっちゃ眩しい!!!おいバカ!!まじで眩しいって!!!

「おはようございます提督」

「どうですか?我々が丹精込めて作った大型探照灯は?

一発で寝起きバツチリ」

「やかましいわー!てかそんな手荒い起こし方しなくてもいいじゃん!目覚ましみたいな音の出るものとかさくあるじゃん!」

妖精さん達は顔を見合わせると

「「「あーたーらしい朝が来たーきぼーのあさーだ」」」

「お前らが音出すのかよ。てかなんでその歌チヨイスしたんだよ。え、何？俺スーツ来て宇宙人と戦えばいいの？100点取ったら人生やり直させてくれるの？」

「要望が多いですね」

「我々の渾身の力作を」

「まだ寝ぼけているようですねもう1発探照灯で」

「もうええわ!!どうも、ありがとうございました」

「3点ぐらいですね」

うるさいよ君達。乗ってあげたんだからそれでいいじゃんもう。

……そんで、ここはどこよ？

「車の中です。」

いや、それは分かる。俺はその車がどこに到着したのか知りたいのよ。まあ分かってるといえば分かってるけど確認でね。

「これから貴方が勤める鎮守府です」

はあ~~~~涙が出ちやう!だって海軍だもん!

……遂に来ちやったかあ。

やっぱり夢だったとかいうオチにならない?

「お?96式?96式?」

もう使わねえよ。はいもうそれ危ないから没収!。

妖精さんから探照灯を奪い取り車の床に置く。

「そう言えば大淀さんから荷物を預かってます。」

荷物?契約書と録音機でしょ。これで帰れるわやったね!

風呂敷を開くと出てきたのは弁当箱。

まあ、契約書と録音機が出てきたら寧ろ驚きだわな。

お、手紙だ。えーと、なにになに?

『ごうちゃんへ』

この手紙を読んでいるということは、舞鶴に到着したようですね。と言っても伝え忘れていましたがその鎮守府は正確には舞鶴第2鎮守府です。舞鶴から隣の宮津湾に位置する鎮守府です。有名な天橋立が鎮守府から見えると思います。資材の運用や任務でお困り

の時は連絡を下さい。サポート致しますので。これから始まる鎮守府生活を応援しています。』

これ見ると提督になっちゃったんだなあって思う。ん？2枚目？まだ続きがあるのか。

『……………ここでは軽巡大淀の話です。ここからはこうちゃんの幼馴染、淀川恵としてお話しします。まずはごめんなさい、私はこうちゃんにかなり強く当たってしまいました…。あなたに辛い思いをさせたと思います。』

……………あのプレッシャーはなかなかだったね。

『でもこれだけは分かってください。私はあなたに嫌がらせをしなくてこのような事をしている訳ではありません。でも、私が散々お昼に誘ってたのに駆逐艦候補の子と一緒にご飯を食べていた時は少し怒っていました！』

それは本当にこっちがごめん。でも犬のようにじゃれついてくるアイツには敵わなかった…。ん？ナンノコトツポイ？

『まあそれはもう水に流しましょう。…何故私がこうちゃんを提督にしようとしたか分かりますか？』

……………提督の数が足りないから？

『それは、答えることは出来ません。どうしてかと思うでしょう。ですが私はこうちゃんに何故提督を勧めるのかその理由を気づいて欲しい、思い出して欲しい…。だからここでは教えられません。』

思い出す……………？

『…もし思い出したら、私に教えて下さい。思い出してくれて、それでも一般企業に勤めるというのであればその時、私は止めません。』  
……………。

『それまで私はあなたをサポートし続けます。何があろうと私はあなたの味方です。だから……………信じて。 恵より』

『P. S. お弁当を作ったのでどうぞ食べてください。』

淀姉さん……………。提督嫌だけど、ちよつとだけやってみようかな……………ん？なんかもう1枚メモ書きが…。

『あ、書き忘れてたので追加で。こうちゃんの事だから「思い出せ

ば解放されるのであれば、とりあえず適当に提督やつてればいいんじゃないやね？」とか考えているのであれば今すぐ止めましょう。それと一番重要な事が……』

ゴクリ……あの先見たくない。

『も・し・に・げ・た・ら、地の果て、海の底まで追いかけますのでその所、覚悟しておいてくださいね?』

ああ、文章なのに淀姉さんのあの笑ってるのに目の奥が笑ってないプレッシャーがひしひしと伝わってくるわ。

………やっぱ、提督辞めよ。

よっす！少し未来の相良航希だ。ここから先はワレアオバが撮影してた映像、ああ、はいはいプロローグのどこか。

今だから思う俺の心情を入れていくぜ！俺が淀姉さんから貰った弁当を食べ終わったあとの話さ！因みに弁当は半分以上妖精さん達に食われたぜ!!泣けてくるよな!!キョウシュクデス!!

—————

風が運んでくる磯の香り、聞こえるのはウミネコの鳴き声……をかき消す砲撃の音。

『青葉く、このボタンでいいの?え何?もう始まってると?やべえやべえ!』

頑丈な門の先に見えるは立派な赤煉瓦の建物。



なぜこんな所にいるのかって？

それはこれから俺がここで働くから……いや、働く事になってしまったからである。

『そうそう、手紙を書いて俺を送り出したということは淀姉さんはここには来ていない？となれば……って思ってたんだよ俺も』

「いや、まだ大丈夫……。引き返して電車乗って、家に帰って、辞表書いたら郵送して……来年第二新卒としてどっかの企業に就職すればいいじゃん!!よつしや帰ろウボアー」

唐突に首根っこを捕まれ持ち上げられる。この圧倒的なプレッシャー……まさかつ!?

『ハハッ、本当に死んだと思ったよあれ。』

「帰れると思いますか?ここに印の押された契約書もありますし、茜(あかね)さんと藤太郎(とうたろう)さんの承諾も得てますから帰ってもまた連れてこられるだけです。諦めて下さい。て・い・と・く。」

『ですよねええー!!!いますよねえええー!!!』

「淀姉さん!?待って待って!!淀姉さんがいるなんて聞いてないよ!?!とどうか首締まってるから離してくださいお願いします!!」

親父と母さん……信じてたのに!!既に淀姉さんの手が回っていたか!!

『うん、今俺は誰を信じたらいいか分からなくなってる。』

本当にこのままだと落ちる……っ!!ギブ!!ほんとギブ!!

全くもう……。と離してくれたがそもそも俺はこんな所に来る気なんて

『手紙読んだ時は淀姉さん……。って思ってたけどあの時の絶望って言ったらないよほんと。』

「何か言いたそうですが、パイルドライバーとキャメルクラッチのどちらが良いですか?」

『淀姉さん昔っからプロレス好きで良く試合とか見に行ってたのさ。今思えば全力で止めておくべきだったと思ってるよ。もつと違うの勧めてればなあ。眼鏡とって、エレキベースを淀姉さんに持たせて白露にドラムやらせて、愛宕にキーボード、エレキギターを雪風に持たせてグループ結成すんだよ。け○おん？知らんな。あず○やん 梓どうしよ。』

「滅相も御座いませぬ。あの頃の淀姉さんが懐かしいなんて思ってたまオガガガすんませんでした!!!体が半分こしちゃうううう!!!」

淀姉さん、昔は優しかったなあ……。

『本当になあ……。』

「あ、いたいた。提督、大淀さん。」

『時雨かあ、良い娘なんだよ基本、気が利くし大人しくてさ。ただ偶に目のハイライトお仕事しない時あんのよこの娘。その目で笑顔向けてくるのよ。淀姉さんみたいにならないでくれな。』

「こーちゃんだ!!楽しそうっばい!!夕立も交せて交せて〜!!」

『昔飼ってたゴールデンレトリバーのハナちゃんを彷彿とさせるんだよなあ夕立は。もうすんごい、褒めて褒めて!!遊んで遊んで!!って感じでき。お前ハナちゃんの生まれ変わりか……?まあ冗談よ。』

「おおーこーちゃん、ここの配属になったんだ。これから楽しみだねえ〜。」

『北上ね。1番取っ付きやすいと思ってる。フレンドリーそしてマイペースな奴で話しやすい。からかってくることもあるのよこいつ。でもからかい返してやると真っ赤になる北上様も面白いぜ。……でだ』

「北上さーん!待ってよお〜!……げ。」

『北上さん大好き大井こと大井っち。北上からかっていたのがバレてグーで殴られた。後北上に被せる感じで大井っちって呼んだらめっちゃ睨まれた。めっちゃ当たり強くて辛いわ。でもたまにしおらしくなる時ちよつと可愛いからどう反応していいかわからなくて困る事あるからこのままでもいいかもしれん。』

「アンタ達、ほんとに騒がしいわねえ……。もう少し静かになさいよ。ほら、退いた退いた。不本意だけど私が初期艦らしいからアイツの提督姿を拜んでやろうじゃない。」

『さあ初期艦様のお出ました。叢雲、優秀かつ周りにも自分にもストイックな奴。このせいか性格がなかなかキツイことキツイこと。酸素魚雷（演習用）でぶんなぐられることもしばしば。意外にも甘いものと可愛い物好き。この前コイツがパフェ食べて幸せそうな顔してたのを目撃した時は12.7cm砲でぶん殴られて、工廠裏の野良猫に猫語で話してるのにかち合った時は装備の槍で突き殺されそうになった。笑ってる時の方が可愛いのに勿体ないやつだよな。』

はああ揃いも揃ってぞろぞろと……。

時雨、夕立、北上、大井、叢雲とは海軍学校高等部の知り合いだったりする。因みに淀姉さんもお家がお隣で高校の先輩でした。まさか他にも知り合いが……

「ちなみに知り合いの方々は結構ここに居ますよ？私の方で色々手配しましたから。」

淀姉さん心を読まないでほんと怖いから

『ゾロゾロいらっしやいますよ（遠い目）』

「では、皆さんをご存知かと思いますが提督、自己紹介の方を」

ああ、助かった。このままだと体が逆パカしちゃう所だったよ。なんだっけ？自己紹介？そうだなあ……

「ええ、本日付けでここを辞めることになった相良航希（さがらこうき）です。短い間でしたがありがとうございます。これからの皆さんのご活躍を心より願っています。…そして私の右腕が持つていけないことも願っていますうううがああああ!!」

「禁忌に触れたもの、求めすぎるものにはそれ相応の対価が必要にな

りますので今回は右腕を頂いていきます。」

俺は自己紹介するだけで人体錬成を行っていた可能性が微レ存……？

『この時、川の向こうで心理が扉越しに手招きしてた。これで俺も国家錬○術師だぜ!』

というか淀姉さんやべえな……。一瞬で俺を組み伏せ、あまつさえ右腕を持っていこうと……。この鎮守府で働く? 考えただけでも恐ろしいわ。早いとこどうにかしなければ……。

『あ、脱出の手口、今も随時募集してますのでなにかいい案ありましたら教えてくださいます?』

「本当にアンタも懲りないわねえ……。大淀さん、もういいでしょ。とりあえずコイツを執務室に連れていかないと始まらないし。」

叢雲おおろくろく!!! 良い奴になったなあろくろく!!! ちよつと目付きが悪いなろくろくか回し蹴りが強烈だなあろくろくかお尻が3つになりそうだったろくろくか色々あったけどやっぱり成長してるんだね!!

「でも胸は……。あ、やべ」

『なんで口に出ちやっつたんだろろくろく? 口縫うかって? いやいや、それは面接で鍛えたトーク力で……』

いや、まだ間に合う、フオロー出来るはず。俺は数々の企業で数々の面接を受けてきた就活エキスパートだぞこれぐらいの事「釈明の余地は無いわ。合否通知の代わりに酸素魚雷食らわせてやるわ。有難く受け取りなさい!!!」

『やっば口縫った方がいいかもしれないわ。でも痛いと思うからジップロックにしてもらつてもいいですか?』

爆音が響く。死んだと思ったけどどうやら演習弾だったかあ。ささやかな優しさを感じるけどそれならもう少し手心加えて欲しかったなあ。いのちはだいじに。

空はこんなにも青いのに…いや、今日結構曇ってたわ。俺の気分はこんなにも青いのに……。

俺はただ、色んな世界が見たかっただけなのに

普通つてもものを満喫したかっただけなんだけどなあ。

どうしてこうなった俺の人生……。

『そう思うか俺？安心しろ、今でもそう思ってるからさ。』

『あ？なにになに？おお時間か、おーけおーけ。視聴者皆さん、俺の人生、中々ハードでしよう？そうなんですよ！メンツが濃い連中ばっかでやっていけないですわ。』

『もう疲れたよ。一般企業に務めて、趣味の合う彼女作って、ライブや音楽フェス行って、結婚して歳とったら余生を過ごす…こんな生活を送りたかったのよ。本当にどうしてこんなことに……。』

『もし、良い脱出の方法があつたら教えてくれな!!それじゃ、またいつか!アデュー!!』

『ん？何青葉？……はあっ!?妖精さんがマイク入れて全体放送してた!?ふぎけんな!!つてこんなことしてる場合じゃない!!衣笠、ドアの鍵閉めろ!!そしたらありったけの物を置いてドアを塞げ!!どっから逃げる?窓からに決まってるんだろ!!早くしろ死にたいのか!!まずい淀姉さん達だ!もう来やがった!!行くぞ窓だ!!つて叢雲お前ここ3階ぐああアアアツーー!!!ドガーンツ!!!バキーンツ!!!ガラガラガラツ!!!ドガガガガツ!!!チュドーンツ!!!

ツーーー

この放送は舞鶴第2鎮守府、青葉、衣笠の提供でお送りしました

!

## 就活戦争5日目

……ハッ!!

なんか変な夢を見ていたような気がする……？

鎮守府に来た時の俺を未来の俺が解説している夢……？

ちよつとよくわからないですね……。

そしてここは、医務室か？

ああ、そうか。叢雲に模擬弾で吹っ飛ばされたんだっけか……痛てーなーもう。コイツらと関わってくんだったら命がいくつあつても足りないわ。1UPキノコとかその辺に生えてないかな？

「あ、そうだ。このまま名誉の負傷ということで退役するか！  
よっしやああ!!」

ありがとう叢雲、お前の事は一般企業に務めるまでは忘れない!!  
「何言ってるんだかアンタは……。馬鹿な事言ってる元気があるならさっさと起きる!!」

スパーンッ!!ああ~~~~!!ハリセンの音おお~~~~!!

「……叢雲さん、いらしてたんですね。」

「私だってこんなセクハラ野郎のどこなんか行きたくなかったわよ。でも私が初期艦だし今日の秘書艦らしいから仕方なくね。」

ははっ、仕方なくだってよ奥さん。し・か・た・な・く

「へいへい、こんな私めの初期艦様になつて頂きありがとうございます。  
います。」

「それにしても、あくあ、どこかの誰かさんは人にいやらしい目を向けておいて謝罪のひとつもないのかしらねえ。本当に傷ついたわあ。」

お前をいやらしい目で見るわけ無いだろ。まだまだガキンチョの癖して、ませた奴だぜ。お前を見るならもつとナイスバディな……わかったわかった、まあ待て話し合おうじゃないか。とりあえずその槍をおけつて……。

なんだってコイツらは人の心が読めるかの如く反応すんだよ。艦娘つてこういうもんなのか？それじゃあおちおちエ〇い事を考え

る事も出来ないぜ。

「……はあく、叢雲様大変申し訳ありませんでした!!……これでもいいか?」

「貸しーね。ふふん、そうねえ……今度の休み、外出したらパフエでも奢ってもらおうかしら? 買い物してアンタに荷物持ちさせるのも良いわねえ……。」

「こんにやろおおくくく!!! 人が下手に出てれば調子に乗りやがってえええくくく!!!」

「あら? 反抗的な目ね? 大淀さんに医務室でもセクハラされましてって伝えとこうかしら?」

「おい待て!! それは完全なる冤罪じゃねーか!! ああもう、わかつたわかつた!! 降参だ降参!! パフエだろうが荷物持ちだろうが好きにしろ!!」

淀姉さんはシャレにならない。最近新技とか覚え始めてるからやられたら体がいくつあっても足りないわ。背に腹はかえられない。

「ふふん! 言質取ったからね! 忘れたとは言わせないわよ? ……危なかったけど何とか話をこぎつけたわ……。」

「わお勘弁してくれよ……早速休日返上だぞ。……ん? 最後何か言ってた?」

「まあ、それは今度の楽しみに取っておくとしてそろそろ行くわよ。」

「行くったって何処に?」

「アンタはこれからここで提督をやるんだから施設の事を知っておかないといけないでしょうが。私は先月からここにいたからアンタに色々教えてあげようって訳。感謝しなさいよね?」

「なるほど、施設案内って事ね。まあ確かにこの鎮守府の事を知っておかないと逃走ルートの確保も脱出も出来ないしな。重要な事ではあるな。」

「あ、そう言えば淀姉さんはどうしたよ? こういう事なら淀姉さんがやるとばっかり思ってたわ。」

「大淀さん? ああ、大本営に戻ったわよ。そりや大本営所属の艦



娘がいつまでもアンタを見てられるわけないわよ。」

……え？マジ？本当の本当でマジ？

淀姉さんいない？

はあああ~~~~!!最高~~~~!!

ようやく淀姉さんのプレッシャーから解放される。

「まあ代わりに何かやらかしたら私がアンタを確保するから変な気は起こさない方が身のためよ。」

……代理執行人叢雲。まあ、淀姉さんよりはマシか。

「それじゃ、行くわよ。ついてらっしゃい。」

—————

「ここが入渠施設ね。知ってるとは思うけど、ここでは負傷した艦娘を治療する事が出来るの。入渠槽は4つあって同時に4人まで修復できるわ。」

ほー、これが入渠施設か。結構デカイ所だな。講義で聞いてたけど、艦娘を入れて置くだけで傷が治っていくってすげーよな流石妖精さんの謎技術、凄すぎる。

「そしてこれが入渠で大事なアイテム、高速修復材よ。数に限りがあるから大事に使いなさいよ。」

「ゲームでよくあるよな。蘇生アイテムとか味方全員のライフを全回復するアイテムとか使おうとしても勿体なくてなかなか使えないってやつ。」

「必要な時は使いなさいよ！だからアンタドクエとかで回復アイテム逃してパーティー全滅すんのだよ。今やってるのはゲームじゃないんだからちゃんとしてよね！」

うぐう~~~~!!何も言えねえ!!!

「因みにIII、IV、Vなら？」

「…選ぶのに困るけどやっぱりV。でも最後に全員集合のIVも良かったわね。」

ほうほう、やはりVか。しかしIIIも名作中の名作…言い出した俺も割と困る。まあ他にも名作あるからなんにしても困るんだけ

ど。

俺はとりあえずストーリーをダーっとやって行くつてスタイルに対し、叢雲はトコトン突き詰めて完璧を目指すスタイルで隠しボスやら宝箱やら全部制覇しててコイツのデータ見た時ほんとにビビった。

あの時叢雲のデータ消したらどうなつてただろう？面白い展開……にはなつてただろうけど俺の命も面白い展開になつてたな。データ消すのは大罪。俺もやられたらどうなるか分からない。

「つてそんな事はいいのよ。ちょうど今、入渠中の艦娘が居るかからお試して使つてみなさいな。」

「大事に使えつて言つてたのにいいのか？」

「じゃないといぎつて時に分からないでしょうが…と云つても大したこと無くて高速修復材をこの機械の中にバケツごとセットしてボタンを押すだけなんだけどね。2人だからバケツは2つ、ほらやつてみなさい。」

言われた通りバケツをセットしボタンを押す。

すると機械が作動しバケツが入渠施設に運び込まれて行った。

「これで修復材が浴槽に注がれて修復完了。このメーターを見てなさい。」

壁のモニターには艦娘の修復予定時間が書かれており、4時間の艦娘と1時間の艦娘がいたようだ。

するとそのメーターがみるみる減つていき、チーン！という電子レンジのような音で完了。

「これで修復完了になったわけか。」

「そういう事。入渠してた連中が出てくるから顔合わせも兼ねてもう少し待つてなさい。」

ここに来て初めてのコイツら以外の艦娘か…なんか緊張するな…。

あ、そう言えば…

「てかさ、俺ここにいていいの？」

「は？当たり前じゃない。じゃないと顔合わせ出来ないでしょ

？」

「いや、そうじゃなくて入渠って風呂みたいなもんだろ？そしたら出てくる時さ……。」

「……あー、確かにそう思うわね。入渠槽は確かにお風呂みたいなものだけどちよつと違うのよ。」

「どういうことだってばよ？早くしないと出てきちまうぞ。」

「最後まで話は聞きなさい。入渠は損傷した艦娘を修復するつてのは分かるわよね？それはね、艦娘自身の怪我だけでなく、着ている服も修復されるの。だから入渠する時はそのまま入るのよ。」

「そうすると傷も破けた服も元通りになって出てくるってことか。」

「そういう事。お風呂はこの施設内のもう少し奥にあるの。お風呂は24時間いつでも使えるわ。提督用っていうのもあるけど混んだったりすると私たちも使う事があるからもし、アンタが使う時は『提督使用中』って看板を扉のところに掛けておきなさいよ。」

するとガラガラと音を立てて入渠室の扉が開き中から艦娘達が出てきた。

「この高速修復材はどなたが……。」

「もつとお姉様と二人きりの時間を楽しもうと思ってたのに、とんだ邪魔を……不幸だわ……。」

黒髪で巫女服を改造したのような服装の艦娘達。よく似てるし姉妹かな？

「扶桑、山城、コイツが今日着任してきて早々セクハラしてきた変態司令官よ。ほら、アンタも自己紹介しなさい。」

「誰が変態司令官どころ。余計なものが入ってるだろ「じゃ変態ね。」うがー!!!!って違うそこじゃない!!!!」

はあくコイツは……。ほら、二人とも困惑してるじゃんか。

「あー、一応ここで提督やる事になった相良航希だ。よろしくな。」

「あら、提督さんでしたか。初めまして、戦艦扶桑と申します。こ

ちらは妹の…」

「戦艦山城です、よろしくお願いします。もし、お姉様に手を出さうものなら撃ちますので。」

おおう、妹の方怖いな。大井と同じ香りがプンプンするぜ。君子危うきに近寄らず。

「で、今日はどんな理由で入渠？ 出撃はしてないでしょ？」

「実は、歩いていたら飛んできたカラスに突つかれ、私を助けようとした山城が石ころにつまづき、工廠脇に積んであったドラム缶の山に衝突、山城はそこで大破、私は降ってきたドラム缶にぶつかり小破しました…。」

なんとという不幸体質姉妹。普通に生きててそこまでの不幸に…：あ、俺会社100社も落ちてたわ…：不幸だわ。

「気をつけなさいよね…：って言いたいところだけど気をつけてどうにかなってるならあんた達もそんな事にはならないわね…：もうお祓いにも行ってきたらどう…：？」

格好だけならお祓いする側にしか見えない2人という。

俺もお祓いしてもらおうかなくなんかやばいものがついてる気がするし…：リアルな方で。

「とりあえずそろそろ行くわ。まだ案内してない所がかなりあるし、夕方から歓迎会やるからそれまで損傷しないでよ？」

「努力はします。」

「では提督さん、叢雲さん、後ほどお会いしましょう。」

こうして、扶桑、山城との初顔合わせは終わった。

「なんつーか不思議な連中だったな…？」

「不幸に愛されし姉妹なのよ。それでも実力者達だから上手く使えるようになりなさいよ？」

さあどうなるか…：その前に俺がこの鎮守府を去ってるかもしれんしな。

—————

「そしてここが食堂よ。大体100席ぐらいあって座れないって事は今はないと思う。」

「確かに結構広いな。」

お昼時ともあつてか多くの艦娘達が食事をしていた……え？なにあの人、カレーの量やばくね……？てかちらほら量がおかしな奴らがいる。戦艦・空母は結構食べると聞いていたが予想以上だったわ。

街で大食い選手権とか出たら優勝間違いねえな。

「それでこの食堂を切り盛りしてるのが給糧艦の間宮さんと伊良湖さんよ。」

「へえ、驚いた。ここは間宮と伊良湖がいるのか。」

給糧艦間宮と伊良湖は艦娘の中でも適合する者が少なく希少な人材となっている。

希少な彼女達の作る料理はとても美味しいと有名で海軍学校の時にどんなものと神谷や大迫と話し合ったなあ。

「ヒトフタマルマル……ちようどいい時間ね。休憩がてらお昼を食べてこの次は工場に行くわよ。」

「あいよ。それにしても、噂に聞く間宮・伊良湖の料理かあ……。食べる機会はないと思っていたが……。」

「あら、良かったじゃない。間宮さん達の料理は絶品よ。極めつけはアイスと最中……。くううう!!間宮券があれば……!!」

そんなに美味いと聞けば楽しみが増えるな。ん？間宮券？

「てかその間宮券ってのは何よ？」

「間宮さんや伊良湖さんのデザートはいつでも頼める物じゃなくて、頼むには間宮券・伊良湖券ってのがいるのよ。大本営から各鎮守府に毎月1枚ずつ配布されるんだけどほんと、1枚じゃ足りないわ……。」

やべえな間宮券、いつか間宮券求めて争いが起こるんじゃない？

「その間宮券、俺にも配布されんの？」

「されるわよ。同じように1枚ずつ」

流石に配布されるか。これで艦娘限定ですって言われたら甘党の提督、生殺しだろうな。

「そうそう、司令官には司令官が使える券とはまた別に間宮券が配布されるのよ。」

へえ、提督豪華じゃん間宮券多めに貰えるなんて。

「多めに貰えてラッキーみたいな顔してるけどこっちはアンタには使えないわよ。」

「なんだよ使えないのか。」

まあそりやそうだよな、不公平だわ。

「それはMVP間宮券と言って、作戦で優秀な働きをした艦娘に司令官からご褒美として渡される間宮券ね。」

これは1枚でアイスと最中が貰えるすごい券よ！

MVPって言うてるけど実際は司令官が頑張ったと思う艦娘に渡す、実質司令官の裁量で渡せるわ。」

……ほう、いい事聞いたわ。みんな大好き間宮券を持っていれば、ヤベー奴らから絡まれても助かるかもしれない。最初から持ってる交渉カードみたいな物だな。

「間宮券についてはこんな感じね…懇切丁寧に説明して案内してる秘書艦様に間宮券くれてもいいのよ?」

「この感覚で投げ銭してたら間宮券が速攻で無くなるわ。こういうのは焼肉と同じで、偶に食べられるからより美味しく感じられるんだよ。」

そんなこと言ったら焼肉食いたくなってきたわ。タン塩食いてえ……。

「…なんか上手いこと言いくるめられた気がするけどまあ確かにそうね、勝利の味はなんとやらって言うし。その代わり、私が活躍したらMVP間宮券、私に寄越しなさいよ?」

「ほいほい、考えとくわ。とりあえず飯食べようぜ。さつき焼肉の話したら一気に腹減ったわ。」

「それもそうね。あ、でも夕方から歓迎会やるから軽くにしないとよ。……間宮さくん!」

厨房の奥から「はい!」という声と共に1人の艦娘が現れた。割烹着姿で柔らかい雰囲気、一瞬で癒し梓だと分かる艦娘、間宮

さんだ。

「あら、叢雲さんいらつしやい。今日のお昼はカレーライスですよ。……そちらの方はもしかして」

「そ。今日からここに着任した変態司令官よ。ほら、間宮さんに挨拶なさいな。」

まだそのネタ引つ張ってんのかよ……。このまま誰かに紹介される度にこれで説明されるのは面倒だわ。

「お前なあ……一応これからお前の上司になるんだぜ？……初めまして間宮さん、一応ここで提督をやる事になった相良航希です。海軍学校の時から間宮さんの作るものは美味しいって有名だったから食べるのが楽しみですわ。」

「あらあら、それなら提督さんの期待に応えられるよう腕によりをかけてお料理しますね！あ、伊良湖ちゃん！ちよつと来てもらってもいいかしら？」

はあく間宮さんいいわあく。艦娘と言ったら一癖も二癖もあるような連中だけど柔らかな雰囲気、素敵な笑顔、女神か。

「どうしました間宮さん？あら、見慣れない方……あ、もしかして」  
「そう、こちら今日着任した相良提督よ。伊良湖ちゃんも挨拶して。」

「初めまして伊良湖です！ご飯の事で何かありましたら間宮さんと私、伊良湖にお任せ下さい！」

かあくこの娘もいい子だわあく！やっぱり給糧科出身は海軍で唯一まともな人材を輩出するつてのは間違いないわ。

「ちよつとアンタ、私達の時と態度の差ありすぎでしょ!!間宮さん、伊良湖、騙されちゃダメよ！コイツ普段はもつとガサツな感じだから！」

うるせー!!余計なこと言うな!!ちよつと黙ってる!!ボロが出ちまうだろうが!!!

「あら、そうなんですか？相良提督、お気を遣わずどうぞ普段通りに話してくださいな。私も堅苦しいのは苦手です……よろしければ私の事もさん付けせず間宮とお呼びください。」

「伊良湖も間宮さんと同じくです！」

はあ~~~~なんなんこの人達？女神の生まれ変わりかよ……。  
尊いわあ~~~~!!!!尊過ぎて辛い。

「…分かった。それじゃよろしくな間宮、伊良湖。」

俺、ここに間宮さん達がいる限り、頑張れそうな気がする……。



## 就活戦争6日目

間宮達から今日のお昼であるカレーライスを受け取り席を探す。  
うっ！視線を感じる……っ！！まさかっ！？難見沢症 r y

まあ、なんてことも無くそりやそうだ。新しい指揮官が来てそいつ  
がみんなの憩いの場、食堂に現れてみる。

向こうもびっくり、こっちもドキドキだ。

わお注目の的ですよ相良さん、転校生ってこういう気分だったの  
かな？

あれでしょ？

『今日転校生くるんだって〜！』

『え〜!?!うそ〜！男子!?!女子!?!』

『な・ん・と、男子らしいよ！』

『カツコイイかな？もし良かったら〇〇声掛けてきてよ〜！』

『え〜！恥ずかしいよお〜！』ってやつ

なんかソワソワしてくるわ。いや、その前に今の妄想は我ながら  
気持ち悪いわ。

「何ソワソワしてんのよ、気持ち悪いわね…。シャツキつとしな  
さい！シャツキつと！アンタはこれからこの指揮官になるんだか  
らみんなの前では堂々としてなさい！」

近くにいるこっちが恥ずかしいわ……。とスタスタ歩いていく叢  
雲の金魚のフンのように引っ付いていく俺。

転校生から気の強いお嬢様の荷物持ちに早変わりって感じ。

「おーい！叢雲く、こうちやくん!!ここに座るっば〜い!!」

「相良く…提督、叢雲、こっち空いてるよ。」

さつきぶりの夕立、時雨コンビだ。二人ともアホ毛が動いちやつ  
てまあ……。時雨はピコピコと動くのに対し夕立のはもうブンツブ  
ンツとちぎれんばかりに動いてる。

やめろやめろ、アホ毛は抜けるとオルタ化するぞ。はいはいどう  
どう。

「全く、いつも騒々しいわね…。」

「良いじゃねえか、みんなで賑やかにメシ食った方が美味しいだろ。」

トレーを置き、早速とばかりにカレーを頬張る。

!!?? 何これカレーなの？めっちゃ美味くない？

一瞬スペースキャットの目を見開いてる猫みたいな顔になってたわこれ。

母さんの作るカレーも美味いんだけどこれはベクトルが違う。

「間宮さんが作る料理は本当に美味しいよ、ボクも初めて食べた時は感動したなあ。」

「時雨はもつと食べるっぽい！こんなに美味しいものは沢山食べないと損だよ！」

「ならお前はもう少し落ち着いて食べるや…あゝ口の周りにカレー付いてるじゃねえか…。ほら、拭いてやるからこっち向け。」

ハンカチを取り出し、夕立の口元を拭ってやる。ツポイ

「……………」

「……………」

ベチャ！ベタツ！

「あ、提督ごめん。ボクも口元にカレー付いちゃって…。拭いてくれるかい？」

「私も少しよそ見してたら口にカレー付いちゃったわ。拭いてくれる？」

「いや、お前ら今明らかに自分で……………」  
「拭いてくれる（かしら）??」

「……………はい。」

なんなんだよコイツらはよ……………。

ハンカチがカレーまみれになるじゃねーか、洗うの大変なんだぞカレー。

「じゃあほら時雨、こっち向け。」

「うん……………」

いや、なぜ目を閉じる。カレー拭くだけなのにドキドキさせられるな……………。

「ほら、取れたぞ。」

「うん、ありがとう提督。」

なんかコイツ、キラキラしてね?…まあいいわ次は

「じゃこつち叢雲も向け。」

「ん」

いやだからなぜ目を閉じる。いやいやないない。こいつらに限ってそんな事はない。

「ほい、拭けたぞ「あ、ありが」ってお前髪の毛にまでカレー付いてるじゃねーか。あだ名カレー臭い女とかに「フンツ!!」ゴスツ!!痛ってえええー!!!」

こ、コイツ…弁慶の泣き所、思いつき蹴りやがった!!

あ、でもなんかコイツキラキラしてる…。

「アハハハツ!!!相変わらず仲良しだねえ!!」

「久しぶり相良君!」

ん?この声…

「お前ら飛川と蒼井?!お前達もここの鎮守府だったのか!!」

コイツらは飛川龍子 (とびかわりゆうこ)と蒼井龍華(あおいりゆうか)海軍大学で艦娘候補生だった奴らだ。

因みに時雨の本名は時崎雨音(ときさきあまね)、夕立は立川夕香(たてかわゆうか)、叢雲は南雲凜香(なぐもりか)と言う。

「久しぶりだね〜!卒業演習以来だから2ヶ月ぶりぐらい?」

「そうそう、でも驚いたよ〜!新しい提督が来るって言うからどんな人が来るかと思ったら相良君だったからさ〜。あ、今は提督だから提督って呼ばなきゃね。」

「となれば俺もこれからは飛龍と蒼龍って呼ばなきゃ行けないな。」

「これから航空戦力がある時は呼んでね!私達活躍しちゃうよ?」

「そうそう、今の私には多聞丸もついてるし!!」

「お、頼もしいねえ!とりあえずこれからよろしくな!」

「こちらこそ!あ、相良く…じゃなかった、提督、私達これからお

昼なんだけどもまだ食べてるなら私達も相席いい？」

長い机だからまだ座れるけど：

「今はダメよ飛龍、蒼龍。まだ案内終わってないからそろそろ行かないと。もしこいつと話したかったら歓迎会の時お願い。」

「あー、そっかそっか。今鎮守府案内中だったか。おーけーおーけーそれじゃまた後で！」

「叢雲ちゃん、提督をよろしくね〜！」

彼女達も間宮のカレーを受け取りに行ったのだろう。

大学の時から賑やかな奴らだったが艦娘になってからもそれは健在という訳だ。

「さてと、私達もそろそろ行くわよ。」

え？もう食べたの？早くない？

「アンタがくっちゃべってる時に私は食べてたからね。」

おいおい…そりゃねーぜ。

カカカツとカレーライスを掻き込み水を飲み干す。

「それじゃボクらはここで準備があるからもう少しゆっくりしてよ。提督、また歓迎会の時にね。」

「夕立も準備頑張るっぽ〜い!!」

時雨、夕立コンビとも別れ、食器を片付けに行った初期艦様を追いかける。

「それじゃ、次は工廠ね。工廠は説明しなくても分かるわよね？」

「流星にな。」

工廠、装備を開発・改修したり、艦娘を建造する施設。

開発・改修はその言葉の通りだが建造はちよつと複雑かもしれない。

艦娘を建造する場合は、まず艦娘候補生、艦娘の適性がある者が必要である。そして建造機に入ってもらおう。

そしてらば艦娘を作り出すエネルギーを注入する。

燃料、鋼材、弾薬、ボーキサイトの4種類だ。

この4種のエネルギーを加えることで艦娘候補生の中にある軍艦の気呼び起こし、艦娘候補生の魂と合成すれば、艦娘の建造完了

といった手順である。

因みに希少な適性の持ち主であったりすると通常の建造ではなく、大型艦建造と呼ばれる建造方法でエネルギーを多く使い艦娘を建造するのだ。

本当に妖精さんの謎技術凄いよな。人間と軍艦の魂を合成つてなんだよ、そのうちタイムマシンとか作り出すんじゃないか？あ、なら俺、もしもボツ○スの開発お願いしてもいいですか？

工廠は食堂を出て、先程の入渠施設のさらに奥にある。

「ここが工廠ね。ここでは明石さんを主体とした工廠妖精さん達や技術者の人達で私達の装備や私達自身のメンテナンスをしているわ。」

おおー、かまぼこ型の工場で、いかにもと言った感じの場所だな。そして、明石ねえ……まあまさかそんな事はないでしょ。

我がクレイジーファミリーの1人、明石適性を持った姉がこんな所に、大体あの人は今横須賀にいるはずで……

「お、航希君じゃん！元氣してた〜!!」

いや、見間違えだし聞き間違えだ。想像してるとそういうやばいものが見えたり聞こえたりするって……。

「ちよつと〜？実の姉に無視はないでしょ無視は〜？あ、お姉ちゃんのこと忘れちゃったかあ〜。そしたら昔みたいに腕持ってグルグル回るヤツやれば思い出すかな？」

「覚えてます!!覚えてますからその腕を握った手を離して!!! 離せやゴラあああー!!!」

大体アンタみたいなインパクトの塊みたいなのを忘れる方が難しいわ!!

「え!? 明石さんアンタ、コイツのお姉さんだったの!?!」

「ええそうよく、本名は相良明希(さがらあき)、改めてよろしくね〜!……気を取り直して明石の工廠へようこそ、叢雲ちゃん今日はどうしたの? 装備の改修?」

「……あ、いや、違くて……今日は……明石さんの弟……さんが提督になっ

だからそれで今鎮守府の案内をしてて…。」

「ああ〜！そつかそつか！それで工廠の案内に来たってわけね〜！どうぞどうぞ入って入って〜!!かなり散らかってるけどね〜!!たははは〜!!」

おいおい…この姉いつもこんな感じでやってたのか…。

見ろよ、いつも強気なああの初期艦様がタジタジじゃねーか。

流石母さんの娘だわ……。

「前々からこの明石さんやりづらいつらいつらと思ってたけど今日まさかの事実が発覚してさらにやりづらくなつたわ。」

だよなく。弟の俺ですらそう思ってるからさ〜。

「いやでも、明石さんを上手いこと出来ればコイツとも……。」

ん？なんだコイツ？聞こえんかったけど急にボソボソと

…。

まああの姉見て色々思っただらうな。

「それじゃ、軽〜く工廠の説明しちやおうかな〜。まずはこの建造機〜！まあ言葉の通りだよ〜。ああでも艦娘候補生の娘が居ないとダメだから使うのはまだ先になるかな。だからそんなときに改めて建造機を見せるよ！はい次〜！」

確かにこの主任みたいな立場だから説明してくれんのはありがたいんだけどさ、母親譲りのマシンガントークで説明してくのやめてくれよな…。

「アンタ、結構苦労してたみたいね……。」

「お、分かってくれる？そしてこれの上位バージョンがもう一人いるんですよヤバいだろ？」

乾いた笑いの叢雲を他所に明石さんのトークは止まらない。

『トークを止めるな！』じゃない。誰でもいい、頼む止めてくれ。

「それでー、こっちが装備保管倉庫ね〜。私や妖精さんが作った装備がここに保管してあるからさ〜！」

……散らかってると言えば散らかってるけどそこまで思ったよりは散らかってないか。きっと妖精さん達が気を利かせて片付けて

くれてるんだろうな……今度顔合わせも兼ねてプリンでも差し入れしよう。

「あ、そうそう！この倉庫だけどね！装備が入る量は限られてるから要らないと思ったものは誰かに持たせるなり、廃棄するなりしてね。じゃないとどんどん物が増えちやつてね〜！」

……妖精さん達の差し入れ増やそう。

「はあ、近いうちにここの整理するわよ。私も手伝うから……。」

「ああ、頼むわ……なんかすまん。」

「まあいいわ、最初の1週間は私が固定で秘書艦らしいからその間でやるわよ。」

「奢りの件、パフェにアイスも付けとくわ……。」

「そう、ありがと……。」

なんでだろう、なぜただ説明を受けてるだけなのにこんなに疲れるんだらう……。

「それじゃあ〜最後、開発室〜!!」

よつしやああーっ!!最後だぜええーっ!!

「今喜んだ弟〜、お前は補習だから居残りなく。」

……………。

「じゃあ、ちやちやつとやつちやいますか〜妖精さん！かもーん！」

明石の呼びかけに応じ、何人かの妖精さんが集まってきてくれた。

「はいはい、どんな用件で？」

「開発？」

「96式探照灯ですか？」

お前もいたのかよ。ああ、そういえば工廠妖精とか言ってたしな。96式はもういいよまだ作るんかい。

「提督さんの目覚ましは私が作る」

要らねーって言ってるんだろ!!

「ああ、キミこうちちゃんと一緒にいた妖精さんか〜！」

これからよろしくね！とりあえずお試しだし資材も勿体無いから簡単に主砲作ろつか！全部最低値でもいいけど今回は真面目に燃料10、弾薬10、鋼材30、ボーキサイト10でお願いね〜！」

「じゃあ持つてくるね」

そして戻ってきた工廠妖精さんは緑、黄、銀、茶色のオーラを持つて帰ってきた。

「まあみんな見たことあると思うけどこれが燃料と弾薬と鋼材、ボーキね。これを……ほいっ!!これで出来上がり！12・7cm連装砲ね！叢雲ちゃん、2番と3番スロット空いてる？」

「ええ、空いてるわよ？」

「それじゃこうちゃんに装備のしかた見せてあげてよ！艤装展開して。」

ああなるほどと納得すると叢雲は艤装を展開し、手で12・7cm連装砲に触れた。

すると12・7cm連装砲は一瞬で消え、叢雲の手に装着された。

「これで今、叢雲ちゃんは12・7cm連装砲を装備している状態ね。じゃあこれ、倉庫にあった5連装酸素魚雷。叢雲ちゃんまたお願い！」

叢雲が再び魚雷に触れると魚雷は消え、今度は叢雲の太もも辺りに魚雷が装備された。

「今叢雲ちゃんは第1次改装は済ませてあるから3スロット装備することが出来るの。元々装備していた主砲と今装備した主砲と魚雷で全てのスロットがいっぱいになった。」

てかコイツ改装済みだったのか。まあ1ヶ月前から現地入りしてたらそうなるもんなのかな？

「そしてここで問題！この状態で別の装備に触れるとどうなるでしょうか?!正解は触れても何も起こらないね！」

姉よ、問題やる言うたやん…答え早すぎるから問題になつたらんわ…。

叢雲もため息を吐きながら装備に手を触れる。



「…全部装備していると何も起こらないけど、変えたいと思った時は頭の中で念じるの。そうすると変えたい装備と変更出来るわ…こんな風に。」

すると両手に持っていた主砲の片方がまた地面に現れ、手に触れていた魚雷が装備されていたのと合わせて両足に装備された。

「まあこんな感じね！工廠の説明はこれでおしまい！まあ研究室とかもあつて、そこで自主開発とかしてたりするけどそれは気にしないでね。」

あ、この顔はその研究室とやらでなんかやつてるんだなコイツ。今度調査しとこう。

「それじゃあまた何か作るとか整備するって時はお姉ちゃ…工作艦明石にお任せ下さい、提督!!」

そのさあ〜ニマニマしながら言うの止めて貰えませんかね明希さん……。悪意を感じるわ。

「悪意なんて飛んでもない！可愛い弟が提督さんになったんだから嬉しいことなのよ。」

だから心の中を読むなんての!!艦娘のパッシブスキルかなにかなのそれ？

「そういうえばこうちゃん、朝方淀がこつち来てたけどまだ居たりする?」

「いや、大本営に帰ったらしいぞ。  
マジで助かった。」

「えー、何よ〜同期である明石さんが仕事終わったら歓迎会の時に飲もうと思ってたのにく。」

あ、そうそう。この人と淀姉さんは同い年で同期の艦娘だ。  
「私見送ったけどあの結構急いでたわね。なんでも事務処理と荷物整理があるとかで帰って行つたわよ。」

あの人多忙だからな。色々やる事あんだよ。てか俺にこんなことしてる暇あつたら仕事してた方が良かったんじゃない?俺は就職活動出来る、淀姉さんは仕事が片付く、win-winじゃない?

「……………ほくん、なるほどね。そういう事ならおつけーおつけー

！それなら…叢雲ちゃん？ちよ〜つといいかしら〜？」

やめろやめろ手をワキワキさせながら近づいてくるな！！

「なっ…何よ!?ヒツ!?」

あ、叢雲が捕まった。

「いやあく初めてであった時から表情が硬いなあく〜って思ってたね  
〜ほら、笑顔笑顔〜！」

「ちよ、ちよつと明石さん!?や、やめ…アハハハッ!!やめなさいつ  
てのおおおー!!!」

あーもう…本当にこの人はさ……。叢雲はくすぐりの生贄と  
なったのだった。

「そうそう、叢雲ちゃんの自然な感じが見たかったのよ〜！可愛い  
んだからもつと笑って笑って〜!!」

「ほんとにやめなさいって!!!クツ…アハハハ!!!航希ツ!!!明石さん  
止めハハハ!!!」

この姉は暴走するとすぐこうだからな、はあ……。

「おい『明石』もうやめろ、提督命令だ。」

「お?こうちちゃん?」

「聞こえなかったか?今すぐやめろ。」

「…:はいはい、すいませんでした提督。叢雲ちゃん大丈夫〜  
?」

こうしてヒイヒイ言いながら叢雲は明石から解放されたのだっ  
た。

「…:…つたく、明希姉はもう少し加減と落ち着きを知ってくれ  
…:…アンタのテンションについていけるのは母さんぐらいなんだか  
ら。…:…何ニヤニヤしてんだよ。」

「いやねえ〜こうちちゃんも大人になったんだなあ〜つてさ〜『や  
めろ明石、提督命令だ。』くう〜!!カッコイイ〜!!録音しとけば良  
かったなあ〜!!」

うん、まだ反省してないなこの人。おーけーおーけー

「もうーっ提督命令だ、工作艦明石。「…:え?」どうやら反省の色

が見られないようだからこれから三日間お前の研究室とやらは出入り禁止だ。それまでお前が作りまくって散らかした工廠の掃除をしとけ!!」

「こうちゃん!!!あ、いえ…提督!!そんな殺生な!!!あそこが私の唯一の楽しみなのに!!!」

「無駄なものばかり作るなつての!!!大体明希姉は昔っからだしらないから……」

しばらく明石に説教していた航希を見て叢雲は後にこう語った。

「あれぐらい普段からしっかりしててくれれば私も苦労しないのに……。でもまあ、アイツも苦労してんのね。」

この後、まだごねる明石を叢雲や近くの艦娘たちに取り押さえさせ、俺は妖精さんから受け取った鍵で明石の悲鳴と共に研究室をロックしたのであった……。

## 就活戦争7日目

「…………じゃあ次、艦娘寮ね。」

目に見えてお疲れの初期艦様。うさ耳みたいな艤装も垂れ下がっている。

うちの身内が大変申し訳ないとかいいようがない。

「…………なんか、ほんとすまんかった。」

「…………まあこれも貸しにしとくわ。」

工廠から移動して入渠施設、食堂を通り過ぎたら艦娘寮だ。

「……」が艦娘寮ね、全部で2棟あって、手前が駆逐・潜水艦・軽巡等、奥が重巡・空母・戦艦の寮。」

はいはい、このいかにもと言ったマンションやっぱ寮ね。ここ来た時にも目立ってたからね。

…………そういえばさ、俺どこで暮らせばいいの？艦娘寮と同じ所とか言わないよね？

『ごめんなさ〜い！こっちの手違いで部屋が用意できなくて!!用意できるまで明石さんと同室でおねがいね!!姉弟だし大丈夫よね?』とか無しね。

どこのインフィニットスト何たら？

てか明希姉と同室はこっちのメンタルが色んな意味で持ちそうにないから勘弁してくれ。

脱走不可避。いやまあいざれ出てく気だけどさ。

「なあ叢雲、因みに俺の部屋の的なのもあるのか?」

「ん?ああ、あるわよ。ここからもう少し奥の方に。まあ後で説明するからとりあえず付いてきて。」

良かった、違う建物らしい。流石に艦娘と同室とかはないか。

スタスタと艦娘寮の中に入っていく叢雲初期艦。

え?ちよつと待って入るの?艦娘寮でしょ?実質女子寮じゃん。

海軍学校の寮で生活してたときは完全に男女で寮が分かれており、許可が無くては入ることは出来なかった。

「何ぼさつとしてるのよ?」

「あ、いや、なんつーか…入っていいのかなーって。」

「あー、またそのパターンね。海軍学校の寮は完全に分かれてたものね。こればかりはもう慣れるしかないわ、執務室とか作戦会議室、そしてアンタの部屋もここを通らないと行けないから。」

うーっ、欠陥構造過ぎない?彼女達の部屋の前通らないといけない執務室とか私室とか。

…まあいいか、別に部屋の中入るとか言う訳でもないし、考えすぎだわな。

というわけで突撃お隣の艦娘寮へ

玄関から廊下、そして各部屋があると言った一般的なマンション。

これだけ廊下が長いと学校にも見えてくる。

今いるのは潜水、駆逐、軽巡のエリアだ。

時折、アハハハツ!!と笑い声がするのが微笑ましい。

「こっちの寮には潜水・駆逐・軽巡の40人程度が生活してるわ。基本的に2人部屋か4人部屋で、大体は姉妹艦達と一緒に部屋割りになってる。これは隣の重巡・空母・戦艦も同じ。決定的な違いと言えば…まあこの通り、結構喧しい事かしらね。」

「良いじゃないか、賑やかで。叢雲も姉妹艦と同じ部屋なんだろう?」

「そうね、慌ただしい奴、喧しい奴、と思ったら逆に全く動かない奴とか色々よ。ほんと、個室が欲しくなるわ。」

叢雲の性格からしたらそんな気はしてたけどな。

「まあくでもなんだ、姉妹や友達と過ごせるってのもいい事だと思っぜ。」

「んなわけないでしょ。学校の時からそうだったけど、こっちとしては騒がしくていい迷惑よ。」

「つつても1人も大変だぜ?やる事は全部自分でやらなきゃいけないし。何かを手伝ってもらうこともない。」

何よりも……

「話す相手が居ないってのもなかなか辛いもんだからさ……。」

静かすぎる部屋、温かいものがあつた筈なのにポツカリと抜け落ちたような空間、外からは楽しそうな笑い声が聞こえてくるのにそこはまるで時間が止まったようにシーンと静まり返……

「ちよつとアンタ…大丈夫?」

少し心配したように俺を覗き込む叢雲の顔があつた。

おっと、いかんいかん!

「まーもし本当にお前の個室が欲しいって言うならまずはMVPでも取ってきたら考えてもいいぜ。」

叢雲の頭をグシャグシャと撫で回す。

うお、サラツサラだなコイツの髪。

「ちよ!?…ちよつとアンタねえ!!髪のもグシャグシャにしないでよ!!」

わーむらくもさんがおこつたくにげブハツ!!

開いたドアに強かに顔面を打たれたのは今年入つて既に2度目、このペースだと月1で顔面強打だな。

「はわわ!?ごめんなさいなのです!!」

「ちよつと大丈夫!」

「その扉、向こう側に開くんだから気をつけなさいって言ってるじゃない!」

「…そもそもなんで内側に開くように作らなかつたんだろうね、欠陥構造?」

おーいてて…鼻曲がってない?

「いいのよ、アンタ達は悪くないわ。余所見してたコイツが悪いわ。」

「あ、ああ、俺の不注意だからさ…こつちこそごめんな?」

現れたのは4人の、おそらく駆逐艦だろうか。

「叢雲さん、その人はもしかして…」

「そ、今日着任した新しい司令官。ほら、アンタもモゾモゾしてな

いで挨拶しなさい。」

「ひゃく!!提督さんなのです!!本当にごめんなさいなのです!!」

「いやいや、俺の不注意だからさ、気にすんなって…。俺は今日ここに来た相良航希って言うんだ、よろしくな。……んで君たちは」

「私は駆逐艦暁、この子達の中じゃ一番上のお姉さんよ!レディーとして扱ってよね?」

この紫がかった黒髪の子が暁か。てなると特Ⅲ型の子達かな?

「はーい!司令官!私は雷!困ったことがあったら私を頼ってもいいのよ?」

でこの子が雷ね。なんだろ?天からバブみを感じておぎやりたとか聞こえた気がしたが気の所為だと思っておこう。この声に耳を傾けたら一気に引きずり込まれる気がしてならない。

沼は恐ろしい。

「…私は響だよ、不死鳥の名前は伊達じゃない。よろしく提督。」  
目深に帽子を被ったちよつと眠そうな子が響。

んーロープロレタリアート?サワークリームとかお好き?

「……提督。」

「ん?なんだ?」

「ロシアでウオツカが一番消費されない月は?」

「2月かな」

「どうしてだい?」

「月が短いからじゃね?」

「…提督とは気が合いそうだ、今度ウオツカを持ってくよ。」

この子も心の中読んでくる子かあ。もうなんか普通に驚かなくなってきたわ。あ、因みにこれはロシアのジョークな。

そして……

「君のお名前はなんだい?」

「あ…あう」

最初の事があったから話しづらくなっちゃったかな?

ここは1つ、場を和ませて

「Hi!! My name Koki Sagarra! You

can called me Teitoku!! Nice to  
meet you are name!?

ハハハ、横で叢雲がめっちゃでかいたため息したのが分かったわ。  
ジョークじゃんよ。

「はわ!?はわわわ!?」

「ちよ、ちよつと暁!提督さん英語喋ってるわよ!」

「…この前金剛さんから教えて貰った英語で電を助けてあげるんだ。レディーの嗜みだよ。」

「え!?ちよ、ちよつと待ちなさい!!…えくと…。」

おーおー面白い反応する子達だわ。

「い、電!!とりあえず自己紹介よ!!名前聞かれてたじゃない!!」

「あゝ!暁、誤魔化したわねゝ!」

1人、また1人と笑いが広がっていく。

あ、叢雲はやれやれみたいな顔してた。

「アハハハ!!暁ちゃんたら…提督さん、私は電なのです!!さつきはごめんなさいなのです。」

お、調子戻ってくれたかな?

「よろしくな、電!さつきのは俺が悪かったからさ。あ、いやこれやってるとエンドレス譲り合いが始まるからはいおしまい。」

こういうのはお互い水に流すのが1番。

「お〜い、ちび共くさつきからどうした〜?」

「あ、天龍さんなのです!!」

「龍田さんもこんには!!」

「鬼ごっこしましょ!!」

お?新たな艦娘の予感?

「おいおいまた追っかけっこすんのかよ…。」

「でも天龍さんが鬼だとすぐく盛り上がるしカツコイイのです!  
!」

「…しょうがねえなあゝカツコイイとまで言われちゃあこの天龍が鬼役を…」

「天龍ちやくん?鬼ごっこもいいけど前前。」



お、気がついた。

「お、もしかしてアンタが今日来た提督か？俺は天龍ってんだ、よろしくな！んでこっちが」

「龍田と言います、天龍ちゃん共々よろしくお願いしますね。」

俺系で暁達に集られてるのが天龍で……ちよつと背筋を凍らせてくれたのが龍田か……コイツ、気を抜いたら……いや、やめだやめだ。下手なことした方がヤバそう。

「なんだ提督黙っちゃまって？……ああ、俺様の雰囲気にはビビったのか。……フフ、怖いかな？」

……いや、そんな子供達にまわりつかれて背中によじ登られるような状況見せられても……それなら後ろのたつたさんの方が怖いんだが。

「天龍ちゃん、それじゃあ説得力ないわよ？」

うん、そうだな。

「いや、すまん。ちよつと考え事をな。俺は今日からここで提督をすることになった相良航希だ。よろしくな天龍、龍田。」

「おうよ！もし出撃するならこの天龍様を入れてくれよな！こう言っちゃなんだが、俺は強いぞ？」

「そりゃ頼もしい限りだ。その時は龍田も頼むぞ。」

「ええ、分かったわ。天龍ちゃんだけじゃ心配だしね。」

「あ？龍田そりゃどういう事うがっ！コラ雷、首を絞めるな！！  
なんだろう、天龍先生って呼んでいいですか？

幼稚園とかの先生みたいだからさ。

これからこの状況を天龍幼稚園と呼ぼう。

「天龍さん！！グラウンドに行きましょう！！早く早く！！」

天龍先生大人気ですねえ〜！子供達4人に囲まれてますよ〜！

「ちよつとアンタ、そろそろ時間押してるからもう行かないと……。」

お、そうか。それはまずいな。

「それじゃ天龍、龍田、それと暁達もまた後でな。」

「おう、また歓迎会の時に話そうや！」

「提督さん、また後でなのです〜!!」

こうして天龍は暁達に引きずられるように、龍田はそれを見守るようにグラウンドへ向かっていった。

「はあく、ようやく移動できるわ。」

なんとも賑やかな連中だったな。まあただ一人アサシンのような雰囲気の方がいらっしやっただが。

こうして潜水・駆逐・軽巡エリアを抜け重巡・空母・戦艦達の寮へと入った。

「んでこっからが重巡から上の奴らの寮だっけか?」

「そうよ、面倒なのに絡まれなければいいけど……。」

叢雲さんよあく、そういうのはフラグって言うんだぜ?

「叢雲さん!!ちよつとよろしいですかー!!」

ほら、早速絡む気満々の奴が来たじゃん。

「叢雲、自分で立てたフラグなんだからどうかにかしてくれよな……。」

「はあく、1番現れて欲しくないのが出てきちゃったわ……。」

薄紫色で癖っ毛の艦娘がカメラ片手に猛ダツシュしてくる。廊下は走ると危ないぞー。

「どもっ!恐縮です!私、重巡青葉と言います!今日着任された司令官さんですよね!?インタビューをお願いしたいのですが、まずはお名前伺ってもよろしいですか?」

おうおう、この感じ、この子もマシンガントークの民出身の子だな?母さんや明希姉と同族のにおいがした。

「……青葉お願い、今は頼むから帰って。取材したりするのはコイツの歓迎会の時、私がない所で好きなだけしていいから。お願いだから私を巻き込まないで!」

いやいや叢雲さん、あなたが立てたフラグですよ?

それ丸投げは俺もちよつちピンチすぎや。

まあでも自己紹介ぐらいはしないとな。

「俺の名前は相良航希だ。とりあえず今日からここで提督をする

ことになってる、よろしくな青葉。」

「はいっ！よろしくお願いします司令官！……ところで取材の方をお願いする事は……」

取材、ねえ……今は時間も押してるらしいし、正直なところめっちゃ疲れた。取材はまた今度に……。

「それもそうだけど青葉、アンタが防犯用っていう名目で鎮守府の各所に取り付けた隠しカメラ、いい加減外してくれたんでしょうね……？」

ん？カメラ？防犯用なら別にいいんじゃないの？

「……たははく、今取り外す準備をしまして……。」

「今の間は何よ今の間は！！アンタね……いい加減外にしないよ！！そもそもなんで監視カメラがローアングルだったり際どいラインで設置されてんのよ！！しかもそれで撮影した写真を自分の新聞に載せるなんて言語道断だから！！」

ん？待て待て待て……。

コイツ（青葉）は鎮守府の至る所にカメラを設置してる。

カメラは脱出の時に非常に役立つ。

青葉を味方に引き入れておくのは今後必須条件。

となれば取材を受けておくことに越したことはない！

完璧だわ俺……。

では早速行動開始。

「まあ待て叢雲。」

「何よ！！こちとら今後の自分のプライバシーが掛かってるんだから！！」

「気持ちは分かる、でも時間が押してるんだろ？すぐ出来ないことだろうし、とりあえずこの案内を済ませてしまおうや。だろ？」

まあ、確かに……。と叢雲も折れてくれた。

そして……

「青葉。」

「はっ、はい!!なんででしょうか?」

「取材だが、今からでも構わんど。まあ叢雲の案内もあるし、何よりも今日は疲れたから沢山は出来ないけどな。それでもいいなら」

「も、勿論です!!ありがとうございます!!司令官!!」

おっとおゝ叢雲選手、超絶嫌そうな顔!!

兎も角この旅(案内)に新たなメンバー青葉を加えて再開。

道中は青葉からの質問を受けつつ、寮から連絡通路を通った建物にある応接室、放送室、作戦会議室、俺が最初にいた医務室など鎮守府運営に関する部屋について叢雲から説明を受けた。

途中「青葉!!カメラのフラッシュが鬱陶しい!!」

なんて青葉がどやされることもあったが賑やかなもんよ。

「で、これが執務室ね。明日からアンタはここで書類とかの作業してもらうから、8時にはここに来なさいよ?いいわね?」

あーここ最近12時からの会社説明会に行ってたから起きるの10時ぐらいだったんだよなあ……。

夕方ぶりに5〜6時頃には起きなくちゃ……というか起こされるのかあ。

否応なしに。

起床ラッパの音聞くと勝手に飛び起きちゃう生活とかもうしたくないわ俺。

それと青葉カシヤカシヤうるせえ。

「司令官、明日から始まる鎮守府生活について一言お願いします!」

「めっちゃしんど……日本の海を守る為戦ってくれる艦娘達、その艦娘達が戦いやすいよう、そして戦闘がない日は彼女達が少しでもリラックスして過ごせる環境を整える事が提督である私の役目であると思っています。」

「おおゝ!!素晴らしいお言葉ありがとうございます!!」

おうおう叢雲さんよお、おっそろしいことするじゃんよお前。

俺の背中に向かって自前の槍を突き立てるとはなあ。

一瞬で面接中の就活生みたいな回答になっちまったじゃねえか。

しかも青葉からは死角とかさてはお前淀姉さんからのまわし者……あ、実際まわし者だったわ。

「……まあとりあえずこれで鎮守府の施設案内はおしまい。最後はアンタの部屋ね、付いてきなさい。」

「突撃司令官のお部屋!!果たしてどんなお部屋なのか気になりますねえ!!」

いや、何も無い……あ、淀姉さんが荷物送ったって言ってたな。どんなぐらい送ってくれたんだろ？

「前任の司令官も使ってたところで部屋というか、小さい一軒家みたいなものがあるのよ。アンタはそこで寝泊まりしてもらおうわ。」

ほー、一部屋どころか小さくても家1つ貸してくれるたあ嬉しいね。

再び連絡通路を通り、重巡艦達の寮を奥に進む。

「それじゃあ、アンタの寝泊まりする……ところ……」

なんだなんだ叢雲のやつ急に尻すぼみになって……つてうおおおー!!!!なんかすげえ綺麗な所じゃん!!

寮の扉を開け、渡り廊下を挟んだ先には小さいけれどもまるで旅館のような建物が建っていた。

「すげえじゃん叢雲!!俺これに寝泊まり出来るとかワクワクすつぞ!!」

「……ねえ青葉、ここの建物こんな豪華な感じだったっけ？」

「……いや、私もかれこれこの鎮守府に3年ほどいますけどこんな旅館じゃなくてもっと普通な感じの一軒家だったと思います。」

なんか知らんけどラッキー!!とりあえずお邪魔します。

おおく!!中もまるで旅館の一室を抜き取ったような感じで素晴らしい!!

叢雲達も付いてきて目を丸くしている。

「ようこそ提督さん」

お、お前らは………っ!!!

「そう、私達です」

えーと………あ、そうだ!! 実家に帰ったときに集まった妖精さん達

!!!

「まさか忘れてたりしてませんよね?」

い、いやそんなことないぞピューピュー

「……まあ、いいでしょう」

「私達の仕事ぶりを見てもはや忘れられないでしょう」

いやだつて………誤差はあるけどお前らが作ったの!」

「にしてもすげえな! これお前らが作ったの!」

「ええ、私達は特注家具職人妖精です」

「この程度、朝飯………夕飯前です」

はえ、ビックリだなあおい。

いつも居るヤツらに見せてやりてえよ。「辺りを見てきます」と

か言つてどっか行っちゃったしよ。

「でもなんだつてこんなすげー物を作ってくれたんだよ?」

「ギクツ……わ、私達も職人ですのになにかしてないと落ち着か

ないのです」

「そうだ提督さん、外もご覧になつてください」

ん? 珍しく妖精さんが口籠つた?………まあいいか。

外にも何か………おお!!

「温泉です」

「露天風呂仕様になりました」

すっげえええー!!! 夕日も綺麗だし温泉も入れるとかどんな

贅沢だよ!! もうお前ら最高かよ!! 今度出かけた時になんかスイーツ

買ってきちゃう!!! えーと5人ねはいはい任せて!!

「………もう後戻り出来ませんね」

「………あれだけのものを貰つてはやらない訳には………提督さんに

は黙っておきましょう」

そう、この時俺は浮かれに浮かれまくっていた……。だからこの家の欠陥や罫、妖精さんのイタズラに気づくことが出来なかった。

そしてワレアオバを連れてきた事にも後悔している。まさかあんな事になるとはな……。

……あ？何？追加のセリフ？

。。。これが方がミステリー感出るから？はいはい分かった分かった

旅館もどきの建物で起こる数々の事件!!

迫り来る魔の手!!

一体黒幕は誰なんだ!!

真実はいつもじっちゃんのおにゃんこにかけてひひひ!!!

ギイイイイーバタンツ!!!

## 就活戦争8日目

俺は大卒就活生、相良航希。

大学の同級生である神谷、大迫と居酒屋の帰り、コンビニへ行ってレジカウンターで会計をすまそうとしていた。

財布を取り出すのに夢中になっていた俺は目の前で電話をしている淀姉さんに気づかなかった！

俺は淀姉さんに薬を嗅がされ、目が覚めたら……

提督にさせられていた。

相良航希が脱出を企んでると淀姉さんにバレたらまた命が狙われ、周りの奴らにも危害が及……いや、それでもねえな……。割とみんなグルだったし。

俺自身の助言で何とかこの場から生きて帰ることにした俺は、淀姉さんにホールドされ、とっさに提督になると答え、脱出の機会を伺う為に海軍が基地を持っている舞鶴第2鎮守府に転がり込んだ。

たった一つの脱出法を見抜く見た目は提督、実際は就活生、その名は、相良航希！

…なーんて茶番もやっちゃうぐらい気分の良い俺です。

まさか私室がこんな良い部屋になるとは思いもよらなかったぜ。

絶景露天風呂付き客室でしょこれ。

今日は疲れることばかりだったけどこれのおかげで疲れも吹き飛ばわ。

さて、これから何が起こるかと言うと、食堂で俺の歓迎会が行われるらしい。



あの間宮さん達の料理が食べられるんだ、楽しみでしょうがない。

まあでも歓迎会って事は自己紹介やら、色んな奴らにも挨拶回りやらなんやらもしなきゃ行けないからまだまだ疲れるなこりゃ。

それで今俺は叢雲、青葉と共に会場である食堂に向かつて来た道を引き返しているところだ。

叢雲は「一体今日は何が起きてるのよ…歓迎会もほどほどにしてさっさと寝よう、ホントしんどいわ…。」と体を引きずるように歩いている。

運動して身体を鍛えてる奴らでも精神的な疲れには敵わないって事だな。

対して青葉は「はあ、今日はネタが一杯で記者冥利に尽きるつてもですね〜！しかもこれから歓迎会！まだまだスクープが私を待ってるなんて!!」と目をキラキラさせながら歩いている。

確かに次から次へとネタが転がってくる今日はコイツからしたら最高にハッピーな日だろうな。あ、取材料としてカメラの位置教えて貰ってもいいですか？脱出用と観賞用として使いたいですけど。

あ、そうだ……

「そっかいやき、この鎮守府って艦娘ってどれぐらいいるのさ？」

「……青葉、頼んだわ。」

「では青葉がお答えしましょう！」

ほうほう青葉くん、元気がよろしいね。では青葉くんに聞いてみようか。

「うん、頼むわ。」

「はいっ！現在、舞鶴第2鎮守府では総勢69名の艦娘達が所属していますー！」

ふむ、69名ね。そう考えるとそこそこ規模の大きい鎮守府だな。……全員の名前を覚えるのが大変そうだな。

「艦種別に説明すると駆逐艦が24名、潜水艦が4名、軽巡洋艦が10名、重巡洋艦が6名、軽空母5名、正規空母が7名、戦艦10名そして給糧艦の間宮さん、伊良湖さん、工作艦の明石さんの3名で

すね！」

ふむふむ、戦力は問題なさそう。しかしだな、脱出するにあたってはこの70名の目をかいくぐっていくのは些か厳しいものがある。

なんでだよなー淀姉さんもうちよつと逃げやすい鎮守府に送ってくればよかったのに。

「戦力的には十分そうだな、青葉ありがとう。」

「いえいえ〜！何か知りたい事がありましたら是非ともこの青葉にお聞きください！明日の献立からお風呂場の覗き穴までお教えしますよ、フフフ…まあ見返りをちよつとお願いしますがね？」

「…青葉、アンタもほどほどにしておきなさいよ？」

叢雲は疲れて遂に怒る気力も湧かないようだ。なんかここまで疲れてると案内させた身としても何だか申し訳ない気にもなってくる。まあ全ては明希姉こと明石のせいなのだが。

にしても、何でもとな？そうだな…青葉の実力も知っておきたいし、ここは1つ何か頼んでみるか……。

前を歩く叢雲に聞こえぬようこつそりと青葉に話しかける。

「…なあ青葉、お前の実力がどれほどのものか見せてもらいたい。試しに、そうだな…叢雲の弱みになりそうなを何か見つけてきてくれないか？」

「…叢雲さんの弱み、ですか。常日頃からガードの固い叢雲さんの素顔、気になりますねえ〜！分かりました青葉にお任せください司令官！今回は初回ですし、取材も受けて頂いたのでサービスしますよ。」

「おう、助かるぜ。」

「いえいえ、今後ともご鼻屑に。」

「しかしだ、どうやって叢雲から弱みを探るよ？アクション起こせば流石に警戒もするだろう？」

「弱みを見せないなら誘い出すまでです。特に疲れてる今はチャンスです。司令官、耳を……。」

お？ほいほい…え？マジで？それいけるかあ？というかそれが弱みになるのか？

「司令官、女性は多少強引な方が良い時もありますですよ、叢雲さんのような方なんかは特に！最悪、これが失敗してももう1つぐらいは私が調べておきますので。」

まあやってみないことには分からんか。まあ失敗してもたんこぶひとつで済ましてもらおう。

「では作戦スタートです！……叢雲さくん、ちよつといいですか〜？」

お、マジかよもうちよつと心の準備を……と思ったけど面接の方が緊張するだろ。ここはいかにこの役を演じ切るかが勝負、伊達に会社を100社も受けてないぜ!!見てろ俺の演技力!!

「何よ青葉？」

「いや〜今日取材した事を今度の艦隊新聞に載せようと思ってましてね、そこで1枚写真が欲しいのですよ！よろしければ司令官と初期艦である叢雲さんのツーショット写真を取らせて頂けないかなと思ひまして。」

お、想像通り嫌そうな顔。

「ええ〜、アンタに写真撮られたらロクでもないことに使われそうで怖いんだけど……。」

「使いませんよお〜!!司令官が着任して一発目の新聞ですよ？流石に真面目に書きますよいくら私でも!!」

なんなら新聞が完成したら叢雲さんにの所に持っていくので確認して頂いて、リテイクがあるならその場で直しますから〜」

「良いじゃねえか叢雲、俺も提督になった記念に1枚ぐらい自分の写真が欲しいしき、頼むよ。」

「……はあ、分かったわよ。1枚だけね？」

「ありがとうございますっ!!では撮りますので、お二人共もつと寄って頂いてもいいですか〜？」

いきますよ〜という青葉の掛け声と共にカシャというシャッター音。

「ありがとうございます〜!この写真も現像したらお二人に渡しますね〜!!私は部屋で一旦このネタをまとめてきますのでまた後

ほど、では!!」

「歓迎会遅刻すんじゃないわよ。」

……実を言うと青葉の作戦は青葉本人が離れてからがスタートである。

さて、俺も行動開始といきますかな。

「…叢雲、お疲れさん。今日はありがとな。」

「ホントよ、今日はアンタから幾ら感謝されても足りないくらいだわ。肩もだるいし、足も疲れたわ。」

「それは申し訳ないことをしたな…そうだ、そんなに疲れてるなら俺が食堂の前まで抱えてつてやろうか? ほら、お姫様抱っこつてやつ。…なんだよお前顔赤くなってんぞ?」

ちよつとおちよくる感じに言ってみるとみるとみるみる叢雲は顔を真っ赤にしてしまった。あーはいはい、夕焼けのせい夕焼けのせい。

「ばっ!!夕焼けのせいよ!!そう見えるだけ!!」

言うとは思ってたけどそのまんま言ってくるとはな。

「し、しかも、お、お、お姫様抱っこなんて恥ずかしくて出来るわけないじゃない!!」

「冗談だよ冗談。ほら、おんぶならいいだろ? ほれ。」

今俺が何をしているかと言うとビジネス交渉なんかでも使われる技だ。

まず相手に断られる前提で予定より高い水準の要求をする。

?

当然相手は拒否、そしたらば予定通りの水準で再度交渉を行う。

?

そうすると相手は要求が下がったと安心し、OKが貰えるというパターンだ。

まあ相手に有利な状況を作らないというのは大事な交渉スキルだ。

お? 叢雲さん悩んでらっしゃるね? 青葉が多少強引に言うのはここだろう。この辺からはもうアドリブだから適当に。

疲れて頭の回転も鈍ってる今がチャンス。

「悩むぐらいならさっさと乗った乗った、そらよっ！」  
叢雲の側まで寄り、ちやつちやとおぶる。考える隙も与えないと。

「ちよっ!?ぎゃっ!!」

「はいはい、初期艦1名様ごあんなーい。って軽っ!」

「馬鹿!!さっさと降ろしなさい!!」

「まあまあ、落ち着けてって叢雲さんよ。そんなにバタバタされたんじや落ち着いて話も出来ねえ、OK?」

OK!ズドンツ!!とはならない。なったらヤバイ。

「そんなこといいから早く降ろしなさいって!!」

「はあく、ほら、お前にこれやるよ。」

ポケットから1枚の紙切れを取り出し、叢雲に差し出す。

「は?何よ急に……これって!」

「そ、MVP間宮券。執務室に行った時、封筒の中に入ってたからな、それを持ってきたわけよ。」

…俺が思う今日のMVPは間違いなくお前だ叢雲。そしてMVPの艦娘が疲れてるって言うなら何か労いをするもんだろ?ならそのまま食堂前までおぶられてろ。労いの足ぐらいは俺がやるわ。」

すると観念したのか叢雲は大人しくなった。

……で本題の叢雲の弱みを握ろうってのをみんな忘れてるかもしれないから改めて確認するぜ?」

実はねこの廊下、青葉特製監視カメラが至る所に仕掛けてありまーす!!!

叢雲さんのあんな表情やこんな表情もバツチリ激写!

おんぶしてるから叢雲の顔は見れんので後で青葉に見せてもらって大笑いしてやるぜ叢雲!!

そんなこんなで歓迎会会場である食堂に到着しましたとき。

あ?叢雲はどうしたって?食堂が近くなったから降ろしてって暴れるから速攻で降ろした。

しかも部屋に用があるからと来た道を引き返して行った。

なんだよ、それなら自分の部屋の前で降ろしてくれって言え  
ばいいのよ、ゲンコツのやられ損だわ。

何はともあれ歓迎会だよ。

「あ、提督、来てくれたんだね。ちょうど準備も終わったところだ  
よ。」

「こうちゃーん!! 私も準備頑張ったっばい!! 褒めて褒めてー  
!!!」

おうおう、早速現れたな犬っぽい事に定評のある二人組。

2人まとめてワシヤシヤシャー!と撫で回す。

「お、貴方が新しい提督か?」

背後からハキハキとした声が聞こえた、新たな艦娘だな?

「そうだ、今日この鎮守府に着任した相良航希だ。よろしくな。  
そんでお前は…」

「戦艦長門だ。今はここの艦娘達をまとめるリーダー的役割をし  
ている。そしてこつちが妹の…」

「戦艦陸奥よ、よろしくね提督。」

ほう、あのビッグ7の長門と陸奥か。この存在感、流石と言うべ  
きか。おかげで脱出の難度がまた上がったよこんちくしょう。

「長門と陸奥か、提督としてまだまだ未熟者だがよろしく頼む  
な。」

「…新任の提督にはまるで見えんな。落ち着いた物腰、まるでい  
くつもの修羅場を潜り抜けてきた奴の目だ期待してるぞ、提督。」

いくつもの修羅場を潜り抜けてきた…そうだな会社を100社  
も受けてきたからな。落ち着いた物腰つてのも数々の圧迫面接で鍛  
えられてきたのよ。ある意味修羅の道でしょ100社も受けてる  
のって。

すると長門は手を差し出してきた。ああ、握手ね。

「あ、提督ちよつと待っ」

ギリギリギリッ!!!

ぐああああーッ!!!手がッ!!手がアアアアーッ!!!こ、コイツ…握力ゴリラかよ!?

名前ゴ級戦艦長門に改名しろ!!!

「長門あなたねえ、自分の力を考えなさいよ。前任の提督の時もそれやっただじゃない……。」

「すっ、すまん提督!」

流石脳筋……ビッグ7の名前は伊達じゃない……。

そして時雨、うずくまつてる俺を心配して背中をさすってくれるのはありがたいんだけどな、気持ち悪いわけでも咳き込んでる訳でもないんだ。ただ腕がもげそうなくらい痛いんだわ……。

「い、いや長門大丈夫だ……。」

「し、しかし提督!まるで足が産まれたての子鹿のようにガクガクと……ッ!!」

「うるせえーッ!!!武者震いってんだよ!!!」

—————

まあそんなこんなあったけど俺の歓迎会が始まった。

机の上には美味しそうな料理がずらりと並んでいる。

駆逐艦達が美味しそうと目を輝かせているのが微笑ましい。

対して大型艦の一部は酒と美味い飯を目の前に、食べ物を取られまいとお互いに牽制し合ってるというカオスな空間と化した。正直怖いわ。

席としては、①駆逐艦と潜水艦14名グループ、②駆逐艦と潜水艦14名グループ、③軽巡10名グループ、④重巡、軽空母、正規空母、戦艦ごちゃ混ぜ+明石、⑤④と同じと言った席順だ。

間宮、伊良湖らは「皆さんよく食べられるので、私達も後から合流させて頂きますね!」との事。ほんとありがたいとございます。

「提督も座ってくれ、主役が居なきや始まらんぞ。」と長門にも言われたのでどっか座ろう。

さて、俺はどこに座ろうかなくと辺りを見渡すとわおびっくり、

視線がたくさん集まっている。

一部謎の威圧感を放つやつ以外、俺がどこに座るか気になつてい  
るようだ。

……まあまずは駆逐艦グループから回って行くかな。

いやだつて、あからさまに向こうやベーもん。特に何よあの正規  
食う母、気合が違うわやベーよ絶対。

ほとぼりが冷めたあたりに顔を出そう。

という訳で駆逐艦席にお邪魔します。

「ここはこの長門が進行役を務めよう。それでは主役も席に着い  
たことだし、そろそろ歓迎会を始めようか。まずはこの舞鶴第2鎮守  
府に着任した相良提督に一言頂こうと思う。では提督、一言頼む。」

イエーイー!!!来てくれてありがとうー!!!みんな、今日は盛  
り上がって行こうぜええー!!!みたいなライブのノリで行く訳  
には行かないので真面目に行こう。大学の飲み会みたいな感じで?  
ははっ、知らんな。

「いま長門から紹介に預かった相良航希だ。

つつても俺を知ってる奴もちらほら居るようで

かなり安心したよ。知らない所は不安でな。けど

にぎやかな鎮守府のようで楽しみだ。俺も

げんき良く皆と共にやっていけそうだ。

るいは友を呼ぶと言うしこれも何かの縁だろう。

けっかは大事だが君達に無理はして欲しくない。

どんな些細なことでも俺に言ってくれ。

よろしく頼む。以上だ。」

拍手ありがとう!!メッセージは残したからほんとに頼むよ。  
マジでいつかやるから俺は。淀姉さんなんざ怖かねえ!!!し字にな  
んて読むなよ?

「相良提督、ありがとう。提督は各テーブルを適当に回っていつ  
てくれ。話したい奴はその時に話しかけるといい。まだ話す事が  
あつたけどもう赤城を押さえてられそうにないから……乾杯!!」



乾杯——!!!

……うぶぶ、なんか寒気が……気の所為か？

こうして賑やかな歓迎会が始まったのだった……。

「ふう、こっちでの仕事も片付けましたし、寮の荷物もまとめたと。忘れ物は……無さそうですね。」

寮のベランダで春の暖かな夜風を浴びながら一息つく。

急な転勤願いだったし大本营や元帥……もとい、お父さんには本当に迷惑をかけたと思う。幸い、お父さんも快く（力）了承してくれて助かりました。

彼にも私がそちらに行くことを連絡しておきましょうか。そして連絡したことで脱走する可能性があるので叢雲さん達にも連絡しておいて……これでよしと。

さて、今から移動すれば明日の朝には向こうに着くでしょうしそろそろ行きましょうか。

また彼と過ごせると思うと楽しみだなあ〜！

「……待っててねこうちちゃん、もうすぐ行くからねっ。」



## 就活戦争9日目

そんなこんなで始まった歓迎会、俺はまず駆逐艦達のグループと共に食べる事になった。

隣の席には時雨と叢雲…となるとちかくに座ってる同じ制服の奴らは吹雪型と白露型の奴らか。

「悪いな、急に入ってきちまってる。改めて、ここで提督をやる事になった相良航希だ、よろしくな！」

「はいはい!!私はいらムグウ!!」

「あー!!!!夕立も喋りムグウ!!」

「待って白露、提督は僕達の事を知ってるから後で…」

「夕立ももう少し待っててね。」

そうだよ、お前らの事は知ってるよ。1番になりたくてしようがないやつのも…。犬みたいにブンブンしてるお前も…。

「そして色々すまんな」

「あ、いえいえ!私達も司令官とお話ししてみたかったですから!!」

「まずは自己紹介しなさいよ吹雪。」

叢雲に肘で小突かれ、わたわたと慌てるコイツは吹雪か。  
んー田舎に住んでる親戚の中学生って感じ?」

おいもの民?なんじゃいそりや。

「じゃーご主人様にもわかりやすいように姉妹艦ずつでやりましょーか。てなわけで吹雪さんからオナシヤス。」

ピンク髪でうさぎの髪留めしてる子から提案。

ん?なんか聞いたことある言葉。まあそんなのどうでもいいか。とりあえずそうしてくれ、一部目つき悪い初期艦様とか、やたらクソ言ってくる奴とか何人かは学校同じだったから知ってるけど後は分からなくてな。

「それでは私達、吹雪型から行きます!私は吹雪型1番吹雪です!よろしくお願いします司令官!…ほら、次叢雲ちゃん。」

「ええ〜？私自己紹介いる？」

「何言ってるの!?!初めて会ったら挨拶するのは基本でしょ!!しかも司令官に挨拶しないなんてそんなこと駄目に決まってるじゃない!!」

おお、吹雪がああ、の叢雲にお姉さんらしく振舞おうとしてるぞ!頑張れ!!一泡吹かせ!!でもな……

「いや、学校同じだったから初対面じゃないし……。なんならさっきまで鎮守府案内してたのも私よ。」

「え?え?!嘘?!……司令官、そうなんですか?」

「え……あ、うん。」

聞いてたから知ってるけど、うん、確かにそうだわ。

The 慌ただしい子だな吹雪。

「そんなっ?!あんまりですっ!!」

「ええ〜。」

なんで中破ボイスが流れるのさ……ああ、メンタル中破ね。

「叢雲、何とかしろ。」

「無理。……はあ、吹雪型5番艦叢雲よ。改めてよろしく。ほら

吹雪、おいもよ。好きでしょ?」

もくもくとおいもを頬ばる吹雪、なんかリスみたい。

というか口の中の水分無くならないそれ。

「んじゃー私か!吹雪型4番艦深雪、よろしくな!!」

ほいほいこれまた元気いっぱいな子が出てきたな。

元気良過ぎて、電辺りとぶつからないように気を付けるんだぞ。

特Iの子も次でラスト……って、寝てるだど!?

このガヤガヤ賑やかな場所でも寝るとはコイツ……出来るツ!!

どこでも寝れるって重要なスキルだよなー。

俺、夜行バスとかどうしても寝れないから……

なお腰もしくは尻がしぬ。

「ほら初雪、起きなさい。あんたの番よ!」

ムクつと起き上がると一言、「初雪……です……よろしく。」そし

て思い出したかのようにご飯を食べ始めた。

「初雪はほんとよく寝るよなく。逆に疲れないか？」

深雪が言うことも最もだが分からなくもない。

俺も正直布団に入って引きこもりたい。

「……布団と飲み物食べ物、本とゲームがあれば私は生きていくから……。」

……今なんと言った？

「……初雪。」

初めて会う司令官から声をかけられ予想していなかったのか初雪はビクツとし、恐る恐る「…な、何？」と聞き返す。

「……モリオカートのタイム。」

「……大体1分30ぐらいには完走。」

「スモブラは何使い。」

「ゴンキーカリヨウ。」

「「……グツ!!」」

しばらく無言のまま見つめ合い、お互いサムズアップしていた。目を見ればわかる、コイツはなかなかの猛者だ。

「アンタ達、茶番も程々にして次にバトンを回しなさいよ。」

あ、いつけねいつけね!

ゲーマーを見つけるとついついね……。

「じゃー次は私達ですねご主人様!私は綾波型9番艦、漣です!!ご主人様にはメシウマな展開を期待してますー!」

おーおーキャラの濃い奴だなあ。艦娘の口からご主人様とかメシウマとか聞けると思わなかったわ。

「アタシは7番艦の隴、これからよろしくね提督。」

ショートボブの子が隴か。カニの髪留め……え、あれ本当に髪留め?動いてない?生きてない?リアルなやつじゃない?

「わ、私……10番艦の潮です……っ!も、もう下がってもよろしいでしょうか……?」

この子が潮か。大人しい感じというかおっかなびっくりというか。

潮さんや、今下がったら夕飯が食べられなくなってしまっ  
て……。そしてラストが……

「……………」

目と目が逢う瞬間寒くけが

あらヤダ奥さん、めっちゃ睨まれてる……。

「……………はあ、まさかあのクソ提督がクソ提督になるとはね……。  
まあいいわ、綾波型8番艦、曙よ！とりあえずこっちは見んな！このク  
ソ提督!!」

わーい、クソ候補生からクソ提督にランクアップしたぞ。

……………はい、海軍学校からの知り合い、曙こと早坂明乃（はや  
さかあけの）さんです。

ん？中の人？はてさて、なんのことやら。

この流れるように出てくるクソ呼び、ふうく何も言えねえ!!

「ぼのぼのちゃん、いくらなんでもこっちは見んなは酷ってもの  
よ。」

「そうよ、ぼのぼの。」

「ぼのぼの、提督と知り合いなのか〜!」

「ぼのぼの言うな!!!」

「なんだよお堅いな〜ぼのぼの。同じ学校のよしみで俺はOKで  
しよっ。」

「そのクソ提督は後で張り倒すから覚悟してなさい。」

ひえ……。なんで俺だけ……。

やっぱりぼのたんは恐ろしいわ……。

「あはは……じゃあ私達ね！海のスナイパー伊168よ!!イム  
ヤって呼んでね!」

「提督、Guten Abend、伊8です。はっちゃんつてよん  
でね。」

潜水艦の2人か、もう2人は隣のテーブルにいるのね。

しつかり者感あるのがイムヤでドイツ語の方がはっちゃんね。

一瞬、海外艦までいるのマジかよ!?!とか思ったけど国内艦の方でしたかはっちゃん。

「じゃあ最後は僕達だね、ほら白露、出番だよ?」

「……1番じゃない私なんて……。」

「白露変な所で面倒くさいわね…白露型で一番乗りしないなら私からやるわよ?」

「んー…!!白露型の1番は私なんだからあー…!!白露型1番艦白露です!!白露型一番乗りいいいっく!!」

あーはいはい、わかったわかった!!お前は一番だよ!!今騒々しいやつだけどな!!

「白露型4番艦夕立!!頑張るっぽい!!あー…!!白露それ私の狙った唐揚げっぽい!!」

よーしよしよし、お前達はもうめんどくせえからご飯食べてようなく!!美味いか?おーそうかそうか美味しいよな、間宮ご飯ほんま美味いわ…何だか泣けてくる…。

「じゃあ私ね、白露型3番艦村雨。村雨の良いところ、見ててよね?」

んー…なんかおかしいよなあ、この子が1番お姉さん感出してるんだよなあ?村雨1番、時雨2番、白露3番じゃねえの?ホントに。

「僕の2番は変わらないんだね?」

「お前は一部危ない思考があるけど基本的にはしつかり者の次女って感じだから…:というか心の中と会話すんな。」

「……ふーん、危ない思考って何かな?かな?」

やめろやめろハイライトを消すな。そしてナタ持ち少女の口癖もやめろ。雛○沢の恐怖を思い出させるな。

ほんとお前がいつか淀姉さんのような恐ろしさを持つんじゃないかとビクビクしてんだよこちとら……。

「…僕は相良君がもっと構ってくれたらそれでいいんだよ…僕の事を見てくれれば…今は我慢してるけど、我慢出来なくなったら、僕は……」

え?何怖い。最初の方ボソボソいってたから聞き取れなかった

けど何？我慢出来なくなったら……？何我慢してんの？トイレだよ  
ね？その目のハイライト無いのはお腹痛いからだよね？

「ほら、時雨姉さん。自己紹介自己紹介。」

あ、目にハイライト戻った。村雨ナイス!!

「おっと、ごめんね。僕の名前は時雨。よろしく提督…僕の事が  
知りたいのかい？いいよ、なんでも聞いてよ。」

………怖えーっよッ!!「なんでも聞いてよ。」の所でまたハ  
イライト消すなよ!!!聞けるわけねーだろうが!!!「さっきなんて言っ  
たの？」なんて迂闊に聞いたら最後俺はしぬ。

「…ははお前の事は割と知ってるから何かあった時に聞くよ、  
じゃ、じゃあそろそろ隣のテーブルに行かなきゃ行けないからみん  
な、これからよろしくお願いしま〜す……。」

「え〜〜もう行っちゃうんですかあ〜？」

「司令官が初期艦に叢雲ちゃん選んだ理由とか聞いてみたかったで  
す！」

「それ僕も気になるなあ……。」

「吹雪、余計なこと言わないで。とりあえず時雨、アンタ目が怖い  
からこつち見んな。」

おーおー怖い怖い。こんな時は逃げるが最良。伊達に淀姉さん  
から生き延びてきてないぜ。

俺はそそくさと席を立ち、隣のテーブルへ移る。

「お、来たわね提督!!さ、座って座って!!」

お、こつちの席は明るい雰囲気で……いや、なんか2人ぐらい  
こつちにガン飛ばしてる奴がいるわ。

流石にここから軽巡テーブルに方向転換出来ないから諦めて座  
るか……というかここで方向転換したら後でアイツらから問い詰め  
られる気がしてならない……。

「あー、じゃあお言葉に甘えて……。」

あー気まずい、ただ2人を除いて他の奴らはウエルカム雰囲気なの  
にその2人の威圧感が凄い。

「司令官は何飲む？……司令？」



まるでヘビに睨まれたカエル……動けばどうなるか…

「おーい！司令ったら!!」

ん？なん…うごおお!!??

「やーつとこつち向いたよ。大丈夫？」

いやいやいや、首が無くなるかと思ったわ。

艦娘のパワー忘れんというて。

「いや、すまん。ちよつと考え事を……。」

「こんな時まで考え事なんて良くないわよ？私は陽炎型1番艦陽炎。司令官、よろしくね！それでこの子達が…」

「…2番艦、不知火です。ご指導ご鞭撻、よろしくお願いします。司令。」

「アンタが新しい司令はんかあ、うちは3番艦黒潮や！よろしゅうな！」

「13番艦浜風です。どうぞよろしくお願いします。」

クール娘と関西弁娘そしてマ○ユか……ん？1人修理中の方いませんか？

「おうよろしくな、相良航希だ。お前達陽炎型の働きにも期待してるぞ。」

「私達は自己紹介は必要かしら？」

「さつき自己紹介したばかりだから大丈夫だとおもうのです。」

「…とりあえずもう1回名前言っておこうか。」

「じゃあ、暁…響。雷！電なのです！」

「おーおーお前達も改めてよろしくな！」

わーわーと子供達に囲まれてるとまるで先生になった気分だけ。

「んじゃ私達でちね、私は伊58。ごーやって呼んで欲しいでち！」

「伊19！いくなの!!よろしくなの!!」

ウチの潜水艦達はキャラが濃いなあ〜というか、キャラが濃くないのがいなくてキャラが濃いかめつちや濃いかつてことなんだろうな。

「では私達ですね！朝潮型1番艦朝潮です！お久しぶりです相良提督！よろしくお願いします！」

朝潮、久しぶりだな。

「駆逐艦、大潮です〜！ 小さな体に大きな魚雷！ お任せください〜！」

特徴的な帽子、元気っ子枠だな。そしてここからが恐怖！

「久しぶりね相良……。」

「あなた私達から逃げるように隣のテーブルに行ったわね……？」

いやあ、そんな事は……。向こうにも曙居たし、たまたま……

「言い訳しない!!!」

「いや言つてないじゃん!!!言葉に出てないじゃん!!!」

「いや、顔にそう書いてあったわ!!」

コイツらに心の中読まれるのが1番辛いわもう。

「とりあえず満潮、霞、あなた達も自己紹介しなさい。」

朝潮もつと強く言つてあげて!!というか助けて!!

「:3番艦満潮よ。私、なんでこんな部隊に配属されたのかしら

?アンタ、司令官としてもつとしっかりしなさい!!」

「10番艦霞よ、私が秘書艦になったらガンガンシゴいて行くから覚悟してなさい!クス司令!!」

大月満智留(おおつきみちる)と北条華澄(ほうじょうかすみ)が2人の本名。

……大学の時コイツらと組んで模擬戦した時は怖かったなあ。ちよつとミスしたらもう罵倒の嵐だった。

だが俺も成長してるってところを見せないとな!!

宝船でバイトしてた俺には新たなスキルがある!!

それは……

心を無にして営業スマイルと営業トークさらにクレーム対応!!!

「そうだな、満潮や霞の言う通り俺が不甲斐ないばかりに不安にさせてしまったんだな。」

「そうよ!今のアンタに司令官なんて務まるわけないじゃない

!!

「全く、惨めよね!!」  
無心だ無心。

「だけど満潮や霞がいるんだろう?俺がダメだと思うなら言ってくれ、お前達が納得出来るような司令官になれるように努力するからさ。」

「ふん、どうだか…すぐに投げ出すんでしよう?」

正直、めっちゃ投げたしたい。

「まあ俺も提督をやるのは不安だったけどな、でも満潮や霞がいるから安心してるよ。叱ってくれるのはお前達ぐらいしか居ないからな。」

営業トークで大事なものは笑顔で相手を立てる事これ重要。

まあでも叱ってくるやつかなりいるんだけどな。

初期艦様とか初期艦様とか初期艦様とかね。

「どうせ私達の事なんか口うるさい奴らって思ってるんでしょ!!このクズ司令!!」

「いやいやそんな事ないさ、間違ってると思う事を正直に言うってなかなか出来ないもんよ。だからもし、作戦なんかで悩ましい問題とかあった時はお前達に意見を聞きたい、その時は頼むぞ。勿論戦闘でも期待してる。これからよろしくな!」

最後は1番良い笑顔をする。これほんと大事よ?マジで。とりあえず笑顔をつくれ。

「……なんかやりづらいわね。」

「学校の頃こんな感じだったかしら……?」

「笑った時とかちよつと良かったし…」

「満潮アンタ…ププ!そういうことだったの!」

「バツ!馬鹿じゃないの!?!そういう霞こそ、耳真っ赤にしちやつてさ!!あゝら恥ずかしい!!」

「なにを〜!!!」

あー、やっぱり営業スマイルは疲れるわあゝ。あ?何?

姉妹喧嘩中？ラツキー!!今のうちに逃げるべ!!

こうして俺はさつきと軽巡席に逃げ込むのだった。

「こうちゃん来たみたいだね。ここ座んなよ。」

「北上さんの隣は渡しませんからね!」

「お、ウワサの提督クマ?ほら多摩、もうちよい詰めるクマ。」

北上と語尾が特徴的な艦娘の間に座らせてもらう。

もし大井と北上の間に座ったら大井がどうなるか分かったもんじゃない。

「こうちゃん何飲む?ビールは無いけどサワーとかカシスならあるよ。」

「ん〜ならレモンサワーで。」

「はいよ。」

北上にレモンサワーを任せ、料理に箸をつける。

「そんで、アンタが提督クマね。私は球磨型1番艦の球磨だクマ。よろしくマ。」

まあだろうなと思ってたけど北上や大井のねーちゃんに当たる艦娘球磨だ。

決してペルソナ関係では無い。

「2番艦の多摩にや。お近づきの印に提督のイカ刺は貰っていくにや。」

うーんこの2人、なんともクマとネコっぽい。この鎮守府は犬っぽいのも入ればクマもネコもいる。

「…っってお近づきの印にイカ刺くれるんじゃないやなくて持ってくるんかい!!」

というかお前イカ食べちゃダメだろうが!!!

「多摩はネコじゃないにや!」

いやもうネコだ。お前のキャラはネコで確定した!!

「はいこうちゃんレモンサワー。」

「おおあんがと。」

さてレモンサワーひと口うぼお!何これめっちゃ濃いですけど

……

「うっははは!!こうちゃん顔やばいよ?何飲んだのさ?」

「おめえが作ったどちやクソ濃いレモンサワーだよ!やってくれ  
たなこんちくしょう!」

イタズラ大好き北上様に作らせた俺が間違いだったわ。

「おーおー提督も姉さん達の洗礼を受けたか。そいつは災難  
だったな。」

眼帯イケメン系女子?女子っていうかマジでイケメン男子にも  
見える。

「俺は5番艦の木曾ってんだ、よろしくな提督。俺を使えばお前  
に最高の勝利を与えてやるよ!」

はーなにこのイケメンカツコよすぎんだろ。一般の女子高とか  
だったらモテモテだろうな。

「生意気な末っ子だクマ、北上くレモンサワー。」

「はいよ。」

「うげ!嘘だろ姉さん達:俺はもう飲んでるじゃねえか!!」

「ハツハツハ!!残念だったな木曾、ほら頑張つて飲めよ!...よう  
提督、飲んで食べてるか?間宮の作る飯は美味いからじゃんじゃん食  
えよ?」

「北上くレモンサワー追加く。天龍の分だクマ。」

「:お、おうつてことだ。俺はいいから提督飲んでくれよ。」

「天龍ちやくくん?煽ったからには責任もって飲まないとく。」

そうだよ、責任持て。そもそも俺まだほぼ丸々一杯残ってるのに  
飲めるわけねえだろ。

「おーい、提督くこつち来て話そうよ!」

「那珂ちゃんもお話聞きたいな!キャハ!」

お呼ばれしたので席を立ち、大井と呼んできた艦娘の間に座ろうと  
する俺。

「なんで私の隣に座るんですか!!」

「別にいいだろそれぐらい:北上とお前の間にすわるわけじゃな  
いんだから...。まあいいけどよ、したらすまんちよつと間座らせて  
くれ。」

「……ッ!!す、座るなどは言ってますせん!……でも今回だけですからね!!」

なんなんだよコイツは…なら最初から座らせてくれよな。

「大井も素直じゃないねえ」  
「なんです川内?」いやなんでもない…私は川内型1番艦川内ね、夜戦があるなら私の事絶対に呼んでよね!!というかこれから夜戦行かせてくれてもいいんだよ!!」

夜戦大好き川内ね、そこで次が……

「2番艦神通と申します。以後お見知りおきを。」

うちの鎮守府は長女より、次女がしつかり者になる傾向が強いな。

そして最後が「艦隊のアイドル、3番那珂ちゃんだよ!!盛り上げていくからよろしくね!!プロデューサー!!」

俺はプロデューサーだったかな?提督もプロデューサーもマスターも大変そうだわ。

「あ〜〜こうちゃん、私が作ったレモンサワーまだ飲んでないね?」

「なぬっ!それは聞き捨てならないクマ。」

「多摩も飲んだにや!!早くグラスを空けるにや!」

うわ、めんどくせえ…。なんだよこの大学みたいなのリ……。

あ、コイツらも大学出てたわ。

「そうですね提督、せっかく北上さんが作ってくれたものを飲めないわけじゃないですよね〜?」

「…分かった。飲もう。」

このノリ俺嫌なんだよな、酒は美味しく飲みたくない?俺はそうしたい。

「そう言えば、まだ大井も飲んでなかったクマ。北上〜レモンサワー。」

「おお〜いいねえ!大井つちの為ならスペシャルなレモンサワー作ってあげなきゃねえ〜!」

「2人共〜気クマ〜!!」

「お?2人共気合い入ってなあ!」

「なら天龍ちゃんも一緒にやる〜?」

「い、いや、俺は結構だ……。」

いつもすまし顔の大井の顔が固まるのを俺は横目で見た。

あくあ、墓穴掘ったな。黙ってれば生き残れたものを…

早速北上が製造したえらく濃いレモンサワーが大井の元へと運ばれてきた。

飲んだ事はあるのだろう、しかしそれを飲むのは割と勇気がいる。

そして大井の事だ。大好きな北上さんが作ってくれた飲み物を飲まない訳にはいかない、しかしこれは飲みたくないという葛藤に悩まされているのだろうか。

……。はあく

「おい、大井そのレモンサワー寄越せ。」

「……え?」

「俺はこんな炭酸の抜けて水でアルコールの薄まったレモンサワーなんて不味くて飲めそうにない。だからお前の新しいレモンサワーと俺のレモンサワーを交換してくれ。」

「て、提督……。でも……」

「早く寄越せ、じゃないと一気コールドが始まるぞ。」

半ば強引に大井のレモンサワーを貰い、俺の炭酸も抜けアルコールの薄まった飲みかけ（まあ言うてひと口）を大井に押し付ける。

ん?なんかコイツ顔赤いな、これ飲む前から酔ってんの?

「はいーいーつき!!いーつき!!」

そして始まってしまった一気コールド

諦めて飲むしかない。

俺と大井は北上特製レモンサワーを一気に煽った。

新しいって事はどういう事かみんな分かるだろう。

アルコールは薄まって無く、炭酸もバツチリだ。そんなもの飲めば……

「うぼおげえええ!!!めっちゃ濃い!!!というか喉が!!喉が痛てええええー!!!」

こうして軽巡テーブルをクリアしたい俺だった。



## 就活戦争10日目

軽巡テーブルからも逃げるように避難してきた俺は軽空母と戦艦テーブルでも比較的安全そうなテーブルにやって来ていた。

「お、来たな提督！こっちに座るといい。」

早速長門から声をかけられ、長門が空けてくれた空間に腰を下ろす。

「挨拶回り、大変そうじゃないか？ウチの鎮守府は濃い面子ばかりだからな。まあ飲兵衛達は隣のテーブルに行き、巻き込まれたくない奴らはこっちに流れてきて席が入れ替えになったからそんなにやかましくはならないと思うから安心してくれ。」

非常に、ひじょくに変です。はい。

「そいつは助かるけど長門はいいのか？」

「ん？何がだ？」

「お前も向こうで酒を飲んでる陸奥みたいに飲みたいだろ？あ、やっぱリーダーになるとベロベロに酔うのはまずいか。」

「ああ、そういう事か。確かにそれもあるんだが、恥ずかしい事には私は下戸でな…酒は弱いんだ。気持ちだけ受け取っておくよ。だから提督は私のことは気にせず飲んでくれ。」

あー確かにこの見た目で！？って言われてきたんだろうな。

北上にレモンサワー作らせて長門に飲ませたいけど、苦手と言ってる人に無理やり飲ませるのは良くないぜ。

理由は色々あるけど最終的にそいつの酔い方がめんどくせえ奴だった時は自己責任な？マジで。

近くにあつた徳利とお猪口を取り日本酒を注ぐ。

「まあそりゃ仕方ないってことよ、酒が飲めなくても美味しい飯がありやそれでも話ができるってもんさ。」

にしてもこの肉じゃが美味しいな。というか何食っても美味しいわ。酒ともよく合う！

「それはそれは、提督のお口に合って良かったです〜！」

「頑張った甲斐がありましたねえ〜！」

この鎮守府の女神、間宮、伊良湖ペアが降臨なされたぞおおおー！！！！

「ああ、最高に美味しいよ間宮さん！伊良湖さ「間宮…です」…：間宮！伊良湖！この肉じゃがなんか特に美味しくてどんどん食べれちやうよ。」

…俺の知り合いには笑顔でプレッシャーを出す人がたくさんいるなあ！！

「うふふ、ありがとうございます?!これからも間宮、伊良湖共々よろしく願いますねー！」

「提督、よろしく願います！」

はーほんといい人だなこの人達。この美味いご飯が毎日食べられるって考えると提督もアリ…：いやいやいや!!!待て待て待て!!!結局仕事は大変だし、やべえ奴らにも絡まれまくるし脱出は絶対不可避だ!!!

そう考えるとこの鎮守府で一番やばい人達は間宮、伊良湖なのかもしれないな…：。外で下手な飯が食べなくなるかもしれない。

「あ、提督。よろしかったらお酒のお代わりはいかがでしょうか？」

「お？おーありがとうございます、頂くよ。」

長門とは反対側の隣に座っていたオツドアイ？の子にお酒を注いでもらった。

「ありがとうございます…それで君は…？」

「あ、失礼しました！私、古鷹型1番艦、古鷹と言います。重巡洋艦のいいところ、たくさん知ってもらえると嬉しいです。それでこつちが…：もう加古！食事中に居眠りしないの！ほら、提督来てるから挨拶して。」

「ん？んー、あん？提督が来てる？おっと、そいつはいけねえ！古鷹の妹、2番艦加古ってんだ。よつろしくうー!!!」

しつかり者の姉が古鷹、活発系居眠りの妹加古ね。

古鷹は問題なさそうだけど加古はアホの子属性持ってそうだ。秘書艦向きでは無さそう。

こういう子はあれだな、いざ事務仕事とかさせてみると予想通りやってなくて、見かねたしっかり者のお姉さんがやってるって言う想像が頭の中に広がってる。

まあでも戦闘面では活躍してくれそうだ。

あれやこれやとたわいもない話を古鷹達としていると声をかけられた。

「H・i・i・テートク！古鷹、ワタシ達もそろそろテートクとお話したいネ！というわけでテートクを借りていってもOK？」

なんとも面白い話し方をする子だ、帰国子女的なやつか？扶桑、山城とはまた違った改造巫女服のような衣装ね。そして俺はものじゃないぞ！

「あ、金剛さん。ごめんなさい、ついつい話し込んでしまいました。提督もすみません、まだまだ回らないといけないのに引き止めてしまつて…。」

「いやいや、俺も古鷹や加古と色々話せて良かったよ。2人共、また今度ゆっくり話そう…つてコイツはもう寝てるのか…。」

思わず苦笑いしてしまう俺だった。

古鷹は慌てて加古を起こそうとするが俺は古鷹を止め、席を立つ。

コイツも苦労してんなあ…やっぱり癖のある姉妹兄弟を持つと大変だぜ。

「じゃあ古鷹、今日は楽しかったよ。これからよろしくな。あ、加古の事、頼んだぞ。」

挨拶もほどほどに「テートク！こっちなー！」と彼女に引つ張られるようにして移動した。

「あ、お姉様!!」

「提督もようこそいらっしやいました！」

「紅茶もいい頃合ですのでどうぞお掛けになって下さい。」

あっちゅーまに席に座らされて目の前には紅茶とパンやらロー

ストビーフやら、これまた美味しそうな料理が用意された。

「では改めて自己紹介ネ〜！ワタシは英国からの帰国子女、高速戦艦金剛型1番艦の金剛デース！ワタシから目を離しちゃノーノーですヨ〜！」

「司令!!私は2番艦の比叡です!!気合い!!入れて!!行きます!!」

「3番艦、榛名です!よろしくお願いします提督!」

「マイクチェック:よし、4番艦の霧島です!さて、司令のデータはどれほどのものか、見物ですね!」

うん、これまた面子が濃いわ。いや、悪い意味じゃないよ?今回は。

まず金剛、帰国子女だしあの喋り方、ガンガンアピールしてくる所とかインパクトでしかない。そして長女として妹達を大切にしているのもよく分かる。

次に比叡、まあうん。元気ハツラツ、ファイトオオオ〜!!! っぱあああ〜!!!って感じが凄い。そしてお姉様大好きなんだねもうありありと分かるよ。この子もアホの子属性ですね確信。

そして榛名、清楚系女子の代表。純粹でちよつと箱入り娘っぽい所ありそうだね。新参ホイホイ?ダークホース?

何言ってるのか俺もちよつとよく分からない。

最後は霧島、コイツ見た時はちよつとドキツとしたよ。

ああ、恋とか愛とかそんなじゃねえぜ?分かるだろ?あのインテリっぽい雰囲気、もうちよい黒く染めて髪伸ばして服着させれば淀姉さんの出来上がりだ。

なんだって?バスターx3アーツx1クイックx1の脳筋?

宝具もバスター?ハハツ、怖くなってきたよ。

まあ何がともあれこれだけインパクトのあるコイツらを忘れる事は難しいだろう。

しかも高速戦艦、速力もあれば火力もある。……脱出難度が上がる上がる。

まあ結局の所難度が上がってもバレなきや余裕なんスよ。某ステルスゲーの3みたくワニの被り物に松明装備して煽りながら脱出

してやるぜ。淀姉さんの居ない鎮守府なんてまあ軽く出てやるわ。

これまた金剛達とたわいもない会話を楽しむ俺。

やれどこそこの紅茶の茶葉が美味しいとか、英国で食べた鰻のゼリー寄せが凄かっただの、今度三越で服を買いたいとか様々だ。この辺の会話はみんなの想像にお任せしよう。ん？尺の都合だよ尺の。

「でもほんとにこの紅茶美味しいな…。」

酒やら油っこいものやら食べたから小休憩にはちょうどいい。

「やったネ！」

「お姉様の入れた紅茶が1番美味しいです!!」

「流石お姉様！」

確かに今まで飲んだ紅茶の中で1番美味かったと思う。

「そうソウ、今度テートクも私達の tea time に招待するネー! その時には紅茶に合うお菓子も用意するヨー!」

「司令司令!! 私も今度比叡特製カレーを作ってくるので食べて下さいね!!」

「おう! どっちも楽しみにしてるぜ!」

ん?なんか一瞬ほかの3人が固まったような気がしたけど…気のせいかな?

「金剛さーん、そろそろ時間だから提督貰っていい〜?」

「次は私達の時間ですわよ?」

「oh……もうそんな時間ですカ〜。もつと話したかったですけど、テートク! 今度は tea time の時にもつとお話ししましょーネ!」

「おう、また今度楽しみにしてるよ。」

こうして金剛4姉妹と別れた俺は呼びに来た艦娘2人に案内され、さらにテーブルの奥に座る艦娘達の元へ移動してきた。

「おーいみんなー、提督来たよ〜。」

「さ、提督、こちらに座って下さいまし。」

おー、やはり長門が言うように飲み場としては比較的安全なのが集まってるらしい。激ヤバレモンサワー作ったり、大食い選手権が

始まつたり、大声でだあくはっはっはっはっ!!とかそんな笑い方をするやつもない。

おい明希姉、恥ずかしいからその笑い方やめろ。

「じゃーまずは鈴谷から自己紹介ね！最上型3番艦の鈴谷ね！提督、よろしくう〜!!」

「ごきげんよう提督、わたくしは神戸生まれのお洒落な重巡、4番艦の熊野ですわ。入渠の時は全身エステフルコースでお願いしますね？」

ほー、ちよつと意外。この子達制服一緒だから多分と思ってたけど姉妹艦なのね。鈴谷は渋谷にいるJKみたいだし、熊野はどこぞのお嬢様学校出身で鈴谷とは正反対の友達って感じ。

それと熊野、入渠の度に全身エステフルコースするとなったらお前の出撃はほぼ無くなると思うぞ……？

「提督何飲む？カシオレ？レゲパ？今なら鈴谷が作ってあげるよ〜？」

「鈴谷お待ちなさい、提督にそんな庶民的な飲み物は合いませんわ。ここは私がイタリアから取り寄せたヴェンテージワインを…」

いや、俺庶民なんで全然飲んでましたよカシオレ。むしろヴェンテージワインとかの方が飲んだことないわ。

「ええ〜？そのワインやたら苦いじゃーん？そんなのより鈴谷の作ったカシオレの方が美味しいって〜」

「んまあ…このワインの美味しさが分からないなんて、鈴谷もまだまだお子様ですわね！」

「何を〜!!」

あ、そうそう。コイツら普通に酒飲んでるけど艦娘候補になると細かい事は省くが年齢制限的なものは全部解除されるんだ。だから飲もうと思えば駆逐艦達でも酒は飲める。まあ駆逐艦達は元々10代前半だから酒を飲むこと自体無かったからあんま飲んでるやつは居ないな。恐らく酒よりもジュースの方が好きだろう。ハラシヨーコイツハスバラシイウオツカダ

「……提督、どうぞこちらに」

鈴谷と熊野が少し荒れだしたからコソツと隣に移動する。

「…危ない所でしたね。」

「祥鳳姉さん、これ新しいお皿とお箸。提督に渡して。」

「ここは静かだったのに…。」

「まあ鈴谷と熊野が喧嘩するなんてしよつちゅうだし気にしない気にしない。相良君何飲む？サワー？日本酒？」

「こら瑞鶴、相良さんはもう提督なのだから提督と呼びなさい。…すいません、相良さ…提督。」

コイツらは完全に静かに飲みたい派の奴らだな。

そして……

「久しぶりだな、瑞季、明日翔。なら日本酒貰おうかな？てかあんまり気にしなくてもいいぞ？別にいつも通り相良で呼んでくれても構わないし。」

コイツらは大学同じだった鶴屋姉妹、鶴屋瑞季（つるやみずき）と鶴屋明日翔（つるやあすか）だ。

「おっけー、なら私は今まで通り相良君で呼ぶねー。はい、日本酒。」

「それでは次は私の自己紹介ですね、航空母艦大鳳です。飛行甲板まで十分な防御が施されてて、密閉型の格納庫も素敵でしょ？これで流星も烈風も問題ありません。どうぞよろしくお願いします。」

この子が装甲空母の大鳳か、正規空母って割には小柄な奴だな。まあ真面目そうとかストイックそうなイメージ。装甲空母ってだけあって固そうなまない「提督今邪なこと考えてるでしょ？」…いやなんでもないです。その笑ってない笑顔やめてくださいお願いします。

艦娘は直感が働いたり、心の声が聞こえちゃったりするから下手な事考えると抹殺されかねんな…提督辞める名目で寺にでも入門するか？…いや、それはそれで俺には無理そうだな。俺は普通に辞めるぞ淀姉ええー！！あかん、石仮面付けて吸血鬼になってしまふ。

「それじゃあ次は私達ですね、祥鳳型1番艦の祥鳳です！ちよつと小柄ですけど、ぜひ提督の機動部隊に加えてくださいね？よろしくお

願います!」

祥鳳か、凜とした雰囲気の真面目な子だと思う。

割烹着に三角巾付けたら可愛ささらに増しそう。

何秋刀魚だと? 脱出予定あるし秋まで待てないから今度頼むしかないわそりゃ。

「私は2番艦の瑞鳳です! 軽空母ですが私も戦力になりますよ!

提督、あの…卵焼き焼いてきたんだけど…食べりゆ?」

食べりゆううううううううううう!!!

はっ!? 今のは一体…? 今の言葉を聞いた途端に勝手に口が動いていた。うっ!? 頭が…食べりゆ教…?

いかんいかん! こういう沼はまずいんだって!!

「あ、ああ…食べりゆ…頂こう。」

ほら、早速言いそうになったよ。大丈夫? 卵焼き食べ続けたら食べりゆ教? とやらになってないか心配になってきたよ俺。

「お、美味しいなこの卵焼き、酒にもよく合うし。」

「わっ、ホント? えへへ、よかつた〜! あ、提督、私も日本酒飲みたいから入れてもらっても?」

え!? お前酒飲むキャラだったのか。小柄だしまだ子供だろうと思ってたけど…もしかして実際は俺と同じぐらいの歳?

「お、おう。あ、でもお猪口が無いな。ちよつと向こうから取ってくるか。」

「いいですよ提督、提督のお猪口貸して下さい。」

「でもこれ俺が口付けたやつ」

「気にしない気にしない!」

あ、ひったくられた。さてはコイツ結構酔ってんな? …まあいや、酔ってるやつに絡むほど馬鹿な行為は無い。

日本酒を注いでやると瑞鳳はゆっくりとしかしかしひと口で日本酒を飲み干した。

「ぶはあー…ふふっ、いつもの倍美味しい!」

酒がまわってくると楽しくなってきたやうんですよね分かりません。



「あはは…すいません提督、これ新しいお猪口です。」

「お、すまない祥鳳、ありがとうな。」

お猪口を取ってきてくれた祥鳳から新たなお猪口受け取り日本酒を入れてもらう。

瑞鳳の卵焼きをひと口食べ、日本酒をひと口…うん、美味しい！

おつまみ系も充実してて非常に美味しい……ん？祥鳳？

「祥鳳、それ俺のお猪口…。」

しかし時既に遅し、祥鳳は飲み干したあとだった。

「えっ!?嘘!?ごめんなさい提督!!」

「いや、いいんだが…祥鳳、新しいお猪口はまだあったか？俺が何個か持ってくるよ。」

「実は…それが最後のお猪口で…。」

え？もう無いの？そんなにみんな日本酒飲んだのか？

「主に隣の席が沢山使って…もう無いんです。」

おー隣の奴らなにしとんねーーん。

グラスは1人1個!!これ大事!!

「ほら提督、私のお猪口使いなよ。大丈夫、私のもって言ってもまだ飲んでないからさ。」

大鳳から酒の入ったお猪口を受け取る。クツソ、お猪口無いから仕方ないけど飲み会ではよくあるパターンだ。

『お、何？相良グラス無いじゃん。じゃあこれ新しいやつな。大

丈夫大丈夫誰が頼んだかわかんないやつだからほら一気一気!!』

はーあんときめっちゃ飲まされて吐きそうだったしマジで酔った勢いで大迫ぶん殴りそうになった。

だが受け取ってしまった以上飲み干さない訳にはいかないのだから飲み干す。

「あ、ごめんなさい提督。それ乾杯の時にひと口飲んでたわ。」

…まあいけどき、俺そんなに気にしないやつだからいいけどお前ら女の子と違ってこういうの気にするやつじゃないの？

艦娘になると性格変わるって言うし、そういう所も寛容になっちゃうのかな？

なんだよ瑞鶴ジロジロ見てきて……なんか君黒いオーラ出てない？気の所為？

「あーこのお酒美味しいなー共感者欲しいから相良君も飲んでよねー？」

瑞鶴が飲んでいたお猪口をグイグイと押し付けてくる。

「え、いや、それこれと同じ酒……」

「飲・む・わ・よ・ね？それとも私が入れたお酒は飲めないって？」

「……頂きます。」

なんだつてコイツは不機嫌なんだよ……。

とりあえず飲み干すと「よろしい！」と笑顔になった。

なんかほんとはよく分からない。

いやあもう飲まされたしそろそろ飲みたくない。

「ていと……相良さん、私もうこのお酒飲み切れそうに無くて……飲んで頂いても……？」

無情にも差し出されるお猪口、翔鶴よ声は申し訳なさそうにしてたけど顔は「勿論私のお酒も飲んでくれますよね？」って書いてあったな。

「ちよつと提督く？何逃げてるしく。今熊野とどっちのお酒が美味しいか勝負してて提督には審査員してもらおうから！勿論鈴谷のカシオレの方が美味しいに決まってるけどく！」

「鈴谷もお子様ですわね!!この芳醇な香り、繊細かつ大胆な味……まあお子様の鈴谷には分からないものですわね。提督、勿論わたくしのワインの方が美味しいに決まっていますわよね？提督のセンスが試されてましてよ？」

どんどんと追加される酒酒酒……。

長門、このテーブルに座ってるヤツらのどこが比較的マトモな奴らなんだ……今にも潰されそうだわ……。

## 就活戦争11日目

結局、鈴谷・瑞鶴達の酒は全て飲み切った、というか飲まされた。しかしそれに見合う代償は大きかった。

現状を確認しよう。

まず1つ、視界がボヤけてきた。

2つ、かなり頭が痛い。

3つ、まだもう1テーブル残っててかつそこが1番難関だということ。

絶望的だ、今俺は少しでも回復を図ろうと間宮が入れてくれた水を飲んで休んでいる。

……もう、アイツらの席行かなくてもいいんじゃないやね？

わざわざ激戦区に行かなくても改めて挨拶すればさ、いいんじゃないやね？つてことよ。

という訳で飲み潰れた体でうつ伏せになる。

よーし、誰も声掛けてくるなよ？俺はもう潰れてるからな？飲みたくないからな？声かけても反応無いからな？

とりあえずこのまま休んで少しでも回復を……

まあ来て欲しくないやつは来て欲しくない時に来るもんで現れたのが……

「おーいこうちやーん!!楽しんでるかーい!!」

そう明石（明希姉）だ。

神は許しても明石は許さんと申す。

頼む向こう行ってくれ…俺はもう死んだんだ!!

「んーんー? 潰れちゃったかあ。それじゃあ仕方ないなあ。」

そうそう、向こうで他の連中と一緒に飲んでこいほら!!

「はーんーい!!提督が酔い潰れてるんで今から提督の昔の恥ずかしい話しまームグウ!!」

俺は今ある全ての力を使って明石の口を塞ぎ、椅子に座らせた。

あはは、なんでもないよ。うんなんでもないからみんなこつち見るな。

「こうちゃんやっぱり起きてるじゃない。」

「飲み疲れたから休んで何が悪い。」

やっぱりこの姉はロクでも無いことばっかやらかすんだから……。というか酒くせえ!!

「いや、休んでていいのよ? こうちゃんの昔話に花を咲かせるだけだからさー!」

「ふざけんなこんにやろう! お前の恥ずかしい昔話暴露すんぞ!!」

「ご自由に? 私はそこまで気にしないタチだからさー」

コイツ……酔っ払ってるのと元々の性格が相まって無駄に気が大きくなって余計にめんどくさくなってる。

「とりあえず向こうの席行こっかー! 挨拶まだでしょ?」

「いや、残りの連中はまたの機会に……。」

正直今日はもう休みたい……。もう疲れたよパトラツシユ……。

「この提督なんだから挨拶またの機会になんて許されるわけないでしょ? それとも……私だけ戻って昔話してきてもいいんだぜえ〜?」

こ、コイツ〜!! うぜえ〜!! もしこのまま帰ったらマジで明石は昔話暴露大会始めるに違いない……。

幸い、今の休憩でちよつと回復したし向こうには青葉や飛龍達の知り合いもいる。もしやばかったら助け舟を出してもらおう。

「……分かった分かった!! 行きますよ!! 行きますから!!」

「ほいほい! 提督さん1名様ご案内〜!!」

ズルズルと引きずられながら最も恐れていた飲み席へと連行される俺。

ああ、ドナドナが聞こえてくる。

「あら? ようやく提督さんのお出ましね?」

「お、遂に来よったな! ウチをどれだけ待たせるんや! はよこち座りいや!」

あ〜『勿論飲むよな!』って連中が勢揃いじゃん。もしくは

そいつらに絡まれた犠牲者。

分かるのは陸奥、飛龍、蒼龍、青葉の4人だけだ。

「隼鷹く連れてきたよ〜!」

「おお明石ナーイス!!提督くやつと来たねえ〜?私は隼鷹つてんだ!ほら、お猪口持った持った!!パーつと行こうぜパーつとなあ!!」

ああ、酒くせえ空間……。座った途端にお猪口持たされてそれに並々……。おい、零れてるって!!

「ちよつと隼鷹!零してるわよ!?飲み過ぎだし他の人達にも絡みすぎ!!:すいません提督、このおしぼり使ってください。」

「あ、ああ、ありがとうな:それで君の名前は:~?」

「あ、すいません!名前は出雲ま:~じゃなかった、飛鷹型航空母艦1番艦の飛鷹です!よろしくお願いします提督!」

妹さん随分いい飲みっぷりですね……。

おたくも相当姉妹に悩まされてるようで……。

自由奔放な家族を持つと誰かが苦労するんだよなあ。

お分かり?明石さんよお?

「:なんとと言うか、お前も苦労してるな飛鷹:まあなんだ、これからよろしくな。」

飛鷹の疲れた苦笑いが今日の苦労を物語っている。

きつと俺も似たような顔をしているのだろうか。

「なんや飛鷹、しけた顔しよつて。酒が足らんとちゃうか?ほら、もつと飲めや!!」

「ちよ!龍驤さん!!やめっ!!グホッ!!ゴボゴボ……。」

あー!!!お客様おやめ下さいお客様ー!!!あー!!!お客様お客様困ります!!!一升瓶を人の口に突っ込んで飲ませるなんてー!!!

あ、飛鷹……。一升瓶が口に突っ込まれたまま潰れたか……。お前の事は忘れないぞ、コイツらに酒で記憶飛ばされない限りはな。

「ほれ、提督もはよ飲みいや。お猪口空けてくれんと酒が注げんでえ?あ、ウチは軽空母龍驤や!よろしゅうな!」

この陽気な関西空母が龍驤か。まあ実際酔ってるからここまで

陽気かどうかは分からないけど。

……小柄なのによく飲むなあ。俺は飲めそうに無いから勘弁して貰えませんかねえ……。とりあえずこの一杯は何とか飲むか。

「ああ、よろしくな龍驤。だが、すまん。俺ももう飲めそうにない……。また次回にお願いするよ。」

苦しい言い訳だけどこれぐらいしか言えん。頼むもう無理なんだって!!

「まあせやなあ、提督は明日から執務もあるし、もう飲まれへん言うんやったら無理に飲ますのも可哀想やしなあ……。」

お、流石関西人!!分かつてるうう!!そうそう無茶に飲ますのは良くないぜ!

「…せやけどな、提督。ここに座つてしもた以上選択肢は飲む、飲まへんやないで?」

は?何言うてんのこの子?あかんわ、ちよつちピンチ過ぎん?

「選択肢は飲むか飲まされるのどっちかや!!さあ観念してお猪口空けえや提督!!」

「ちよつと待て龍驤!!一旦落ち着け!!とりあえずその右手に持った一升瓶を置くんだ!!」

なんだつてこんなな気性が荒いんだ!!コイツら禁酒にした方がいいんじゃねえのもう!!

いや、やつぱりやめとこう。禁酒にしたらコイツら暴動起こしちゃうだわ。

「ほつほお、提督は一人じゃ酒が飲めん言うことか、しゃーないなあ、そんなら今回はウチが特別に口移しで飲ませたるわ!あ、もしくは他の子にやつてもらうのでもええで?」

思わず椅子から立ち上がり後ずさる俺。この酔っ払いども思考回路がおかしすぎる!!恥ずかしいとかいう概念はないのか!?

そ、そうだ!!飛龍や蒼龍に助けを!!

「えゝあにゝゝさながらひゆんにくちうつしでおさけ飲まへるって?はいはゝい!!わらしのやるうゝ!!」

「ちよつとゝそうりゆゝほれはわらしがやるんだからあゝ!」

うわっ！飛龍と蒼龍!?ダメだコイツらも碌でもないヤツらの仲間入りしてやがる!!

あ、扶桑山城!!お前達なら!!

「うえええ〜ん！山城おおくこんな姉でごめんねえ〜!!」

「ヒック!!グスン!!そんな事ありません姉様は山城にとって大切なあ〜!!」

こいつらもダメだ!!まさか泣き上戸だったとはな!!

はっ！青葉!!青葉ー!!助けてくれええー!!

「じゅんよ〜さ〜ん、もう飲めませんつてばあ〜。きぬがさ〜たすけてえ〜!」

「あかしさん、わらしももうムリだつてえ〜!あ!ていとくさんたすけて〜!」

「何言つてのさ〜2人共まだまだ足りないって顔してるよ〜?」

「ほら、衣笠ちゃんもう一杯もう一杯!!」

何これ戦場かなにかですか?衛生兵が突撃歩兵に蘇生頼むよ  
うな状況になつてしまつたようですね。

詰んだな。

「提督、大丈夫?」

時雨!?来てくれたのか!!ナイス!!助けてくれ!!

やっぱりこういう時に気が利く子は最高だな!!

「時雨、ちよつと助けてくれ。流石に俺ももうキツくて……。」

「分かつたよ、僕が何とか龍驤さんを説得してくるからそれまで待って……」

「お、なんや?時雨が提督に口移しするんか?ええでええで!!ほら酒や、ぐいーつと行つたれ!!」

このバカ!!余計なこと言うな!!時雨もその酒を机に置くんだ!!

「……提督、あと一杯だけだから我慢してよ。その代わり僕が飲ませてあげるからさ……。」

「ま、待て時雨!!酔っぱらいの言葉に耳を貸すな!!」

ハイライト仕事してえええー!!クソっ!後ろはもう壁が!!  
誰か!!誰でもいいからヘルプミー!!!

「……ねえ相良君。」

壁際ギリギリまで追い込まれもうダメかと思ったその時時雨が耳打ちしてきた。

あれ？ハイライト戻ってる……？というか呼び方が……ああ、はいそういう事。

「…なんだ雨音（あまね）。」

「これ、やめてあげようか？」

お？賢者タイム？まさか正常に戻った？

「そりゃ、やめてくれんならやめてくれた方が……というかお前ら酒飲んでるからにしてもオープンになり過ぎだろ。」

「…艦娘になるとね、ちよつと気が荒くなったり、感情がストレートになつちやうんだ、ごめんよ。」

気が荒くなったり、感情がストレートにねえ…はあく

「…でやめてくれんのか？」

「やめてあげてもいいよ、ただ条件があるんだ。」

「……なんだ？」

「うん、今度僕のお願いを1つ聞いて欲しいんだ。聞いてくれるなら僕が『時雨』の気を抑えておくからさ。」

さり気なくいい条件にしようとしてるなコイツ。『お願い』つて言葉の幅が広すぎんだよなあ。

「無茶なお願いとかは無理だからな、俺の出来る範囲なら聞いてやる。」

「そんなに難しい事は頼まないよ、強いて言うならば、1つ欲しいものがあるんだ。まあまだどうなるか分からないけど。」

欲しいもの……買い物でも付き合ってやればいいのか？まあそれぐらいなら大丈夫か。何万もするようなものなら一蹴して終わりだ。最悪、そのような事は聞き覚えがないで済まそう。

「じゃあ取引成立だね。あ、念の為録音しておいたから聞き覚えがないですはなしだからね。」



……コイツ淀姉さんにやり口まで似てきたな。

こうして時雨は足早に去って行った。

「なんや？時雨やらんのかいな、まあそんならウチが：／／／はっ！そうだ時雨をどうにかしただけで根本の解決になってねえじゃん!!」

ジリジリと迫り来る酔っぱらいども…飛龍と蒼龍、お前らゾンビみたいで怖いわ。

「貴女達やめなさい、みつともない…。」

「そうですよ、飲みすぎは身体にも良くないですからね!」

「い、いや…赤城は食い過ぎと思うんやけど…。」

まさか助けが来るとは思わなかった。

あ、あれは誰だー!誰だー!誰なんだー!

つて!!そんな茶番はどうでもいい!!このままメルヘンデビューしちまう所だった!!

この弓道着っぽい2人にはホント感謝!!

「まあ!龍驤さん、私が食べ過ぎだなんて!!」

「いや赤城さん、私が言うのもなんですが、私達かなり食べてますから…。」

「と、ともかく!!あんまり提督を困らせるのはいけません!このまま続けるなら今度鳳翔さんが来た時にお話ししておきますからね!」

空母勢は鳳翔という言葉を聞くなりびくつと反応し、皆席に戻って行った。

なんだなんだ、鳳翔さんってのはそんなに怖い人なのか…??

件の鳳翔さんたらやらを想像してみる。

……鬼軍曹のような人なのか?それともうちの母親は当てはまらなかったが世間で言うオカンみたいな感じの人とか…?はたまたレスラーの如くムツキムキのひとか?

謎が謎を呼ぶがともかく助かったという事だけは事実だ。

「助かったよ2人共、ありがとう。…失礼、君達の名前は…?」

「二航戦赤城です。大変でしたね提督、彼女達も普段は真面目な

方々なんですがお酒が絡むとどうも……。」

「私は同じく」航戦の加賀です。けれどハッキリやめろと言わなかった提督もいけません。提督である以上もつと堂々となさって下さい。」

すんません、その通りです。

「まあまあ加賀さん、それは提督の優しさ故言わなかったのでしょう。皆に挨拶回りするのに雰囲気壊すのは申し訳ないと提督はそうお考えだったはずです。それにこうして私達の所にも来て下さったじゃないですか。」

赤城さん優しすぎん？大食いで見境無くすのが玉に瑕だけど……優しすぎるわ。

「そうですね赤城さん。提督、失礼しました。よろしければ何か飲みます……いや、お酒はもうやめておきましょう……今お茶を入れてきますね。」

加賀が席を立つのと入れ違いに2人の艦娘が横と向かいに座ってきた。

「提督も大変だったねえ！この鎮守府切つての飲兵衛達に絡まれたんだから。あ、私は航空戦艦の伊勢って言うんだ、よろしくね提督！」

このポニーテールっぽい髪型の子が伊勢ね。なんかあれだな、漫画とかに出てくる酒場だったり居酒屋に出てくる気前の良いお姉さんキャラ。あんな感じ。

「2番艦の日向だ。よろしくな。……時に提督、瑞雲に興味はないか？」

「よろし……え？瑞雲？」

瑞雲ってあれだろ？水上偵察機の……。

「あれは素晴らしい機体だ……偵察も攻撃も出来る、そして洗練されたシルエット、あのエンジン音、どれをとっても瑞雲は最高と言えよう。」

瑞雲について熱く語っているのが日向ね。なんだろ新興宗教か何かかな？瑞雲教？なんじゃそりゃ。食べりゅ教の他にもあんのか。

「おっと、すまない。つい熱くなってしまった。そうだ、お近づきの印にコイツをやろう。」

こ、これはっ!?

「そう、瑞雲だ。」

うん、瑞雲だわ。

「そいつを肌身離さず持つておくがいい。きっと瑞雲が提督を守ってくれるはずだ。」

瑞雲、御守りかなにかかな?

「それは護身用の瑞雲、そしてこれが観賞用と保存用だ。大事にしてくれよ?」

いや、多いよ瑞雲。観賞用はともかく保存用ってなんだよ。そもそも護身用の瑞雲ってなんなんだよ。

「本来であれば布教用の瑞雲も渡したいところだったんだが、生憎残り1スロットは主砲を積んでてな。また今度渡そう。」

布教って言っちゃったよこの人、やっぱりピュゲフンゲフン：瑞雲教はあつたんだ!!

その後は加賀の入れてくれたお茶を飲みながら4人と雑談した。特に荒れることも無く：いや、1回荒れたわ。

あの後明希姉モードの明石が懲りずにだる絡みを始めたので加賀に言われた通りハッキリと言ってあげた。

研究室の使用禁止期限を1週間に延ばした。

そしたらもう、暴れるのなんの…。

最終的に駄々こねても無駄と分かり泣き落としに作戦変更してきた。

「お姉ちゃんの事、嫌いな…?」とか言いながら涙目で上目遣いとかしてきたけどここで許すと調子に乗るのは長年の経験なので放置した。ガチ泣きしてた。

はつきり言えと言われた加賀から「提督：貴方、案外鬼畜ね…。」と若干引かれたので、じゃあ物は試しと1週間は取りやめと言ってみたら速攻で泣き止んで調子に乗り始めたので再び1週間延

期した。今度は加賀も賛同してた。満場一致だった。

そんなこんなあって、俺の歓迎会は終わりを迎えた。

「注目!!そろそろいい時間だ、明日も早いからお開きにしよう!」  
長門の一声で注目が集まる。

「今回の準備は駆逐、軽巡のみんながやってくれた。片付けは軽空母から上の連中のだ。隼鷹逃げるな、川内は早く寝ろ、絶対に騒ぐなよ?」

所々から『ちえ〜』という声が聞こえてた辺り件のヤツらはやる気満々だったわけだ。

「最後に提督、一言頼む。」

締め言葉って苦手なんだよなあ。

それっぽくすればいいか。

「あー、まずはこのような会を開いてくれた事に感謝をしたい。準備してくれた皆、美味しい料理を作ってくれた間宮、伊良湖に拍手!」

パチパチと鳴り響く拍手、『私達頑張ったもんね!』と笑顔の駆逐艦達が微笑ましい。

「片付けは俺と残ったヤツらでやろうな?逃げた奴は明日明石と仲良く工廠の掃除だ。」

「いえーい!!仲間募集中だよ!!皆、私と一緒に工廠の掃除しようぜ!!」

「研究室使用禁止1週間に延ばされたからって吹っ切れんな明石!!頼むからちよつと静かにしてくれ!!期限また延ばすぞ!!」

「ハイッ!!スンマセンツ!!」

うるせえ!!体育会系ばりの元気な返事を返すな明希姉!!

「あー、話を戻すぞ。俺はまだまだ新人だ、新人って事に甘えるつもりは無いが皆に迷惑掛ける事もあるかも知れない。未熟な俺かもしれないが早くみんなに頼られるような提督になれるよう頑張るか皆さん、手を貸して下さい!お願いします!以上解散!!」

こうして俺の歓迎会は幕を閉じたのだった……。

俺はその後、妖精さん達が魔改造した自室に戻り、シャワーを浴びてほっこりしていた所だった。

「ふー、さっぱりした。温泉は明日の朝にでも入るとするかな。」

風呂上がりは牛乳が鉄板だが今はない。しかし水道から出る水が冷たくとても美味しい。

「結局の所、片付けは残った連中に任しちゃったし、部屋で休めと言われたけど申し訳ねえな……。」

片付けをしようとした所で長門から「主役が片付けしてちやダメだろう」と帰された。まあでも疲れたし、お言葉に甘えて今に至る。

歯も磨いたし、日向から貰った瑞雲3機は……とりあえず机の上に置いておくか。後はメール確認して寝るだけだな……お、噂をすればなんとやら早速メールが……淀姉さんからだ、なんか怖いな。

受信ボックスからメールを開く。

えーなになに？

『提督生活1日目、お疲れ様です！どうでしたか？舞鶴第2鎮守府は？こうちゃんのお姉さんである明希も実はそこで働いてたんですよ？ビックリしましたか？』

知らないビックリ要素ホント勘弁ですわ。

『何はともあれ、これから始まる鎮守府生活応援してますからね！分からないことがあったらなんでも聞いてくださいね！』

聞いてくださいねって言ったって淀姉さん多忙だろうが。

まあ、加賀や赤城辺りは詳しくそうだしその辺にでも聞くか。

……ん？まだ文章あったのか、ああP・S・ね。

『P. S. 大本営から舞鶴第2鎮守府へ転勤になりました。明日の朝にはそつちに着くと思えます！改めてよろしくねこうちゃん!!』

………は？

何言うてんのこの人？冗談でしょ？

『こうちゃん冗談でしょ？とか言ってるかもしれないませんが本当なのでよろしくね!』

しかも先読みまでしてくる辺りやべえわ。

え？つて事は………まじ？

う、うわああああアアアアア

こうしちやいられん!!!こんな所さつさとおさらばしなれば!!!

脱出、脱出だ!!緊急脱出!!

必要な物をカバンにぶち込み、急いで玄関に向か「そんなに急いでどこに行こうって言うのかしら提督さん?」……。

玄関には既に叢雲が立っていた。

何故既にコイツが居るんだ!?

ま、まあ落ち着け……たまたま来ただけかもしれない。

「い、嫌だなあ!ちよつと食堂に忘れ物しちやつてな!それを取りに行こうと……」

「あらヤダこうちゃん、私片付けてたけどこうちゃんの忘れ物なんて見当たらなかつたけどなあ〜?」

あ、明希姉まで!?

クツソこうなりや窓から脱出を!!

「提督、部屋の中で走ったら危ないじゃないですか、しかもこつちには窓がありませんよ?ねえ?北上さん。」

「こうちゃんさあ、まさか……脱走しようとか……考えてないよねえ?そうだったらあたしも悲しいなあ。」

大井と北上!?!他にも退路は………そうだ!勝手口!

「提督、君には失望したよ……締めという言葉とても良かったのに。何より……僕のお願いを反故にしようとしたのは見逃せないなあ。」

こつちには時雨が!!ハイライトオフ!!消えてるじゃあないか!!  
戻して雨音さん!!早くハイライト戻して!!

「下手な嘘はつかなくていいわよ、アンタが脱走しようとしてるのはもう大淀さんから聞いてるから。」

「私としてはこうちゃんが見逃ししようって言うなら手を貸すのもやぶさかじゃなかったけど研究室の件もあるし、何よりこうちゃんの方が面白そうだからさ。」

「さあ、明日から早いですから諦めて布団に入りなさいな。」

「こうちゃん、初めて泊まる部屋で寝れないタイプなんでしょ? だったらあたし達、こうちゃんが寝れるまで一緒にいてあげるからさ...。」

「なんなら提督、僕が添い寝してあげてもいいよ?」

「お、良いねえ〜!あたしもしてあげようか?」

「ダメよ(です)!!」

クソツ!!コイツらが全員淀姉さんから連絡を受けていたなんて!!あまりにも根回しが早すぎるぞ淀姉さん!!

しかし脱出する機会は何か知らんがコイツらが言い争ってる今しかない!!.....よし!!

うおおおおおー!!走れ俺!!!

よし!!もうすぐ玄関に.....っ!!

玄関のドアを開け放ち、俺は一抹の希望を見出していた。

このまま走り続けければ鎮守府を出て自由な生活を送れると(シユルグイツ!!) おおおおお!!??

なんだこれ!?ロープが足に!!

「おーい、みんなくかかったよ。」

「全く、アンタってやつは油断も隙も無いわね...。」

「クソツ!!解ける!!俺は自由な生活をするんだ!!淀姉さんやお前らに自由を奪われてたまるか!!」

そのまま俺はズルズルと部屋に引き戻され布団の上に4人でガツチリ抑え込まれた。

「離せ!!離せ!!の!!HANASTAR!!」

「じゃー、みんなーそのまま押さえててね?こうちゃん、寝付きが良くないならお姉ちゃんが寝かせてあげよう!はい、りらーつくす。」

明希姉が何かの布をこちらに近づけてくる。

「やめろー!!!やめろー!!!それ絶対クロロホル ( ⊠ ω

⊠ ) スヤア…」



## 就活戦争12日目

ん……んー？なんか眩しい……。あれ？やけに明るいわ、俺外で寝てたっけ……？

「提督さんおはようございませう、朝ですよ。」

「そろそろ起きて下さい。」

……あーお前達かそれと96式探照灯妖精さん、とりあえず眩しいからそれ消せ。

いつもの5人組妖精さんと目覚ましではお馴染みとなりつつある工廠妖精さん改め、96式探照灯妖精さんが枕元にいた。

「なんですか、96式は眩しすぎるって言うからわざわざ普通のライトで起こしに来たというのに。」

いや、だからわざわざ光るもので起こしに来なくていいんだよ。探照灯とかライトとかじゃなくてもっとマトモな起こし方をしてくれ。

「「……あたらしい」「それはもういいから、もうそれ2度目だから、二番煎じはウケないぞ。」

「なんとも注文の多い提督ですね。」

やかましいわ……。……さて、なんだかんだで目覚めた訳だがまず非常に大変な事になった。まずは現状を確認しようか。

「記憶、ヨシー」現場ネコ妖精は帰れ。

「昨日は随分お飲みになってたようですね。本当に記憶はありますか？」

覚えてるよそりや勿論。

むしろ忘れてた方が幸せに暮らせたな、皆、驚くなよ？

今日は特別ゲストになんと……。あの淀姉さんがこの鎮守府に来てくれま〜す!!!皆、拍手う〜!!!

「我々もその話は聞いてますので。」

なんだよノリ悪いな……。……はあ、気が重い。

重いといえばさ、なんか体が全体的に重いとか息苦しいというか動きづらいというか……。五体満足かどうかも確認しようか。

まず右腕……時雨が引っ付いてる。あの、動きづらいんですが……。

次に左腕……ハイパー北上様が俺が寝てるのに対し平行に眠ってらっしやる。座布団を枕にしており、それが腕の上に乗ってるので血が止まりそう。

左足……明石。邪魔だから足を動かして明希姉の頭を退かす。布団から落とした瞬間、明希姉が「フガッ！」と変な声を出したが、その後何事もなかったかの様にグーグーと寝息を立てて再び寝始めた。

右足……なんで夕立がいるんですかねえ？昨日の騒ぎの時はいなかったのに……あー時雨がここに行くって行っただまま帰ってこなかったからここに来た的なパターンか……ってなんかズボンの膝上辺りが湿ってるんですけど!!!コイツまさか涎……。

「漫画ではお馴染みの展開ですね。」

「艦娘達と同じ屋根の下で眠る提督さん。」

「電○文庫やM○文庫系のラノベ、漫画辺りではよくあった気がします。」

いや眠る（強制）なんですすがそれは……妖精さん達に漫画とか読ませるんじゃないかってわ、ロクでも無いことばっかいいやがって。

コイツらも監視の途中で寝たって事だろう……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？となる。井が居ない。となると交代で監視してるって事だな……？？となる。1人は玄関、もう1人は外を警戒って感じか。そう簡単には逃げさせてくれないって事ね。

それでも僅かな希望を捨てては行けない。脱出の機会はまだまだある。

その為にもコイツらを起こさないように退かさねばな。

まずは左腕、北上を起こさぬようにゆっくりと腕を引き抜いていく。幸いにも綿の多い座布団だったので腕を引き抜いても北上が目覚ますことは無かった。

まずは左腕の救出に成功、続いて右腕に引っ付いてる時雨だ。ここから難度が上がる。

まずは自由になった左手で右腕の解放を試みる。しかし時雨が

俺の上着を掴んでいるため、簡単に抜け出せそうにない。

試しに上半身を軽く捻ってみた、これで時雨が離してくれれば良かったのだが「ん…むう…」と起こしてしまいそうになった。あぶねーあぶねー。

となればプランBだ。上着のボタンを外し、左腕から時雨を起こさぬようゆっくりと脱いでいく。脱げたら右腕の袖を掴みゆっくりと引き抜く。これで両腕解放だ。代わりに上着はそのまま時雨に抱え込まれてしまったので回収は不可能となった、まあ仕方ない。

さて今度は右足の夕立だ。コイツが1番ムズいかもしれない。

まずは枕を夕立の頭の横に置く。そしてここから緊張の瞬間だ、少しずつ膝を曲げ夕立の頭を太ももからずり下ろしていく。頭が落ちる瞬間横に置いておいた枕を滑り込ませる。

…よし、これで五体満足だ。

布団から起き上がり彼女達を踏まないように布団から脱出する。

「…いくら艦娘と言えどまだ4月だぞ、寒くないんかコイツらは…。」

掛け布団を夕立に掛け、毛布は時雨に掛ける。

妖精さんがどこかからブランケットを持ってきたのでそれを北上に掛けてやり、明石はーとりあえずタンスからバスタオルを2〜3枚引つ張り出し、適当に掛けておいた。

にしても…うへえー、夕立やってくれたなあ、ベツタバタじゃねえか…。

時計を確認すれば現在6時、昨日の酒臭さも少し残ってるし、シャワーでも浴びるか…。

「提督さん提督さん、シャワーも良いですが、あれをお忘れですか？」

あん？何をさ？

「特注家具職人妖精さん達が作った温泉ですよ。」

…おおく！！良いねえ〜それ！！

朝日を見ながら温泉に浸かる…最高じゃん！

そうと決まればレッツらゴー！

(職人妖精さん鍵の方はどうなってますか?)

(バツチリです。戸を軽く引いただけで壊れるようになってます。)

(OKです。仮にバレても言い訳は『突貫工事だったので鍵が駄目になってた』で行けるでしょう。)

(ふふふ…提督さん、私達も大淀さんと同じく、簡単に鎮守府から脱出させませんよ?まあ私達が妖精だから鎮守府で働きたいと言うのもありますが…)

(提督さんの周りで面白い展開になってメシウマするのが楽しみです!!)(!!)

—————

うぶぶぶっ!!???

なんだあ?なんか今背筋がゾクゾクしてきたわ。

淀姉さんとは違うなんと言うか…頭がハッピーな奴らに弄ばれてるような…。

まあこの人生で会ってきた人間が大半の頭がハッピーな方々だったしな、朝方は少し冷えるからそのせいだろう。

早いとこ風呂に浸かろう…。

暖簾をくぐり脱衣場に行く扉を開け(ガキッ)……なんだ少し立て付けが悪いな…。

ガタガタと音を立てながら扉をスライドさせ中に入る。

「おお、やっぱり旅館だわ。別途料金払って使う貸切風呂みたいだ。」

洗面所は2つ、ドライヤーが壁に引つ掛けてあり、衣類を入れるロッカーが1つ。体重計やら扇風機も置いてある。

どうやらロッカーには鍵が付いてないらしい、まあそもそも俺しか住んでないから脱衣ロッカーに鍵なんか要らないか。

1番上段の右端に衣類を入れ、タオルを持ったら楽しみの温泉だ

!!!

戸を開け放ち風呂場に入る、まずは内湯がお出迎え。シャワーを浴び、汗や酒臭さを洗い流す。

普段は朝シャンなんてしないが旅行気分もあつてか頭、体を洗う。

泡をシャワーで流し、椅子から立ち上がる。

内湯に入ること考えたが朝日を見ながら温泉に入る贅沢は今の時間しかできない。

自然と足は露天風呂へ向かっており、奥まで行き、露天風呂に繋がる戸を押し開ける。

おおー、すつげえ！モウモウと立ち込める湯けむりの向こうに見える太陽、温泉独特の香り！どこまでも続く水平線！……寒いしさつさと入ろう。

ちよつと熱めの温度、しかし温泉ならこれぐらいの熱さの方が丁度いい。

ふうふう生き返るく。

さすが温泉、荒んでた心まで綺麗にしてくれる。

……ここからだちよつと朝日が見にくいな、もう少し右に移動して……(トンツ)「あ、すいません…。」「あ、いえ、こちらこそ…。」え……？」

やべ、ぶつかっちゃつ……は？俺は今何とぶつかつたんだ？

待て待て待て落ちけつ俺、いや本当に落ち着け、落ちけつとか言ってる場合じゃねえ。

おかしいぞ？風呂に居るのは俺だけのはず、他の奴らは寝てて、大井と叢雲が見回りに……あ……。

ま、まさかね？そんなはずはないよな？

横見ればほら、気のせ……

お湯に浸かって顔を真っ赤にした大井つちがいた。

「え……ちよつ、なん、なんで相良、君がここに…？」

突然の事で大川真井（おおかわまい）さんに戻ってるよ大井つ

ち。うん、俺もね、あまりのことで頭が真っ白になっててね。俺、今多分IQ2位しかない。

「ちよつと大井く？何騒いでるの…よ…。」

湯けむりの向こう側から叢雲の声。ジャバジャバと歩く音と共に……

目と目が逢うく瞬間、君が無の感情だと気づいたく

てかあれなのね、大事な所は謎の煙や光で見えないって本当だったんだ……!!

叢雲は一瞬訳分からないという顔になったが頭の良い叢雲さんだ。状況を理解してしまった彼女はみるみるうちに顔が真っ赤になっていく。

「……どうしてアンタがここに居るのかしら……？」

「……入口に鍵を掛けておいたのにそれでもお風呂に侵入してくるなんて……。」

怒りと困惑と恥ずかしさで声が震えているお二人。

俺も震えているぜ、恐怖でな。

おいおいおい、死んだわ俺。

でも鍵なんて掛かってなかったような……？

まあ待て、落ち着け、戦場では焦った奴から死んでいく。ここはお馴染みの娘を連れ去られた男を宥めて話し合いをしようとする彼のように行こうじゃないか。

「まあ落ち着け、そんなに殺気を突きつけられたんじや、ビビって話もできやしねえ。この先どうなるかはあんた次第だ。オーケイ？」

「馬鹿な事してないでさっさと出て行きなさい!!このド変態!!!」

「ぐわあ〜!!!」

話し合いは失敗、飛んできた桶やら椅子が俺を襲う。

慌てて俺は露天風呂から飛び出した。

最後に眉間にクリーンヒットした石鹼がなかなか痛かったぜ。

この騒ぎにより部屋で寝ていた連中も目を覚ましたようでぞろぞろと脱衣場の入口まで来ていた。

一部、事情を察した奴らがニマニマしてた。  
はっ倒すぞ。

「そういや、大井が鍵を掛けてたって言ってたよな？  
でも鍵なんて……。」

ひとまず部屋まで戻り、そこにいた家具職人妖精さんに事情を説明し、ついてきてもらった。

脱衣場に戻ってくると叢雲と大井も出てきており、こちらを睨みつけていた。

「まあ待ってくれ、ひとまず謝らせてくれ。本当にすまん。」

「馬鹿だ馬鹿だとは思っていたけどまさか、覗くどころか堂々と入ってくるとは……とんだド変態ね。鍵も掛けておいたのに。」

「それなんだけどな、俺が来た時鍵なんて掛かってなかったと思うんだよ。」

「……？そんなはずないでしょう。私が確かに鍵を掛けて置いたはずですよ！」

「……妖精さん、どうよそれ？」

妖精さんには先に扉の様子を見てもらってどうだったか確かめてもらっていた。

「あーこれですね。鍵の取り付け位置が悪かったのか開けようとした瞬間に金具が曲がってしまったようです。提督さんが開けようとした時にガタガタしてたのは曲がった金具が隣の扉に当たったのが原因ですね。」

「だから本当に故意ではないんだ。ただ温泉があるの思い出して朝風呂しようと思ったらこんな事になってしまったのが事の顛末で……本当にすまない！」

「これは我々家具職人の責任です、大井さん、北上さん大変ご迷惑をお掛けしました。」

妖精さんと一緒に頭を下げる。

この状況、誠心誠意謝るしか生き残る術はないからな。

1歩間違えれば、憲兵に突き出されて豚箱行きだ。

頼む叢雲、大井!!

「……まあ今回は妖精さんに免じて許したくないけど許してあげるわ。鍵が壊れてたつて言うのもこれで分かったし、事故つてことで。」

「叢雲さんの言う通り今回は妖精さんに免じて私も許しますけど、次は骨という骨を折りますね。」

ひえ。おつかねえおつかねえ、オラまだ死にたくねえだ。

「でもまたこれで貸しが増えていくわねアンタ…さあて今度は何させようかしらねえ……?」

「私もやっぱり提督に何かしてもらわないと気が済みませんね、北上さんと買い物行く時に荷物持ちでもしてもらおうかしら?」

うぐうぐう!!!これだよこれ、コイツらの恐ろしいところ。ただでさえ学生から社会人に片足突っ込んだような状態の俺だぜ?

このペースだと暫く休日サービスしなくてはならないかもしれない。

「あー!!大井さんと叢雲だけずるいっぽい!!それなら夕立も時雨とこーちゃんで購入物行くっぽい!!」

おい待て!夕立も!休日3日は消えた……。

「大丈夫ですよ提督さん。」

お前はっ!?5人組妖精さんの2人目の妖精さん!!大丈夫とはどういうことだ!?

「安心してください。海軍は福利厚生もしっかりしてますから有給前倒しも出来ますグツ」

何が大丈夫だよ!!それ俺の次の有給がどんどん引かれていくシステムだから!!!ドヤ顔でサムズアップしてんじゃねえ!!名案でもなんでもないから!!

「夕立が誘ってくれるなら僕もお言葉に甘えて行こうかな?あ、提督、これは僕の『お願い』じゃなくて夕立のお願いだからさ。」



時雨のよろしく足元見やがって……。  
それが歓迎会のお願いで済むなら喜んで連れてってやったのに  
よ……。

「あら？。でしたら私も提督とお出かけしても問題ありませんよね  
？」

「淀姉さんまで勘弁してくれよ…俺もうクタクタだからさ  
………はっ？」

待つて、おかしいぞ？居なかつたはずの人がここにいる……。俺  
はまだ寝ぼけていた可能性がある……。

もう一度布団に入つてててて痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛痛  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いアッアッアッアッア  
ッ………！！！！

「ごうちちゃん？！勿論ごうちちゃんも私も寝ぼけていませんよ？こうし  
てお互い目と目が合つてるじゃないですか……？」

ああ懐かしの淀姉さんお得意のアイアンクロ。そしてお目目  
がとても笑つてなくて素敵すぎますね。

技はいつにも増してキレツキレですね。

「さて、事情は大体把握しました。」

いや待つてくれ、俺は把握出来てない。事態が飲み込めない俺を  
置いていかないでくれ。

「とりあえず今朝のこの騒ぎは叢雲さんと大井さんが許したとい  
う事で一先ず置いておきます。さてごうちちゃん、色々言うことはあり  
ますが……昨日脱走しようと思いましたね……？」

「知りません。」

「嘘はいけませんよ？まずここにいる方々に聞けば脱走しようと  
してた事の話は聞けますから。」

「分からないでしょ、みんなで口裏合わせてるかもしれないじゃ  
んか。映像でもなければ証拠にならないよ。」

「ひどーい」や「やめとけばいいものを……」など反応は様々だ。お  
前の命は今保証されてるけど俺は保証されてないんだ。お前らもこ  
の立場になればこうしてるさ。

「映像があればよろしいのですね？わかりました。では提督、そちらのテレビをご覧ください。」

は？なんで？映像があるの？

あ、俺だわ、ロープが足に絡まって……

『おい、みんなくかかったよ。』

『全く、アンタってやつは油断も隙も無いわね……。』

『クッソ!!解ける!!俺は自由な生活をするんだ!!淀姉さんやお前らに自由を奪われてたまるか!!ヤメローヤメロー!!』

そうしてズルズルと部屋に引き戻されていく俺の映像が公開された。

『あ、青葉……見ちゃいました!』

「という訳で青葉さん衣笠さんからの提供でした。」

はい拍手〜!……つてふぎっけんなワレアオバ!!!なんで見てたらなら助けてくれねえんだよ!!というかなんてもん撮影してくれてんだ!!

「……これで気は済みましたか提督？言質も証拠もバツチリですよ？」

……冷や汗がダラダラと垂れてくる。記憶ないんですが……一体、俺が何をしたって言うんだ……。ああ、淀姉さんにまた説教される……。

「提督さん、私は悲しいです。来て早々脱走だなんて……私は提督がこの鎮守府に来てくれたあまりの嬉しさに提督のお家をリニューアルしましたのに……早速脱走だなんて……」

淀姉さんが悲しそうな顔で俺の横を行ったり来たりする。

まるで冬眠出来なかつた熊と鉢合わせてしまった気分だ……。

「さて、提督さん。脱走未遂について、何か申し開きはございますか……？」

淀姉さんからの尋問が幕を開ける事になろうとは……。

苦し紛れの言い訳かもしれないが割とそうなんです記憶曖昧な

んです。俺もよく分からないんです！

「い、いや、昨日めっちゃ飲まされてて酔っててよく分からないんですが……。」

「でも心の中にはそういう気持ちがあるって事ですよね？」

着々と追い詰められてる気がする。なんか罰があるよ今回やっぱやべえ世界だわ海軍。

「さて、こうちゃん」

「はい。」

「とりあえず壁に手をつけてください。」

その棒は何ですかね？

「デデーン」

「相良、アウトー」

「精神注入ー」

やかましいわこのゲス妖精さんがああー！！！！

「こうちゃん、早くしてください。」

「分かりました受けます、ただ一つだけ聞いてください！」

「なんですか？」

「あのさつきから嘸し立ててる妖精さん達を1発叩いてください！」

これには流石の妖精さん達も動揺したのか慌て出す。

「なんで我々まで！」

「提督さん潔く気を付けしてくださいー！」

「うるせー！！お前から裏でコソコソやってただろうが！！じゃなかったら海軍精神注入棒の刑なんてならんやろが！！」

本気で尻が四つに割れる危機を感じた時、淀姉さんの殺気が消えた。

「……はあ、流石に冗談ですよ。昔の海軍じゃないんですからしませんって。」

ほんとに恐ろしい方だわ恵さん。貴女が言うとう冗談に聞こえないんですから……。

「本気で精神注入されるかと思いましたわ……。」

ホッと胸をなで下ろした俺。

「だからこうちゃん、私にこんな事させない下さいね？」

……………全身からぶわっと嫌な汗が吹き出てきた。

淀姉さん怒らせるべからず……………。

「では、改めまして……………提督、軽巡大淀、戦列に加わりました。艦

隊指揮、運営はどうぞお任せください！」

……………やっぱり早く逃げようこの鎮守府。

## 就活戦争13日目

執務室の椅子に腰掛け俺は溜息を一つ吐く。

俺がこの舞鶴第2鎮守府で提督を始めてから、かれこれ一週間で過ぎた。そして、また新たな一週間が始まるわけである。

ん？その一週間で何か無かったのか、むしろないわけが無いって？いや、特になんもなかったよ？俺が命を賭してまた脱走しようとしてバレて奴らに捕まって淀姉さんに説教されるってのを何日か繰り返したぐらいかなあ……？

そのお陰でもう正座はお手の物。坊さんと一緒に念仏唱えるのも可能だろうと思う。……それは少し盛ったから聞き流してくれ。

そしてあるじゃねーかとか言うのは無しだ。これは無かった事にしてた方が良く、知らないほうが幸せってこともあるのよお互いにな。……まあそんなに聞きたかったら、俺の気が向いたらまとめて話すかもしれないし、そんなときにでもな。

あ、そうそう、後淀姉さんからデイリー任務つてのを与えられたからそれをやったりもしたな。これをクリアすると大本営から燃料や弾薬、鋼材やボーキサイトなどの資源を提供してもらえるんだ。ありがてえありがてえ。

装備の開発、整理とか出撃とか遠征ね。結構大変だったよ？いろんな意味でも。

装備開発したら明石が「提督さくん？もしよろしければ、成功報酬に研究室の鍵を……ダメ？」とき。一週間は我慢しろって言ったらまた大騒ぎよ。ああ、こういう時はスルーが一番だ。

因みに今日が研究室とやらの鍵を返す日なんだけどなんか気が進まない。理由としては鍵を返したら絶対明希姉が何かやらから。

それはさておき、とりあえずこの鎮守府にいる艦娘の戦力を知る為にも交代で近海を哨戒してはぐれ深海棲艦と戦ってもらったけど元々いたヤツらは40〜70ぐらいと練度高めだし、今年来た奴らでも俺よりひと月前から戦闘してるから練度で言うなら全体的に約3

0ぐらいはある。

中でも強かったのは一航戦の赤城・加賀の2人、ゴ級戦艦の長門、火遊び厳禁の陸奥辺りも強かった。ただ資源の食い方がえげつないので暫く貴女達の出撃はなさそうです。

鎮守府近海程度なら基本大丈夫だったな。

まあ何人か小破したり、扶桑・山城が偶に中破してきたりする事もあったけどその程度だ。

……もつと2人の心配しろって？してさそりや、唐突にドラム缶が降ってきたり、駆逐艦達がボールで遊んでたら後頭部に直撃したり、出撃以外にも損傷したりする事もまあまあある事だとしても、心配しかないわ。

誰か良いパワースポット教えてくれない？もう可哀想なんだよアイツら……戦力として強さを発揮するにも不幸がそうさせてくれないなんて……。

「……お前も幸運艦って呼ばれてるならあの二人何とかしてやってくれよ。同じ西村艦隊だろ？」

「そりゃ僕だって何とかしたいさ、でも難しいからこうなってるんだ。」

因みに今日から秘書艦は時雨が担当している。叢雲は今日遠征に行った。秘書艦は一週間交代でローテーションしてやるらしい。だからいつもいる奴らが秘書艦じゃ無ければ脱走の機会も……いや、淀姉さんの事だ。何かしら対策してるに違いない。けどそこをどうにかするのが俺って訳よ。

「まあそりやそうか、でも何とかしてやりたいよなあ……？」

「……可能性があるとすれば幸運艦の中でも幸運と言われる雪風適性のある娘がここの鎮守府に来てくれたらねえ……。」

雪風かあ……。あのレア適性をお持ちの方はそうそう見つからないと思うしなあ……。

「もし、雪風が来てくれたら時雨、瑞鶴、雪風プラス軽巡辺りの誰かと扶桑・山城で出撃させよう……。」

きつとあの二人も幸運の女神のキスを感じてくれるだろう。

「とりあえず提督、取らぬ狸の皮算用もいいけど今日の任務と書類を片付けないとまた大淀さんにシバかれるよ？はいこれ、提督の承認印が必要な書類。」

そいつは勘弁願いてえな、あの人と仕事するにはモリオブラザーズ並に命のストック無いとやっていけんわほんと。IUPキノコそこらに群生してないかな？

件の淀姉さんは今叢雲と一緒に遠征に行っている。昼頃には帰ってくるけど心に余裕があるって良いなあ！

時雨から渡された書類に判子をポンポン押していく。

なにに？休暇申請届？飛龍と蒼龍か。理由が『明日街に買い物行ってきま〜す！もし良かったら、提督も来てくれたっていいのよ？』って友達とのLIEか。休暇申請届なんだからもうちょいまともに書けやアイツら……。

まあもう印鑑押しちゃったから今更だけど。

てか俺も休みたいわ。提督めっちゃ忙しいんだけど、俺の休みたい取れんの？いや休みはあるんだけど俺の自由時間を下さい。ここ最近の休みは奴らの買い物やらお出かけやらに付き合わされてるかなあ……。

ああ俺はとんでもないブラック企業に就職しちゃったもんだぜ。

えー次のお便りは舞鶴第2鎮守府にお住まいのR・N『恋するウサギ』ちゃん……ってミュージック・アワーじゃないんだよ。この番組ではみんなのリクエストをお待ちしてないからな。あ、でも良い脱出案があつたらいつでも教えてくれな？

茶番はさておき、今度はなんだ？……間宮と伊良湖からか、えーと……今回の歓迎会で食糧の備蓄を結構使ってしまったから次の食糧の補給量を増やして欲しいとね、オーケーオーケー。

歓迎会やってもらった身だからね、予算多めに当てとこう。というかじゃなかったとしても間宮ご飯のためなら予算多めにするわ。

赤城、加賀辺りからすればこれこそ生命線だろうし、やっぱご飯は大事。まあアイツらの食いつぶりには勘弁して欲しいとこだけだな。

はい、次はく陽炎か。えーと……娯楽室を拡張、及び設備の充実化、(例) マッサージチェア、ジュースサーバー等ねえ……すぐに拡張するのは難しいけど新しい設備とか物の一つや二つぐらいなら増やせるしな、今度アンケートでもして聞いてみるか。正直俺なら漫画喫茶みたいなエリアが欲しい。

んで、次が……工場、明石からか。んーと、新たな装備開発のために資金援助を……ってこれお前の研究室の資金だろ？今日解禁だからってこんなの出してきやがって。まともなものを作るなら予算やるのもいいんだが、いつも変な事してるからどうも胡散臭くてなあ。

後で工場に行った時に話を聞こう、この書類はそれからだな。

次は購買部の注文表と領収書？へえ、ここ購買部なんてあつたんだ。てなると間宮か伊良湖辺りを取り仕切ってるのかな？なら大丈夫だろう！印鑑ポン！

NEXT！えーと、日向ね。みんなに瑞雲の良さを知ってもらおう為に演説会を行いたいで許可を……うーん

なんて言うかその……ついに瑞雲教本格的な布教に入ったのね。まあ大事にならない程度に済ませてくれるならいいか。……食べりゆ教は無いやね？

んーと、次は瑞鳳。言ったそばから食べりゆ教来たよ。

みんなに美味しい卵焼きの作り方を教えたいので卵焼き教室の許可を。

まあ卵焼きなら問題ないだろう。食べりゆ教をNOにするなら瑞雲教とかもつとヤバイしな。

てか皆、要望多いな。ストレス溜まってる？まだまだあるよ？

もつと休みが欲しいでち！とか執務室にBAR作ろうぜえ！とかもつとマシな指揮が取れるように頑張りなさいクソ提督！どんな采配してんのよ！クズ司令官！もつと頑張りなさい！なんでこんな部隊に配属されたのかしら？見限られたくなかったら努力しなさい司令官。

……後半最早暴言じゃん、もうこの3人名前見なくても分かる



よ。……いや待て、さり気なく頑張れるな事言ってるあたりこれはツンデレメツセージと解釈してもいいはずだ！はっはっはっ!!……んなわけあるかいな、さっさと書類終わらせよう……。

書類を終わらせて、時間は11時

「……書類も片付いたし、そろそろ工場に行って今日のデイリー任務片付けるか。時雨、あと何が残ってたっけ？」

時雨は淀姉さんから預かっているファイルを開き中を確認していく。

「えーと、今日は……後は工場で装備の開発して、明日の出撃と遠征の編成を考えて発表ぐらいかな。」

今日は楽だな。出撃が無いのもここの一週間ローテーションで出撃繰り返してたしな。休憩ってことだろう。

「どうする？楽といえどもこのふたつをやったら昼過ぎになるけど、今のうちに昼食べておくか？それとも終わらせてから昼飯食べる？」

そう提案してみると時雨は「んー」と少し考えていたが

「先にやってみようか、今日の午後ぐらいゆっくりしよう。先に編成考えて、その次に工廠、その足で食堂でお昼を食べようよ提督。」

と結論を出した。

まあ折角楽な日なんだから早く終わらせて自由時間を作った方が堅実だな。

(提督と2人でお昼♪♪提督と2人でお昼♪♪)

なんかコイツご機嫌だな、まあ休みになるってわかったらウキウキするもんか。実際俺も嬉しい。何すっかなー。

時雨と話し合った結果、出撃の編成は燃費の良い水雷戦隊で行くことにした。

第一艦隊の旗艦……球磨にしておこう。後は時雨が調子が良いと思う面子で吹雪、不知火、夕立、霞、漣。鎮守府近海のいるはぐれ深海棲艦の掃討作戦だ。そろそろいなくなると思うけど。

第二艦隊からは遠征組で天龍と龍田の2人と暁、響、雷、電の天龍

幼稚園のみんなに行かせよう。そして今回の旗艦は龍田に任せようという事で話がまとまった。

第三艦隊は最近一番にしろうるさい白露を旗艦に村雨、朝潮、満潮の4人に行ってもらおう事にした。

第四艦隊は今回無しで。資源節約と休みを取らせないと大変だからな。

明日の編成は緊急の何かがない限りこれで決定と……

ああー工廠かあーこの鍵、明希姉に返したくねえなあ……。絶対口くでもないもの作るってアイツ。

まあでも約束は約束なんで机から研究室とやらの鍵を取り出し、ポケットに入れると時雨と共に工廠へと向かった。

「らっしやいーらっしやいー安いよ安いよ!!」

……俺は工廠に来たはずんだけどさ、なんか明希姉が店やってるんですけど。なんでそんな商店街の八百屋魚屋みたいなノリなの？

「時雨、あれ何よ？明石ついにとち狂った？」

「ん？明石さんの……ああ、そっか提督は初めてだったね。説明するよ、あれは明石さんが切り盛りしてる購買部さ。一週間に何度か店が開かれてて、そこでは色んな物が買える、言わばコンビニみたいなものさ。」

「へえー、アイツこんな事もしてたのか……。」

「というか明希姉が購買部やってたのか……。」

「外出許可が無いと外に出られない僕らからすると本当にありがたい場所だよ。明石さんに頼めば大体のものは仕入れてきてくれるからさ。」

「そりや、なかなか便利なもんだな。それなら俺も明石になんか頼んどこうかな……?」

「お?こうちちゃん、時雨ちゃん、いらっしやくい!何かご入用で?」

「いや、様子を見に来ただけなんだ。……と言うより、明希姉がま

ともに働いてるのに驚いたよ。」

「失敬な!! 私だつてちゃんとやってるんだからね〜! ブーブー!」

いやだつて……あの明希姉だよ? いつつもちやらんぽらん明希姉が……いや、よく考えてみれば仕事はしてるけど態度はちやらんぽらんだわ。つて違う違うそんな事しに来たんじゃなくて開発を頼みに来たんだよ仕事モード仕事モード。

「明石、今日のデイリー任務で開発するつて任務があるからそれ頼みたいんだけど、どうすればいい?」

「お? はいはい、開発ですね〜! ちよつと店閉めるんで待つて下さいね〜!」

シャッターを閉め、『すぐ戻ります』の貼り紙を貼つて明石が店から出てきた。

「お待ちせしました〜! とその前に!!……提督例のアレは勿論お持ちですよね?」

例のアレとか危ない物みたいですと言いますねえ明石さん、ただの鍵をなんですけど。

「はいはい、鍵ね鍵。ほら、あるよ。」

「んもー! もうちよつと乗つてくれてもいいじゃないですかあ〜!!……まあいいです、で今日は何狙いですか? 今ならレベル高めでも行けちゃいますよ! 流星ですか? 彩雲ですか? それともわ・た「今日は対潜の為にソナーと爆雷投射機を4個ずつほど欲しいんだ、頼んだぞ。」……最後まで言わせてくれてもいいじゃないですか。」

ため息交じりに作業に取り掛かる明石に質問してみた。

「なあ明石、あの購買部つてのはお前の発案で始めたのか?」

「いや、私じゃないです。もつと前からあったらしいですね。因みに他の鎮守府の明石適性の娘達もやってますよ。夕張と明石がどっちもいる鎮守府は毎日購買部やってる所もあるらしいですけど、ウチは私だけなんで流石に毎日出来ませんけど……。けどまあそれでも『ありがとう』と言つてくれる皆さんがいますからね、あそこは大変だけど頑張ろうつて気持ちになれる場所なんですよ。」

明希姉……。明希姉の口からこんな真面目な言葉が出てくるとは思わなかったな……。まだまだちゃんぽらんだけど、根は真面目なんだよな。

「……ホイ完成つとー！じゃあ九四式爆雷投射機が4つと九三式水中聴音機4つですな！確認してください！」

「……んー確かに確認した。ご苦労さん明石。」

「えへへ……提督では鍵を……。」

そういや、コイツどうやって物を仕入れているんだろうか？鍵を取り出しがてら明石に聞いてみた。

「なあ明石、購買部では注文を受けたものを取り寄せてるんだよな？どうやって取り寄せるんだ？そのルートは？」

「企業秘密で……待って待って！！鍵をポケットに戻さないで！！もうお茶目な冗談なのに……。」

「それで？結局どうやってるんだ？」

「簡単ですよ、Amazonです。」

……Amazon？え？いいの？海軍がAmazon使ってる。

「嘘です。」

1 発殴った。

「酷いですよ！乙女の頭を殴るなんて！」

「次下手な事言ったら1ヶ月鍵預かるからな。」

「すいませんしたツ!!!」

変わり身の早さに時雨も苦笑いしてた。

「じゃあちよつとお店の方来てください。そっちの方がわかりやすいと思います。」

明石に連れられて先程の購買部へと戻ってきた。

「じゃどうぞ中に入ってください。」

「僕も入っていいのかい？」

「まあ秘密ってほど秘密でもないんでどうぞどうぞ。多分知っている人は知ってますから。」

時雨と購買部の中に入ってみると売り場の奥にも部屋がありそ

ここには「パソコン…?」

「そうですね、このサービス、実は海軍の大本営がやってるんですよ。」

聞いてみると前に、艦娘達が通販で買い物するようになり鎮守府に宅配トラックが一時間おきに来ると言う状況があったそうだ。

流星に海軍としても情報漏洩や爆破テロの可能性もあるかもしれない、最初ネット通販の禁止をしようとしたが艦娘達の反対もあり、それで始まったのが明石の購買部ということらしい。

外部のネット通販は禁止になったが代わりに海軍内で通販出来るようにしたのだった。何か欲しいものがある時は明石に頼み、何日か後にまとめて軍の輸送トラックで運んでくるという仕組みだ。

「ほーなるほどね。ほら、じゃあ約束の鍵だ。その研究室とやらで問題起こしたらすぐに鍵没収するからな。」

「ひゃっほーい!!!愛しの研究室!!!勿論勿論!!!この私が問題起こす訳ありませんから!!!提督ありがとうございます!!!まーす!!!」

明石はダツシユで工廠奥へと引っ込んで行った。

時雨は「明石さんらしいね。」と笑っていたが

いや、購買部完全に営業終わってから行けやと思っていた。

「あら、提督こちらにいらしたのですね。」

「お、淀姉さん、遠征お疲れ様。予定より早かったね?どうだった遠征?」

「大淀さん、お疲れ様。」

「ありがとうございます時雨ちゃん。勿論成功ですよ。今日は天気も良く、波も穏やかでしたので早く帰ってくれました。獲得資源は後で報告書作成しますのでこちらに目を通して下さい。」

「ありがとうございます、休んでからでいいからね……ところで淀姉さんさあ、明希姉の研究室入った事ある?」

淀姉さんはその言葉を聞くと怪訝そうな顔をした。

「明希の研究室……ですか?いえ、無いですね。私もこうちゃんが知つての通りここに来て一週間経ってませんから。明希ったらまた変なことしてるんじゃないでしょうね……。」

「一週間前俺が来た時、色々あってその研究室の鍵没収したのよ。で今日その鍵を返したんだけど結局俺もアイツが研究室何してるか知らないしき。というか明希姉のヤツ購買部の営業放置してるし。」

淀姉さんは呆れたと言わんばかりに溜息を吐いた。

「連れ戻すついでに中の様子も見ていきましよう。明希の事だからとんでもない事をしてても不思議じゃないですからね。」

こうして俺達3人は明石の研究室に突入して行った。

そこで待ち受けていたのは……

「うへへ〜！ようやく研究室が返ってきたわ！全くこうちゃんもこうちゃんよねー、鍵取り上げて倉庫の掃除しろって？倉庫なんてどうせまた散らかっていくんだからさ〜。お！これこれ〜プラズマレールガン！誰か使ってみてくれないかな〜？伊勢さんや日向さんの刀、放電する日本刀とかカツコイイと思うんだけど！！いつか波動砲とかも作ってみたいしなあ〜！色んな想像が膨らむ流石愛しの研究室！！」

……………。

多分俺と淀姉さんと時雨は同じ考えだったと思う。

このマッドサイエンティストが！！

前にも言ったと思うんだけど、給糧科は安全だけど整備科にはマッドなやつが偶にいるって言ったでしよ？

明希姉みたいにやばいものを作り出すやつがいるんだよ。いつかガスグレネードとかまで作り出しそう。

お前はOPEXのドーステイックかよ。

横を見れば……ヒエツ！！

修羅と化した淀姉さんがいた。

「明希い〜？貴女、購買部をすっぽかしてまで何してるのかしらあ〜？それと……この規格外の装備は何かしらねえ……？」

「よ、淀？！なんでここにどうか今遠征のはずじゃ！！」

「予定より早く終わったんですよ。それよりもこの装備はどうやって作ったのかしら？まさか私達が汗水流して回収してきた資材を使つてたりしませんよねえ……？」

「そ、そんなまさかあ……へへ、えへへ……こうちゃん助けて!!淀にシバかれる!!」

「……いや、無理だ。擁護出来るような要素が何一つないんだわ。それと、倉庫はどうせ散らかるから掃除の意味なんて無いって……どういう事かな明希姉さん?」

俺が助けてくれないと悟った明希姉は時雨にすがりついた。

「し、時雨ちゃん!!時雨ちゃんは私の事信じてくれるよね!?ほら!私の間宮券あげるからさ!ねっ!?!」

しかし時雨はフイツと工廠の外に顔を向け……

「……雨は、いつか止むさ。」

「今日 日 雨 な ん て 降 っ て な …… い や あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ ……!!!」

こうして工作艦明石は淀姉さんからこつてり絞られ!!首から『反省中』というプラカードを下げ購買部横で正座させられていた。お昼は間宮に頼んで持ってきてもらい、その間購買部は淀姉さんと俺と時雨で営業した。

因みに明石愛しの研究室はまた一週間使用禁止になったとき。

## 就活戦争14日目

目覚まし時計がセットした定刻通りに鳴り出した。

只今の時刻、朝5時。寝惚け眼を擦りながら布団からムクリと起き上がる。本日は日曜日、しかしそんな事は関係ない。どんなに粘っても1時間以内に叢雲辺りが怒鳴り込んでくるに決まってる。

いや、まだ叢雲ならいい方かもしれない。もし、淀姉さんが来ようものなら俺の布団の上はプロレスのリングへと早変わりだ。因みに一切の抵抗も許されない、というか抵抗しようにも身動き一つ取れずに関節技を決められる。

提督になって1ヶ月が経った。1ヶ月経った訳なのだがどういう事か未だ休みらしい休みが無い。正確には休みはあるんだけど俺の心が休まらない。

休めるかなと思うと誰かしらが俺の部屋にやって来るので1人で自由な時間を過ごせない。

先週の日曜日は午後から半休だったものを我が姉である明希姉こと明石が盛大にやらかしてくれたのでその半休すら失われた。

そんな明石さんですが次の日に有給使って隼鷹や球磨達何人と共に街でパ一つとやってきたらしい。皆さんご想像の通りべろんべろんになって帰ってきた。

マジでなんなのコイツら……って思ったねあの時は。

主犯である明石に説教しようかとも思ったが、酔っ払い共に説教しても馬の耳に念仏、逆にダル絡みされる事が予想出来たので諦めてさっさと部屋に帰らせた。

道中明石がやたら絡んできたけど全て、「はいはい……」と聞き流した。

結局のところ……『いいなー!!俺もパ一つとしたいなー!!』つてのが本音だ。折角、職場が京都にあるんだ。京都の風情ある町並みで神社やお寺、美味しい食べ物や気になる脇道、綺麗な舞妓さんなんかを見て、居酒屋なんかでお酒飲んで気分よく前に住んでたアパートに帰りた。まあ京都駅までここからだと電車で2時間ぐら



いかかるんだけどな。もし今日休みだったとしたら疲れてるから天橋立とかが良い。隣駅だし。

同じ京都でも東京から新幹線乗るのと時間的には大して変わらないのだ。むしろ新幹線の方が早いかもしれない。

まあそれでも鎮守府内じゃないし、監視の目も緩まるだろう。艦娘達に行き先を伝えずにササツと行ってそのままおさらばだ。

……その作戦の大前提として休みの獲得が必須なんですがね。

兎にも角にも眠いしダルい。……正直、俺すんごい頑張ったと思うんだこの1ヶ月。今日ぐらい休んだっていいじゃないか……。愛しのお布団、どうして君は僕を離してくれないんだい？でも本当は僕も君ともっともつと一緒にいたいんだ!!でも魔王が迫ってくるんだ!

「ちよつとアンタ〜!いつまで寝てるのよ!入るわよ〜!」

ほら、魔王襲来だ。でもなんか雰囲気違うな……。魔王って言うより朝起こしに来たオカンって感じ。

玄関の開く音と共に足音が1つ。

「やっぱりまた寝てるじゃない……。ほら、早く布団から出なさいよ、時間は有限なんだから!」

俺はその声が聞こえるや否や、布団を頭から被り、芋虫に変化した。

「……叢雲おく、俺はもう疲れたんだ。昨日遅かったし今日は休ましてもらおうぞ!仕事はしない!!もうお布団と結婚する!!」

「……は?何言ってるのよ、アンタ今日休みじゃない。」

……?

ちよつと何言ってたかよく分からなかったなあ。

「叢雲さん、今なんて言った……。?」

恐らく俺の顔は今、相当アホ面だろう。しかしそんな事よりも重要なワードが叢雲から聞こえたぞ!!

「だから、アンタは今日休みでしょうが!!」

「……休み?」

「休み。」

「Holiday?」

「Yes, Holiday.」

「……………よっしやああああーっっっっ!!! 休みだぞおおおーっっっ!!!」

夢にも見た休みが今現実……………!!!

……………ん?でもなんで急に休みに?

「アンタは今日は休みつて……………昨日大淀さんから言われたんじゃないの?」

昨日、昨日……………執務室で時雨と仕事して、昼に食堂で間宮ランチしてまた執務室で書類にはんこポンポンしてる途中で眠気が襲ってきてうたた寝したら淀姉さんも襲ってきて……………ああ、チョークスリーパー決められてもう一度眠りについた気がする。うたた寝してた辺り、その辺で言われてたのかもしれない。

うたた寝してた俺も悪いけどチョークスリーパーでトドメを刺した淀姉さんにも非はあると思うんだよ、え?ない?……………そつすか。

まあ、それはそれとしても……………

「休みは休みじゃああああーっ!!!俺は寝るぞ、叢雲おおおくく!!!」

背景にドドドド!!とかゴゴゴゴ!!とか擬音が付いてる石仮面の某アニメみたいな喋り方で布団に潜り直す俺。

休みじゃ休みじゃ!!二度寝できるという幸せ!!5時起きどころか昼ぐらいまで寝たつていいわけじゃん!!だつて休みだもん!!

「何言つてんのよ、とつとと起きなさい。アンタは私に借りがあるでしょうが。今日はその借りを返しなさい。私も今日休みだからこれから出かけるわよ。」

沈黙が部屋を包んだ。実際俺の顔は今絶望の顔だろう。

「……………いや、待つてくれ叢雲!今日は、今日だけは勘弁してくれ!!頼むから今日だけは休ませてくれ!!」

脱出の失敗、増え続ける仕事、淀姉さんからの説教で心身ともにもうヘトヘトだ。

借りは返さなければ行けないが今日は辛すぎる。

「次いつ休みが被るかなんて分からないんだから今日以外機会はないでしょうが!!文句言わずにさっさと起きる!!」

抵抗も虚しく叢雲に布団を剥ぎ取られてしまう。これが夏なら大したことないのだが、4月の朝はまだまだ冷えるのだ。

ぬくぬくと温かったお布団を奪われ、部屋の冷えた空気が俺を一気に冷やしていく。

「だあああああー……わーっただよ!!!行けばいいんだろ行けば!!!」

「うむ、宜しい。」と叢雲は満足げに頷いていた。

くっそおおおくく!!!休みってなんだよ!?これじゃあいつも通り休日返上じゃねーか!!!

着替えると言って叢雲を追い出したが「アンタ寝直す気満々だから、5分経つても出てこなかったら大淀さんに報告して休み取り消してもらおうから」と俺の考えてる事がバレバレだったので諦めて着替えた。

そして着替え終わり、部屋から出ると引きずられるように叢雲に連行されるのであった。

この時俺は気がついていなかった。

「フッフッフツ……青葉、見ちゃいました!!あのお二人でお出かけですか!幸いにも今日は私もお休み!!まだまだ謎が多い司令官と普段隙のない叢雲さん!!この機会を逃す訳には行きません!!」

出歯亀精神旺盛なコイツに捕捉されていたことを。

「さてさて、この情報をどうするか……。私だけで独占するのもありますが記事的にはもう少し面白くしたいものですね!……今日のお休みは誰がいたっけなあ?白露型の子達は今日遠征かあ、司令官がお休みだから時雨ちゃん、夕立ちちゃんも同行と……他の面白そうな子達も出撃だったり遠征だったりで……あ、良い方達見つけちゃいました〜!!」

舞鶴第2鎮守府から1番近い宮津駅から特急はしだてで約2時間。時間は9時頃、俺は叢雲と共に京都までやって来ていた。

最初俺は天橋立で観光したりご飯食べたりすると思っていたのだが叢雲の要望で京都となった。買い物をするなら京都まで出てしまった方が色々あると言うことらしい。

京都に行きたいとは思っていたけど正直今日は天橋立とかでサツと観光して終わらせたかった。

烏丸口から改札を通り修学旅行以来の京都タワーが目の前に現れた。

「さて、着いた訳だが叢雲さんよ、なんか予定とか決まってるの？あ、エスコートしなさいとかは無しな？京都は中学の修学旅行以来で土地勘無いし、実質今日休みを知ったわけだし。」

「……今回は仕方ないわね。まあ、今日は私の行きたいところに行く気だったし、私は何度か来たことあるから今日は私が案内してあげるわ。でも次来る時はアンタが私の案内しなさいよね？」

「ええ、今回含めても2回しか京都言ったことないやつに案内任すのかよ？」

「なら今回色々見ておく事ね、足りないなら次までに良い観光スポットや美味しい食べ物を調べておきなさいよ？」

いつも通り俺に対して当たりは強いが口調は普段より優しくげだ。余程楽しみだったのかいつもツンツンとした表情も柔らかく、ふんすつ！と気合十分だ。

対して俺は眠そう気だるげだ。

いつものうさ耳髯装があったらブンブン動いてそうだ。

今日の叢雲はいつもの制服ではなく私服だ。茶色のテーラードジャケットに白いブラウス、黒のスカートに緑がかかった黒のタイツという組み合わせ……なかなか似合ってる。髯装も外しているのだから新鮮だ。

やっぱりインパクトというか印象強いよな？叢雲のうさ耳髯装。あれが無くなるだけでも相当イメチェンだと思う。

「何よ、ジロジロ見……アンタ、私に何か言うことは無いのかしら？」

あ？なんだよ急に？ああなるほど。

「ああ、分かった分かった。初日は色々迷惑掛けたな。今日は俺が金出すけどカードの上限額超えるまでつてのは無しにしてくれよな？」

「それもそうだけど、そうじゃなくて今日の私を見てどう……くっツ!!今日アンタには荷物持ちさせるから!!覚悟してなさい!!」

背中を思いつきりぶつ叩かれた。

「あだっ!?何すんだよ急に!」

「うっさい!!グズグズしないでとつとと歩く!!」

こうして俺は朝と同じように叢雲に腕を引かれながらズルズルと歩くのだった。

—————

「おーおー随分と仲良さげに歩いてるクマねえ。」

「いや、球磨姉さん、俺には提督が引きずられてるようにしか見えないんだが……といつかなんでこんな事に……。」

「にやー、木曾はあのもどかしい感じが分からにやいかにや？」

「まだまだクマねー。」

「それはさておきどーすんだよ？見ろよ、北上姉さんと大井姉さん達。大井姉さんは『私全然興味無いんですけど』感アピールしてる割にはめっちゃ提督達の事チラツチラ見てるし、北上姉さんは双眼鏡やらなんやらで提督達ガッツリ見てて最早不審者じみてるし……ほら、俺らの事忘れて追いかけてっちゃったよ。」

「仕方のない妹達だクマ、まあでもこの状況だったらその気持ちもわからなくはないクマ。こういう時こそお姉ちゃんが一肌脱いでやるクマ。多摩、木曾、みんなを追いかけるクマ〜!」

「にやー!」

「お、おー……。」

「木曾、全然元気ないにや！もつと声を張るにや！」

「しかもクマ、にやーと来てるのにオーとはなんだクマ。なんか掛け声あるだろクマ。」

「いや、俺、姉さん達みたいな特徴ある語尾付けないし。」

「文句が多いクマ！この際だから私が木曾の語尾を決めてやるクマ……まあ無難にキソでいいクマね、これからはくキソとかくキソソーとか言うクマよ。」

「やだよ恥ずかしい!!なんだよキツソーって!?!ポケモンのペカチユウか!!」

「愛嬌のあるいい語尾にやー。木曾良かったにやー。」

「多摩姉さんまで……こんな事だったら天龍達と残って自主トレしとけば良かった……。」

「ほら、まずは練習あるのみクマ！とりあえず『木曾だキソ!』って言うってみるクマ。」

「恥ずかしいなんて感情捨てるにや！多摩達はこの語尾に誇りを持つてるにや！それが言えないという事は多摩達の誇りを馬鹿にしてると同じにや！」

「めんどくさい姉たちだな!?俺は絶対「帰ったら青葉に木曾の恥ずかしい話を流すクマ」分かったよ!!言う!!言うから!!」

「分かればよろしいクマ。とりあえず今日はお試しクマ。1回『木曾だキソ!』って言うクマ。」

「姉さん卑怯だぞ……はあ、1回だけだからな……き、木曾だ……キソ……。」

「木曾、それは無いクマ。肝心な所が聞こえないクマね。」  
「もう一度にや。」

「1回って言ったじゃねーか!?「青葉に」だから卑怯だぞ!!」  
「木曾、おねーちゃん達もそこまで鬼じゃないクマ。」

「ついでに言うなら多摩は猫じゃないにや。」  
「結構鬼だわ。俺もついでに言うならそれは知ってる。」

「私達に聞こえるようにセリフを言えれば1発で終わるクマよ、さあ木曾、恥ずかしいと思うなら1発で決めるクマ！」

「にやー！木曾、腹から声出すにや！」

「うう……なんだってこんな事に……。」

こうして木曾の自己紹介（語尾にキソ付き）はなんだかんだで結構な回数続いた。その時の姿を青葉に撮影されてるとは木曾も思わなかつただろう。

彼女がその事を知るのは後日、青葉が鎮守府内で発行している新聞に掲載されてからだった。

後に木曾は遠い目でこう語った「姉さん達から恥ずかしい話をバラされなかったところで無意味だった……こうして俺の恥ずかしい話は新聞に載っちゃった訳だしな……。」

頑張れ木曾、負けるな木曾！今日も元気に頑張るキソ！！

「おいやめろ!!」

## 就活戦争15日目

青葉から提督と叢雲が京都まで出かけたという情報が舞い込んできたのは朝6時過ぎ。

食堂で愛しの北上さんと一緒に素敵な朝ごはんを私は食べていた。寝惚け眼の北上さんがご飯をゆっくり食べる姿はとても可愛いのだ。

すると私の隣に「失礼しま〜す!!」と朝でもやかましい事でお馴染みの青葉が座ってきた。正直鬱陶しい。私は「おはようございます。」と一言だけ言い、北上さんとの食事を再開する。

「球磨型の皆さん、今日はお休みなんです〜、実は私もなんですよ〜!〜!〜!」

無難な会話をしようとして青葉はあれやこれやと話を振ってきた。私は北上さんとの朝ごはんを楽しみたいのでハッキリ言ってお邪魔ではない、何なのかしらホント……。

面倒になった私が邪魔だと伝えようとした時、青葉から私達の目の前に、1枚のメモ用紙を滑らせてきた。

一体なんなのかと折りたたまれたメモ用紙を開いていくと……そこには一言だけ

『提督と叢雲ちゃんが2人でお出かけする。』  
とだけ書かれていた。

青葉がちらりと食堂の奥へ視線を向ける。

そこには件の提督と叢雲が朝ごはんを食べ終え、食器を片付けている所だった。

そしてこちらに目配せすると一呼吸置いて日常会話を始めた。

「実は今日の休みを使って私、『京都』まで行こうと思うんですよ! 『7時発』の特急に乗ってなんですけど、これを使えば大体9時ぐらいには京都駅に着くんですよ〜!」

それでお茶飲んで少ししたらピックカメラで新しいレンズを買おうと思ってるんですよ〜!」

青葉が所々言葉を強調して来るのには意味がある。今回は『京



都』と『7時発』というワード。

へえ〜『7時発』の特急で『京都』に……。

「……『京都』ねえ〜、偶にはアタシ達も遠出してリフレッシュするってのも良いねえ大井っち、ならアタシ達もその7時発の特急に乗ってこうか〜。」

北上さんの顔はついさっきまで寝惚け眼だったとは思えない戦闘直前の顔つきへと変わっていた。

私は提督と叢雲が出掛けることに興味など無い、本当に微塵も興味など無いが北上さんが偶には遠出しようと言うのであれば致し方ない。

「もし、向こうでお会いしたら一枚よろしいですかね？新しいレンズの被写体にお二人はピッタリですので！」

青葉がシャッターを押すポーズをする。

あまり撮っては欲しくないのだが、北上さんとのツーショットなら旅の記念にもなる。……

「アタシは構わないよ〜。」

「あまり撮って欲しくはありませんけど、出来ればツーショットでお願いしますね〜！」

と私は北上さんとのツーショットをアピールしておく。

「ありがとうございます！ではでは、私もそろそろ準備しないとイケないのでこの辺りで失礼します！今日の休暇、楽しんでくださいいね〜！」

……記者って言うのは本当に『良い性格』してるわ。まあ、今回は見逃しましょう。あくまでも、青葉は私達に観光地をオススメしてくれただけです。

あ、北上さんが食器を片付けるみたい。私達も7時の電車に乗るならそろそろ支度しなくては……。

後ろの席にいた姉妹達も話を聞いてたらしい。勘のいい姉のことだ、今の会話と視線のやり取りで察したのだろう。結局、球磨型全員で京都へ遊びに行く事となったのだった。

なんだか後ろの方が騒がしいが興奮気味の叢雲に腕を引っ張られて止まる事は叶わないので見ることは出来ない。……まあ大したことは無いだろう。この辺なら芸達者な人とかもいるはずだし。マジックとかその辺やってたと想像する。

「んで叢雲、これからの予定はどうするよ?」

グイグイと歩いていく叢雲を少しでも落ち着かせようと声を掛けてこれからの目的を聞く。

「まずは今いる南北自由通路を通ってバスロータリーまで行くわ。そこでバスの1日券を買う。そしたらそうね……デザートを食べるにしてもまだ時間が早いからどこか観光しようかしら。……アంతはどこか行きたい所とかある?」

聞かれても京都でピンと来る場所は限られてるからなあ……他にどんな所があったっけな?

「んーそうだなあ……。マップ的な所ない?そこ見て決めようぜ。」

「ん、分かったわ。」

叢雲の案内でバスロータリーまで出てきた俺らは券売機横の全体マップを確認する。

懐かしいな、中学の修学旅行で京都を訪れた時今でも覚えてるのは金閣寺と清水寺ぐらいだが。

「じゃあ、どうするのよ?」

「うーん、どーすっかな……。」

俺らが行き先で悩んでるとおじさんが声を掛けてきた。

「お兄ちゃん達はどちらまで?」

どうやら観光案内の人らしい。そう言えば修学旅行の時もこんな感じの人いたな。

京都は目的地が沢山あり、それだけ行先の違うバスがあるので観

光客、特に外国人なんかはどのバスに乗ればいいのか分からなくなる。そんな観光客相手にどのバスに乗ればそこまで行けるか教えてくれるのがこのおじさんだ。

「いやあー、今どこに行こうか迷ってて……因みにどこかオススメってあります?」

分からない時は知ってる人にオススメを聞くのが1番良い。基本ハズレはないからな。……まあ偶に微妙な時もあるけど。

まあそもそも京都だしハズレは無い、さらに言えば長年観光案内してるだろうこの人なら安心だろう。

「そうだねえ、私のオススメなら伏見稲荷大社かなあ……今の時間ならまだそこまで混んで無いだろうし、あそこは時間が経つにつれてどんどん人が来るから行くなら朝方の方が良いと思うよ?」

伏見稲荷大社かあ、この京都で日本人にも外国人にも大人気の観光スポットのひとつだ。修学旅行でも行けなかったし、行ってみるか。

「あら、良いんじゃない伏見稲荷大社。1回行ったけどなかなか良いところよ。」

叢雲とも意見が一致したので目的地は伏見稲荷大社で確定した。

「ありがとうございます、因みに伏見稲荷大社行きのバスはどこから……」

「伏見稲荷大社でしたらここからぐるっと奥まで行ってC4のバス停まで行ってください。そこから伏見稲荷大社行きの急行105か南5番のバスに乗ったら稲荷大社前で降りてください。後は道なりに行けば伏見稲荷大社まで着きますので。」

えーととりあえずC4のバス停まで行って105か南5番のバスに乗ったら稲荷大社前ねオーケーオーケー

「何から何までありがとうございます、助かりました。」

「いえいえ、これが仕事ですから!あ、そうそう、お二人はバスの一日乗車券お使いになられます?」

「ええ、使う予定よ?」

「では、1つお得な情報を教えておきましょう。すぐ隣の券売機、凄いいんでるでしょう？これを待つのは結構しんどいですよね。」

右を見れば俺らと同じように多くの観光客がバスの一日乗車券を買おうと券売機は長蛇の列だ。確かにこれを待つと考えると憂鬱だ。

「この話を知ってる人はこの列には並ばないですよ。このまま伏見稲荷大社行きバス停の方まで行ってみてください。……実は向こうにも券売機があるんです。」

「え!?それ本当!?私、前来た時この列並んだわ:。」

「これからは向こうで買った方が早いという事を覚えているとお得ですよ。待っても2組程度ですから。おっと失礼、向こうで外人さんが困ってるみたいだ。」

「あ、どうぞどうぞ。俺達はもう分かりましたから。」

本当にありがとうございませう、お仕事頑張ってください!」

「おおきに、今の時期は桜も綺麗だから色々見てデート楽しんできてくださいね〜!」

案内人のおじさんは仕事をすべく、案内板と睨めっこする外国人の元へ向かっていった。

……。

隣を見れば少し俯いて顔を赤くした叢雲がいた。

いやいやいや待って待って、俺らはここに遊びに来ただけだ。それをデートって言うんじゃないかって?」

やめろよ、俺だって今考えたら恥ずかしくなってきたんだから……。

「こっつ、これはデートなんかじゃなくてただの買い物だから!!勘違いしなツ〜!!!」

……あく、舌噛んじやったなこりや、痛そうだ。

涙目でヒーヒーしてる叢雲見てたら笑えてきた。

隣でめっちゃ焦ってる奴見ると安心してこない?今そんな感じ。

叢雲の頭をポンポンと撫でると教えて貰ったバス停まで足を進

めるのだった。

アタシ達はこうちゃんと叢雲を追ってバスロータリーまでやってきた。

「……………くつ、バスですか。」

「まあここでの移動手段のひとつと言えばバスだしねえ。……問題はどうかやってバレずにこうちゃん達をつけられるか。」

そもそもどこに行くのか、いくら私服と言えど同じバスに乗れば2人のどちらかは気がついてしまうだろう。

大井っちはさつきから黒いオーラがチラチラしてるし、

彼女がこうちゃんの事を興味無いと口では言っても実際そうでも無いことは知っている。

アタシもアタシで多分ソワソワというか少し落ち着きないだろう。

ではどうやって尾行するか……………。

「全く2人共さつきと行き過ぎだクマ！まあそもそも木曾がちゃんと声出さないのが悪いんだクマ。」

「……………やっぱり姉さん達鬼だわ。」

「木曾、何言ってるにや！多摩は鬼でも猫でも無いにや！」

うん、それはアタシも知ってる。

「それはいいクマ。大井、提督はどうしたクマ？」

おっと、このまま話を聞いてたらこうちゃんを見失ってしまう。「あんなに楽しそうに……………私だって……………いやいや！そんな事ない

わ。私には北上さんがいれば……。」

「あー……、これはだめそうクマね。」

「あー！見つけたにや!!向こうに歩いてくにや!!」

視線を向けた先にはこうちゃんと叢雲の姿があった。

歩いていく先は……

「……あのバス停は伏見稲荷大社に向かうクマね。」

伏見稲荷大社か、無難といえは無難な選択だと言える。

「行先が分かったのはいいけどどうするよ球磨姉?木曾に尾行してもらおう?」

「だからなんで俺なんだよ!!絶対バレるって!!」

焦る木曾を他所に球磨姉はフツフツと悪い笑いをする。

「木曾、そう焦るなクマ。こんなこともあるかとちやんと作戦は考えてあるクマ。」

そうして球磨姉は背負っていたカバンをゴソゴソと漁るとこの状況を打開するアイテムを引っ張り出した。

「じゃーん!那珂チャンから借りてきた変装セットクマ!サンダラスとウィッグ、それとマスクだクマ!」

「結局尾行じゃねーか!!てかそんな変装じゃいくらなんでも気がつくだろ!」

「那珂チャンを馬鹿にするなクマ!那珂チャンはな、これで幾多の街を駆け抜けて来た実績の持ち主クマ!これだけ実績のある変装なら木曾にも出来るクマ!」

「止めだ止めだ!!姉さん、俺は降りるぜ!!付き合いきれん!!」

おっ?大井つちに動きが……

「……木曾、うだうだ言っつてんじゃないわよ、やるやらないじゃないの……『やれ』。」

「……………ハイ。」

「そう、じゃあお願いね?」

大井つちの笑顔の『お願い』は本当に迫力があるなあ、まあ目が

笑ってないんだけどね。

「とりあえずこれで尾行担当は決まったにや。そしたら私達は次のバスで移動かにや？」

「いや、バスで次を待つのは得策じゃないクマ。そもそも伏見稲荷大社行きのバスはそこまで多くないクマ。」

「じゃあどうします？」

京都を移動すると手段といえば……

「電車を使うクマ。というかここから伏見稲荷大社に行くんだつたらバスより電車の方が圧倒的に早いし楽だクマ。」

バスの一日乗車券は京都市内をほぼ行けるといふ非常に便利なものだが欠点として道路は基本的に混雑してたり、

大量の観光客でバス停に長蛇の列ができ、1回では乗れない等と時間をロスすることもある。

その点、電車は短時間で目的地付近まで一気に移動出来る。まあ欠点と言えば京都の電車の料金が結構高いという事だろう。

「そうだクマ、後お前達にコレを渡しておくクマ。」

球磨姉が姉妹全員にまた新たなアイテムを手渡していく。

「これいつも使ってる無線機じゃねーか。球磨姉さんこんなものどうやって持ってきたんだよ？明石さんと倉庫番の妖精さんがいるだろう？」

腹を括ったのか木曾も真面目な顔つきだ。やるならトコトンやるって言うのが木曾のいい所だと思う。まあでも木曾の疑問は私も気になるところだ。

これはいつも作戦時に使う小型無線機。作戦時以外は無断で持ち出せないように倉庫にしまっているのだが、どうやって……。

「知らない方がいい事もあるクマ……ってカツコよく言ってみたところだが実際は多摩と一緒に明石と倉庫番妖精さんにちよつと袖の下から良いモノを渡してきただけクマ。」

「俗に言う賄賂ってやつにや！」

おいおい、ザル過ぎでしょウチの鎮守府。最早倉庫番の意味ないじゃん……。

身内のセキュリティの甘さに一抹の不安を感じながらもアタシら姉妹により変装させられた木曾を提督達が乗るバスへ送り込み、アタシ達は提督達よりも先回りする為、電車へと乗り込んだのだった。



## 就活戦争16日目

……何だか不穏な空気なのは気の所為だろうか？後々面倒な事が起こるのは勘弁願いたい。

案内人のおじさんに言われた通り、伏見稲荷大社行きのバス停近くに券売機があったのでそちらでバスの一日乗車券を購入する。

叢雲が「前回20分近く列に並んでたのが馬鹿みたいじゃない……。」というのも分かるくらいあっさり券が買えた。

みんなも京都行く時は覚えといた方が良いぞ？ほんと早い。

5分ほど待つと伏見稲荷大社行きのバスがやってきたので俺らはバスに乗り込んだ……あの後から乗ってきた人存在感ヤベーな。

肩ぐらいまでの長さで茶色がかった黒髪にキャップ帽、

ボーイツシユな服装、そして何より存在感を放つのがデカイサングラスとマスクだ。

乗車時にマスクを1度外してくれと運転手に言われて取ってたが1番後ろの席に腰掛けると直ぐにマスクをつけ直した。

普通なら風邪気味か花粉症なのだろうで済みますのだが、格好が格好なので中々目立つ……なんつーかお忍びで遊びに来た有名人って感じ。

スラつとした手足、ボーイツシユな格好、デカイサングラスにマスクと来た。モデルか有名バンドの一員とかだろう。実際、所々から「あの人カッコよくない？モデルさんかな？」や「雰囲気あるな、どこバンドメンバーだろ？」やらいわれてた。

……でもあの人がマスク取った時、どっかで見たことあるような気がしたんだよなあ……。

まあ俺の有名人説が正しいならテレビとかどっかで見たことあるんだろうな。

因みに叢雲はスマホを使って本日の本目標であるデザート店と今後の予定を調べまくっていた。

時折「アンタも意見出さないよ。」と言われたのでバス停に行く前に観光案内所で貰ってきたマップを叢雲と見つつ予定を考えてい

た。

こうしてバスに揺られること15分程、本日最初の目的地である伏見稲荷大社に到着した。

伏見稲荷大社行きのバスだけあってほぼ全員が稲荷大社前のバス停で下車した。

……お、あの人も降りるか。やっぱりお忍び旅行とかなのかな？ 有名人さん（仮）は喉が渴いたのか自販機で水を購入し、みんなに見られないよう後ろを向いてから水を飲んだ。有名人も大変だな、そんな所まで気を使わないといけないなんて俺ならストレスでハゲる。

「さっきからどこ見てるのよ？ あんまりキョロキョロしてるとみんなから気持ち悪がられるわよ？」

「サラツと毒吐いてくるね君いく、まあ慣れてるから良いけどさあ。」

「え？ 気持ち悪がられるのにな？」

「ソツチジャネーヨ。」

なんで気持ち悪がられるのに慣れなきや行けねーんだよ？ 思わずカタコトになっちまったじゃねーか。

え？ 何？ 俺、鎮守府でみんなから気持ち悪がられてるの？ 自分、提督辞めて良いっすか？ 元より辞めたい人である意味都合かもしれないけど、それはそれでメンタル来るわ……。

「まあ冗談はさておき、さっさと行くわよ。ここじゃ他の人の邪魔にもなるし、伏見稲荷大社までもう少し歩かないと行けないからね。」

「へいへい。」

「返事は『はい』そして1回。」

「はい……。」

さて、気を取り直してレッツ観光だ。

流石京都の観光名所、他の観光客も結構いる。

というか……

「京都駅の段階で思ったけど、外国人めっちゃいるな……。」

右を見ても外国人左を見ても外国人。

日本人かと思えば外国人ぐらいの割合で外国人がいらっしやる。

外国人も『そうだ京都、行こう』みたいな感じで来てるのかな？  
流石Cool Japan。これがあと数時間したら倍以上人が来る  
って考えるとなかなかヤベーな。人口密度的にはHot Japan  
だわこりゃ。

「まあ外国人の間でも京都の観光スポットナンバーワンになって  
るぐらいだし来るでしょ？なんだかんだで私達日本人も結構いる  
し。」

「観光地としては有名になってありがたいかもな。」

まあ問題もあるらしく国内外含めて観光客が多くなり過ぎて道  
が狭くなったやらバスが非常に混むやら色々問題も出てるだろうし、  
これからの課題なのだろう。

こうして暫く歩いていくと朱く大きな鳥居が見えてきた。

「さて着いたわ！ここが伏見稲荷大社よ！」

「おお、これは凄いや。」

月並みな感想だが圧巻の一言だ。朱朱朱と目につく限り朱色の  
建物、堂々立つ鳥居の先にはこれまた立派な楼門が構えている。

他の神社と異なるのはまず普通神社の脇に居るのは狛犬だが伏見  
稲荷大社は『お稲荷さん』と呼ばれているだけあって楼門の脇には狛  
犬ではなく、狐が鎮座している。

「ねえアンタ、この楼門ってあの豊臣秀吉が建てさせたものだっ  
て知ってた？」

へえ、あの秀吉が……やっぱり有名な人は色んなところで色ん  
なことをしてるもんだな。

「それは知らなかった。叢雲、お前物知りだな……。」

「結構調べたり、テレビで見たりしたからね。……なんでもお母  
さんの病気を治してくれたってお礼でこの楼門を建てたらしいわよ  
？」

はーすっげえなおい。俺も鎮守府脱出祈願して置こうかな……  
出来たら油揚げといなり寿司めっちゃお供えしよう。流石に楼門は

建てられんからな。

木曾は戦闘中焦らず冷静に判断できる能力の高い艦娘だと皆からも言われてきた。木曾自身もどちらかと言えば冷静沈着であると自負していた。

そんな木曾でも焦る事はある。現に今やっている尾行には焦りを感じていた。任務内容は同型艦の姉妹達から強制的にやらされている提督と叢雲の動向を監視するもの。

腹を括ったつもりだったがやはり後ろめたさがある。それが木曾の心の余裕を無くさせたのだろう。

『はあく、尾行は尾行でも海の上で深海棲艦を尾行する方がまだ気楽だな。出歯亀精神旺盛な姉さん達には困ったもんだよ……。』  
何より木曾を焦らせているのは「あの人カッコよくない?」「どっかのバンドメンバーとか?」とほかの乗客から視線を浴びまくってる事だった。

みんなあまりこっちを見ないでくれ……。ほら提督達も見てるじゃないか……。

球磨姉さんは那珂ちゃん御用達の変装装備と言っていたが絶対に間違つてると木曾は感じていた。

変装は目立たないためにするものだ。

後に那珂に聞いてみたところ『変装すると有名人感でてみんなに注目してもらえるから〜!!』との事だった。まあその事を今の木曾は知る由もない。

恨むぜ球磨姉さん……。ともかく早く降りてえ……。

『ザッ……そっちの様子はどうかクマー?』

そんな時、件の球磨姉さんから無線が入った。一応周りに聞こえないよう小声で返答する

「とりあえず提督達からはバレてないはずだ……。が、すげえ注目されてる。……。本当にこの変装大丈夫なんだろうな?」

『ザッ……自信持つクマー。木曾は私の妹クマ、私の妹がこんなこ

とでへこたれるわけないクマ。』

もうへこたれそうだわ……と心の中で思いつつ木曾は「はいよ、じゃあ監視続けるから現地で。何かあったらまた連絡する。」と無線を切った。

相変わらず乗客からは視線を浴びてるが提督達は今後の予定を決めているのか地図を開いてあれやこれやと話し合っていた。

興味を持ってくれないでありがたい限りだ。特に叢雲は普段から警戒心が強いから正直バレると思っただが休みに出かけてるということもあつて警戒心が薄れているのが幸いだつた。

……もし、提督達にバレたらと思うと球磨姉さんや多摩姉さんは『あーあー、やっちゃまったクマね』にやー、つまらなかつたにやー』で済むかもしれないが今回に関しては大井姉さんと北上姉さんがやばい。ハッキリ言つてどうなるか分かつたものじゃない。

へこたれたいが自分の命が掛かつてると思い、気合を入れ直した。

すまねえな提督、叢雲。出歯亀だなんて事分かつているけど俺も命が掛かつてるんだ。だから気付かないでくれよ……？

—————

そうこうしてるうちに本殿までやつて来た。

お参りの常識二礼二拍手一礼はしつかりな？

あ、神社によつては違ふところもあるから気をつけて。

そして勿論お願いは鎮守府脱出を祈願して……。

お参りを終えて端に避ける。

「アンタは提督だし、お願いはやつぱり暁の水平線に勝利を刻むことかしら？」

おお、なんかスタート画面で聞くようなセリフ……いや、スタート画面？なんでスタート画面なんて言葉が……？よくわかんないや。

「あー、そんなのもあつたなあ……。まあそれもお願い出来るなら……。」

「は？アンタ、紛いなりにも提督でしょうが……普通そういうのをお願いするもんでしよう!？」

いやー確かにね、分かる、分かるよ叢雲。大丈夫だってへーきへーき、先輩方も能力高い人達ばかりだし、艦娘達も強い。期待の新人神谷君も佐世保にいる訳だし。そこいらの方々が何とかしてくれるでしょ？

俺はね、一般企業行きたいのよ。守る側じゃなくて守られる側。Do you understand!?

「確かに重要な事だと思うよ？それこそ人類の悲願だ。常日頃から願う事だろう。でも神様をお願いする時ぐらい自分のため、人の為そういった願いをしてもいいと思うんだよ叢雲君。」

「何か腹立つわね……じゃあアンタは何をお願いしたって言うのよ？」

「……神様をお願いすることは他人に言うとは叶わなくなるって知らんのかお前。分かった分かった、その振り上げた拳を下ろせ。……まあ強いていうなればある人の幸せを願った。」

一応出任せじゃないぜ？あ、因みにある人ってのは勿論俺な？

「ちよ、ちよっと!!その言い方じゃあ余計気になるじゃない!!誰なのよ!?!もしかしてワ、ワタシ……?？」

小声で言われてもさっぱりだ。

「い、いや、そこはプライバシーの関係で……。」

「ま、まあいいわ。言われても困るし……。(もし私とか言われてたらどんな顔していいか分からないわ……。)」

そうだそうだ気にするな気にするな。ついでに俺の脱出についても気にするな。

まあいい加減この話も面倒だ。早いところ話を切り替えねば。

「とりあえずあれだ、おみくじでも引いていこうぜ？来た記念にもなるだろ?？」

もう既に俺はおみくじの方へ歩みを進めている。

全くもう……。と叢雲も後を追ってきた。

「おみくじねえ……なんだかんだ最近引いてこなかったわ……。」

「そうか、俺は毎年引いてるぞ？年初めの1発目運試しとして幸先いいか悪いか。」

今年は大吉引いたはずなんだけどなあ……就活は失敗するわ脅されて無理やり海軍入れさせられるわで本当に大吉だったとは思えんがなあ……。まあたかがおみくじだし。

「ふーん、まあ私は中吉辺りが来てくれればいいわ。アンタは日頃の行い悪いし良くて末吉か凶でしようけど。」

「……ほおー、言ってくれじゃねーか。そういうこと言ってる奴がだいたい微妙なの引くんだよ！ほら引け引け！」

カチャカチャとお互いみくじ筒を振ると棒が一本

「……六十二番だ！」

「……二十七番よ！」

文句無しの真剣勝負!!……まあ実際真剣勝負もへったくれもないが。

でも煽られたからにはコイツより良い運勢を引きたいというものの。

叢雲の分も含め2000円を支払い、巫女さんに番号を伝え、おみくじを貰う。

「あら、いいの？ありがとう。」

「ついでだ、ついで。まあ1000円ぐらいなら良いけどこれが何万単位なら勘弁だわ。あの巫女さん美人だったなあ……。」

「ふんっ!!」

思っつきし足踏んづけられた。

あまりの痛みにしばらく悶絶したわ。

流石初期艦様だわあ。

「そうやってすぐに鼻の下を伸ばすんだから……巫女服好きなの……?」

あ？何言ってるんだコイツ？

「大好……んなわけねーだろ。そんな特殊なもん持ち合わせて

ねーわ。」

「いや、アンタ今、大好きって言いかけたわよ。」

「いや気の所為だ。そんな事よりおみくじなんだったのか見ようぜ。」

「あー逃げるなこら!!」

これ以上質問されたらボロが出る可能性がある。

就活で鍛えたポーカーフェイスが無かったら死んでいた。

まあこのお口が悪いんでポーカーフェイス鍛えるよりお口鍛えたほうがいい。失言なくそう。

気を取り直しておみくじを広げていく。

こっつ、これは……っ!?

『小吉』

……なんか微妙なとこ突いたな。

「やったわ!大吉よ!!ふふん、ほら見なさい!私は大吉だったわよ!アンタはなんだったのよ?」

うおっ!?!近い近い!!そんな乗り出して来るんじゃない、落ち着け航希、平常心だ平常心。

「……ほら小吉だよ小吉。」

「ほら、やっぱり私の方が良かったじゃない!……にしてもまあ微妙なとこ突いてきたわね。でも小吉で良かったじゃない、下手もの引くよりはね。」

あながち間違いではないな。正直、ここん所の運勢考えたら大凶引いても不思議ではなかったね。

「んで、なにになに?」

「いやお前、まず自分の見ろよ……。」

「私は大吉だから基本いい事書いてあるでしょ?えーと……『失物』でやすい。」

失物……なんかあったっけな?

『商い』無駄遣いを無くせ。」



なんかピンポイントで資材の事言われてる気がしてならない。  
『学業』は関係ないわね。

関係ない訳ではないがな。一般企業受ける時SPIとかあるから。

『病気（やまい）』所を選び保養せよ。」

本当だよ、休ませてくれよ……所を選びっていうの言ってるんだから部屋まで来たり、盗撮してたり盗聴すんなよ……。

『争事（あらそいごと）』決戦は遠くない。」

争事……深海棲艦との戦いの事かな？ 淀姉さんとかだったら怖すぎる。

『抱人（かかえびと）』荒れることあり、用心せよ。」

……抱人って確か雇ってる人の事だよな？ 俺で言うなら艦娘達の事か……荒れるとか言うなよ恐ろしい。

『転居（やうつり）』難あり 流れを待て。」

おいおい……1番聞きたくない話だわ。まあでも無理って言ってるから、流れを待とう。ん？ 声が震えてる？ そんな馬鹿な……。

『旅行（たびさき）』行く先に利益あり」

いや、これからの奢らされてるんですが、それは……。

『願望』さまたげありて成り難し 進むは凶。」

さまたげって絶対淀姉さん率いるコイツらだろ、かんべんしてくれよ……。

てかなんなんだよ、本当に小吉かよ。内容的には末吉か凶のちよつといいぐらいじゃねえか。

「それで最後『縁談』……。」

……なん？ なんで溜めるかな？ バラエティー番組じゃないんだから最後に溜めんでもいいわ。

「……はあく。」

なんかため息と共に睨まれたんだけど。

俺が何したって言うんや。

「もういいわ、アンタの運勢見ても飽きた。時間考えたらもう

良いし。」

ええ、お前から見せろって言ったのに急になんだってばよ……。

叢雲からおみくじを返してもらい、まじまじとおみくじを眺める。

『失物』、『商い』、『抱人』e t c. ……まあまあ分かんない内容だったな。一部、絶対に信じたくないけど……。

志は高く生きよう。諦めたらそこで試合終了だってじつちゃんと言ってた。

最後叢雲が急に不機嫌になったのはなんだったかな……確か『縁談』だったけ？

……『縁談』縁談多くも女難あり 間違えば争いが起こる  
用心せよ

………ぷつ、はーっはっはっ!!!有り得ねー!!!

縁談多くて、間違えば争いが起こる? いやいや無いわー!!女難は認めるけどな!!!海軍学校の時からその節はあったからそれは認めるわ!!でも争いってどんな環境だよ!!

「………何ニヤニヤしてんのよ、気持ち悪いわよ?」

「いやいや、悪い悪い。おみくじの内容があまりにも的外れな所があつてな。お前のおみくじはなんて書いてあつたんだよ?」

「まあ割と無難な事が書いてあつたわね。『願望』は

機会多い 活かせ とか、『病気』は 特に問題ない、『縁談』は……宿敵多いが巡り巡りて良い方向へ向かう、とかね。」

まあ大吉って無難でちよつといい感じの事書いとけばそれっぽくなるよな。

「んで、どうするよ?観光客は奥の方まで行ってるけど何かあるのか?」

ぞろぞろと観光客達は道の奥へ奥へと足を進めていく。

「ああ、あの有名な千本鳥居を観に行くのよきつと。」

あーあの京都のCMだと必ずと言っていいほど出てくるあれか

!!

「それは気になるな……勢いで千本鳥居全部見に行くか？」

「それやると伏見稲荷大社の山に登る事になるから一周すると1時間半はかかるわ。今回は時間も限られてるし、少し見てパフェ食べる行きましよう。」

ひえー1時間半？リアル登山じゃねえか。こんな疲れてる時にやるもんじゃねーな。またの機会にしよう。

「ほら、人も増えてきたし、歩く歩く！時間には限りがあるんだから!!」

また叢雲に腕を引かれ歩き出す。

頼むからもう少しゆっくり行かしてくれ……体力、体力が足りない……。



イン○タ映え間違いないと思うぞこれは。

イ○スタしてないから分かんけど。

「これはすげえなあ……。確かに叢雲が行きたくなるのも分かるわ。」

「でしょでしょ！鎮守府のみんなにも見て欲しいわ！絶対これは見た方が良い!!あ、7月の20日か21日のどっちかは休むわよ？絶対ね！」

おーおー、まだ4月なのに気合入ってますねえ。

「分かった分かった、休暇申請を事前に出してくれば休めるようにするから。」

最も、俺がその時期までこの鎮守府にいるとは思わんがな!!

「勿論、アンタも行くんだからちやんと休み取っておきなさいよ？その為には仕事を溜めない事！私が秘書艦の時はサボらせないから!!分かったわね!!」

「わーったわーった。そんな時は来れるヤツら誘ってみんなで来ような。」

「(……私はまたアンタと2人で回る気だったんだけど……。)」

「んあ？なんか言ったか？」

「……別に!!なんでもないわ!!ほら、この先で写真撮るんだから早く行くわよ!!」

「おわっ!?だから引つ張るなって!!」

今日コイツよくボソボソ喋るから分かんよね。

いつもみたいにハッキリ言ってくれば楽なだけだな。

……まあ楽しそうだし、いいか。

—————

「うにゃー!!人混みで前に進めないにゃー!!」

「うげえ、アタシ人混み苦手えく……。」

「北上さん、こっちに!!」

うーん、やはり京都の観光名所は伊達じゃないクマ。

提督達を追ってきたはいいものの、丁度団体観光客とかち合ったらしく人の壁に阻まれてしまったクマ。

「球磨姉さん、どうするよ!?これじゃあ提督達を見失っちゃうぜ!」

「分かってる、今考えてるクマ。」

と言ったけど、この観光客達は写真を撮りまくるからしばらくは動かない……どうしたものかクマ……。

「お困りのようですね。手を貸しましょうか?」

耳元で聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くと瑞雲に乗った妖精が頭の上辺りで飛んでいた。

どうやって瑞雲でホバリングしているのか構造が気になるところだが今それはどうでもいい。

「お前は提督と一緒に居る妖精さんクマ?」

「あら、覚えていただいて光栄です。よろしく願いします球磨さん。」

「ああ、よろしくクマ……ってなんで妖精さんがこんな所にいるクマ?提督ならこの先クマよ?」

「後ろで艦娘の気配がしたので面白そげフンゲフン。

気になってこっちに来てみました。」

今コイツ面白そうって言いかけたクマ。やっぱり妖精さんはイタズラ好きつてのは本当クマね。まあ私達もイタズラ、出歯亀精神でこんな事してるから人の事言えないクマ。

「提督達は球磨達に気付いているクマか?」

「いや、2人共気付いていないみたいですよ。私は提督達を他の方々に任せてこっちに來ただけですので御安心を。」

とりあえずそれが分かっただけでも一安心だ。

今バレてしまったら妹達に起こる面白展開もパーになってしまう。まだ溜めの時間だ。

「手を貸してくれると言ったクマね？」

「ええ、我々も面白い展開は大好きなので勿論手を貸しますよ。」

「今この人混みで先に進めそうにないクマ。どうにかしたいクマ。」

妖精さんと会話していると妹達も気がついたのかこちらに集まってきた。

「やっぱり駄目にやゝ、とても全員では抜けられそうにないにやゝ。」

「ふむふむ、やはり1人ぐらいなら通れると思いますですが5人全員となると難しいですね。分かりました。では1人この道を通る人を選んで下さい。残りの4人は私が迂回路に先導します。」

4人か……。

「多摩、北上、大井、お前達は球磨と一緒にこの妖精さんについて行くクマ。」

「アタシはこの人混みの中突っ切らなければなんでもいいや。」

「ああ、人混みで北上さんと抱き合う状態で幸せだった……。」

「大井く戻ってくるにやゝ提督と叢雲を追わなきゃいけないにやゝ。」

「木曾、お前は変装してこの団体の端を何とか掻き分けて提督達を追うクマ。」

「マジかよ、また俺かよ。というかこの人混みの中進むのかあ、もう疲れたぜ……。」

やはりこの中で1番フィジカルが強くて人混みに耐えられそうなのは木曾だろう。

いや、決して面倒そうだから木曾に押し付けた訳じゃないクマよ

?ちゃんと適性で判断したクマ。

「決まりましたね、では回れ右して付いてきてください。」

妖精さんの乗った瑞雲はぐるっと旋回すると結構な速さで飛び始めた。

「逆に戻ってるけど大丈夫なの!?!」

大井の疑問もご最もだ。

「大丈夫です、このままぐるっと回って納札所から迂回していきます。……まあ実際逆走なのであまりよろしくありませんがちよつと行くだけなので。」

この妖精さん、目的達成の為には手段を選ばないタイプクマね……けど嫌いじゃないクマよ。

「…………今無線で仲間達から連絡が来ました。もうすぐ千本鳥居を抜けて奥社奉拝所に到着するとの事です。」

「奥社なんたらつてのは何処なのさ〜!」

「おもかる石のある所クマ、時間を考えればそこで引き返すだろうからみんな急ぐクマ〜!!」

4人の少女達は人を避けながら鳥居の中を駆ける…………一方木曾はと言うと…………

「Could you take a photo for s?」

「えあ!?!お、俺英語分かんない……写真? ああ、オーケーオーケー……これ、どうやって通ろうかな……。え!?!俺も入るの!?!」

この後ジェスチャーやらなんやら使って説明したら通してもらえたとか。

—————

「やっぱり千本鳥居は写真撮るのには最高のポイントね!」

「…………そいつあ良かったですわ…………。」

千本鳥居、確かに幻想的だった。光が差し込んできて風もそよそよと吹いてくる。

ただ、人の多い事多い事。叢雲に写真頼まれて撮ったり撮られた



りただでさえ少ない体力を持っていかれる。

元気だねえ、この子も。

そして、千本鳥居を抜けると少し開けた場所に出た。

「あ、アンタもこっち来なさいーほら、この列並んで！」

叢雲に腕を引かれるまま列に並ぶ。

「この列はなんの列なのさ？」

「修学旅行とかでおもかる石って聞いたことあるでしょ？あれよ。」

あーあの、石を持ち上げて軽いと思つたら願いが叶うつてやつね。まあ軽いと感じるしかない。願うのは勿論、鎮守府脱出、自己防衛だよな？

5分程並ぶと俺らの順番が回ってきた。

「アンタからいいわよ、私もこれやった事ないからどんぐらいの重さか私に教えてよね。」

俺は実験台か……。まあそんなに重くないはずだ、行くぞっ!!

「あ、重い……。全つ然重くないわあ〜!!めっちゃ軽いわあ〜!!」

「……。アンタ、今絶対重いって言ってたわよね？」

「言っていないですよ〜!軽かったですよ〜!!」

言っていないです。ほんとに言っていないです。

伏見稲荷の神様、セーフですよこれ? (セーフだよ!裏声)ほら、神様もセーフって言うてるからセーフ。異論は認めない。

「分かった分かった、軽かったんですねー凄いですねー。」

めっちゃ適当に流された……。なんか虚しいわ。

「まあ、思ったよりは重いつて思っておいた方が良さそうね……。じゃあ次は私の番ね。」

スタスタとおもかる石に近づく叢雲、ふふふ……。地味に重いと感じるおもかる石の重みを知るがいい!!

そして『あ、やっちゃった!』みたいな感じになれや!!ガハハ!!

「いっせーのっ!!」

持ち上げる時一瞬艤装を展開する叢雲

軽々と持ち上がるおもかる石

? ?

こちらに満面の笑み＋ドヤ顔の叢雲

何そのドヤ顔、腹立つわあ〜!!!というかそれは反則だろ!?

「あく本当に軽いわあ〜!アンタ、これが重いつて思うようじゃ  
お願いは叶いそうに無いわねえ。」

むき〜!!!違反勝ちして楽しいかコンチキショー!!!

「まあ帰って筋トレでもする事ね!」

!!!  
「うるせー!!!心無い奴だぜ!!!だから胸も無いんだろうが  
!!!」

「あ?」

「きよ、今日という今日はお前の眼力に屈しないぞ!!そんな顔し  
ても無駄だ!!」

精一杯の虚勢だが、いっつも負けっぱなしなんだ!!今日こそは負  
ける訳にはいかない!!

「へえ〜ほお〜、良い根性してるわねアンタ……。それだけ威勢  
のいい啖呵を切るわけなんだからそれなりの覚悟があるわけね  
……。」

心で負けるな心で負けるな心で負けるな心で負けるな心で負け  
るな心で負けるな心で負けるな心で負けるな心で負けるな……。

「どんな事されても俺は屈しないぞ!!それだけの侮辱を受けた  
んだ!!」

「アンタのプライドなんて深海棲艦にでも食わせておきなさい!!  
この私を侮辱したんだから覚悟なさい!!」

「はー、なんの覚悟すればいいですかねえ!？」

「大淀さんにアンタからセクハラされたって言うわ。」

「調子乗ってすんませんした、それだけは勘弁してください。」

一瞬で土下座に移行した。やっぱり叢雲に勝てなかったよ……。

コイツの言ってる覚悟ってのは命の覚悟だ。

俺はまだ死にたくない……。

誰得だよ、俺の即堕ちニコマ漫画。

「とりあえず列の邪魔になるから社務所裏ね。」

「……はい。」

30秒後、スッパアアアアーン!!というビンタの音が境内に響いたという。

やっぱり人が嫌だと思ってる事は言っちゃ駄目だね！

お兄さんとの約束だよ!!

命が幾つあっても足りないからね!!

—————

境内を駆ける4人と団体観光客から道を譲ってもらい提督達を追いかける1人の少女達、何故彼女達は境内を走るのか……。

1人は本人も気付いていない嫉妬と照れ隠しから。

1人は自らの淡い想いに気付きつつ、事情を知ってしまった以上

ジツとしていられなくなったから。

1人は妹達の雰囲気を感じ、甘い、面白い展開を見てウマウマしたい、けど妹の幸せも祈り、かつ心配しているから。

1人は姉と同様出歯亀精神旺盛で面倒事になったら末っ子に丸投げするかにやくと呑気だけど奥底ではやっぱり心配してるから。

1人はただひたすらに、完全に無関係でいれたのに姉達の好奇心のせいで巻き込まれてしまったから。本人もずーっと俺はなんでこんなことしてるんだらう……。と思いつつ俺はなんでこんなことしてるんだらう……。と思いつつ俺はなんでこんなことしてるんだらう……。と思いつつ俺はなんでこんなことしてるんだらう……。

そんな彼女達はひたすら走る、前を飛ぶ妖精さんを追いかけて走

る。

「もう少しです。そのカーブを曲がれば後は一本道です。」

「もうちょいで着くクマ！お前ら、間違つても飛び出すなクマ!!」

「ええ!!」

「はいよー!!」

「にゃー!!」

「もうそろそろ着きそうだな。姉さん達はもう着いてるか？」

5人の到着はほぼ同時、そして5人が見たものとは……っ!!

「うるせー!!心無い奴だぜ!!だから胸も無いんだろうが!!」

「あゝ?」

「きよ、今日という今日はお前の眼力に屈しないぞ!!そんな顔しても無駄だ!!」

「へえくほおく、良い根性してるわねアンタ……。それだけ威勢のいい啖呵を切るわけなんだからそれなりの覚悟があるわけね……。」

「どんな事されても俺は屈しないぞ!!それだけの侮辱を受けたんだ!!」

「アンタのプライドなんて深海棲艦にでも食わせておきなさい!!この私を侮辱したんだから覚悟なさい!!」

「はー、なんの覚悟すればいいですかねえ!？」

「大淀さんにアンタからセクハラされたって言うわ。」

「調子乗ってすんませんした、それだけは勘弁してください。」



……  
終わったな。

## 就活戦争18日目

「大丈夫ですか?.....あれ?」

「ああ、大丈夫.....あ、やべ.....」

おつかしいなー観光客に押し出されて倒れた人が目の前に出てきたから助けたらなんか見知った人なんですけどー。

「木曾じゃないか、こんな所で会うなんて奇遇だな。お前も伏見稲荷大社観光か?」

「はあ?木曾?あら、本当だわ。」

「い、いやこれはそのだな.....」

そんな木曾さんだが今もどうやって言い訳しようか考えていた。だがしかし.....

「ん?ちよつと待ちなさい。木曾だけってわけないわよね?真面目な木曾がこんな変装やら人の休日追っかけ回す趣味は無いはずだから。.....他の球磨型の連中はどっかにいるのかしら?」

おおーなんとまあ、笑ってるのに笑ってない顔とはこの顔だ。

『吐け、吐かないなら痛い目に遭わすぞ』というプレッシャーがひしひしと伝わってくる。

これにはあの木曾も引き攣った笑みしか返せない。

「待つクマ、球磨達はここにいるクマ。」

声のする方に視線を向ければ球磨達が鳥居の影から出てきた。いつもいる妖精さんが日向から貫つた護身用瑞雲に乗ってる。

護身用に乗ってきたんだから俺の護身してくれよ。なんで自転

車感覚で乗り回してんだ。

「全く……球磨型が揃いも揃って人の休日の追っかけなんて趣味が悪いわね。どう落とし前付けてくれるのかしら？」

落とし前って……お前は極道の者か。

「っーわた」

「全て責任は球磨にあるクマ。何かあれば私に言うクマ。」

大井が何か言い出そうとしていたが球磨は手で口でそれを遮った。

しばらく叢雲は考え込むと「はあ」とため息をついた。

「……いいわよもう、付いてきたアンタ達の気持ち分からないでもないわ。でも次やったらただじゃ置かないわよ？」

叢雲はチラリと大井達の方を向くと「アンタ達にも機会が来るだろうからその時にでも振り回しなさいな。」

と一言。

大井、北上は少し苦い顔をしていた。

「これは余裕見せつけられたなクマ。初期艦で秘書艦とかもあつたから提督と関わる機会多かつたのは叢雲だったクマね。」

「(後で荒れなきやいいけどにやー。)」

気持ち分からないでもない？機会？なんのこっちゃ……。

まあ向こうの話だ俺には関係ないか。

「……じゃあ、球磨達は行くクマ。観光楽しむクマよ。」

「おう……っってお前ら一緒に行かないのか？」

ここにいる舞鶴第2鎮守府メンバーの思考がフリーズした。

え、何？なんでみんな固まってんの？女の子連中って友達と会ったらそのまま遊びに行くんじゃないの？



「ちよ、ちよっと待つクマ！」

「そこで待ってなさい！」

すると叢雲を含めた6人で円陣を組むようにヒソヒソ話を始めた

「え？提督理解してないクマ？いくらなんでも状況理解して無さすぎるクマよ。」

「昔っからニブチンな奴だとは思ってたけどここまでだとは思わなかったわ。」

「あーこうちゃん結構おちよこちよいな所あるからねー、でもそこが可愛かったりするよねー。」

「でも流石に私達だけモヤモヤさせておいて、自分だけ気にしてないのは気に食わないので私は後で1発殴らせてもらいます。」

「大井落ち着くにゃくそれやっていつも布団の中でどんよりするんだからやめとくにゃ。」

「(……多摩姉さんも後で1発殴りますね。)」

「(にゃっ!?)」

「(それもいいけど本題に戻そうぜ、どうするよ叢雲？俺達もついて行っちゃっていいのか?)」

「(木曾も1発ね。)」

「(なんでだよ!?)」

「(……まあ、今更よね。さつきも言った通り今回は許すけど、次は怒るから。というかアイツもアイツよね、どうして女の子と出かけてるのに他の女の子誘うのかしら?……考えたらムカムカしてきたから私も後でアイツの事1発殴るわ。)」

「(じゃあ、同行させてもらおうクマ。叢雲、今度詫びに行くクマ。)」

「(ええ、期待してるわ。)」

お、円陣終わったか。結構長かったな。

「じゃあ球磨達も一緒に行かせてもらおうことにしたクマ。提督、よろしく頼むクマ〜!」

「おう、みんなで行った方が楽しいからなく頼むぜ〜。」

なんだよ妖精さん、そんな目で見るなよ……。

「……提督さん罪な人ですよ。可哀想に……。」

……なんか急に憐れまれたんですけど。なんなん急に?

え、なになに? 一旦CM?……え? CMあんの?

—————

「こんにちは、妖精さんです。」

「ん?どの妖精か分からない? 瑞雲に乗ってる妖精ですよ、最後に出てきたじゃないですか。ちゃんと覚えて下さいね?」

「そしてこんにちはは探照灯でお馴染み、探照灯妖精さんです。さつきまで提督のカバンの中にいました。」

「はいこんにちは。さて、提督さんの鈍さが露見したのは今更なのでそこはスルーして今回は伏見稻荷大社についてお話して行きましょう。」

「歴史秘話ヒス〇リアですか？」

「歴史秘話ヒ〇トリアじゃないですよ？でも見てる人、良いセンスしてます。はいそこ、テレビ点けない。今の時間歴史秘話ヒス〇リアはやっていませんよ。」

「言われたら気になるじゃないですか。」

「それはさておき、今回は伏見稻荷大社です。京都駅からも比較的近いエリアで市バスであれば提督さんが前に説明した通り、京都駅バスターミナルC4のバス停から出るバスに乗ります。バスターミナルは京都タワーが見える方にあります。反対側に降りないようにお気をつけて。」

「反対側に降りるとデパートのアバンテアーしかないからね！」

「まずC4のバス停から105か南5番のバスに乗ったら稻荷大社前まで行きます。交通状況にもよりますが大体15分〜20分です着きます。」

「思ったより近いですね。」

「そうですね、京都駅からも比較的行きやすいです。そしてもうひとつの交通手段として電車があります。正直球磨さんの言う通りこちらの方が圧倒的に楽で早いです。バスの難点は時間によっては結構待たされたり、乗客が沢山いることもありますので。」

「電車だと大体6〜7分って所かな。行きはいいけど京都駅に戻る電車は混むから気をつけてね。バスも同様だよ。」

「電車はJR奈良線で稲荷駅か京阪本線で伏見稲荷駅まで行きましょう。ですが、電車で気をつけなければいけない点もあります。似たような駅で近鉄京都線の 伏見駅というのがあります。」

「この路線に乗って伏見駅まで行っちゃうと伏見稲荷大社から結構離れちゃうからこれだけは気をつけてね。私はこれで1回やらかしたよ！」

「そして駅やバス停から伏見稲荷大社まではまず迷うことは無いでしょう。奈良線で行けば伏見稲荷大社は目の前なので不安という方は奈良線を使って稲荷駅で降りて下さい。でなくても他の観光客達が沢山いますので、最悪その団体について行けば着きますね。ある意味それでたどり着けない方はお稲荷さんからお断りされてるのかもしれないですね。」

「京都駅は沢山電車があるから分からなくなったら駅員さんに聞いてみてね。」

「では、伏見稲荷大社の見所について説明していきますね。結構見所あるというか基本見所しかないのであんまり説明する意味無いですね。」

「え？今回これで終わりですか？」

「冗談ですよ、ちゃんとお話ししますから。観光雑誌に書いてあるような所から書いてないような所までお話ししますのでご安心を。」

「いえーい！」

「じゃあまずは千本鳥居ですかね。伏見稲荷大社はともかく沢山の鳥居があります。提督さん達が通ってたあれですね。一言で言うとう鳥居と言うより朱色のトンネルって感じがします。ただ伏見山の雰囲気とその朱色のトンネルが見事に合わさって、天気が良く太陽の光が差し込んできたりすると、とても幻想的な風景が見られます。」

「今日は天気が良かったし神秘的で良かったよー！」

「ただこの千本鳥居、入口付近は写真撮影で混み合います。中も写真撮影の方が結構いらっしやるのでガンガンいこうぜってタイプの方、いのちはだいじにに切り替えておいてください。」

「綺麗だから立ち止まって写真撮るのもありだと思うよ？」

「続いてもおかる石ですね。」

「提督さん達もやってたあれね。」

「石の前でお願いします。石を持ち上げる。軽いか重いかで占うパワースポットですね。これぞ本当のパワーストーンってやつです。」

「実際に軽いか重いかは京都に行って確かめてね！私達？普段装備を持ったりする私達からすれば石なんて軽い軽い……って言うのは冗談で、人によって重さは変わると思うし、これ言うとなタバレにもなっちゃうからやっぱり気になったら行ってみるといいよ！」

「あとこのおもかる石の近くに絵馬があるんだけど伏見稲荷大社の絵馬は面白いことにキツネの形をした絵馬なんだ！」

「凄い絵の上手い人や面白い顔したキツネさんの絵馬が見られますよ。」

「私的には賭博黙示録力○ジの顔のキツネさんを見た時は面白さとスゲーって思ったね……。」

「インパクトしかなかったですものね……。では、続いて稲荷山参拝コースについてお話して行きましょう。叢雲さんは大体1周するのに1時間半って言ってましたが、実際の所、結構体力のある人がほぼ休憩無しのノンストップで行った場合なら可能かもしれません。」

「叢雲さん、艦娘だし体力的には提督なんかよりもあるからね！」

「ですので指標としては大体2時間半から3時間半っていう所でしょう。体力のある方は2時間ぐらいで回れるかもしれませんが、写真撮ったりゆっくりと回りたいという方は3時間は時間をとった方がいいですね。」

「まあそもそも山登り慣れてないや体力そんなに自信が無いって人はとりあえず四ツ辻まで目指そう！あ、そうそう、靴はスニーカーとか歩きやすい靴をオススメするよ！ヒールやレンタル着物着てきた方は残念だけどもかる石のある奥社奉拝所で引き返した方がいいね。それ以上行くと足痛めたり、服が汚れたりしちゃうから。」

「……探照灯妖精さん、説明してない所を話しても伝わりませんよ。では、探照灯妖精さんが言ってた四ツ辻についてお話ししましょうか。あ、靴は私も歩きやすいのをおすすめします。」

「四ツ辻ですが山の中腹辺りにあります。歩いて1時間ぐらいの場所ですかね。」

「ここは凄いいんだよー！なんと京都の街並みが一望出来ちゃいます！」

「ここで京都の街並みを眺めながらソフトクリームを食べて休憩なんてことも出来ますので私としてもおすすめポイントですね。」

「あ、そうそう、ソフトクリームで何故か思い出したけど飲み物は伏見山入る前に買っておいた方がお得だよ。山の中にも自販機があるんだけど……ちよつとお高くなるからね……。」

「500m1で250円ぐらいでしたね……。」

「やっぱり山の中だからね、しょうがないね。」

「なんで先に買っておかなかったのか私……き、気を取り直して続いては猫に出会えるかもしれない伏見稲荷大社です。」

「猫ですか、伏見稲荷大社は猫の神様も祀られてるんですか？」

「いえいえ、そういう訳ではなくて野良猫……なのですかね？多分野良猫だと思いますけど稲荷山を歩いていると猫さんに遭遇することが結構あります。」

「猫好きの人も猫アレルギーの人もこれはたまらんですね。」

「まあ猫さんに会えるのは運次第ですので会えたらラッキーぐらいに考えておいてください。というか本当に猫さんに会いたい方は猫カフェに行けば確実です。」

「京都はふくろうカフェとかあるし見所多いよー。」

「1回行ってみたいですよねあれ。……ともかく話を戻しましょうか。」

「ほいー。」

「次は知ってる人は知ってるマイナーな所をお話して行きましょうか。皆さん、京都で竹林と言うと嵐山の竹林が有名ですよね？」

「嵐山の竹林も観光客がいーっぱいいるよー！」

「そんな竹林ですが、なんと伏見稲荷大社でも見ることが出来ます。」

「え!?! そうなの!?!」

「本当です。しかもそんなに人も多くないです。」

「穴場ってやつなのね！」

「そうですね、ついでに言えばその道を通って頂上まで行くことも出来ますね。ルートが全然違うので四ツ辻とか通りませんけど。」

「まあ頂上まで行って戻る時に四ツ辻を通過して帰れば寄れるからね。」

「でそんな伏見稲荷大社の竹林ですが、行き方はおもかる石の



ある奥社奉拝所から山道方面に少し行くと鳥居のトンネルが少し途切れます。その右側に〈奥の院方面〉と書かれた道標があります。伏見稲荷大社は基本舗装されていますがここはちよつとした山道になっています。」

「思ったけど伏見稲荷大社って割と山登りだよー。」

「だって山登りですから。伏見山ですよ？あ、因みにこちらのルートは竹林で引き返すなら問題ないですが山頂まで行く場合歩きにくい靴や体調不良の方はオススメしません。途中から完全に山道になるので。」

「ひえー登山だねー！」

「普通のルートで登るのも登山なんですけどね。こちらはハイキングコースにもなってるので。まあ、正規ルートが鳥居のトンネルをひたすら行く道とするならこちらは裏道ですね。でもハイキングコースにもなってるだけあってこちらも綺麗ですよ。途中。雰囲気のあるお塚とか末社とかその後、畑の辺りに出るのですがそこから夕日や伏見桃山城とかも見えますので。」

「とりあえず一言いうなら伏見稲荷大社来る時は歩きやすい靴で来てね！」

「後こちらのルートには民家の横も通りますのであんまり騒がないようにして下さいね。というか伏見山自体が聖域なのでどんなところでも騒ぎすぎるのは良くないのですが。」

「伏見稲荷大社の営業時間ってどのぐらいなの？他の神社とかお寺は4時半から5時半ぐらいで閉まっちゃうでしょ？」

「そこは心配ありません。一応24時間解放されてます。ですから夜行く事も出来ますよ、明かりも途中から無いのでめっちゃ怖いんですけど。」

「相当勇気がいるね。」

「まあ神様も寝てる時間なので夜神社に行くのはよろしくないのですがね。もしかしたら何か起きるかもしれないですね、保証は出来かねますが。」

「興味本位で行って遭難しても知らないよー？もし私がいたら探照灯で照らしてあげられるかもね！」

「ですがそんな夜の伏見稲荷大社が見たいという方、ご安心を。伏見稲荷大社の夜でも堂々と入れてそんなに怖くない日があります。」

「おお!!やっぱりそんな日が!!」

「はい、それでは最後に伏見稲荷大社の例大祭、宵宮祭と本宮祭です。」

「叢雲さんが言ってたお祭りだね!!私もお祭り大好き!!」

「このお祭りの期間中は伏見稲荷大社全体に赤い提灯が設置されます。建物から鳥居の中まで至る所に。」

「おおー!!それは凄いねえ!!」

「本当に凄かったですね。存在が不思議な私達が言うのもなんですけどもう異次元に来たような感じでした。普段の伏見稲荷大社

も幻想的なのですが、10倍増しで幻想的です。叢雲さんがみんなに見て欲しいというのも納得いく風景が見られます。」

「おおー!!なら今度私達も行くようよ!!」

「そうですね、行きましょう。ただ一つ注意するとすれば……。」

「え!?何かあるの?」

「人の数が尋常じゃないです。通常でも凄いですがこの日に關してはその何倍も人が来ますので。」

「やっぱりですかー。まあそれだけ人気のあるお祭りってことなんだね!」

「もう本殿の辺りはまるでコミッ○マーケットみたいな感じですね。道を行くも帰るも人の波をかき分けて進むしかないってぐらい混みます。でもオススメですよ、あの幻想的な風景は1度見ておいて損はしませんから。」

「今年はいつやるの!?!」

「7月20日が宵宮祭、21日が本宮祭ですね。予定が合えば是非行ってみてください。」

「それじゃあそろそろ時間だね!」

「また機会がありましたら私達が京都の観光地を紹介するかもしれませんね。ではまたいつかお会いしましょう。」

「またねー!!」

この放送は舞鶴第2鎮守府、青葉、衣笠の提供でお送りしました！

……………CM長くね？CMと本編の長さ逆だろ普通。

「司令官く！本編は尺の都合で次回に持ち越しですって〜！」

「は？マジかよ……………ずっと待機させられてた意味だわ。妖精さんのこんな観光情報見るぐらいだったら自分でググった方がもつと色々出てくるわ。てかCMの癖に長すぎんだよ。CMなんだからもつとまとめろっての……………」

「いいじゃないですか〜あれはあれで妖精さんも青葉も頑張ったんですからね〜。下調べだったり撮影だったり……………」

「まあ問題は今後のお前の行動だわな。本当に出歯亀精神旺盛なの抑えてくれよな……………俺の命が幾つあっても足りないんだよ。」

「むうー!!出歯亀精神じゃなくて知的好奇心と言ってくださいよー!!」

「……………はあく、もういいわ。もう俺疲れたよ、大変なのは脱出と淀姉さん怒らせた時だけでいいよ……………」

「お？また大淀さんと何かありました？」

「……………淀姉さんと明希ね、明石と時雨と夕立が私達だけ除け者

にしないでいい、私達も連れてけとさ……。」

「……？いいじゃないですか、また行つてくれれば。」

「俺はいつ休めばいいんだよ!? つてことを伝えたら夕立は悲しそうな顔をするし、時雨は目のハイライトオフになるし、淀姉さんは笑顔だけど目が笑ってない圧力かけてくるし……。とうにか明希姉は自分で行け。」

「つて事でまた行く事になりました……。」

「ここまで来たらそんなこと考えないでもう楽しんだらどうです? モテモテでいいじゃないですか?」

「アイツら何となく好意があるような雰囲気は出してくるけどモテてるかと言うとどうなんだろうな。」

『結構わかりやすいと思うけどな。』

「なら今度のお出かけは青葉もついて行きますね! 青葉がバツチり皆さんの取材しちゃいますよー!!」

「やっぱり絶対に付いてくるなよトラブルメーカー!!」

「それは無理です!!」

「良い笑顔で却下するなこんちくしょう!!」

## 就活戦争19日目

前回のあらすじ、紆余曲折を経て球磨型がパーティーに加わった。

「すんげーいざつくりだにやー。」

「まあいいクマ、逆に1から10まで説明されてもどんな嫌がらせだってなるクマ。」

「だろ? こういうのはなんとなーくまとめた方が思い出しやすいんだよ多分。」

「いや、紆余曲折じゃあまとまってないぜ提督。つかそのまま話すなよ。」

「おお、すまんすまん。」

「ところでこうちゃん、叢雲く、次はどこに行くのよ?」

現在はおもかる石の場所から引き返して駅の方まで戻ってきているところだった。

「あー、どうすんの叢雲?」

正直、俺はスイーツ食いに行くって事だけは知ってるけどどこの店に行くかは聞いてないからそこん所は叢雲に丸投げだ。

「そろそろいい時間だし、目的のスイーツ店に行きましようか。」

「スイーツ店行くんですか!?ち、因みに何処の……?」

大井の食いつきっぷりが凄い。怖いところがあってもやっぱり甘いものが好きな女の子ですね。

アイスクリームとかならちよいちよい食べてたけどパフェだのクレープなんてもん海軍学校の時は食べられなかったからなあ……。

俺もスイーツ楽しみなんだ！今流行りのスイーツ男子って奴だよ！……すいません調子乗りました。甘いもの食べるのひさしぶりです。

「祇園にあるスイーツ店よ。味は毎日行列が出来るぐらいだからきつと美味しいはず！ほら、この店よ。」

「ああー!!ここ前から行きかけた所なんですよ!!楽しみみ!!ね?北上さん!」

「そうだね。大井つちここ最近スイーツ店スマホで調べまくってたもんね。」

「い、いいじゃないですかあ!!」

「確かに最近の大井はスマホでケーキやらパフェやらの写真ばかり見てたにや。あ、でもその中何枚かに提督の写真ムグツ!」

「多摩姉さん……?」

「い、いやー見間違いだつたにやー!そもそも最近の大井は出撃や遠征で忙しかったもんにやー!!」

「ん?お前、俺の写真でも持ってるの?」

「ぼっ!?!ばば馬鹿なこと言わないでくださいよ!?!そんなのももも持つてるわけないじゃないですか!!」

「ええ……写真って言ってもあれだろ?海軍高等学校の卒業式で撮った卒業写真だろ?あれなら俺も今フォルダーの中にあるぜ。俺も懐かしくなって偶に見返すんだよ。アイツらどーしてるかなー?」

「ごうちゃん、君には失望したよ。」

「なんでだよ!？」

しかもそれ時雨のセリフ!!ちゃんと使用許可取ってます？

「とりあえずもう電車来るから京都駅まで戻るクマ。でも提督、妹達を泣かせたら球磨が許さないクマね…。」

「え? あ、はい。」

いや、お宅の妹さんもそうだけど俺も泣かされたこと結構ありまして…主に大井さんから……。

男は強く生きるもんだクマ。うじうじしないでビシツとするクマ。

コイツ!? 直接脳内に……っ!?

まあ結構当たり前の事になってきてるので驚きもせずネタで返す刃り、俺もここに慣れ始めてるということを理解して少し萎えた。脱出への道のりがどんどん遠くなっていく……。

伏見稲荷大社から電車で京都駅まで戻り、そこからバスに乗り換えて祇園まで向かう。

移動中のバスの中でんやわんや……とはいかないのであまり大きな声にならないよう、周りに配慮しつつの会話。

叢雲達はネットで可愛い服を見つけたからデパートにあつたら欲しいやら間宮券が全然足りないやら結構会話が盛り上がっていた。

「実際、デザートは食べ物だし時が経てば駄目になってしまುತ್ತて考えればもつと間宮券を配って消費した方がいいと思いませんか?」

「大井はわかってないクマねー。間宮券ってのは焼肉と同じだクマ。毎日食べられたら間宮券のありがたみがどんどん薄れていくク



マ。やっぱりあれは偶に食べるのがいいんだクマ。」

「おいおい、そう言う割には球磨姉さん昨日一昨日と連日貯めた間宮券使ってアイス食べてじゃねーか。」

「そ、そりや球磨だつて2日連続でアイスが食べたくなる時だつてあるクマ!!」

「ほお、偶に、ねえ……。」

「……木曾、帰ったら覚えておくクマ。」

「いやいやいや!!姉さんそれは無しだろ!!」

「まあ結局の所、美味しいもんは毎日食えた方が幸せだと多摩は思うにや。う。」

「アタシもそう思うな。美味しいものは食べれる時に食べとく主義。」

「私は北上さんがいればいつもご飯が美味しいです。」

「アンタ達は本当にブレないわねえ……。まあでも頑張つて勝ち得た間宮券で食べるアイスが1番美味しいと私は思つてるわ。」

あーでも俺も美味しいものは食べれる時に食べておきたいかな。そう考えると入りたくない海軍だけどやっぱり間宮がいる鎮守府は大きいな。……まあ、ちよつと対価が大きすぎるというかなんというか……。

「叢雲は仕事終わりにビール飲んだらプハーツ!!つて言うタイプだしな。」

「あれ疲れた日にビール飲んだら大体の人が声出ると思うわ。てか馬鹿にしてんの?」

「いやしてない。むしろ出ない筈がないとすら思つてる。仕事終わりに温泉とか入ったらああ……つて声が出るぐらいの俺だし。」

「あーアタシもそれ分かるわー。」

「なんだか40〜50代みたいな会話してるにや〜。」

「北上さんは美少女です!!」

「うら若き乙女達が揃いも揃っておっさんじみてどうするクマ!もつとピシツとするクマー!」

「そう言う球磨姉さんだって今の内容全部当てはまってるけどな。」

「……木曾、明日も覚悟しとくクマ。」

「いやだって事実じゃん!!」

木曾も大分俺に近いところあるよな。ポロツと言つちやう所とか。

「ほらアンタ達、おしゃべりもその辺にしなさい。もうすぐ祇園に着くわ。本日のメイン、デザートの時間よー!!」

活き活きとしてますね叢雲さん。もしなんか俺がやらかしてもその時はデザートの事考えて頂けます?その間になんとか誤魔化しておきますんで。

問題は叢雲をやり過ぎすことが出来たとして第2、第3の奴、そしてラスボスの淀姉さんが控えているので恐らくそれまでには俺のライフポイントはゼロだろう。

誰が可能性永遠の0だ、可能性ゼロじゃないわ!0・01%ぐらいはあると信じてる!……多分あるよね。

永遠の0はいいぞ、涙無しには見られないけどな。

ともかく、永遠の0オススメですよ。本当に。映画版もドラマ版も漫画もあるからちやんと見て。

宮部さん、許してください……。

俺もこの鎮守府から生きて帰る努力をしよう……。

そんなこんなもあって京都駅からバスで20分ほどの祇園四条までやってきた。

「こここの通りが四条通りね。ほら、向こう見てみなさい。あれが有名な八坂神社。」

「ほーあれがねえ。」

各々、反応は様々だ。「あーそう言えばテレビで見たことある風景だね。」「あ、北上さん北上さん！舞妓さんですよ!!」「大井姉さん、あれは観光客で本物の舞妓さんじゃなムグツ!」「木曾、また面倒な事になるから放っておくにやう。」「にしてもまあ、相変わらず人が多いクマねー。」

まあ皆さんなんだかんだ楽しんでらっしやるみたいで……。

「とりあえずお店の方に行くわよ。道路の向こう側だから信号渡りましょう。」

「「はーい。」」

いや、小学校の遠足か。間延びした声で返事するな。

ぞろぞろと移動する俺ら。道の幅と通行人の都合上、二列縦隊で移動してる、やっぱり遠足感ある。

そして店の前まで到着した俺らが見たものとはっ!?

「あー……、並んでるねー。」

「毎日行列って言ってましたもんね。」

「まあ想像通りと言えば想像通りよね。」

勿論、多くの方々か並んでおられましたとき。

「まあでも並ばないとスイーツは食べられないクマ。」

「そうにやう、他の人が並ぶ前にさっさと列に並ぶにやう。」

おっしやる通りで。宝くじだつて買わなきゃ当たらない。脱走だつてしてみなきゃ脱走出来ないからな。

あ? 確率? 知らん。難易度VERY HARDって事だけは知ってる。

コイツらを掻い潜るのも大変だけどやっぱり淀姉さんが難関だな。

まあ今は仕事の事を少しでも忘れよう。今考えるべきは久方ぶりのスイーツで何を頼むかという事だ。

列に並ぶと店員さんからメニューを手渡された。待ってる間に

何を頼むか決められるし、店側も効率を上げられるし、人気店だからこそこのシステムだ。

「何にしようかしらねえ……あ、これ美味しいそう。私白玉パフェ！」

「北上さんは何にします？」

「あー……、アタシこれいいなーおいもさんパフェ。……でもほうじ茶カステラパフェも捨て難い。」

「なら私が北上さんと違う方頼んで半分ずつ食べましょうよ！」

「おお、良いねえ。」

「球磨は桜あんみつにするクマ。やっぱり期間限定と書かれてると頼んじやうクマ。」

「にやー!!それ多摩も狙ってたやつにや!!」

「なら俺は白玉ぜんざいとやらにするかな。」

スイーツを頼むだけでも大盛り上がりの我々ですわ。

あ、でも球磨の期間限定って書かれてると頼みたくなっちゃう気持ちめっちゃ分かる。

俺もどーすっのかなあ、限定ねえ……あー、この桜パフェっての美味そうだな。やっぱり人間、期間限定って言葉に弱いな。よしこれに決めた!

「んじや俺はこの桜パフェにするかな。」

「へえー、アンタのも美味しそうね。」

「だろ? やっぱり期間限定はなんかそういう効果があんだよ。」

「超適当なまとめ方だったけど分からなくもないあたりが不思議よね。」

期間限定には不思議な力があんだよな。

まあそこからなんだかん待つこと10分ぐらい……。

「7名でお待ちお客様大変お待たせ致しました! 4人がけの席に3名と4名様でお座り下さい!……ご注文はお決まりでしょうか?」

席の配置は3名側に球磨・多摩・木曾

4名側に俺・叢雲・北上・大井だ。

「私は桜あんみつクマ！」

「多摩もそれをお願いするにやー！」

「俺は白玉ぜんざいを。」

「私はほうじ茶カステラパフェを！」

「アタシはおいもさんパフェ。」

「私は白玉パフェをお願い！」

「そんなじゃこの期間限定の桜パフェをお願いします。」

各々自分の好きな物を頼んでホクホク顔だ。

こんぐらい笑顔の絶えない職場ならまだ良かったんだけどねえ

……どうしてこんなに凶暴化したのかやら。

「はい！桜あんみつがお2つ、白玉ぜんざい、ほうじ茶カステラパフェ、おいもさんパフェ、白玉パフェ、桜パフェがお1つずつですね？かしこまりました、少々お待ちくださいませ！」

お店の人に注文して後はスイーツが出てくるのを待つばかり。

にしても……

「次から次へと客が並んでいくなあ。そんなに有名な店だったのか。」

「私達今回運良いわよ、普通30分以上並ぶ事もあるって言ってたし、そう考えたら10分ぐらいで席に着けたなら早いもんだわ。」

「まあ有名も有名なお店ですからね。『京都 スイーツ』で検索すれば大体引つかかる人気TOP3ぐらいのお店ですし、本当に運が良かったですね！」

ほおー、そういうの聞いたらテンション上がっちゃうじゃない？

提督、テンションアゲアゲです!!

暫くすると注文したデザートが運ばれてきた。

「お待たせ致しました〜！桜あんみつ2つ、白玉ぜんざい、ほうじ茶カステラパフェ、おいもさんパフェ、白玉パフェ、桜パフェになります！」

「待ってましたクマ！」

「良いねえ〜！痺れるねえ〜！」

「きやく〜！美味しそう〜！」

皆さんテンション上がりまくりですわ。

お隣の叢雲さんも「この日をどれだけ待ち望んだ事かしら！やっぱりスイーツは人を幸せにするわね!!」とテンション上がりまくりです。むふ〜っ！と鼻の穴広げちゃってまあ。

そして俺の目の前にも念願の期間限定桜パフェが置かれた。

「お、おお……。これが桜パフェ……。」

う、美味そう……。やっぱりこれ選んで正解だったわ。

「……それじゃあ、全員スイーツは行き届いたわね？」

やっぱり食べ物は出来たて、作りたてが1番美味しいわ。では、満を持して……。頂きます！」

「「頂きまくす!!!」」

早速パフェをスプーンでひとすくい……。んん〜っ!!!うめ〜っ!!!

口の中に広がる冷たい桜の風味、いちごの甘酸っぱさ、フレークのカリツとした感じ……。いや、フレークは普通だわ流石に。

にしても「美味いつ!!」

「でしょう!ここを探しておいた私に感謝なさい!んふ〜!!美味しい〜!!」

みんな頬が緩んでますよ?なんというかみんな顔がモニョモニョした感じになってるし……。まあ俺も人の事言えてないと思うけど。

どんどん食べたいけどもつと味わって食べよう。そもそもそう簡単に来れる場所じゃないしな。

「提督さん、提督さん。」

ん?この声は……

「私達の分のパフェは無いのですか？」

「あんなに影ながらサポートしてきたのに……。」

「甘味……甘味……。」

「あー私達も甘いもの欲しいなーチラツチラ。」

「今なら提督さんのパフェひと口ずつ頂ければいいんだけどなく  
チラツチラ」

「頂ければ朝起こしに行く時も探照灯からラッパ目覚ましになる  
んだけどなくチラツチラ。」

お前達は?!いつもの5人組妖精さん+探照灯妖精さん!?

どっかにいるとはおもってたけど、ほんとにどっから湧いて来る  
のかね君達は?

「私達はバッグの中。」

「私は上着の裏。」

「私達は両ポケットの中。」

あなたらのパフェに狙いを決め……いや風邪薬のCM  
じゃねーんだよ。

「ちなみに私は提督さんが歓迎会の時に日向さんから頂いた瑞雲  
で追いかけてました。」

本当に神出鬼没な方達ですなぁ!!なんか驚かなくなったよもう。

「それで……パフェは頂けますでしょうか?チラツチラ。」

「わざわざ新しいのを注文しなくても提督さんのを少し頂ければ  
いいですよチラツチラ。」

「頂けなければ後で何かが起こるかもチラツチラ。」

チラツチラチラツチラうるさいなお前ら!!

てか最後!さり気なく怖いこと言ってんじやねーよ!!

何する気だ!?

「ではパフェを頂けますか?」

はい、分かった分かった。はい、やるから欲しいやつはせいれく

っ。

「二はーい!!!ササッ!!」

こういう時は本当に素早いよね君達……ほれ、あーん。

「あーん……はく癒されます、感謝ですね。」

「流星に気分が高揚します。」

「なんか、もう……いっぱいですわ……。」

「はい!力が湧いてくるようです!」

「充分かと。」

「ありがたくいただきます。」

なんか補給ボイスって感じしましたね。まあなんでもいいか。とりあえず6口分で満足してくれるなら良い方か。妖精さんがそんなに大きくなって良かったぜ。大きな妖精さんってなんすかねえ……。

まあそれでも俺の期間限定桜パフェは減っちゃったがな。とほほ……。

ガックシと肩を落としていると横からアイスの乗ったスプーンが現れた。

「そんなにガツカリしないの。ほ、ほら、私の少し上げるから……。」

「え?いいの?」

「は、早くしなさいよ!今も溶けてるんだから!」

「い、いやそうじゃなくて……これお前のス」だああー!!!さつさと食べなさい!!!」ムグウツ!!」

スプーンを口にねじ込まれるって経験懐かしいよね。

小三の頃、苦手だったプチトマトを淀姉さんからスプーンで口にねじ込まれた記憶が……。あ、でもこのアイスめっちゃうめえ……。

「美味しいなこれ……サンキュー叢雲。」

「ふ、ふんっ!まあそれぐらい良いわよ!」

多分叢雲はそういうのを気にしないタイプなんだそういうことにしておこう。意識?してないっス全然そんなことないっス。



「(お、隣の席が何やら甘ったるい空気になってきたクマ!)」

「(甘ったるいけど案外悪くない感じにや!あ、木曾、野暮ったい事は今言わない方がいいにや。今何か言ったら多摩達まで巻き添え食らうにや。それだけは勘弁願いたいにや。)」

「(さ、流石に出来ねーよ!)」

「ほうほう、そういう事なら北上さんもこうちゃんにひと口あげよーじゃないか。ああ大丈夫、アタシは気にしないタイプだからさ。ほら、おいもさんパフエ。」

「ふ、不本意ですけど、私からもちよつとぐらい分けてあげますっ!!私も気にしないタイプなので!!」

正面に座る2人からもスプーンが伸びてきた。

え? いいの? 君達本当に気にしないタイプ? あーでもそっか、軍隊学校いると回し飲みとか普通にあつたしその影響もあつて気にしないんだろうな。うん。

「じゃ、じゃあまず北上のから貰おうかな。」

「ほいほいどぞ。あーん……。」

さつまいもとバナラアイスの甘さが見事にマッチして非常に美味しい。おいもさんパフエって言うからちよつと警戒してたんだよね。しばふ村で取れたおいもだとみんな似たような顔になるって伝説があるから……。

「うん、これも美味しいな。さつまいもとバナラアイスの甘さが丁度いい。」

「でしよ〜?」

「じゃ、じゃあ次は私のを……。」

ぱくりと大井のほうじ茶カステラパフエを頂く。

こちらにも非常に美味しい。ほうじ茶のカステラと抹茶アイスがこれまた美味しい。

「あー、これも美味しいな、しかもカステラとアイスで新食感って感じがする。」

「で、ですよね!!私もそう思いました!!」

三者三様のパフエを食べさせてもらった訳だし俺のパフエも少

しあげるか。

「ほれ、お返しだ。俺のパフェも少し食っていいぞ。」

スツと中央に俺の期間限定桜パフェを送り出す。

「みんなで適当に食べてくれ。あ、ちよつとは残しといてくれよ？」

しかし、3人ともこちらを見てパフェには手を付けない。

「ん？どうした？要らないのか？」

すると北上がケラケラと笑い出す。

「いやいやこうちゃん、私達もこうちゃんに食べさせてあげたし、こうちゃんに食べさせて貰いたいなーってね。」

「ま、まあ妥当よね！」

「そ、そうですね！北上さんが言うなら仕方ないですね！」

「え、ええ〜？」

「妖精さん達、これを狙ってたクマか？」

「ふふふ、球磨さんもこの席配置、狙ったとしか思えません？」

「計画通り（です）（クマ）……。」「」

## 就活戦争20日目

やあおはよう皆さん、舞鶴第2鎮守府でい・ま・は提督をしている相良航希だよ。

ん？京都？ああ、前の休みのやつね。何とか生きて帰ってこれたよ。

因みに今は6月、あの京都お出かけから3週間ほど経っている。どこまでやってたっけ？あースイーツ食いに行つた所か。あの後も色々あつたよ、錦市場に行つて食べ歩きしたり、駅中のデパートにみんなで服買いに行つたりもした。

『この服どつちが良い？』っていう質問に

『どつちも似合う』って回答はNGだぞ？

溜息か蹴りかビンタかチョップかねこパンチかくまパンチ？が飛んでくるぞ。上から来るぞ気をつけろ！

ソースは俺だ。

んでそつからだ。折角鎮守府の外に来てるんだからやる事は1つ、逃走しかない。

淀姉さんも居ない、連中は可愛いお洋服に夢中。あ、木曾はクル系な服見てた。けどめっちゃラッチラ可愛いお洋服も見てました。可愛い。

まあそんな機会をこの俺が逃すわけがなからう。みんなには「ちよつとトイレ行つてくる」と言い残し、意気揚々と駅の改札に向かつてサラダバー……違う違う、サラバダーする予定だった……筈なんだけどなあ〜おかしいなあ〜？

なんでみんな改札に先回りしてるのかなあ〜

ヤメローヤメロー!!HA☆NA☆SE!!

つて感じに捕まりましたとき。

後で聞いたらかの有名なトラブルメーカー青葉さんが付けてたらしい。速攻でメールが行つたらしいですよ？俺が改札方面向かつた瞬間。

証拠写真もバッチリだ！因みに叢雲達のローアングル写真や際

どい所の写真もバツチりだったのでその後2人仲良く鎮守府に帰ったら反省室なる場所で叢雲達から肅清(説教)されました。因みに青葉のカメラデータは淀姉さんによって消されました。青葉ガチ泣きだった。某議員の如く「アッアッアッ!!!この鎮守府を変えたい!!!」ってな感じになってた。

京都のお出かけはそんなところだ。

じゃあ今日は何してるかと言うと……

脱走だ。お昼を食べ、執務を再開して1時間後、『こんな量の書類やっつけられるか!!俺は逃げる!!』と言うことで、秘書艦だった夕立にお茶を入れに行ってもらってる間に抜け出してきた。

『お宅も懲りないねえ……。』って声が聞こえた気がしたけど俺は何があっても諦めないぞ。何度収容所(鎮守府)に連れ戻されてもいつかは外に出て、民間企業で働くんだからな!!

京都の次の脱走計画は海から泳いでの脱出を図ってみたが逃げてから10分後、対潜装備で固めてきた淀姉さんを含むいつもの連中が追ってきて余裕で捕まった。反省室に連行された。

その次の計画は地面に穴を掘り、地下トンネルを掘ってそこから脱出する計画だった。

トンネルの名前はトム・デイック・ハリーと名付けよう。

冗談だ、正直三本もトンネルを掘っている余裕は無かったのだから俺が住んでる家のストロブみたいな所の下から鎮守府の外へ出る一本だけ掘った。

ストロブ下に掘る理由?何となくそこに掘らないと行けない気がしたからさ。詳しい事は映画『大脱走』を見てくれ。

そんな時は妖精さん達に賄賂(お菓子)を渡して手伝って貰ったり、鎮守府を囲む塀の外に逃走用のバイクを置いておいたりしてもらった。

暇が出来たら穴を掘り、掘ってない時は偽装の為、穴を隠すようにその上にストロブを置いて穴を隠蔽していた。

着々とトンネルを掘り進め、もうすぐ開通というところでアクシ

デント発生、よく部屋にやつてくる夕立がよりにもよってストーブ横ですつ転んでしまい、持ってたお茶を零した。

ここでバレる訳にはいけないので慌てて「俺が拭くから下がってろ」と言ったが、夕立と一緒に来てお茶を入れていた時雨が雑巾を持って登場。

バレないように祈ったが祈りも虚しく「ん？水の滴る音……？零れたお茶が地面に染み込んでいく……まさかっ!？」とストーブを退かされてしまいバレた。

こちらも勿論反省室行き。

その後トンネルは俺が反省室でお説教されてる間に埋め立てられた。

んで今回!!余りにも突発過ぎたので作戦らしい作戦は考えていなかったが散歩してる体で自然に外に出る作戦だ。

今日はそもそもこの日にやらないでいつやるかと言うぐらい好条件なのだ。淀姉さんは大本営に業務報告に行ったので今鎮守府に居ない。

出撃と遠征は球磨、多摩、白露、村雨の4人が遠征。

霧島、祥鳳、瑞鳳、木曾、白雪、朝潮の6人は輸送船団の護衛任務で出撃。

大井、北上、叢雲は浜風を含む4人で対潜哨戒だ。輸送船団の進路に敵潜水艦を目撃したと他鎮守府からの連絡があったので先回りさせた。

時雨は今日風邪を引いてダウンしてる。朝飯後におかゆ持って様子見に行ったら「いつか、咳は止むさ……。」とか言って元氣そうだったからおかゆ置いて帰ろうとしたらすんごい咳き込み始め「提督……苦しいよ……。」とか言うんでおかゆ食べさせて寝かせた。ついでに看病役としていつもの妖精さん5人組を置いてきた。

病人の割にキラキラしてるという謎状態の時雨さんは不思議でした。

それで秘書艦は先程も言ったが夕立だ。

俺が逃走しても実質行動出来るのは夕立のみ、これをチャンスと

言わずになんと言おうか。

だから今回こんなガバガバ作戦だが成功率は高いのだ!!

さて、まずは夕立を攪乱しなくては行けない。

最初から出口に向かってしまおうと速攻で外に行ったことがバレてしまうので、夕立に出会わないようにどこかに寄りつつ鎮守府の外へ出る、完璧だ。ガバガバだけど完璧だ。

ついでに少しでも脱走発覚を遅らせる為にも執務室に『明石に呼ばれたから工廠に行くってくる、ちよつと待ってて。』とメモ書きを残しておいた。これで暫く夕立は動かないだろうさ。

とりあえずこの鎮守府の癒し、間宮&伊良湖に会ってアイスクリームでも食べよう。なんだかんだ間宮券まだ使ったことないんだよな。

面倒な奴に捕まる前にさつさと食堂に……

「お、提督じゃ〜ん!どったのこんな所で?」

「ご機嫌麗しゆう提督、あら?でも今は執務されてるのではなくて?」

現れたのは鈴熊コンビ。

おーい、フラグ回収早すぎんだろ。早速面倒な奴らが現れたぞ。

「よ、よう、鈴谷と熊野。いやなんだ、休憩がてら間宮にアイス頼もうと思つてな。」

今は午後1時過ぎ、休憩するには早いかもしれないが無性にアイスを食べたくなったということにしておけば大丈夫だろう。

「お、奇遇だねえ!鈴谷達もこれから間宮アイス食べに行くところだったんだ!」

「よろしければ提督もご一緒にいかが?」

ま、まあ面倒な連中に絡まれるという誤算はあったがこのまま行くか。逆に「やっぱり止めとく。」なんて言ったらそれこそ不審だ。

「ならありがたくご一緒させてもらおうかな。それに、誘われてて別件で用事があるならあれだが何も無いのに断るのは失礼だし

な。」

「そうですね、この私からの誘いなんて滅多になくてよ？もつと感謝してくださいませ。」

「熊野ったらそんなこと言っちゃって。提督誘おうって言ったの熊野からじゃくん！しかも提督が間宮券持ってなかつたらどうするって言ったら『私のMVP間宮券を使えば最中とアイスが貰えますし、どちらか提督に譲れば3人で食べれますよ。』って!!」

「ちよ!?ちよちよちよつと鈴谷!?何を言い出すのかしら!？」

え、熊野優しすぎ……。ちよつと涙出てきた。

「そうだったのか熊野、ありがとうな。まあでも大丈夫だ。俺もちゃんと間宮券持ってきてるし。お前のMVP間宮券はお前が使うといい。」

熊野は恥ずかしそうに「別にどちらか譲って差し上げてもよろしかったのですが……」と言ってくれた。

優しい。熊野優しすぎる。でも補給の度にフルコースエステは出来ないから許してくれ。

「んじゃ、そうと決まれば食堂までレッツゴー!!」

鈴谷が飛びついてきた拍子にポヨンとした感触が腕に……まさか……これは……っ!?鈴谷の胸部装甲!？」

「鈴谷!貴女も少しは淑女らしい行動をとりなさいな!急に大きな声を出したり、飛んだり跳ねたりしてははしたないですよ!!」

あの、今も腕の横で鈴谷さんの胸部装甲が飛んだり跳ねたりしてるんですが……結構、大きかった……です。

「ハイハイ、分かりましたよ。もう、熊野ったら今どき大きな声出したりジャンプぐらいするっしょ。……ん?提督?どうかした?」

「いやなんでもありません。」

鈴谷達は気づいてないみたいで助かりました。

――――

一方、その頃執務室……

「艦娘音頭で提督とくおてんとお日様、わくらくつてくるっつぽ

い！」

ガチャ「こーちゃん！お茶持ってきたっばい!!……あれ？こーちゃん？」

お茶を頼まれたのだが頼んだ本人であるこーちゃんが執務室に居ない。

お茶の載ったお盆を机に置いた時にメモ書きが目に入った。

「メモ？なにになに……『明石に呼ばれたから工場に行ってくる、ちよつと待ってて。』っばい？」

それは仕方がない、まあ大した事で無ければ10分15分で戻ってくるだろう。

「それなら私も少し休憩しようかな〜ノビー。にしても……ふわあ〜、今日は暖かくて眠くなるっばい……スヤスヤ。」

お昼も食べたし少し眠くなってしまった。ちよつと寝るだけ。こーちゃんが帰ってくるまでの間。そう、ちよつとだけ……。

—————

「はい、お待たせしました！間宮さんと伊良湖特製、アイスクリームと最中です！」

そんなこんなで間宮アイスと伊良湖最中を食べるため、鈴熊コンビと共に食堂にやってきました。

そしてこれが海軍で噂の間宮アイスと伊良湖最中……

「ひゃっほい！久しぶりの間宮アイスと伊良湖最中!!これでテンション上がらない奴はいないっしょ!!」

「私、色々なアイスクリームや最中を食べてきましたが、やはり、間宮さんと伊良湖さんの作る甘味は一番ですよ！」

「うふふ、ありがとうございます！伊良湖ちゃんと一生懸命作ってますからね。どちらも出来たての方が美味しいですからどうぞ食べてください！提督さんもどうぞ！」

そんじやお言葉に甘えて……

「「頂きまーす!!」」



………暫く言葉失った。アイスクリームで美味しいって言うともんなハー○ンダッツとかその辺想像するよね？ハー○ンダッツの美味しさを1と例えるなら間宮アイスが1583674972倍ぐらい美味しかったと言う感じ。流石に数字を適当にし過ぎたけどとりあえずそれぐらい美味しいという事をみんなには伝えたい。

「提督さん、お口に合いませんでしたか？」

「いかんいかん、間宮が心配そうにこつちをてるじゃないか。めつちや美人。」

「いや、すごい美味しくて言葉を失ってた。」

「でしよ〜？間宮さんのアイスはちよ〜美味しいんだからさー！」

「間宮さんのアイスも美味しいですけど伊良湖さんの最中も絶品でしてよー！」

ほうほう、それは是非とも食べてみなくては……

「では早速……。」

………うん、最中ってなんだっけ？

いや、そういう事じゃない。最中は分かる。ただこの最中、美味しすぎて市販の最中ってどんな味してたっけ？ってなってる。

「提督さん、どうでしょうか？」

「……めちやくちや美味しい。こんな美味い最中初めてだ……。」

「良かったああ〜!!!間宮さん良かったよおお〜!!!」

「うんうん!!頑張ったわね伊良湖ちゃん!!」

2人共なんて美味しいものを作るんだ！これじゃあ外でアイスクリームや最中食べた時コレジャナイ感になって食べられなくなるだろ!!

美味しすぎてありがとう!!!

「ん〜〜!!!やっぱこれっしよ〜!!間宮さんのアイス最高〜!!」

「伊良湖さんの最中も非常に美味ですわ〜!!」

3人ともスプーンを動かす手は止まらない。

そして気がついた時には……

「あー……無くなっちゃったかあ。」

「この時が1番虚しくなるのですわよねえ。」

俺の器も皿の上からもアイスクリームと最中は無くなっていた。熊野が言うように虚無感ある。

「まあでもまたMVP取ればこの間宮アイスが食べられると思えば頑張れるっしょ!!」

「そうですね!鈴谷、次のMVPはこの私が頂きますわよ!!」

「お、熊野も言ってくれるじゃん?なら早速演習場で自主練で1V1といこうじゃん!!」

「勿論受けて立ちますわ!間宮さん、伊良湖さん、ご馳走様でした。またMVP取ってアイスと最中食べに来ますわ!」

「はい、またお待ちします!」

鈴熊コンビ仲いいんだよな。いやほら、歓迎会での酒の一件があったから大丈夫かな?とか思ってたんだけど喧嘩するほど仲がいいとも言出し、やっぱ酒の席つてのもあったからな。

「あ!しれーかんだ!!」

「司令官さん、間宮さんも伊良湖さんもこんにちはなのです。」

「司令官、間宮さん、伊良湖さん、ごきげんようです。」

「Здравствуйте　こんにちは提督、間宮さん、伊良湖さん。」

第六駆逐隊の4人と

「お、なんだなんだ提督じゃねーか!間宮アイス食ってたのか?」

「天龍ちゃん、まずは挨拶からでしょ?提督、こんにちは。」

間宮さん達もこんにちは。」

天龍型の2人の天龍幼稚園のみんなだ。

「ああ、みんなこんにちは。今日はどうした?」

「これからみんなでドロ刑をしようって話になったのです。」

「ただ人6人だからもっと人数が欲しいなあーと思ってたところなのよ。でもドロ刑なんてレディーらしくないわー!」

「……暁、婦警さんも女怪盗もレディーだと思わないかい?」

「た、確かに……大人のレディーって感じがするわね……。」

「でしょう？ならドロ刑はレディーの遊びだ。」

「確かに！し、仕方ないわね、レディーたるものドロ刑なんて朝飯前よ!!」

「まあもう、お昼も過ぎたから夕飯前かしらね。」

「アハハハハー!!」と楽しそうな笑い声。

「やっぱり天龍幼稚園は微笑ましいなあ。」

「てな訳だ、提督も参加してくれや。」

「え!?!俺かあ!?!」

「……司令官さん、駄目でしたか?」

「仕方ないさ、提督も執務で忙しいんだ。」

「ぐあああ!!そんな目で俺を見ないでくれえ!!」

「分かった1回やってそろそろ脱走する、そうすれば丁度いい時間だろう。」

「分かった分かった、ただし1回だけだからな?」

「六駆のみんなから歓声上がる。」

「ここまで喜ばれるんじゃないわ。」

「お、司令はんやないかく。みんなもこんな集まってどないしたん?」

「お、黒潮に陽炎、不知火もいい所に来たな!これからドロ刑する事になったんだわ。けど人数が足りなくて困ってた所なんだよ。つー訳でだ、お前達も参加してくれ。因みに提督も参加する」

「お、提督も参加するの?それは燃えてくるねえ!!……にしてドロ刑かあゝ懐かしい!OKよ!陽炎型3名、参加するわ!今日浜風が出撃しちゃって暇だし3人で演習場行こうと思ってたところだったのよね!」

「演習場と言えばさつき鈴谷と熊野も演習場に向かったぞ。」

「でしたら演習場に行つて鈴谷さん達も呼んできましょうか。」

「そうね、それで道すがら会った人達にも声掛けてくるわ!じゃ、ちよつと待ってて!」

「なんか思ったよりも人が増えそうだなこのドロ刑。」

「正直10人ぐらいで始めてサラツと終わりたかったのだが……。」

あ、そうだ。このドロ刑に乗じてそのまま鎮守府から脱出すればいいじゃん！俺あつたま良い〜!!

「こんな機会だし間宮と伊良湖もどうだ？」

「ええ!? 私達ですか？」

「そうよ間宮さん達も一緒にやりましょー!!」

「みんなでやる方が楽しいのです!!」

この子達に誘われて断れる人はそういない。

「みんなに誘われちゃ断る訳にはいきませぬ間宮さん。」

「あはは、走るのなんて久しぶりだから私走れるかしら〜?」

次回に続く!!!

## 就活戦争21日目

「第1回、舞鶴第2鎮守府主催、チキチキ!?ドロ刑対決!!!ドンドン  
パフパフ!!!いえーい!!!」

ええ……。どうしてこんな事になってるの……?」

「司会は工作艦明石と……」

「どもっ!いつもお馴染み、重巡青葉がお送り致します!!」

「ちよいちよいちよい待てー!ーい!!!」

「ちよつと何よこうちやくん、今盛り上がってる所なのに。」

「そうですねよ司令官!とりあえず企画を説明するのでもうちよつと待っててください!」

「あ、すみません。」

なんか勢いで謝っちゃったけどこれ俺謝る必要無いよね?

「……では気を取り直して、今回の企画を説明しちやいます!!」

「今回行う競技は皆さんご存知のドロ刑です!!事前に確認したところ、皆さんルールはご存知のようでしたので端折らせて頂きます!参加者の皆さんにはこの説明が終わり次第、艦種別にくじ引きで警察役と泥棒役に別れてもらいます!」

多分ドロ刑だったりケイドロだったり地域によつて違うかもしれないけど内容は一緒だろう。

念の為ドロ刑のルールを説明しておこう。泥棒側と警察側に別れてゲームスタート。泥棒側はひたすら逃げる。警察側は逃げる泥棒を捕まえる。捕まった泥棒は1箇所を集められる。

捕まったら終わりでないのがドロ刑の面白いところだ。泥棒側には捕まった泥棒を助けられるというルールがあり、逃走中の泥棒が捕まった泥棒にタッチ出来れば全員解放だ。

警察の勝利条件は泥棒全員の逮捕、一方泥棒側の勝利条件は一定時間逃げ切ることが出来れば勝利だ。

もしドロ刑やる時はちゃんと泥棒側の勝利条件である一定時間逃げ切るってルールを忘れるなよ?じゃないと泥棒側になった奴らエンドレス地獄になるからな。

「間宮さんと伊良湖さんにはバランスを保つため2人で引いても  
らいますね〜!」

まあ非戦闘員である間宮、伊良湖は妥当だと思う。

……というか非戦闘員というカテゴリなら俺もそうだと思うん  
ですがそれは。

「あーそれで〜こうちゃんさ、急でひじょーに申し訳ないと思っ  
てるんだけど、こういうイベントって景品があった方が盛り上がる  
と思うのよ〜それでー……間宮券、2、3枚とか〜出してもらえませ  
んか……ね?」

……はあく、この姉はさあ……。

「……まあ、分かった。今回は俺も参加してるし、景品があった方  
が盛り上がるってのも納得するから景品としてMVP間宮券をだそ  
う。ほら、じゃあこれなMVP間宮券。」

「ありがとう!!こうちゃんありがとう!!」

「さてさて、今回はなんと景品が出るみたいですよ!明石さん一  
体景品は!」

「はい!今提督からもOKが出たので問題無いです!今回の景品  
はMVP間宮券〜!!」

間宮券を獲得するには警察側は泥棒を最も多く捕まえた人、泥棒  
側は最も多く味方を脱獄させた人、脱獄が無かった場合、逃走時間が  
最も長かった人となります!」

参加者からは「MVP間宮券がGET出来れば私達のアフタヌー  
ンティーもGorgeousになりマース!」とか「お姉様の為、こ  
の場に居ない霧島の為、気合い、入れて、行きます!!」やら「流石に  
気分が高揚します。」とか「MVP間宮券、ここで失う訳には……。」  
なーんて声。1人間宮券の為に中破して無い?

「しかーし!!捕まえた数、逃げれた時間だけだと性能差もありま  
すので追加のルールと景品を出しますね!」

「そう、泥棒もただ逃げるだけじゃつまらない。ですのでこの明  
石、お宝を用意しました!それは『提督に1つお願い出来る券』でー  
す!!こちらを4枚用意しました!!」

……………は？

「では追加ルールの「ちよい待て待て待てー！！！！」こうちゃん何よさつきから。」

「いや明希姉、聞いてないわそれ。間宮券は納得したけどそれは聞いてないわ。」

「こうちゃん、お姉ちゃん特権です。」

「いやいやいや、知らねーよ!?お姉ちゃん特権なんて!!」

全国の姉を持つ弟さん達よ、姉って生き物は横暴だよな…………。

「こうちゃん、今ここにこうちゃんが中学生だった頃のノートがあるのだけど。」

そ、それはっ!?俺の黒歴史が書かれたノート!?馬鹿な!?全て処分した筈だ!!

だがあの痛々しい思い出すのも恥ずかしい思い出が書き込まれたノートがあるのは事実だ…………っ!!まさかこの姉…………

「返答次第ではこれを公開することも。」

人はそれを脅迫と言います。流石俺の姉、やる事が鬼畜すぎる。

「くっそ!!卑怯だぞ明希姉!!!」

俺も明希姉の恥ずかしい話を暴露しても…………駄目だ、コイツの恥ずかしい話をしてても本人が恥ずかしいと思っただけでない可能性がある…………。

…………。流石あの母さんの娘だ…………。

「大丈夫大丈夫、使う前に私がOKかOKじゃないか審査するから!問題ナツシング!!」

「いや、そこは俺が判断するべき問題だと思っただけ…………。」

「じゃあこれもOKね!ありがとう!」

会話にならなかった。もう拒否権ないじゃん…………。

「長門、何とかしてくれ。」

隣にいた長門に言うだけ言ってみる。

「すまんな提督、私でもこれを收拾つけるのは難しい。」

ですよねー。そういう長門さん何か楽しんでない?

「フフ、警察になれば駆逐艦達とキャツキャウフフ出来、泥棒になれば駆逐艦達とキャツキャウフフ出来る…………最高じゃないかド口刑

……っ!!」

……聞かなかったことにしよう。というか知りたくない。その時参加する長門以外の艦娘達の間では謎の緊張感が辺りに張り詰めていた。

『普段はいつものメンバーばかり提督にあれこれ出来てるけど私達にはあまり機会の無い事……』

『私達も秘書艦とかやってみたいし、これは良い機会じゃないかしら……?』

『偶には私達にも良いことがあってもいいよね?』

『となれば……』

『何としてもチケットをゲットしなくては!!!』

「では改めて、追加ルールの発表です!この券を鎮守府の何処かに隠しました!泥棒はこれを探しつつ警察から逃げてください!そして最後までそれを持っていれば獲得!!対して警察側は今回参加している司令官を捕まえる事が出来た人がチケット獲得となります。」

「あ、ですので今回司令官は自動的に泥棒側となります!」

え?それ俺の負担デカ過ぎない?

「ですが、それだと司令官の負担や全員で提督を捕まえに行つてすぐ司令官が捕まるという事態も考えられますので司令官をちよつと強化させてもらいます!!」

え、何強化つて?体でもいじられるの?怖いんだけど。

「大丈夫よこうちゃん、ほらこれ着て。」

手渡されたのはなんか俺のやってたゲームで見たことあるようなスーツ。

「……んでこれは一体何さ。」

「明石さんお手製、特製スーツよ!クローク機能に自分そっくりのホログラムを作り出す機能なんか付けときました!!」

「思いつ切りタイタンフィールドのパイロットじゃねーか!!!」

道理で見た事ある物だと思つたよ!!再現度高ーなおい!!!

「これ使うんだから簡単に捕まらないでよく?あ、そうそう、二段ジャンプや壁走り、能力の連続使用とか出来ないから気をつけてね」



？」

あのさ……それはいいんだけど……

「……こういうアイテムをさ、艦娘用に作れば戦闘が凄いなになるんじゃないかと思うんですよ明石さん。」

「いやー提督さん、良いところに目をつけましたねえ。実は実戦用に作ろうとすると何故か失敗したり、直前で故障するんですよ。本当に謎。ただどお遊び目的に作ると何故か出来ちゃうの凄いやね私！」

さすが明石の力だ、謎過ぎる。これを能力の無駄遣いと言わずになんと言おうか。てか褒めてはいない。

そんな事は何処吹く風、明石はルール説明を続ける。

「提督の強化はこんな感じですね。じゃあ追加ルールの続きを説明します！もし、チケットを持った泥棒が警察に捕まったとします。泥棒を捕まえた警察はチケットを押収という事で自分の物にする事が出来ます！」

すると参加者から「えーそれ警察めつちや有利じゃくん！」や「これはもう警察一択でしょ」とブーイングの嵐

「皆さんの仰る通り、このままだと警察の方が旨みがありますよねえ……しかしッ!!泥棒にも旨みはありますよお！」

あ、一応あるのねそういうの。

「泥棒だって逃げるだけが脳じゃない、ならばどうする!!スタイリッシュに戦うのです!!私も記者の時、戦わないといけない場合もありますからね!!」

そして明石が再び机の下から何かを取り出す。

「というわけでこちらも追加ルールと追加アイテムですね!このペイント銃を鎮守府の何処かに設置しておきました!もし、このペイント銃に撃たれた警察は1分間行動不能となります!」

「そしてここが泥棒の美味しい所!!このペイント銃で行動不能にした警察がチケットを持っていた場合、それを略奪出来ます!!」

「自衛するもよし、味方を守るために使うのもよし、逆に攻めに出

て警察を狙うもよし!!」

これには参加者も「おおっ!!」と声上がる。

「ただーし!!」と明石は歓声を遮るように声を上げる。

「このペイント銃は1発しか弾が入りませーん!!ですので使う時は考えて使いましょ!!」

1発か……まあ防衛手段があるだけマシか。泥棒はひたすら逃げる事しか生き残る手段が無いしな。

「あ、そして警察側になられた方、捕まえた泥棒を集めて置くエリアに看守とか言つて張り付いたままにいるの無しですからね。」

あーそれ大事。居たよなそういう奴。あれはズルかった。

とりあえず10メートル以内に居ていいのは泥棒を追いかけている時を除いて10秒間という事に落ち着いた。

「それともう1つ、相手を傷つけない装備であれば使用をみとめますね!何を装備するかはお任せします!」

相手を傷つけない装備ねえ……いつも使ってる無線機とかか。分かった、探照灯がある事は俺も理解したからアピールしてくんな150cmはもういいんだ探照灯妖精さん。

あ、そうだ。

「明石、このチケット俺が最後まで持つてたらどうなんのよ?」

自分で自分をお願い聞いてもらうってどんな状況?

「あー、そうですねえ。いつけないそこ考えて無かったなあ。」

企画者、割と適当ですね。

「じゃあ、艦娘の誰かにしれーかんがお願い出来るって事にすればいいんじゃない?」

そう発言したのは初期参加者の雷だ。すまんウチの姉がルール魔改造しちゃって……。

「お!雷ちゃんその案ナイス!!採用!!てな訳でこうちゃん、もし逃げ切れたら艦娘の誰かに何かお願いしてもOKよ……あ、でもエツチなのはダメよ?」

……何を言い出すかと思えばこの姉は……間宮さんに膝枕して貰いながらお昼寝するのはOKだろう。……多分な。

まあそれは半分冗談として勿論脱走の為に使う。

これを使って淀姉さんに……

『艦娘に1つお願い出来る券？海軍を辞めるや脱走関係じゃ無ければどうぞ。』

……うん、こうなるな多分、というか確実に。

まあお願い出来る券なんて口約束みたいなものだしなく、後の事考えるとあんまり大っぴらな事言って警戒させるのも面倒だしなあ……。

となると間宮膝枕お昼案が有力……？

「ルール説明はこれぐらいですね〜！範囲は鎮守府内で制限時間は1時間。今2時半なので3時から開始とします!!」

1時間……通常20分か30分の所1時間か。まあ普段から動き回ってる艦娘基準で考えれば妥当なのか。

となるとこれは苦しい戦いになりそうだ……。だがせめてもの休み獲得の為に俺も手を抜かんど!!

幸い明石が作ったパイロットスーツがある。どこまで使えるのかは分からんがあるのと無いのでは大違いだろう。

俺は誰にも捕まらねえ!!間宮券も頂いて艦娘にお願い出来る券をゲット!!間宮膝枕お昼で体を休めて脱走に繋げる!!完璧だ!!

……あれ？俺このゲームの途中で脱走する予定じゃなかったっけ……？ああでも間宮膝枕お昼は捨てがたい。

どうする!!どうする俺!?!どうする!?!

そんなくだらない葛藤に苛まれる提督さんでした。

~~~~~  
工廠で作業をしていたら黒潮さんがやって来て天龍を含むいつもの子達とこうちゃんてドロ刑を開催すると知った私。

お祭りは良いですよね〜！私お祭り大好き！

お祭りじゃないけど、みんなでなにかするのって楽しいじゃないですか？

私と同じようにネタの匂いを嗅ぎ付けた青葉もやって来た様子なので早速企画を立てて単なるドロ刑をイベントに仕様変更。

急な話だと言うのに結構な参加者が集まった。

出撃、遠征組を除いて伊58、伊19の潜水艦2人組は今日が休みという事で何処かに出掛けた。

潜水艦2人組、特にごーやが嬉しそうに朝、出掛けて行ったのを覚えてる。

まあウチの鎮守府はそこまで潜水艦達に酷いスケジュールの遠征はさせてない。

ごーや、いくの2人は去年まで別の鎮守府に所属しており、ブックでは無いものの結構なスケジュールをこなしてたらしい。

この鎮守府に来た時の第一声が「オリヨクルはもう嫌でち(なの)……。」だった辺り結構厳しかったんだろう。

やっぱり程々の休みは大事ね。

とりあえず今回は参加しないのはまず司会の青葉、撮影兼音声の衣笠。

……。衣笠いつも裏方やらせてごめん。今度前に出すよう掛け合っておくから。

《よろしくお願いします。》

あ、わざわざパネルでどうも。衣笠からアピールあったって言うときはますね。

後不参加なのは……。風邪の時雨ちゃん、今大本営に行ってる淀と秘書艦だが現れなかった夕立ちちゃん……。執務室にいてもこんだけ賑やかなら出てくると思うんだけど、出てこない辺り……。お昼寝してるな？まあ今日はいい天気で暖かいし分かる分かる。

提督含めて71人、遠征出撃不参加が21人で残りは参加だから丁度50人、25対25のデスマッチね!!

……。私達からの説明も終わりくじ引きタイム。

戦艦は9人、長門・陸奥・金剛・榛名・扶桑の5人が警察、比叡・

伊勢・日向・山城の4人が泥棒となった。

運命は2人を分かつのね、扶桑さんと山城さん……。

空母が10人、加賀・瑞鶴・蒼龍・隼鷹・大鳳の5人が警察、赤城・翔鶴・飛龍・龍驤・飛鷹の5人が泥棒となった。

隼鷹が警察って言うのが不思議すぎてしようがない。飛鷹と逆でしょうが。まあ、本当に警察するわけじゃないから関係ないといえど関係ないですけど。

重巡は4人、鈴谷・古鷹が警察、熊野・加古は泥棒となった。

どちらもその役の格好が似合うなあ。鈴谷・古鷹コンビには際どいミニスカポリス、熊野・加古には怪盗、男装の麗人に是非ともなつて頂きたい。

軽巡は5人、元々の参加者、天龍・龍田に加え神通が警察。夜戦大好き川内と艦隊のアイドルこと那珂ちゃんが泥棒だ。

警察が怖すぎる。あ、すいません、フフ怖の方じゃなくてほかの2人が怖すぎるんです。

駆逐艦は16人、深雪・黒潮・暁・雷・不知火・霞・曙・隴の8人は警察、電・響・陽炎・大潮・漣・潮・吹雪・満潮の8人が泥棒だ。この子達には微笑ましい姿を期待している。特に吹雪ちゃんのドジっ娘には期待してるぞ!!

残り組潜水艦2人はイムヤ、はっちゃんは泥棒となった。

その他、提督は泥棒。間宮さん、伊良湖さんの2人は間宮さんが警察、伊良湖さんが泥棒となった。

因みに私は警察側で参加します。

さてそろそろ25対25のゲームの始まりだ!!

せっかく追加景品まで出したんだから私も楽しませてもらいましょう。このドロ刑でどんな事が起きるか楽しみです!!!

ゲーム開始時刻となり、泥棒達は一斉に逃げ出した。ある者は単独で、ある者はチームを組んで走り出す。

ゲーム開始まで10秒前、9……8……7……6……5……4……3……2……1  
「それでは……ゲームスタートおおおー!!!」

## 就活戦争22日目

ゲーム開始の合図である空砲の音と共に走り出した俺を含む逃走者たち25名。

間宮膝枕お昼と脱走を天秤に掛けている俺だがまだ決めかねるのでとりあえずやるだけやってみて、駄目そうな雰囲気なら脱走を狙うという方針にした。

まあ明石が作ったこのスーツの性能もどんなもんかな。

ゲーム開始前に明石からスーツの説明を受けたのをまとめる  
と

・ホログラムは1分に1回使用可能。一度に2体までホログラムを出すことも出来るが再度ホログラムを起動するまでのリチャージ時間が倍の2分となる。

・ホログラムは起動すると自身が向いている方向に走り出し、障害物に当たれば止まり、消える。ホログラム起動時は起動音がするの  
で注意。

・クロークは起動すると30秒間自身の姿を見えなくする。再度使用可能になるまでのリチャージ時間は3分。

クローク機能は時間経過、衝撃があつた時解除される。

ということらしい。

基本、緊急時に使うべきだろうな。正直透明になれるって聞いた時、ずっとこれで隠れてればいいじゃんとか思ったけど流石にそれは無理だった。

結局は自身の体力を信じるしかないのだ。

スーツの力に頼るのも有るが、開発者である明石が警察側にいるという事を頭に置いておく必要がある。

このスーツの弱点を知ってる訳だしな。

それにあの姉が何かしてない訳が無い。

警戒しておいて損は無いからな。

さて、そろそろ警察連中が追ってくる……

「提督く!!待ちなさい!!」

「Hey! テイトクー!! 今なら優しく捕まえてあげますから止まるデース!!」

「お姉様!! 私は右からお姉様は左から回り込んでください!!」

「不知火! アンタは無線で臆に先回りするよう伝えて! あのクソ提督を捕まえるのは私達よ!」

「あのクズにお灸を据えるいい機会ね。」

いやいやいや、明石がとかいうレベルじゃないぞこれ。

警察がガチ過ぎるんですがそれは……。

逃げ切れるのかこれ……。

—————

遡ること5時間前……

「……以上が舞鶴第2鎮守府からの報告になります。」

こんにちは大淀です。本日は大本営にやって来ています。目的としては資源の備蓄状況や敵との戦闘報告、そして新人提督の現状報告だ。

なので大本営呼び出しを受けて、執務室にいるのは私ともう1人、佐世保第3鎮守府から代表として来た軽巡矢矧、そして報告相手の海軍元帥だ。

「……舞鶴第2鎮守府の備蓄は現状問題無し、か。」

「はい、深海棲艦がこのまま日本海側攻勢を強めなければですが……。」

現在、舞鶴方面での深海棲艦の攻勢は激しいものではない。静かなもので現れる敵も潜水艦やイ級、ごく稀に空母や戦艦などが目撃される程度だ。

静か過ぎるのも困りもので空母はともかく戦艦達から『そろそろ私達も戦わせて欲しい』という言葉を送りしに聞いている。

そして、今日は珍しく敵戦艦が確認されたので金剛型の霧島に出て貰ったのだった。

そしたら彼女『ふおおおお!!! 久しぶりの戦闘ですか!?! 私のデータ

を活かす時が来たのですね!!』と意気揚々に出撃して行った辺り、余程戦闘欲が溜まっていたのでしようね。

機会があれば他の方々にも行ってもらいましょうか。

まあ多少は資材があると言っても、無駄使いは出来ないレベルです。ですから戦艦や空母の方々にはまだまだおやすみですね。

「……現状、深海棲艦の目撃件数は北側より南西側が活発化しているようだな。……矢矧君、君の所の鎮守府はどうだ？」

「はい、現在の佐世保第3鎮守府では……」

矢矧さんが自分達の鎮守府の状況を元帥に説明していく。資材状況は南西方面で深海棲艦が活発化している影響もあり、戦闘がやはり増えているようで、少し心許ないと言った感じだ。

しかし、激戦区に送られても鎮守府運営をしつかりこなしている辺り、佐世保第3鎮守府のこうちゃんの友達の新入提督も海軍大学の噂通り中々能力のある人物らしい。

「神谷提督には1年目から大変な所に行かしてしまいすまないと思っている。多くはないが資材をそちらの鎮守府に送ろう。」

「感謝致します元帥。神谷提督もしつかりやっていますのでご安心を。」

「ほう、そうか。君の所の秘書艦は矢矧君じゃなかったのか？」

「はい、重巡摩耶が務めております。この2ヶ月で2人共、大分打ち解けてきたようなので問題ありません。」

矢矧さんの口調が随分楽しそうですね……一段落したら佐世保第3鎮守府に演習を申し込んで、向こうの鎮守府の雰囲気も演習がてら見に行きましようかね。

こうちゃんも友人と会えるのは嬉しいでしょうし。

「そうかそうか。とりあえず2人共報告は以上かい？」

「はい。」

「よし、では解散だ。あ、めぐ……大淀は少し残ってくれ。それから矢矧君、資材の方は来週辺りまでに届くようにするからそれまで待っていてくれ。それではお疲れ様。」

矢矧さんは会釈で私に挨拶すると「失礼します」と退出して行った。



「……それで、何の用でしょう、元帥？」

「ああ、もういいよ。楽にしてくれ恵。堅っ苦しいのは会議だけでいい。」

「なら普段からお父さんはもう少しどっしり構えて下さい。だから今みたいにボロが出るのですよ。」

「別にいいじゃないか、お前が娘って事隠してる訳でもないし。」

「それでも海軍元帥が頼りなく映るのはよろしいことではないでしょうが……というか、何か用があるのではないのですか？」

「おお、そうそう。そっちの鎮守府での生活はどうだい？」

「どうもこうも今報告した通りなので言うことが無いのだけど……。」

「なんだ恥ずかしがってるのか？お隣の相良のこの息子が提督なんだからなんかあってもいいじゃないか。」

「ですからなんかとは……。」

「だって恵、航希君のこと好きだろ？あれから進展あったのかなーと。」

「……は？」

「そう怒るなよ。娘の色恋沙汰の1つや2つあっても驚きはしないさ。それともなんだ？気がついてないでも思ってたか？」

まあ確かにそう思ってた所もありますが……

「いや、意外だなあとって。お父さんあんまりそういう事気にしてないというか、昔からそういう話をしてこなかったの。」

「馬鹿を言え。自分の大事な娘だぞ？気にならない訳が無い。それこそお前が変な男でも連れてきてみる？お父さんガンバツチャウゾー。」

最後のカタコト言葉に気が無いのですがそれは……。

「ふーん……という事はこうちゃんは問題無しという事ですか？」

「そりゃ昔からの付き合いの相良の息子だしなあ。航希君、真面目だしい子だし、彼なら問題無いとは思ってるけど……。」

「……けど？」

「いや、恵にその気があったとしても、向こうにその気があるのかどうなのかーってのもあるし、じゃなくても彼いい子だから他の艦娘達からもモテたりしてるんじゃない?」

「……この父親、腐っても私の父親で海軍元帥だ。割と的確にポイントを捉えてくる。」

「……はあ、そうですね。こうちゃん、モテますよ。確定なら高校の時から知り合いから、他にもそんな雰囲気出してる娘は何人かいます。ついでに言えば私が空回りしてるのも事実ですね。」

「そんな事だろうと思ってたよ。恵、根は真面目で優しい子なんだけど、艦娘の影響もあるだろうけどちよーっと独占欲が強いというか、強く出ちゃうというかね。」

くっ!なんだかんだ父親という事ですか!結構見てたのですね、急に恥ずかしくなってきました……。」

「……はあ、降参です。そうですねよ私は重い女ですよくだ。」

「そう拗ねる事は無いさ。1ついい事を教えてあげよう。多分お前に母さんとの馴れ初めを話したことは無かったよな?今はもう時効だろうから話すが母さんには内緒だぞ?恵、母さんをどんな人物だと思う?」

「え?お母さん?……それは、お淑やかな感じで甲斐甲斐しく世話してくれる優しい人って感じ、かな……?」

優しいな微笑み、お母さんから頭を撫でてもらうとすごく安心した思い出、ただ怒らせるとめっちゃくちや怖かったのも覚えてる。

「そう思うだろう?甲斐甲斐しく世話してくれる優しく、包容力のあるお母さん、まるで男の理想みたいな人だ。だが、俺と出会った時はそんなんじゃないやなかったんだ。」

「……え!?あのお母さんが!」

「お、その顔が見たかったんだよ!みんなこれを話すと『そんな馬鹿な!』みたいな顔するんだよなあ!うん、母さんはな、結構というか相当面倒な人だった。草食系の皮を被った肉食系って感じだった。」

うーん、イマイチピンと来ない……いや、今の私を想像すれば

……あー、だから何となく想像出来た。

「……ん？なら何故お母さんと結婚したのです？結構面倒な人だったのでしょうか？」

「うーん、別に嫌な人じゃない、というか好きだから結婚したんだけどね。」

それはそうだ。

「付き合って3年ぐらいして、結婚の話をした時に母さんから『結婚するに当たって、私に何か改善した方がいい所を教えてください。』って聞かれたのさ。」

はいはい、定番と言えば定番ですよ。改めて相手とどう接していくかの確認ですね。

「そんなときに俺は結構酔ってな。いや、自分からガバガバ飲んだ訳じゃないんだ。向こうからね……。」

これも驚きだったがお母さんはお酒がとても強い。中学生の頃水の如くサラリとお酒を飲み干していく姿を見た時は驚いた。人は見かけに寄らないの典型みたいな人なのだろう。

「それで母さんに『もっとお淑やかで優しく包容力のある人かい』って言ったら……。」

「本当になっちゃったわけですか……。」

「ただ、1発ぶん殴られた。ただ結婚したら言った通り男としてドンピシャな人になった。まあお前に見せてなかったようだが、偶に昔のような雰囲気を出す時もある、今でもな。」

それ言われたら殴りますね。……お母さんもそういう所あったのかあ……私もいつまでもこんな状況は嫌だし、こうちゃんにも……うーん……。

「でもな、男って言う生き物は愚かにもこういう女の人に憧れを持つわけなんだよ恵。」

ちっぽけなプライドに雁字搦めになる訳ですね。

「……やっぱりそういう女性の方が良いんですか？」

「そりやそげフンゲフン……一概にそうとは言わないけど俺はそうだと思うな。」

「最初否定した意味ありますそれ？」

「気にするな……まああの母さんですら変わったんだ。お前もその気になれば出来るさ、なんたって俺と母さんの子だからな。」

「……でもこうちゃんどんな風に接すればいいか……。頭では分かっているけど出来ない時があるので……。」

また何かあつたら手が出てしまいそう……。

「ああ、そういう時はな、目標を見つけるといいらしいぞ？今回ならお淑やかで包容力のある人、鎮守府に1人ぐらいそういう艦娘居るだろ？その人を観察するんだ。それで自分とどう違うのか比べて自分なりにアレンジして変わってくんだ、って母さんから聞いたぞ。」

「お淑やかで、優しく、包容力のある人……。」

お淑やか……龍田さん？いや、あの人はどちらかと言えば私に近い気がする。

なら熊野さん？うーん、ちよつと違う気がする。

加賀さん？近いといえば近いんだけど私の目指すところとは……。

赤城さんは……駄目だ、一航戦の人は当てはまるような気もするんだけどご飯食べてるイメージしか湧いてこない!!

……ん？ご飯……あ、間宮さんだ。

お淑やかさ、優しさ、包容力、全てを兼ね備えた人材と言えばウチの鎮守府で間宮さんの右に出る人はいない!

「まあ注意すべきはその目標にした人は男の方も良いなあ〜と思ってるわけだからグズグズしてたり目標にした人が男に好意持っていたりすると……。」

……っ!!

「急ぎで鎮守府に戻る用が出来ましたのでこれで失礼します元帥。仕事サボって大和さんに迷惑かけないようにしてくださいね失礼します。」

「たまには家に帰ってくるんだぞ〜!」

「はーい!って一人暮らし始めたばかりの娘ですか私は!!」

私は気がついた時には部屋を飛び出していた。間宮さん……私

は貴女を超える……っ!!

走るく走るく俺く達く流れる汗もそのままに……。

「……提督大丈夫ですか？すんごいしんどそうですけど……？」

「ああ、ゼー事実、ヒュー相当、しんどいわ……。」

あっちにも追手、こっちにも追手、しかもめっちゃ体力ある連中と体力勝負するのは骨が折れる。

因みに今俺は食堂に身を潜めることにし、先客で厨房の中にいた川内と赤城の3人で休憩している。

多少息も整ってきた。すると横からスツと水の入ったコップが現れた。

「あはは！提督もまだまだだねえ！ほら水飲みなよ。」

「うっさい、多少鍛えてても一般人がこのレベルで追いかけてっこしてみる、普通ならとっくにギブアップだわ。……ぷはあ！川内サンキュー。」

流石艦娘、あんだだけ走ってたのに息切れの1つもしてない。

「とりあえずさつき確認した限りでゲーム開始10分の逮捕者が翔鶴さんと潮ちゃんと吹雪ちゃん、後は大潮ちゃんに比叡さんか……。」

「おーおー、結構捕まったなあ。」

「翔鶴さんは駆逐艦達の餌食に、吹雪ちゃんは開始直後に転んで捕獲、比叡さんは金剛さんと呼ばれて、立ち止まった所を確保。潮ちゃんと大潮ちゃんはめっちゃ素早い長門さんに……長門さんやばかったな、欲望全開だった。」

長門……お前……。

「ともかくサクツ戦闘開始から10分で私達の戦力は既に5分の4になりました。あまりよろしくないサクツ状況ですね。」

確かにこのペースで捕まったら時間内に全員捕まるな。というか赤城、こんな時にクツキーなんて食べてるん「っ!?皆さん伏せて下さい!!」

瞬時に3人ともシンクの裏に身を潜める。

味方からの危険報告は上司の命令よりもこんな状況でクッキー食べるなど叱るよりも重要、これほんと。

「……加賀さんの艦載機ですね。サクツ」

赤城がヒソヒソサクサクと小声で伝えてくる。

「いやお前な、冷静に報告しながらクツキー食べるな。とりあえずそれでクツキーやめとけよ？OK?」

「提督、その命令には従いかねます。実は先程膝に矢を受けてしまい、クツキーを食べないと力が出ないんです。」

「膝に矢を受けてしまった奴はそんな元気そうな顔でクツキー食わねーんだよ。後なんなんだよお前は、アンパンの民か。愛と勇気だけが友達なのか。」

「ちよいちよい！静かにして！こんな所で漫才してる場合じゃないって！加賀さんの艦載機結構近くまで来てるんだからさ！」

物陰からチラリと艦載機がいる食堂内を見る。

艦載機は低速でゆつくりと、低空飛行で何かを探すように飛んでいる。

「……おい、なんかあの艦載機の動きおかしくないか？」

「うん、まるで何かを探してるような……。」

「探すと言っても……はっ!?もしかして私達の足跡を!!」

赤城の言葉に一同驚愕だ。

足跡だ?!そんなもんまで見つけられるのか……流石一航戦の艦載機、いつも飯ばっか食ってるのは伊達じゃないって事か……。

少しでも痕跡を減らそうと俺は厨房内の足跡を靴で擦り……なんだこれ？食ベカス？食ベカスが点々と厨房内に落ちているのだ。

川内もこれに気がついたようで共に食ベカスの行先を目で追って行く。

食ベカスの線は一本は厨房外に、そしてもう一本はと言うと……

「くっ！サクツ加賀さんの艦載機達がここまで練度を上げていたサクツなんて……。私も慢心してたサクツつもりはありませんでしたが、私もまだまだサクツ……。」

おい慢心しっぱなしじゃねーか！お前の足元見てみるよ、クツキーの食ベカス塗れだぞ！

「……提督提督。」

ちよんちよんと肩を突つかれる。

「あ？どうした？」

川内の方に振り向くが川内は肩をちよんちよんするのをやめな  
い。

短く突ついたり、間隔の空いて……ん？これは……トンツ  
？

『キケン』『アカギ』『オトリニ』『逃ゲヨウ』

………了解、付いていくから先導しろ。

ジェスチャーと目で合図し、俺はスーツのクロークを起動、川内は素早く裏口まで進み、音をたてないように食堂から脱出した。

スマン赤城、指揮官たるもの時には部下を切らねばならない事もあるんだ……っ!!許せ!!助けられたら助ける!!

『司令はん、それ関西じゃ助けん言うことやで〜』

何故、黒潮の声が聞こえるんだ……。

そんな事ない赤城、お前を助けてみせるからな!!………多分な。

その頃赤城は………

「提督、どうしましょう……提督？」

振り返ると2人の姿は無かった。

「あれ？提督!?川内!？」

キョロキョロと辺りを見渡すが2人はいない。

「やはりここに居ましたか、赤城さん。」

この冷静な声、先程の艦載機……

「くっ！加賀さん、どうしてここが!?しっかり隠れていたのに!!」

焦る私を他所に加賀さんは淡々と話す。

「……私の艦載機達が見つけてくれたのですよ、赤城さんが食べているクツキーの食ベカスが点々と落ちていてここまで続いているのを。」

その時赤城は悟った。「あ、提督達はこれに気がついて……私を

囹に……。」

慢心、ダメ絶対。

逮捕者 翔鶴、赤城、比叡、吹雪、潮、大潮  
泥棒残り19人



## 就活戦争23日目

赤城という尊い犠牲の下、食堂から逃げ出した俺と川内は新たな隠れ場所を探して移動し始めた。

道中、深雪や鈴谷の警察連中に捕捉されたが『たははー!!! 待て 待て司令官く!!』『おっ!? 提督見つけ!!……って深雪危なごふっ!!』『あつちに提督が逃げたわよ!!』とホログラムを使ったり、向こうの自爆もあり振り切ることが出来た。すまん、それは残像だ。

そんなこんなでたどり着いたのが入渠施設だった。因みに今俺らが隠れているのは仮眠室、カーテンや押し入れなんかもあり、最悪隠れる事も可能だ。

入渠施設には娯楽室やら休憩室なんかの部屋が多数あり、一つ一つ探すには骨の折れる作業になる。が、忘れてはいけないことが一つ、警察は泥棒を探すけど泥棒もその1日お願い券を探さないといけないという事だ。

……まあ俺はひたすら逃げればいいんだけど。

恐らくそのお願い券を見つけない事には泥棒側も始まらないからお宝とは言え、そんなに分かりづらい場所には設置していない筈……食堂は多少探したが見つからなかった。となれば工場か執務室や作戦会議室のある別棟、もしくはこの入渠施設だろう。

「いやー!! 夜戦じゃないけどこういうのもスリルがあって楽しいねえ!! ね、提督!!」

小声だけどテンション高く話す川内、正直そのテンションについていけない。だって……

「お前達は楽しいで済むけど俺は楽しいで済まないから困るんだよなあ……。」

俺を捕まえたなら1日お願い券だからそれ狙いの奴がじゃんじゃん集まってくるんだよ。

ほら、外で連中の声が……。

指を口に当て、川内に息を潜めるように指示。

「くっ！提督は何処に……!?」

「司令を捕まえられれば大きいけど、最低限間宮券は確保しておきたい……。」

「結構探したけど見当たらない……。もうほかの所に行つてしまつたのかしら……?」

「そうだそうだが他の所を探しに行つてこい。」

「ここにはもう居ないぞく、というか俺らがお願い券探してる間は来ないで!!!」

「そんな願いが天に届いたのか足音は遠のいて行つた。」

「はあく、行つたか……。」

「本当に心臓に悪い。」

「私としては明石さん達が言つてたペイント銃とかあつたらなくつて思つてたよ。夜戦じゃないけど奇襲大好き!」

「流石夜戦大好き川内さん、普段の戦術もそんな感じなんだ。」

「正面から戦うのもいいけど闇夜に紛れて相手の後ろから魚雷当てた時の気持ち良さつたらもう……。」

「にしても、1日お願い券ねえ……。変なお願いじゃなければいいんだけど……。」

「まあ俺は積極的に探さない方針だ。見つけた所で川内か誰かにお願いされるだけで……川内か。」

「……川内、お前は1日お願い券を手に入れたら俺に何を願う気だ?」

「ん?唐突だねえ、まあ勿論私は夜戦の許可を最低1週間分ぐらい貰う気だからね!ゲットしたら覚悟しててよ提督!!」

「……うん、コイツにお願い券ゲットして貰うべきだわ。」

「痛むのは資材、戦艦の長門辺りがこの条件なら考えるが軽巡の川内だ。1週間分ぐらいの資材なら捻出出来るだろう。」

「何より俺の心は痛まない。面倒事に巻き込まない辺り川内の条件提示はこちらとしても好条件だと言えよう。」

「まあこの場では少し渋るけどOKみたいな返答をするのが正解かな……。」

「1週間か……うーん、資材の備蓄がどんぐらいかにもよるな。」  
「そこをなんとか!!お願い提督!!私も久々に夜戦したいんだよお  
〜!!」

「……1週間分の約束は出来ないがもし券をゲット出来たら夜戦を認めよう。」

この回答に川内は少し不満げで「ぶー」と頬を膨らましていた。ほった押ししてみたい。

「……まあ俺のサポートをしてくれるならもしかしたら1週間に  
なるかも「やるやる!!勿論!!」しれないが……。」

せめて言い終わるまで待つてくれないのよ?

「よおーし!提督、この川内さんが付いてるんだから大船に乗った  
気持ちでいてよ!!……実際は軽巡だから中船ぐらいかもだけど。  
まあそんなことはともかく私に任せて!連中に提督は捕まえさせな  
いからさー!」

「ああ、期待してる。」

まあ前提条件として川内がお願い券を獲得する必要があるんだ  
けどな。

あ、そう言えば脱走計画……

「……まあ、今回はいつか。」

とりあえず俺達2人は今いる仮眠室を調べ始めた。

「よーし!!翔鶴姉に続き赤城さんも逮捕!!いいペースね!!この  
流れで私が相良君を逮捕して……。」

「五航戦、赤城さんを捕まえたのは私よ。そして調子に乗るのと  
変な事口走るの結果を残してからにしない、みっともないわ。」

「むがー!!!言わせておけば1人捕まえたぐらいでー!!!い  
いわ!!なら私は提督を捕まえて加賀さんより結果を残してみせるわ  
よ!!」

たはは、この2人はいつも言い争ってばかりだなあ。本当は  
仲良いのにな。

こんにちは、二航戦蒼龍です!よろしくね!そうそう、この間こ

の2人、飲み会で……いや、今この話はいいか。機会があればまた今度。とりあえずこの2人のフォローをしないとね。

「まあでも赤城さんを捕まえられたのは大きいですよね。向この空母は飛龍と龍驤さんと飛鷹ですし、戦力差で言うなら制空権は取ったようなものじゃない?」

「慢心してはいけないわ。まだ戦いは序盤、提督達がこれから何を仕掛けてくるか分かったものじゃない……。」

「加賀さんそれ赤城さんのセリフ。」

「赤城さん……慢心しては……。」

何処か複雑な表情の加賀さん。因みに赤城さんは今牢屋の代わりとなるサツカーゴールの下で持参したデカおにぎりを（☒☒☒）モグモグしながら捕まった吹雪や翔鶴と談話してる。

「……見つけました。第3倉庫裏に伊勢型の2人と潜水艦の2人です。」

こんな時でもしつかり索敵をする大鳳は偉いというか真面目と  
いうか……。

「第3倉庫の近くにいる子はいるかしら?」

無線で呼びかける加賀さん。

ゲーム開始前に艦載機を扱う空母が司令塔の方がいいということ  
とで本作戦の旗艦は加賀さんになった。

そこでも瑞鶴と揉めたのはまあ想像通りかな?

『ザツ……こちら軽巡班神通、今資材置き場近くです。』

「そう、今第3倉庫で伊勢型と伊号潜水艦の子達を見つけたわ。  
至急そちらに向かつて。」

『ザツ……了解、龍田さんと天龍さんと私で向かいます。通信終わり。』

「神通達か、最低1人は捕まるわね。」

流星軽巡最強と言われるだけある神通、そしてその神通とも引け  
を取らない龍田と体力お化けの天龍だ。瑞鶴の想像通り1人は捕ま  
るだろう。出来れば戦艦のどちらかを捕まえてくれると更に楽にな  
る。

しばらくして無線に連絡が入る。

『ザツ……こちら神通、伊勢さんを確保。天龍さんがイムヤちゃんを確保しました。日向さんとはつちゃんには逃げられました。今龍田さんが追ってます。』

「了解、時間はまだあるわ。捕まえた2人は天龍が連行、神通と龍田は引き続き逃げた2人の搜索を。」

『ザツ……了解。』

「さっすが軽巡のエース達、一気に2人も確保とは。」

「気を抜かないで、いつ誰が仕掛けてくるか分からないわ。」

その後暫くはお互いに動きがなかったが司会進行の青葉からの放送が流れ事態が動いた。

『おおつと!?今泥棒の誰かが1日お願い券を見つけたようですよ!!見つけた方は頑張つて警察から逃げて下さい!!警察の方も泥棒にお宝を持ち逃げされないようファイトですよ!!』

この放送には周りのみんなも「おおつ!」と声を上げた。遂に泥棒がお願い券を見つけたらしい。これで提督を捕まえる以外にもお願い券を入手する手段が増えた。

そんな中、無線から逮捕情報が入ってくる。

「不知火が那珂を鈴谷が飛鷹を捕まえたわ。」

これで泥棒は残り15人。

このペースなら時間内に全員捕まえられるんじゃないかとも思う。

まあルー尔的にも泥棒は不利だしなあ……。飛龍も今どの辺にいるんだろう?

泥棒は減っていくのに対し警察は減らない。

今回はペイント銃があるから一時的に警察が行動不能になる事もあるがゲームから退場という訳では無い。

では何が警察にとって怖いか。それは……

『脱走だあああー!!泥棒が逃げたぞ!!!……ぷはあ!!この酒美味いな……。』

ゴール付近で警戒をしていた隼鷹からの連絡で事態は一変した。



」。

「違う違う龍驤さん!! 事故事故!! 相良君、私は気にしてないからさ!! (ま、まあ、気にしてないといえれば嘘になるけど……。)」

「ジョーダンやジョーダン! 流石にこれが本気ならブラツクジョーク過ぎるわ!」

ジョークじゃなかったら俺はどうしようかね。

「飛龍……いや、飛川、本当に悪かった!! 俺はただ暖簾を捲ろうとしてだな……。」

「い、いや、私もビックリしちゃったけど、事故だからねこりやしよーがないしよーがない!!」

飛川(飛龍)は顔の前でパタパタと手を振りながら、たははくと笑いながら許してくれた。顔はまだ赤いけどね。

これが憲兵案件になったらこの仕事を辞められるけど社会的にも人生辞めることになる所だった……。

「……龍驤、茶化すのも良いが俺のメンタルが持たないから今後無しな。」

「何の事や〜?」

「諦めろ龍驤、お前は犬山さんにはなれない。」

「ちよつと待てや司令官、今どこ見てその言葉言ったか言うてみ? 大丈夫、怒らへんから。」

怒らないからと言う奴は絶対に怒るこれ確定。  
すると入渠場から川内が慌てて顔を覗かせた。

「ちよ、ちよつと!! そんなことしてる場合じゃないって!! 今の騒ぎで警察が集まって来てるよ!!」

遠くからは「今の叫び声はなんだ!!」や「テートクが私を呼んでるネー!!」やら「榛名は大丈夫です!!」とか聞こえてくる。

川内の言う通り、着々と警察が迫ってきている。

「待てや川内!! 今ウチにとつて重要な事聞いとんねん!!」

「捕まるよりマシでしょ!! 行くよ!!」

「早く早く!!」

「話を聞けやー!!」

「ちよい川内！外出たら龍驤の口塞いでおけ！飛龍も足持つてくれ！このまま騒がれたら4人仲良く豚箱行きだ!!」

俺は龍驤を抱え、飛龍も川内が開けた窓から飛び出し、入渠施設から脱出したのだった……。

「神通さんと天龍さんが伊勢さんとはっちゃんを逮捕おおう!!  
どンドン捕まってしまう泥棒側!!状況を打開できるかあ?!!」

Здравствуй те. 響だよ。簡単に失礼、なんせゆつくりしてられる状況でも無くてね。

今も放送で知らせが入り、8人目となる逮捕者、伊勢さんが逮捕された。これで泥棒側は残り17人。

「はわわ…8人目、どンドン捕まっていくのです！響ちゃん、このままだと私達も……。」

「大丈夫、電には私が付いてる。捕まったみんなも提督が助けてくれるさ。」

しかしこの状況を理解出来ない程私も馬鹿ではない。

開始からおよそ20分、それまで鎮守府奥にある提督の私室(家)横の茂みに身を潜めているがそろそろ追っ手が来るのも時間の問題だ。

……冬が来るまで時間稼ぎが出来れば勝機はあるかもしれないが制限時間は1時間……まあ冗談だ。今の私は響。あちらの姿ではない。

戦力差も電が言った通り8人も捕まってしまう、大分開いてきた。

どうしたものかと考えていた時足音が近付いてきた。

こっそりと茂みから確認してみると同じ泥棒の満潮だった。頭だけ茂みからだし満潮を呼ぶ。

「……満潮、こっちだ。」

満潮もこちらに気がついたようで、私達と同じように茂みに身を潜めた。



「……味方がいて良かったわ、始まって早々なんかヤバイ長門さんに大潮は捕まっちゃったし、今も逃げてきたけどどこも警察だらけよもう。」

「はわわー！こそもいずれお巡りさんが来るのです！」

「暁の様なお巡りさんならいいのだけど、実際そうは行かないだろう。」

向こうには開幕でバーサーカーの如く、潮と大潮を捕まえた長門さん、高速戦艦の金剛さんに榛名さん。

私達と遊んでくれる天龍さん、龍田さん、演習で戦い方を教えてくれる神通さん等と猛者揃いだ。

私達3人が集まっても敵わないだろう。

そう、圧倒的に戦力が足りない。

提督や他の誰かと合流出来れば、仲間達を脱獄させることも出来るかもしれない……。

「しっ！誰か来るわ。隠れてやり過ぎすわよ……。」

息を殺して茂みに潜む。

足音はバタバタと音を立てて近づいてくる。

3人ぐらいたらどうか……いや、1人は担がれてる？

走って来たのは提督と飛龍、川内。そして提督に抱えられ川内に口を塞がれた龍驤。

私と満潮はその異様な光景に顔を見合わせる。

「飛龍！ドア開けろ！川内はそのまま龍驤を押さえておけ！」

まるで人攫いの瞬間を目撃しているような気分だ。なんかハラハラしてきた。

素早い動きで家に突入して行く4人。飛龍が扉を開け、提督と川内は突入。飛龍が殿に回りそのまま扉を閉じる。その動きはまるで熟練の特殊部隊……いや、熟練の拉致部隊と言った方が正しいか……。

「……ちよ、ちよっと、あれはどういうことかしらね……。」

「わ、私にも何が何だかなのです……？」

「…確認してみれば分かる事だ。幸い提督達は味方だ。」

「味方のはずなのにこんなに不安を覚えるのは久しぶりね……。」  
辺りを見渡し、警察が居ないことを確認した3人は満潮、響、電の順にソロソロと玄関まで移動する。

「…じゃあ、開けるわよ?」

私と電はコクコクと頷く。

そーっと、満潮の手がドアノブに向かって伸びていき……。だが、次の瞬間、勢いよくドアが開き、中から手が伸びてきて、また満潮、響、電の順で家の中に引きずり込まれた。

一瞬の出来事で何が何だか分からなかった……。がどうやら川内さんが私達の事を引きずり込んだようだ。

満潮と電も思考が停止しているようでもまだポカーンとしている。

「お?どうしたの?おーい、駆逐艦く大丈夫か?」

川内の声にハツとした私達。

「ちよ、ちよつと!!私達をどうする気よ!?まさか解体!」

「はわわ!!はわわわ!!」

「はあ?何言ってるのさ……。そんなことするわけないでしょ。ほら上がった上がった。あ、靴は脱いだら中に持ってきて。万が一、警察が来たら逃げなきゃ行けないからね。」

すると提督が居間からひよつこりと顔を出した。

「お、3人も来たな?こつちだこつち、作戦会議するから全員集合だ。」

「ほらほら、時間が限られてるんだから行くよ。」

川内に押されるように居間に行くと残りの3人は座布団に座り、麦茶を飲んでいた。時間が限られると言う割には結構寛い。

「それはそうとキミイ、さつき事、忘れたとは言わせへんでえ。」

「わーったよ、悪かったって!ほら、北海道限定の美味しい飴ちゃんやるからこれで勘弁してくれ。」

「ウチが飴ちゃん1個で許すと思……。うまつ!何やこれこつち美味いやん!」

龍驤さん、飴ちゃん1個で許してしまったようだ。

「……。さてと、行動出来る奴らがある程度集まったな。あ、お前達

3人も麦茶で良い？というか麦茶ぐらいしかないけど。」

「あ、うん。ありがと。」「頂きますなのです。」「Спасибо。」「

「いいよ提督、私が入れてくるから座ってて。」「

「お、サンキュー飛龍。それじゃあ……反攻作戦の作戦会議、始めようか！」

## 就活戦争24日目

参加者の中では間宮と同じく、非戦闘員の伊良湖は食品庫の物陰に隠れてビクビクしていた。

「ひい、どうしよう……。久々にドロ刑というか運動に参加してみただけど、皆とはバラバラになっちゃったし私一人じゃ……。」

ちよつと前まで食堂の方に味方がいるようだったので味方が居るうちに合流を……と思っていたが、どうやら誰か捕まってしまったらしい。

お陰で私は隠れきれたが、出るに出来なくなってしまったという事だ。そして現在の食堂は人の気配もなく静寂に包まれている。

「うう……。出たら捕まっちゃいそう……。でもいつまでも居られないし……。あーもう!!根性よ根性!!捕まったら捕まったよ!!やれるだけやってみるしかないじゃない!!」

私も久しぶりにみんなと同じようにやるイベントで浮かれているのかもしれない。それ故に結構やけくそ気味になっているようだ。

「そうよ、もしかしたら食堂に提督に1つお願い出来るチケットとかあるかもしれないわ。今は誰も近くに居ないみたいだし、探してみようかしら……。」

意を決して食品庫から顔を覗かせる……。やはり誰も居ない。まあ居るのであれば味方であって欲しい。

「みんな戦闘に行く時はこんな気持ちなのかなあ……。ああドキドキする……。」

とりあえず探さねば始まらない。警察の誰かが来たたら諦めるしかないか……。速さ的に間宮さんぐらいしか逃げるのは無理だし。

ゴソゴソキョロキョロと食堂を探し回る伊良湖。

テーブルの上から下、食器棚の中、受け渡し口等々探してみるが……

「……うーん、やっぱり見つからないかあ。まあお宝って言うぐらいだから多少難しい所に隠してあるのかな……。」

探し回って喉が渴いたので水を飲もうと厨房内へと戻り、水道で

コップに水を汲むと一息に煽る。

こういう時、食堂にしていると便利よね。水もすぐ飲める。

「…………ふは！運動していると水が美味しいなあ…………と言ってもそんなに動いてないんだけどね。」

仕事と運動の体力の違いを改めて感じるわ。駆逐艦の子達は凄いなあ…………出撃遠征で動きまくってるのにその次の日にはまた走り回って遊ぶんだから。

偶には私もジョギングでもしようかしら…………。

そんな事を考えつつコップを濯ぐ為、流し台へ向かうとふと視界に映るもの。

「…………ちよつと誰よ、こんな所でクッキー食べてそのままの人。ああ、床も食べカスだらけじゃない…………。」

調理台の上に食べ終わったクッキーの箱と小分けの袋が置かれていた。

仕事のにも性格的にもこういう所は気になるポイントだ。

奥からちりとりと箒を手に食べカスを集め、ごみ箱へ。

「しかも箱もそのまま…………せめて捨ててつてくれても…………。」

もう！とクッキーの箱を手に取り箱を畳む。

箱なんかの紙は再生紙になるからキッチンと分別して下さい！燃やせるごみじゃないですよ！

納豆のパックもしつかり洗ってプラスチックに！

パッケージに食品やソースが付いてたらその時点で燃やせるごみになつちやうんだから！

資源は大事に使いましょう！伊良湖とのお約束です！

「こういう時だから厨房に入るのはいいけど、これは後で厳重注意ね！」

パッパッと手を払い改めて調理台の上に置いたコップを濯ぐこうと振り返ると、コップ以外にもまだ金色の紙が置かれていた。

クッキーのごみを捨てそびれたかと思い、手に取る。

「クッキーに付いてる応募券とかかしら？にしては金色って言うのも応募券らしくないわね…………。」

こちらの面は裏面らしく何も書いてなかったのて表面を見ている。

「えーと、何なに……? 『提督に1つお願い出来る券』……えええええええええええー……っ!?!?!」

一方その頃、臨時牢屋では……

「……はっ!?!」

「どうかしましたか赤城先輩?」

「あ、吹雪さん、いえ、何と言いますか……先程食堂で隠れていた時にクツキーの食べカスの他にも何か重要な事を忘れていたような……。」

「重要な事……ですか?」

「あの時の私は前々から明石さんをお願いしてようやく手に入った期間限定のクツキーを食べることが最重要だったもので……って、頭の中で何かが……?」

「あはは、赤城先輩らしいですね……もしかしてそのクツキー食べてる時に『お願い券』を見つけたりして!!」

「……うーん、どうだったのでしょうか……? 今となっては知る由もないですねえ、誰かが助けて下さったら後で見に行ってみましょうか。」

「その時はご一緒しますよ! 私は赤城先輩の護衛艦ですからね!」

「あら、頼もしいわ。じゃあその時はよろしくね。」

「はいっ!!」

「……不幸だわ。」

「ちよい山城さん、さつきからそればかりい!! 漣、不幸の言葉ばっか聞きたくないよ!!」

あ、ども(。ω。)/ 駆逐艦漣です! 今何とですね港にある事務所脇に山城さんと隠れている所です!

この人さつきから不幸ばかりだからなあ……漣が居るのに不幸とはなんですか！ぷんぷん!!

「漣、私にとつて姉様は全てなの。今はその姉様と離れ離れ……これを不幸と言わずになんと言うか……。」

「うわめんどくせー……じゃあ、早いところ捕まってゲーム終わらせた方がいいんじゃないの？」

前々から思つては居たけどこの艦娘達、一癖も二癖もあるんですよねー、まあ漣が人の事言えたもんじゃないですけどね！

「それは無いわ。他の人……やはり無いわ、姉様以外に捕まるなんて有り得ないわ。私は姉様に追いかけられながら……。」

『山城く待つてー!』

『うふふふ！姉様くこつちですよー!』

『ふう、ふう、えーい！捕まえたわよ山城!』

『きやく！捕まっちゃいましたく!』

『うふふ、山城、お巡りさんに捕まった泥棒はどうなるか分かつてるわよね?』

『つ、捕まった泥棒は牢屋に……。』

『そう。だから山城、貴女も牢屋に入れないといけないの。』

『そんなんっ!!ようやく姉様に会えたのに!!』

『うふふ、安心して山城。私達の為に特別な牢屋を用意したわ。』

……二人っきりの牢屋をね。』

『ああ、姉様!!まだ日も高いのに……あーれー!』

「……うふ、うふふふふふふふふふ!」

……うわあ、漣がネット漫画や、コ○ケの同人誌買ってそういう耐性があつても目の前で自分の欲望語られたら幾ら漣でもドン引きですわ……。

「……そういう訳よ。」

「そういう訳じゃねーよ。知らねーよ漣のいない所で欲しかったですわそれ。」

「だからこそ、私は扶桑姉様以外に捕まる事は許されないの。」

「おーい話聞いてー……いや面倒だ、警察のみなさーんここに捕まえるべき泥棒がいますよー。」

だー疲れる、ツツコミはぼのたんの役目で私の柄じゃねーです。

「止めなさい漣、それで扶桑姉様を呼べるなら良いけどそれ以外を集めるのは……。」

「山城、見つけたわよ。普段は姉妹でも今日は敵同士、捕まっても恨みっこ無しよ。」

「……扶桑姉様 k t k r!!!」

「ちよ、ちよい待ち!!それは漣のセリフ!!!リテイク!!!リテイクの方向でオナシヤス!!」

というか何さ!?展開が早すぎる!!気がついたら扶桑さん現れるし、ネタは奪われるし!!!あ!?尺の都合!?こっちの都合も考えてよ!!

「良くやったわ漣!!扶桑姉様に捕まるなら本望よ!!」

「だー!!!山城さん待った待った!!!タダでさえ泥棒も出番も少ないんだからもう少し粘ってくれないと!!」

欲望に忠実な事は悪いことではない!!時と場合を考えてね!!!歓迎会以来全然出れなかつたんだからこういう時こそ出たいもの!!

『その気持ちよくわかります。』

衣笠さんも分かる人だね!!今度直訴しに行こう!!

「はっ!?そうね、姉様と追いかけてっこして最後に捕まるという私の夢が叶えられてないわ!!」

ダメだやってられんわ!!押さえてられねー!!

「もう知らねー!!山城さんサラダバー!!」

この人扶桑さんの事になるとポンコツ過ぎる!!

諦めてここは逃げよう……と言うか、嫌な予感がしてならないのでスタコラサツサ、出番はまたいつか回ってくるはず!!

残された扶桑、山城の間には静寂が訪れた。

「山城、私、姉として負ける訳にはいかないの。全力で行かせてもらうわ……。」

「……扶桑姉様、邪魔者は去りました。これで私達姉妹の一騎討ち、勿論私も全力で（捕まりに）参ります。……いざ尋常に」





そ、そんなことないっスよ満智留さん……。

「……大丈夫だ、作戦はある。上手くいくかはさて置きだがな。」

「今の間は何なのよ!」

やっぱり昔っからそうだったけど、満潮さん手厳しいですわ。

「まあまあ、落ち着きなつて。とりあえずみんな1つは装備持ってたんでしょ?それ見て見ようよ。」

ナイス川内!夜戦1週間は近いぞ!

「まあ俺は見ての通りこの明石が作ったスーツだ。ホログラムと透明になれるクローク機能がある。」

「てーとくさん、てーとくさん。」

ん?この声は……

「……まーたお前か、探照灯妖精さん。もういいよ、探照灯この場面じゃ使えないでしょうが。」

私の探照灯、空いてますよ?みたいなドヤ顔すんな。

「どうぞ私が作った大型探照灯を使つて下さい。」

「使いません。」

「大型探照灯。」

「使いません。」

「普通の探照灯。」

「使いません。」

「今から30分以内に探照灯をお使いのお客様には大奮発!!簡単着脱!!どこでも探照灯を通常1つの所……なんと2つ!!2つお付けしちゃいます!!」

「えー!?ホンマに!?2つも貰えるなんてめっちゃお得やん!?せやけど……お高いんやろ?」

「そんな事は御座いませぬ!!なんとお値段」「だー!ー!!!うるせえ!ー!ー!!!龍驤も悪ノリしてくんじやねえ!!てかそもそもなんで急に通販番組みたいになつてんだよ!!要らねーつたら要らねえから!!」

「てへぺろ!」

あざと可愛い!!許す!!

「残念ですがてーとくさん、もう既に肩の横に装備させて頂きました。」

「…………お前は許さん。てかなんだこれ外れねーじゃねーか!!」

「てーとくさんが1度は使わないと外れないようになってますので。」

「おいなんだその『このそうびはのろわれています。』みたいなやつ!!」

「コイツはまたややこしい事してくれるなあもう。」

「まあまあ!!えーやんえーやん!!ちよつちグレーやけど元々付いたって事で!提督だつてあつて損はせえへんやろ?」

「流石龍驤さん、ノリが良い方に悪い人はいません。」

「ちよつと!!ふざけてる場合じゃないのよ!!いつ警察が来るかわかんないんだから!!」

「こういう時の満潮とても有難いです。」

「本来アンタがまとめるべきなのよ!!」  
「すみませんでした。」

「まあそれもそうね、んじゃ次私!と言つても空母らしく艦載機ね。今も外の辺りを警戒してるわ。因みに今の所は敵影無し。」

「ま、当然やけどウチも艦載機やな。」

「私と響はドラム缶を持ってきたのです。……………実際は次の遠征用に装備しててそのままにしてくださいなのです。」

「それとさっきこれを見つけたんだ。」

「響が取り出した物、それはペイント銃だった。」

「おー、ペイント銃あつたんか。よう見つかつたな。」

「ここに來る道中、倉庫の前に置いてあつたのを拝借して來た。」  
「ペイント銃があれば多少楽になるか…………?」

「じゃあ次は川内さんが行こうか!私は煙幕持つてきたよ!これがあれば緊急時も逃げられるからね!満潮はも煙幕でしょ?」

「…………ええ、そうよ。私も煙幕。」

「となると…………艦載機2、ドラム缶が2、煙幕が2、ペイント銃が1  
1「探照灯が1です。」

……わかったわかった、それでいいよ使えば良いんだろ使えば。

「やりました。」

「はいはい！」

「元気がよろしい！川内君!!」

「ぶっちゃけ思ったんだけど、牢屋付近まで行って煙幕焚いてゴリ押しでみんな脱走させればいいんじゃない？ペイント銃もある事だしさ。」

「あーそれウチも思ったわ。案外、行けるんとちゃうかな？」

「ちよつと待つてよ！」

「満潮君、意見がある時は挙手しなさい。」

「こんな時に面倒な事……もういいわ、はい。じゃあ、どうやって牢屋付近まで近づくの？牢屋付近には警察がいつぱい居るわよ。それにペイント銃の弾数は1発、1人止められても防衛線を突破するのは難しいわ！」

飛龍が閃いた!!みたいな顔してる。多分これも問題あるんだろうけど。

「あ!それなら提督に行つて貰えばいいんじゃない?ほら、提督のスーツ、透明になれるじゃない!!」

「おおー!確かに!それやったら行けるんとちゃうか!」

「あー……そっか、お前達コイツで透明になった時見てないんだっけ……。まず、飛龍の案だが、確かに普通に近づくよりか安全に近づける。」

「ならこれで……!!」

飛龍の言葉を遮るように俺は言葉を続ける。

「だが恐らくバレる。試しにクローク使うから見とけよ……。」  
クロークを起動し、透明になる。恐らくみんなの反応は……。

「確かに透明と言えば透明だけど……」

「なんとなく輪郭的なのが見えるつちゅーか……」

「遠目で見れば分からないかもしれないけど、近くからなら……」

「そういう事だ。なんとなくわかるだろ?このクローク機能は物陰や薄暗い所ならほぼバレない。しかし、明るい所なら割と見えるん

だよ。ついでに言えば走れば足音もするから加賀とか瑞鶴とか勘のいい奴は気がつくだろうな。」

「確かにこれじゃあ防衛ラインの突破までは難しそうだね。」

「ゴリ押しでって言うのは間違いじゃない。というかどんな作戦を立ててもこの状況じゃゴリ押しにしかならないからな。そこからどう捻りを加えるかだな。」

「捻りか……あ！夜戦に持ち込めれば……!!」

「時間は後30分ちよつと！夜戦にはならないわよ！」

「飛龍さん、牢屋付近はどうなんだい？私達はずっと外の茂みに隠れてたから。」

「んーそうね、さっき見たそのままなら索敵入れてもやっば今のやり方であの防衛線を突破するのは難しそうね。」

「私達もドラム缶じゃ何かするのは難しそうなのです。」

様々な意見が飛び交うけど決定的な意見は出てこない。

そりやそうだよなあ、そんな簡単にポンポン作戦出てきたら困らんわなあ……。

川内の飛龍の案も悪くは無いんだけどなあ……満潮の言う通り、どうやって防衛ラインを突破して牢屋付近まで近づくかが問題だ。

そんなのバレないで進む事が出来るのは某ステルスゲ-の蛇の人ぐらい……ん？

「おい、みんな何持つてるもう一度教えてくれ。」

「え？提督のスーツに探照灯。私の煙幕。」

「私も煙幕。」

「私は艦載機。」

「ウチも艦載機。」

「私達はドラム缶なのです。」

「それとペイント銃。」

………行けるのか？俺はあのゲームのように行けるのか？否っ!!俺なら、俺達なら出来る!!

「何や提督、作戦出来たんか？」

「ああ、現状の装備でやるならこれしかない。よし、みんな、俺の

作戦を聞いてくれ。」

## 就活戦争25日目

「……本当にこんな作戦でみんなを脱走させられるの!？」

「と言ってもこれぐらいしか案は無いでしょ。私とみんなを信じなつて。」

私と川内さんがいるのは薄暗く、狭い場所……響と電が持っていたドラム缶の中だ。

ドラム缶の底をくり抜き、小さな覗き穴を幾つか空けたもの……これで防衛ラインを越えようと言う作戦だ。

確かにこの鎮守府には至る所にドラム缶が置いてある。

気をつけなければ分からないかもしれない。しかしそれでも自然さは残るものだ。

「しっかも、これ結構重いし……。」

「正直、私もダンボールの方が良かったな。まあ提督にダンボールの思い入れがあるそこまであるとは思わなかったね。流石にあそこまで言われちゃ譲るよ。」

司令官の方はと言うと私達とは反対側から潜入している。私達とは違い、ドラム缶ではなくダンボールで。

ドラム缶だって不自然なのにダンボールは流石に気がつくでしよ。

『川内、満潮ストップや。もうすぐ金剛と榛名がそこを通るで。』  
静かにドラム缶を地面に置き、息を殺す。

「お姉様！不知火さんが那珂ちゃんを確保したとの事です！」

「ぬいぬいもやりますネー！榛名、私達もそろそろticket持ちかテートクを捕まえますヨー！Follow Me！」

「はい！お姉様!!」

「ふー、行つたか……。」

「龍驤さん、この周辺の警察は？」

『……その先んこの倉庫横に霞と曙が居るな。ぐーつと迂回して霞達の反対側から進め。』

「了解。」

私達の視界はドラム缶に空いた穴のみ。それだけでは確実に誰かに見られてしまう。そこで空母の2人には潜入隊の目の役割をして貰っている。

艦載機を飛ばし、物陰から警察達の動きを探り、それを無線で教えて貰っているのだ。

飛龍さんは司令官、私達は龍驤さん。そして響、電の2人は私達の目となる空母達の護衛に付いている。

龍驤さんの指示の下、止まる、移動、止まる、移動を繰り返し、ジリジリと防衛ラインを越えていく。

この雰囲気、緊張感、戦闘前の偵察に似ている……。

確かにこれはゲームだ。だが、やり方によっては戦場の空気を味わう事も出来る。これは一種の訓練にもなる。もしかしてアイツはそれを……!?!?

「満潮! ほら見て! 牢屋だ! 防衛ラインを越えたよ!」

「よしっ!! 後はアイツに合わせるだけ……え?」

「あの時の私は前々から明石さんをお願いしてようやく手に入った期間限定のクッキーを食べることが最重要だったもので……って、頭の中で何かが……?」

「あはは、赤城先輩らしいですね……もしかしてそのクッキー食べる時に『お願い券』を見つけてたりして!!」

「……うーん、どうだったのでしょうか……? 今となっては知る由もないですねえ、誰かが助けて下さったら後で見に行ってみましょうか。」

「その時は……一緒にしますよ! 私は赤城先輩の護衛艦ですからね!」

「あら、頼もしいわ。じゃあその時はよろしくね。」



「はいっ!!」

なんか……牢屋内、和気あいあいとし過ぎじゃない？

伊勢さんと翔鶴さんも楽しそうに談笑、大人しく座ってた潮、大潮も先程確保された那珂ちゃんに「笑顔が少ないよー!!スマイルスマイル!!」と引っ付かれていた。

……はあく、なんか訓練だーとか意気込んでたけど急に恥ずかしくなってきたわ。そりやそうよね、ドロ刑で訓練になるなら常日頃の訓練はどうなるのかって話よ。

……まあでも、作戦話してる時真面目な顔してたし……普段から少しでもいいからあれぐらい真面目にやってくれば……アイツ根は良い奴だし、結構カツコイ……

「満潮、聞いている?」

「ひゃい!? な、ななな何かしら!」

川内に呼びかけられてるのに気がついていなかった満潮は思わずガタガタとドラム缶を揺らしてしまう。

「しーっ!! 静かに!! こんな時にどうしたのさ!」

「あー! ごめんなさいー!」

いやいやいや!! 私は何を考えてるのよ!?

あ、アイツの事なんか全然!!

「とりあえずほら、深呼吸して一旦落ち着いて。」

そう! 今は落ち着いて次の行動を……ゆっくり吸って……

ゆっくり吐く……また吸って……また吐いて……

「ごめんなさい川内さん、落ち着いたわ。」

「なら良かった。龍驤さん、こっちは定位置に着いたよ。いつでも行ける。」

『あいよく、ちよつと待つときやく。飛龍、提督は……了解。もうちよいで向こうも着くとき。向こうが着いたら頃合いを見て合図するで。そしたらアイツらに一丁かましたれ! 泥棒の意地見せたれや!』

数十秒後、提督が配置に着いたという連絡が入った。

後は合図を待つだけ……。これは訓練じゃない、お遊びだ。がお遊びだからと言って手を抜くようなことは私らしく無いわね。

「やってやろうじゃない……。」

「お、気合い入ってんね。満潮！それなら私も負けてらんないな。！」

突入まで後20秒……

—————

ゆっくり、ゆっくりと確実に前進して行く。

逆側は川内と満潮に任せている。潜入プロの川内が付いてるんだ、恐らく大丈夫だろう。

まあバレたらその時はその時だ。そこから作戦を開始するしかない。

すると俺のサポートをしている飛龍から無線が入る。

『提督ストップ！後ろに間宮さんと古鷹さん！』

慌てて物陰に向かいダンボールで身を隠す。

間宮さんと古鷹なら巻くことは可能だろう。しかし今回は誰もバレずに警戒されない事が第1なのだ。

じつと警戒していたが間宮と古鷹はこちらに向かってくること無く、角を曲がって行った。

「ふう、逃げるのも大変だけどバレないようにって言うのは尚更疲れるな……。」

『OK提督、近くには誰も居ないから真っ直ぐ進んで。』

全然関係無いけどあれだよな、OK○○○○って言われると某インターネットが頭浮かぶよな。

はい、どんな御用でしょう？って言えばいい？

冗談はさておき、ダンボールを引きずらないよう注意しながらゆっくりと前進を再開する。

しばらく前進すると不知火の後ろ姿を遠くに確認した。

そろそろ防衛ラインに近づいてきたと言う事か、辺りを飛龍に確認してもらおうとチラホラ警察組がいらっしやるらしい。

ともかく正面に立っている不知火を退かさないと進めない。  
退かせなくとも注意を逸らしたい……。

辺りに何か無いかと見渡すと……

ん？これは……開発に失敗というか妖精さん達が作りだした謎ぬいぐるみ……。

机の上、誰かが持ってきたのだろうか？雲みたいなのとペンギンみたいなぬいぐるみ、そして……カワウソ？なんじゃありや？でもどっかで見たことある気がするんだよな……う？ボクカワウソ！

女の子はよく分からないけど可愛いものに反応するって言うしな。コイツらに関しては何可愛いというか奇妙なっていう方が合ってる気がするけど……。

これを投げて不知火の注意を引きたいけどあの不知火だぞ？物音で注意を引くかもしれないけどコイツらは興味を持たれずに終わるかもしれないな。

まあ物は試しだ。駄目ならまた別の手段を考えよう。物音を立てないように近づき、三体のぬいぐるみを引つつかむ。

「ともかく1発試してみるか……なっと！」

物陰からぬいぐるみをぶん投げる。隣の建物は体育倉庫だ。投げたぬいぐるみは外に出ていたスコアボードに当たり、ぶつかって衝撃でパタパタと音を立てるスコアボード。

音に気がついた不知火はゆっくりと体育倉庫へと近づいて行く。

お？ぬいぐるみに気がついたな。さて、不知火はどんな反応するか……。

不知火は1度足を止め、ぬいぐるみを一瞥すると何事も無かった様にすぐ横の脇道に入っていった。

……まあ、予想通りと言えば予想通りか。物音がしたから近くに泥棒が居るかもってただ警戒させちまったかな？

そうなるも不知火の趣味とか気になるよな、何が趣味なんだろう？イメージ通りの趣味ってなると……駄目だ、想像するのが戦術指南書を読んでる不知火の姿しか浮かばない。

不知火の趣味はともかく、アイツが居ないうちに……うおっ!?

慌てて身を隠す。通りに再び不知火が現れたからだ。

危ねえ、不知火の奴戻ってくるの早えーよ……ん？なんだアイツ、またぬいぐるみの所に……。

というかなんか不知火の奴、妙にソワソワしてると言うかなんというか……今も辺りをキョロキョロと気にしている。

辺りを確認し終えたのか不知火はこちらも驚くような素早い動きでぬいぐるみを拾うと体育倉庫の中へと消えていった……。

え？まさか、そうなの？

コソコソと体育倉庫横まで移動し、中の様子を伺う。

するとそこには……っ!!

「ふふっ……不知火に見つかつたのが運の尽き、あなた達は不知火の部屋に飾ってあげます……ふふ……ふふふっ！」

見つかつたとか言うから少しドキツとしたが、重要なのはそこじゃない。あの不知火が、無表情で有名な不知火が、笑顔で、ぬいぐるみ達に頬擦りしてるんだ。

何故だ、何故こういう時こそ青葉が居ない!!

1番美味しい絵だろ!!

「……貴方はペンペン、貴方はふわりん、貴方は……この子、何処かで見たような……？ボクカワウソ！」

おいおいおい、やべえよやべえ、不知火さんぬいぐるみにめっちゃ可愛らしいというかファンシーな名前付けてるよ……いやいや、別になんの問題も無いのよ？人の趣味嗜好にケチつけるような奴は馬に蹴られて何たらって、そこじゃない。

不知火の普段は謎に包まれていたからな、しかも普段からクールで真面目って言うイメージがあつたし、凄いギャップだった。

知ってしまえば意外だったという驚きとホツと安心感。

戦闘報告の時も表情が読みづらいというか淀姉さんとはまた違う怖さがあったからストレス発散とか大丈夫かな？俺なんか作戦やらかしたかな？なんて思ってたからなあ……でも少し安心した。怖いと思つてた不知火もこんな風に年相応の一面を持っていたのだ。

そう思えば微笑ましい様な嬉しいような、少しだけ不知火の事が

分かったような気がしたんだ……そう、この時までには。

「ふふ……ふふふ……誰だッ!!」

ぐいんツ!!と振り向く不知火の頭。

………殺されると思った、本気で。

「今確かに視線を感じた……まだそう遠くには行っていないはず。誰だか分かりませんが不知火の秘密を知ったからには……徹底的に追い詰めてやるわ。」

怖ッ!!怖すぎる!!やっぱまだ不知火の事分かってなかったわすんません!!目がね、あの眼光がね、めっちゃ怖いねん!!……だが幸いにも俺が近くに居ることをまだ不知火は気づいていない。

こつちに来る前にさっさと移動して……ブオン

ん?この起動音、まさか……。

恐る恐る後ろを振り返ると今来た道を走りながら戻るホログラムの姿があった。どうやら移動しようとした時に椅子の角にぶつかってホログラムが起動してしまった様だ。

起動したのがクロークなら問題無かった、透明になるだけだから。だがしかし、このホログラムはより本物だと錯覚させる為にも足音がするように設計されていると明希姉が言っていた。

今、目撃者を血眼で探している不知火に近くで物音、足音がすればどうなるか、「足音ッ!!」ホログラムの足音にすぐ気がつく。

そしてそのホログラムの姿は誰か?そりゃもちろん、この俺だ。何も知らない不知火がその姿を目撃すれば自分の姿を見たのは俺だと思っただろうよ。

走り去るホログラムに向かって不知火はポツリと呟く。

「……見てしまったのね司令、不知火の秘密を。こうなっちゃったからには……。司令には申し訳ないですが、手段を選んでられません。」

おいおいおい、死んだわ俺。

今不知火に見つかったら絶対処されるのが目に見える。

今度、今日の事聞かれても全部何も見てないの一点張りで行こうそうしよう。

こうして俺は体育倉庫をぐるっと迂回して防衛ラインを突破して行った。

『ザッ…あ！良かった繋がった！どうしたのよ提督、急に無線切って……。』

「あーすまん、近くに警察……というか不知火が居てバレるとまづいから無線切ってた。」

『ザッ…なら良かった。でもそれならごめんなさい、私の索敵が甘かったせいね……。』

「不知火は倉庫内にいたみたいだからそれはしようがないさ。」  
まあ、それにより俺は不知火から命を狙われるようになったがな。

「それで、この先に警察は？」

『ザッ…その通りには居ないよ。あ、でも今みたいに建物内とかに居るかもしれないから気をつけてね！それと川内と満潮もそろそろ定位置に着くらしいから提督も急いで。』

「了解。」

今度はその通りに誰か居ることは無かった。通りを抜けるとグラウンドの端に到着、反対側を見ればドラム缶が2つ、あれが川内と満潮か。

「飛龍、定位置に到着した。」

『ザッ…はいはい、にしてもここが牢屋つても厳しくない？こんな開けたグラウンドの真ん中って。』

「文句言ったってしょうがないだろうこうなってるんだから。とりあえず飛龍、辺りを調べて来てくれ。タイミングが良ければそのまま作戦開始だ。」

『ザッ…了解！ちよつと待ってね、あー黒潮と陸奥さん、後は隼鷹が牢屋近くを警戒してるみたいだね。』

3人、それなら行けるか……？いや、やるしかない！

「飛龍、川内達に通達。残り時間が30分になったら作戦を開始

する。」

『ザツ…了解!』

今からおよそ1分後作戦開始、恐らくここで脱走させられなければこのまま泥棒は壊滅だろう。

だから俺はこの作戦を成功させてみせる!!待ってる間宮膝枕あああー!!!!

「……あら?今何か聞こえたような?」

「どーしたの間宮さん?誰か見つけた?」

「ああいえ、なんでもないので深雪ちゃん。早く私も1人捕まえなきゃって!」

「あはは!それならこの深雪様の出番だね!!間宮さんのフォローなら任せて!!」

「あら頼もしいわ!じゃあ、深雪ちゃんよろしくね。」

—————

……残り時間30分定刻となった。作戦開始の時間だ。

「よし、飛龍、龍驤やれ。」

『ザツ…よっしゃ任せとき!艦載機のみんな、お仕事お仕事!!』

『ザツ…みんな、頼んだよ。』

『ザツ…ファイトなのです!』

任せとけ必ずみんなを脱走させてやる。

『ザツ…川内、満潮、提督を任せたわよ!全機発艦!』

グラウンド手前に待機していた龍驤達の艦載機が一斉にグラウンドへ突入。

「敵艦載機発見や!!」

「落ち着いて、これは陽動よ!隼鷹、貴女は艦載機を!黒潮、貴女は私と辺りを警戒!!」

味方の艦載機が現れた事で牢屋内は盛り上がる。

「あれは、飛龍さんと龍驤さんの艦載機!?という事は……皆さん!!提督さん達が助けに来ましたよ!!」

「きやは!那珂ちゃんもテンション上がってきたよ!」

ドラム缶の中で待機していた川内、満潮もアクシオンを起こす。

「さあ満潮!私達の出番だ!!先に暴れてくるよ!!」

「気をつけてね!!」

「満潮も!!」

ほぼ同時にドラム缶から飛び出す2人。

「来たわよ!黒潮、絶対に通しちゃダメよ!!」

「陸奥はん任せとき!!牢屋には1人も近寄らせんで!!」

「ちよいちよいちよい!!盛り上がっているとこ悪いけど飛龍と龍驤2人相手にするのは流石に骨が折れるつてもんよ!!早いとこ片付けて貰っていいかい!」

「そう簡単に私達は捕まらないよ、そんな事より、私達にばっか構っていいの?」

「アイツはもう近くまで来てるわよ。」

陸奥と黒潮はその言葉に身構える。

注意して!黒潮にそう声をかけようとしたその瞬間、茂みの端から提督が走り込んでくるのを陸奥は見逃さなかった。

「くっ!間に合わない……っ!!」

脱走を許してしまう、そう思った時……

「そうはさせないわよ!!」

「大人しく捕まりなさいこのクソ提督!!」

騒ぎを聞き付け近くにいた霞と曙が提督の進路を塞いだ。

「ナイス!!二人ともグッドタイミングや!!」

「くっ!こんな時に増援なんて!」

まさかの増援で顔をしかめる満潮。

「これで5対3……残念だったわね、頼みの綱の提督もこれで逮捕。さあ川内、満潮、貴女達も観念なさい。」

絶体絶命、その筈なのに川内の顔から笑みは消えない。まさかまだ策を!?



「あはは！陸奥さん、霞と曙が捕まえようとしているのは本当に提督かな!?満潮、煙幕!!」

「了解!!」

満潮が牢屋に向かって投げつけた玉からモウモウと煙が立ち込め、牢屋周辺を真っ白の世界と変える。

牢屋内は突然の煙に咳き込んだり「那珂ちゃんアイドルだからそういうのNGだつて〜!!」と賑やかだ。

「このクズっ!!神妙にお縄につきなさ……つて!?透けた!」

「陸奥さんやられた!!これクソ提督の罠だわ!!」

満潮が牢屋前に焚いた煙幕……まさか!?もう提督は!!

クロークで透明化してるのか提督の声だけが聞こえた。

「ふははは!!!残念だったな警察諸君!!君らが追いかけて回してたのはホログラムだぜ!!さあ、みんな逃げろ逃げろー!!!」

牢屋からワーワーと一斉に逃げ出す泥棒達。

川内が置き土産にもう1つ煙幕を散布した事でグラウンドは火災現場ばりの煙が立ち込めていた。

「よし、これで全員逃げたな……そんじゃ俺もおさらばさせてもらおうかガシツ……な?」

もう川内つたらくもう泥棒は全員逃げたつてのによ。

「川内、もう全員逃がしたぞそれは俺……」

あれ?今俺さ、透明化してる最中だよな?しかも煙の中、いくら川内でもわかる筈……。

「はあい、こうちやくん。とつても素敵なチケットだね。返して欲しい?」

振り返るとごつい機材を被った奴がいた。恐らくサーマルゴーグルだ。しかし声でわかる、アイツだ。寧ろ透明状態の俺を簡単に見つけることが出来るのはこのスーツを作った奴しかしない。

「あ、ああ勿論。」

勿論返して欲しい。それがあれば俺は間宮の膝枕で昼寝ができるんだ……。

「良い子ね。友達も沢山このチケットを狙ってるんでしょう?賭

けてもいい。」

「49人だよ。でも参加してる姉さんが1番タチが悪い。」  
マジで主催者張り倒したい。

「お姉さんは何処にいるんです?」

「分かんないよ。いつも研究室に引っ込んで自分の事ばかりやってる。開発の依頼してるのにさ。」

「そんなことないですよ。きっとその開発に関わることなんですよ。」

んなわけねーだろ。プラズマレールガンやら波動砲やらとんでもスーツ作ってる奴がまともな思考してるわけねーだろ。

「そっかとりあえずもう行かなきゃ。」

「待てや!!」

なんだよ急に大声出すなよ。

「行っちゃおう?これ置いて行っちゃおうの?」

それは……っ!?

「俺の名前と印鑑入り休暇申請届!しかも五連休!」

Oh, my boat!とか言つたやつ誰や。

「Exactly!!さあこうちゃんこれが欲しいんでしょ?……」

受け取りなよ。」

ご、五連休……だがしかし……絶対裏がある……ない訳が無い。

「何を悩む事があるの?五連休よ、五連休。普通なら淀がOKしてくれないよ?」

「………本当に五連休貰えるんだろうな?」

「ええ勿論、大本営からの実印付きですよ?さあ、どうぞお受け取り下さい。」

五連休の言葉に思わず手が伸びる。

「そうよ、こうちゃん。休めるのよ、こうちゃん……休むんだ……。」

こうして俺は悪魔(明石)の囁きに耳を貸してしまい、休暇申請届を掴んでしまった。

「五連休が!!終わったら!!12連勤ですよ!!」

「ぐああああああああ————っ  
!!!!」

・相良航希 逮捕

・牢屋内に居た泥棒は全員脱走

————  
こうちゃんを牢屋に連行し終えた私は通りをプラプラ歩いてい  
た。

大本営からの書類も渡したし、お願い券もゲット。ノルマクリア  
だドン！

「はー、こうちゃん確保でお願い券は私の物。何お願いしようか  
なー？研究費用up？それとも今後の面白い事に使うのも……ひゃ  
ん!？」

東側の暗殺者か!?

突然、体中が痺れて動かなくなった。もんどり打つようにして倒  
れ込む私を見下ろす影が……。

「……やつてくれたわね川内ちゃん、とつくに逃げたものだと  
思ってたのに。」

ペイント銃を片手に川内ちゃんは不敵な笑みを浮かべる。実を  
言うところのペイント弾には痺れ薬が混ぜてあった。まさか自分で食  
らう事になるとは思っていなかったが。

「いやー悪いね明石さん、私、漁夫の利は得意でさー！それと提督  
とも約束しててねー！『泥棒を全員逃がしたら恐らく俺は明石に捕ま  
る。そこでだ、お前にこのペイント銃を渡す。後は分かるな？明石か  
らお願い券を奪え。明希姉さんに渡すぐらいならお前の夜戦1週間  
の方がマシだ』ってさー！」

「……マークされてたってわけですか、まあそりやそうですね。  
ね。」

「あ、恨まないでよー？これも勝負だからさ!!じゃ、お願い券は頂  
いていくよー!!やつせんくやつせんく!!」

颯爽と走り去っていく川内。楽しそうだなあ〜今度戦闘出てみ  
ようかな〜。

それはともかく、

「お願い券の分は連休の時にきっちり楽しませてもらおうかしらね……………」

「……………不幸だわ。」

「ああ、不幸だな……………」

牢屋代わりのゴールに仲良く並んで体育座りしてるのは俺と山城。

ゲームの方は今現在も継続中、残り時間が20分ぐらいか。もう疲れたしゆつくりしたいところだが……………」

「まさか私が捕まったタイミングでみんな脱走だなんて……………」

コイツがいる。

「タイミングが悪かったとしか言えねえなあ……………」  
俺としては何故ドロ刑しただけでお前が大破するか理由が分からないんだが……………」

「……………提督は暴走車両に撥ねられた事ある？」

いや、あつたらこんな所でピンピンしてない。

「無いでしょ？私は今日撥ねられた、長門さんという暴走車両に。」

……………ああ、理解したすまん。

まだ駆逐艦追っかけ回してんのかアイツ……………」

「だから覚えておいて、日常なにが起きるか分からないのよ。」

「……………了解です。」

流石今日撥ねられただけあつて言葉の重みが違う。

「まあ、あれだ。もう捕まってるしあと20分ゆつくりしようぜ。

あれだったら寝ててもいいぞ？時間になったら起こしてやるから。」

「……………私が寝てる間に変な事したり」

「しねーよとつと寝ろ。」

はーやつと静かになつ「あ、司令官！お疲れ様です！実はなんですけど〜」……………」

「青葉、俺は今とてつもなく嫌な予感を感じてる。それ以上何も言わずに回れ右して帰れ。」

「いや、そう言われましても……皆さんやる気満々でして。」

「……『皆さんやる気満々』？確かに始まった時はやる気満々だったけどまだみんなやる気満々ってのはどういうことだ？」

「あ、すいません端折り過ぎましたね。えー重巡青葉、司令官に報告致します。出撃していた艦隊が帰投しました。それですね、大井さん、北上さん、叢雲さんが飛び入り参加。大本営に行っていた大淀さんも帰投したので参加するとの事です！」

「……ま、まあ落ち着けつ、落ち着つけ。俺はもう既に捕まってる追われる理由も無い。あと20分ここで過ごせばいい。」

「……そ、そうか、いいんじゃないか？こういう息抜きも大事だろうし！はは、あははは！」

「でここからが本題なのですが、さつき明石さんから連絡があつてですね、あ、録音しておいたの流しますね。ガチャ『あ、青葉？今ね出撃組と淀が帰ってきて参加するって言うからこうちゃん復活させよう！あ、お願い券また渡しておいてね！あ、参加するのは大井、北上、叢雲と淀ね。残り時間20分だし、みんな警察でいいや！うん、うん、了解くじやあよろしくね〜』って事なんで……じゃあこれお願い券です！」

バシツと背中に貼り付けられるお願い券。

「い、嫌だ!!もう良いだろ!!十分やったじゃん!!」

一遍アイツらに追われてみれば分かる!!鬼ごっこがどれだけ怖いか理解出来るぞ!!

「あはは……私としても撮れ高は十分なので大丈夫なのですが……彼女達のボルテージが最高潮でして……。」

「勘弁してくれ！俺はもう部屋に帰る！」

「司令官それ死亡フラ」「見つけたわよ!!」

「……今、聞こえないはずの声が聞こえたよ。」

この場に叢雲がいるはずないじゃないかH A H A H A。

「こうちゃーん、見て見ぬふりするのには構わないけどそのチケツトは置いてつてもらおうかなー。」

「……………北上さん、北上さんは右から、私は左から行きます。」  
「おっけー大井っち、いつも通りにね。」

「アンタが大人しく私にチケツトを渡してくれれば事が済むのよ。だからさっさと渡しなさい。」

やっぱ幻聴じゃなかったよ……………北上、大井、叢雲集結しました。オラまだ死にたくない……………。そして……………

「こうちゃーん、勿論、私にチケツトを頂けますよね……………？」  
この心臓を鷲掴みにするような声、俺の知る限り一人しかいない。

冥王召喚？ジャツジメント？

全てを奪われた提督が一言、犬はお帰りください。もしくは超になつて出直してきな。

つてそんな事どうでもいい、我が鎮守府のハーデス、淀姉さんまでもが集結してしまった。

「……………青葉、そういやお前、新しい一眼レフカメラ欲しいって言つてたよな？買ってやるから……………いや、差し上げますから。」

「司令官すいません。私も今は自分の命が可愛いです。」

「頼む助けてくれ！お前の司令官の命が掛かってるんだ！」

「駄目です、7時半から空手の稽古があるんですよ！」

「今日は休め！」

頼み込むも「司令官、頑張つて下さーい！」と逃げられた。

「山城、起きろ起きてくれ!!俺の命が危ないんだ。」

「……………私を起こさないで、死ぬほど疲れてる。」

それ俺のセリフううー!!!

こうして俺と艦娘の第2次ドロ刑大会が幕を開けたのであつた!!

ただ一言言うのであれば、「明石許さんからなアアアアアアアアアア!!!」

16:00 執務室…

バサバサと言う音で夕立は目を覚ました。

「……あれ？夕立、寝ちゃった？…つぽい？フワア〜」

6月にしては爽やかな天気、窓の外から吹き込んでくる風が心地よい。ふと時計を見れば……

「16時?!こーちゃんヤバいっぽいまだ全然仕事終わってないっぽい!!…つてええーっ!?!」

飛び起きて辺りを見渡せば風に吹き飛ばされたのか書類が散乱していた。

踏んだり蹴ったりとはこの事か。

「つて、こーちゃんまだ帰ってなかったっぽい？」

こーちゃんが工場に行つて2時間以上経っているがまだ戻っていないようだ。工場で何かあったのだろうか。

「ならチャンスっぽい!!こーちゃんがいなかったから仕事は進まなかった!それで行けるっぽい!!とりあえずこの書類を集めなきゃ!!」

わたわたと書類を集め始めた夕立。そんな床に散らばった紙の中で一際目立つ金色の紙を夕立は見つけた。

「ん?何かしらこの紙?」

こんな書類あったっけ?と拾い上げてみるとそれには

『提督に1つお願い出来る券』……?」

記憶を辿るが、眠る前までこんなのは無かった筈だ。となれば、誰か置いていったのか、もしくは風に飛ばされたのか……?…つて!と  
りあえず書類集めな

「あー疲れ……つてなんじゃこりゃー!?!」

そんな事考えていたらこーちゃんが帰ってきてしまいましたっぽい。

「あわわ……こーちゃん違うっぽい!!夕立が散らかしたんじやなくてこれは風で飛ばされたみたいで!!」

「とりあえずいいから窓閉めろ窓!!」

……舞鶴第2鎮守府の慌ただしく騒がしい日常はまだまだ続くようです。

「めでたしめでたし……つと。」  
「おい！明石！！見てんなら手伝え！！ドロ刑でお前に嵌められた事忘れてねーからな！！」



## 就活戦争26日目

ガチゲーマーと人並みにゲームをする奴の違いは何だと思う？  
レベルやランクの差、装備の差、様々だろう。

だが真に違うのはゲームに対する考えだろうと俺は思っている。  
人並みゲーマーが『あー楽しかった〜！ストーリーもグラフィックも良いし近いうちに大型アップデートも来る、何より双剣とランスは最高ね〜……ふあ、眠くなってきたし続きは明日の仕事終わってからやろうかしらね。』

と程々に楽しんで程々に止められる奴に対し、ガチゲーマーは『発掘武器……これは、はずれ……祭り期間だし、もうすぐ追加コンテンツも……歴戦王のハムタロトもう1回、しよう……。』

『おけ。』

貪欲に上のランク、上の装備を求め続け、これを達成するのに労は惜しまない、これがガチゲーマーだ。

そしてガチゲーマーには危険が伴う。

……大きな危険が。そんな危険がこの鎮守府にはいるのだ。

ガチャ！「初雪!!ゲームは終わりよ!!明日朝から出撃でしょうが!!アンタも聞こえてんでしょ!?!これで寝坊するんだから寝なさい!!」

オカン（叢雲）と言う危険が……。

「……叢雲、もう1回手伝って。次は必ず、出す。」

『こういう時に限って物欲センサー発動して出てくんだよな〜。俺も王金・風龍の片手剣欲しいけど全然出ないわ。』

「私もまだランスの欲しいやつ出てない……って、そうじゃなくて、いい加減クリハンを止めなさいーい!!」

クリーチャーハンター、通称クリハン。

今俺達がやっているゲームである。

仲間と共にクリーチャーを狩り、装備を強くしていくハンティンゲームで俺が小学生ぐらいの時から流行りだし、今に至るまで大人気のシリーズだ。

今日は書類仕事が早く片付いたので前々からフレンドコードを

交換していた初雪、こちらへビーゲームー。

そしてクリハンをやっている事が初雪経由で判明した叢雲、こちらにはライトゲームーと過去へビーゲームーに片足突っ込んでた俺の3人でクリハンをやり、いまに至る。

「叢雲、まだ23時、あと1時間は、余裕。」

『そうだと叢雲、何だったらこの時間まで書類やつてる時だつてある。23時はまだ今日だ、明日じゃない。』

「それに叢雲、もう一度、やれば、叢雲の欲しいランスだつて、出る、かも……。」

「そんな簡単に出たら苦労しないつての……。」

『分かんねーだろ！回さなきゃ当たらないし宝くじも買わなきゃ当たらない。お前の欲しいランスだつて次で出るかもしれないんだぞ!?!』

なんかスロツカスみたいな事言ってるぞ俺。

物事は何事も程々にな。

「はいはい、狙い武器一つも出てないアンタは黙ってなさい。て言うかアンタ達、いい加減止めないと大淀さんと間宮さんに言いつけるわよ?。」

な、なんて恐ろしい事を……。淀姉さんなんかチクられたらキヤメルクラツチされた後、ゲーム機本体を破碎処理してしまう……。

「酷、過ぎる、間宮さんに、言われたら、コントローラー、取り上げられる……。」

「ならとつとと電源を切つて寝る事ね。そろそろ2人が巡回してくる時間じゃないかしら?……それでもいいの?。」

バタバタと音がしたと思つたらマイクが切れた。初雪が電源を落としたらしい。

にしても叢雲卑怯だぞ、ここに淀姉さんを引き合いに出してくるか?もし、叢雲が困った時は明石連れてくるからな?あのテンションについてもらうからな?。」

ともかく消灯時間は過ぎたので電気を点けていると巡回の奴、今

日は淀姉さんと間宮さんがやって来るのでQ S 4は諦めるしかない。

だがしかし、ゲームをする事を諦めるとは一言も言っていない。

頭から布団に潜り込む。するとスマホがブルブルと震え出す

……予想通り初雪からのL I O Eだった。

(提督、本当に寝る?)

(馬鹿言え、こんなに目が冴えてるのに寝れるわけねーだろ。

勿論やる。)

(何が、いい?)

(んー、S w o t c hでもV o t aでも3 B Sでも良いんだけど  
なーでも、カチャカチャ音のもは控えた方がいいか。となれば、  
無難にスマホゲーか?)

(問題、ない。)

では早速とモンスタースライダーを起動させ「こうちゃん、眠れないなら次のお仕事持ってきますけどどうします?」

あ~~~~めっちゃ眠くなってきたなあ~~~~!!!

やっぱ夜更かしは良くないよね~~~~!!!

……本当にこの人音もなく気配も無く侵入してくるの何なん?

次の日、初雪に聞いたら向こうも叢雲が乗り込んできたってさ。

やっぱバレてるんすね。

-----

「……提督ってさ〜ゲーム好きだよね?」

食堂でカレー食ってたら前に座ってた蒼龍から尋ねられた。

「まあ、結構やってるわな。蒼龍はゲームとかやらないのか?」

「んー、あんまり機会が無かったからね〜。でなんだけど、私達の  
練度も結構上がってきたし、海域も安定してきたからさ、飛龍と一緒に  
なんかゲーム買おうって話したのよ、だけどどれが面白いとか全然  
分かんなくてね〜。そこでさ、提督のオススメとかあったら教えて貰  
えない?」

あーなるほどなるほど。俺のオススメねえ……。

俺のオススメと蒼龍達が合うって保証無いからなあ。

「……こういう系のゲームやりたいとかある？ファンタジー系とか格闘系とかふわつと系とかさ？」

「うーん……普段戦闘してるから格闘系はいいかな。あーでもファンタジー系とかなら戦闘もいいかな。ふわつと系だとどんなのある？」

「あー……おいだよアニマルの海とかいいんじゃないか？漁村を發展させていくみたいなゲーム。後はファンタジー戦闘系なら俺が今やってるクリーチャーハンターとか案外合うかもしれないぞ？みんなでクリーチャーを倒して装備を強化して行くゲームなんだけど。」

「へえく……ちよつと動画見てみるね。」

そう言うのと蒼龍はスマホを取り出しPVを視聴し始めた。

そして数分後……

「めっちゃ面白そうだし買う!!」

「ほーええやん。ちなみにどっち買うんだ？」

んー、と考え込む蒼龍の顔がこれまた可愛いこと。

何？そういう見せ方みたいなのがあんの？最高かよ。

「どっちも買おう!!」

「子供か!」

そして元気っ子か!!

まあでもわかる。面白そうだし、ついつい買っちゃうんだよな。だがこうやって積みゲーが生まれてくる。

けど蒼龍はゲーム初心者だし、2本ぐらいなら積むほどのものでもないか。

「後で飛龍にも見せてあげよう！きっと飛龍も買いたくなるはず!!とりあえず私は買うことに決めた!」

「お、おう。まあゲーム仲間が増える事は嬉しい事だ。なんかわかんない事あったら聞いてくれ。」

「もっちゃん!その時はよろしくね!そろそろ飛龍が出撃から帰ってくるはずだから迎えに行ってくるね!!」

そして3日後……

「買いました!」

「買ったちゃいました!」

いや、早いな。まだ3日しか経ってないのにもう準備完了してるよ……。

本日の仕事は休み。蒼龍達の用事に付き合うわけだが、それがゲームなら全然OKです!

「流石明石さんね、頼んだ次の日には届いてるし、本体の設定までしてくれたわ!」

「昨日なんか楽しみ過ぎてぐっすり眠れちゃったもんね!」

ぐっすり眠れちゃったなら良かったわ。

「とりあえず相良くんID教えて〜」

「あ、私のやつこれね〜」

フレンドコード交換会するのはいいんだけどさ……

「なんで君達、テレビごとここに持ってきたのさ?」

インターホン押されて何かと思えばテレビ持った2人が玄関前で立っていたのには驚いた。

「え?だってこういうのって50メートル以内じゃないと通信出来ないんじゃないの?」

いつの時代だつてばよ。

「んなわけあるか! Wi-Fiあれば世界の裏側からだつて出来るわ!」

「へー時代は進化したねー?」いや、お前スマホ使いこなしてるのにゲームの情報10年前ぐらいで止まってるのな。

「とりあえず持ってきちゃったのはしようが無いから今回はここでやるか。後で明石にマイクも頼んどけ。」

コンセントは沢山あるからいいけどブレーカー上がっちゃうんじゃないかとも思ってたが流石妖精さんの建てた家、聞いてみたら大丈夫らしい。まあ大型探照灯点けまくってたしそれもそうなのか?

そんなこんなでフレンドコード交換会も終了し、早速ゲーム開始。

「あ、そうそう。昨日の夜キャラメイクだけはやったんだ〜」

「すごい時間かかったよね。」

まあコイツらも女の子だからきつとバツチリメイク決めた女ハンター作ってきたんだろうな。

他の奴が見る機会はギルドカードぐらいしかないけど結構分かるよね男が作ったネカマハンターと女が作った女ハンター。

そして画面に映るコイツらのキャラ

蒼龍、あーまあ、想像通り。可愛い女ハンターさんですわ。蒼龍らしいと言えば蒼龍らしい。コイツは普段からオシヤレ気にしてるもんな。

で、問題は飛龍のキャラ。いや、問題では無いんだけどさ……。

「すんげー渋いおっさんだな……。」鍛え抜かれた身体、顔には大きな傷に白く染ったあご髭……とても新人には見えない。ベテランだろどう見ても……。

「えへへ〜カッコイイでしょ〜?」

うん、カッコイイんだけどストーリー絡めて見たらこんなに歴戦感ある奴なのにルーキーってすげー違和感じゃね? 店長かと思っただらバイト初日でしたって奴並に肩透かしだろ。

「ほらほら見てよ私のオトモ犬〜! この子も可愛いでしょ〜? このタレ耳とかパツチリした目とか〜キヤー! ゴロ太可愛いー!!」

おじいちゃん家で飼ってる犬の名前かよ。

「私のも負けてないよー! 凛々しい顔立ちに傷跡、そして益荒男の如く荒々しい毛並み!! 多聞丸、カッコイイぞー!!」

おいおいおい、犬の名前に多聞丸って……多聞丸様に怒られるぞ……?」

まあいいんだけどさ……。

「てかさ、相良くんも新しいデータ作ってやろうよ! 私達が新しく始めるのと一緒にさー!」

「あ、いいね! そうすればアドバイスとか攻略法とかわかりやすいじゃない?」

「あーまあ確かにそうだな、しかもレベルや装備が強い奴が入って来てもヌルゲーになるだけだしな。OK! ちよつと待っつけ

「……。」

新たに新規データを立ち上げ、キャラを作っていく。と言ってもご丁寧にキャラを作ってる暇は無いからそれっぽく作りあげていく。

そんな時ブーブーとスマホがなる音が聞こえた。相手は初雪だった。

キャラメイクを一時中断しメッセージを確認する。

(提督、つけてるなら、クリハンやろう。)

「お、いいタイミングだな。お前ら初雪誘ってもいい?」

「勿論OK!」

「初雪ちゃんかあ、めっちゃ強そう。」

初雪ちゃんめっちゃ強いぞ?」

そんな事とはかくメッセージを返信。

(飛龍と蒼龍がクリハン買ってな、これから俺も新しくキャラ作ってやろうと思ってるんだけどお前もどう?)

(分かった。所で、なんでマイク、付けてないの?)

(いや、なんか蒼龍達が俺の部屋までテレビと本体持ってきてやってるからさ……。)

(なんで……?)

(アイツらのゲーム時間は10年前で止まってんだ、許してやれ。どうする?お前もこっち来るか?)

(いや、私は……)

「あ、相良くん、お菓子持ってきたから適当に食べていいからね?初雪ちゃんも来るならどうぞって伝えといて。」

(今飛龍がお菓子持ってきたから初雪も来るならどうぞって言ったけどOK?そしたら部屋作って待っていてくれ、飛龍達も部屋に連れてくから。)

(……行く。)

(んあ?)

(私も、そっち、行く。)

(お、おう、分かった。じゃあ部屋はこつちで作っとくわ。)

部屋を作り、蒼龍達を招待。後は初雪を待つばかり……

ピンポーン！呼び鈴が鳴る。玄関に向かうとハードとコントローラーを抱えた初雪が立っていた。

「おーいらっしやい、あ、あとテレビか……。」

「自分で、取ってくる……。」

「でも重いだろ？任せろ取ってきてやるって。」

「いや、でも……。」

そこに蒼龍が割り込んできた。

「相良くん？ダメだよ乙女の部屋に許可無く入るのは。初雪ちゃん、私を手伝うから一緒に行こうか？」

「……うん。」

あ……確かにデリカシー無かったなこれ。そりやそうだ、知ってるとはいえ男を部屋に上げるのは……ね。

「今部屋、散らかってるから、提督に、見せられない……。蒼龍さんなら……。」

ちゃんとお部屋の掃除しましょうね？

暫くして初雪のテレビも到着。その間に俺もキャラメイクを済ませ、いつでも始められるようにしておいた。

—————

提督はあく鉱石を掘るうへへいほー

クリハン序盤の鉱石集めマジ大事。

何作るにしても鉱石要りまくるからな。

今俺達がやっているクエストは小型肉食クリーチャー、ジャガラス10頭の討伐クエ、だがジャガラスだけ狩って終わるのは勿体なさすぎるので素材集めをしている所だ。

「相良くん、そこなんかあるの？」

「ああ鉱石だ。蒼龍、このゲーム序盤でお世話になる鉱石さん達だ。しっかり取っておけよ。」

「わー!!なんかいっぱい取れる〜!!」

飛龍、序盤だから取っておいて損は無いけどハリの果実とかバク



レツの果実とかボウガン使わないとあんまり意味無い気がする。

「アオライト鉱石…光虫…薬草…」

初雪は黙々と採取、採掘を行っている。やるのはいいんだけどお前だけ強くなりすぎても意味無いからな。

今回はこの2人をサポートして一人前のハンターにするのが目的なんだからよ。

てかなんで布団敷いてるのそれ俺の布団。

初雪曰く、布団が無いと落ち着かないとかなんとか。

因みにみんなの装備は俺が太刀、初雪がハンマー、飛龍が大剣で蒼龍は弓

蒼龍は「私は別世界でも弓で行く!!」との事で、

飛龍は「近接武器とか使ってみたかったんだよね〜!…飛行甲板で深海棲艦殴りつけるのってアリかな?」とかいう感じで各々武器をセレクト。

まあ慣れたら色々な武器使ってみてね。

「相良君相良君!!なんかデツカイの出てきたんだけど!!」

「なんかテイラノサウルスみたいなのやつね!さつき2、3発でちっちゃいの倒せたならコイツも10発ぐらいで倒せるでしょ!よっしゃ!飛龍さん任せなさ〜い!」

「あ、飛龍待つてよ!私もやるわよ!攻撃隊、発艦はじめっ!」

「あ!お前ら、ちょっと待て!!そいつは…!!」

そして蒼龍、今のお前の弓からは艦載機は出ないぞ?!

初心者が大形クリーチャーに勝負を仕掛ければどうなるか…。

飛龍『力尽きました。』

蒼龍『力尽きました。』

相良『巻き添え食らって力尽きました。』

『3回倒れたので復活できません。街に戻ります。』

デカデカと画面に映るクエスト失敗の文字。

まあ、想像通りだな。

「いやいやいや!!なんであんな強いのが居るのよ!!おかしいでしょ!」

「飛龍、この手のゲームにはな、序盤に初心者殺しが居るのが鉄板なんだよ……。」

「アナンジャフ、初期装備だと、結構面倒。」

「えー、じゃあ今は倒せないって事〜?」

「まあ、倒せないことも無いが、正直コイツに時間かけてまだ作れない装備の枠を解禁するぐらいなら先に進めてた方が得かなあ……。」

「そして、何か1個作れても、そこまで強くない……。」

正直、俺はアナンジャフの装備あんま好きじゃないんだよなあ。あんまり強いと思わないというかなんと……。

「まあ、元々倒さない前提でストーリー組んであるんだから次はスルーして行こうぜ。」

飛龍、蒼龍は少し不満げそうだ。

「それにさ、強そうなクリーチャーが簡単に倒せたら達成感も何もないだろ? 飛龍達が深海棲艦を倒した時、どうだったよ? 凄い嬉しかっただろ? それと同じさ。」

「クリーチャーも、最初は簡単なのから、倒して、ハンターを強くしていけば、今のも、いつか倒せる、はず……。」

「クリハンは特に序盤が楽しいもんだからな。防具どれにしようとか、武器をどうやって強化して行くとか考えると楽しいぞ。」

正直な所、これでゲームがつまらないと言う印象持たれるのはちよつと辛い。折角買ったんだ、もっと楽しんで貰いたいしな。

「だからさ、もう1回やろうぜ!」

さあ、どうだ……?」

「何言ってるのよ相良君、当たり前じゃない! もうクエスト貼つてあるから早く早く!」

「やられっぱなしで終わるなんて有り得ないもんね!」

……良かった良かった。

「ははっ、次はやられるなよ?」

「そう言う相良君だっけさつきやられてたけど?」

「ねー?」

「ぼっか！あれはお前達の巻き添え食らっただけで……。」

明くる日も明くる日も、4人はクリハンをやり続けた。

出撃から帰ってきて、休憩時間や終業後に一狩り。執務を急いで終わらせて一狩り。

「お疲れ様です大淀さん！これ、先日の演習結果です。」

「お疲れ様です大淀さん。」

「あら、吹雪さん、赤城さん、ありがとうございます！確かに受け取りました。」

「にしても、最近の提督、いつにも増して熱心にお仕事なさってますね。何かあったんですか？」

「私も分かりませんが普段からこれだけ熱心に執務してくれればいいんですけどね……。」

「そう言えば、初雪ちゃんも凄い頑張ってるんですよ！この間も出撃でMVP取ってきたんです！」

「確かに初雪さんの成長は目覚ましいですね、この演習でも成果を上げてますし。」

「……空母でも飛龍さんと蒼龍さんは伸びてきましたね。集中力が高まったというかなんとか……偶に不思議な動きしてる時もあります、彼女達なりに考えて行動してるということなのでしょうね。」

「よーし、私も初雪ちゃんに負けないよう頑張らないと！でもあんまり根詰め過ぎるのも良くないと思うので司令官にお茶入れてきますね。」

「なら私も一緒に行きましょう。さつき間宮さんにお茶に合うお菓子を頼んで置いたんで、吹雪さんと赤城さんも一緒に如何ですか？」

「えっ?!いいんですか!？」

「はいっ！楽しみですっ!!」

「赤城さん、お代わりは無しです。」

「……はい。」

クリハンの道は辛く過酷なものだった。

二日目……

「きゃく!!ポケポケ装備可愛い!!見て見て相良君、ゴロ太もお揃いで可愛くない?」

「骨!!野性味溢れる骨装備!!多聞丸もワイルドでカッコイイぞおす!!」

……楽しそうで何よりだ。あ、因みに俺の初期装備はイロア装備一択です。

「やっぱり、ハンマー、最高……。」

初雪の奴、よく頭に張り付いてられるな……。俺ハンマー試したけど無理だったわ。めっちゃスタン取るやん……。どうなってんのその技術。

四日目……

「……やっぱり、アナンジャフと戦うなら火耐性強い防具が欲しいよね。」

「となると、レオレイア、辺りが……。」

五日目……

「うあー棘が全然出ない!」

「俺も尻尾が足りねえ!もう1回だ!」

一週間後……遂に……

「やった……。」

「倒した……んだよね?」

倒れ込むアナンジャフと画面に映るクエスト成功の文字。

「ああ、倒したんだ。今度はお前達の力で……。」

「おめで、とう……。」

「「うううう……やったああー!!!」」

抱き合うようにして喜ぶ二人。

「おいおい、まだアナンジャフを倒しただけだ。クリハンはまだまだ先があるぞ……。」

「次は、上級、難易度が上がってくる……。」

「……そっか、そうだよね！よし！蒼龍、次のクエスト行くよ！私、レオレウスの大剣欲しいんだ！」

「私はレウギエナの防具が欲しいな！相良君、初雪ちゃん手伝って貰ってもいい？」

「もち、ろん。」

「構わないぜ。俺もレオレウスとレウギエナの太刀作りたいし。」

そして二週間後……

「……よっし、今日の書類終わりつと。叢雲くもう今日の仕事無いよな？」

「ちよつと待って……ええ、今日はこれで終わりね。どうしたのよ？最近熱心に仕事しちやって？ヤバイものでも食べた？」

「食ってねーよ！さっさと仕事終わらせて悪いか？」

「いや、むしろ今までもそうしてくれた方が私も助かったんだけどね。」

うるさいやい。

「ところで、早く終わったなら久しぶりにクリハンやりましょうよ？そろそろ発掘ランス欲しいし。」

「あーそれなんだが……。」

「？」

話そうとしたその時、執務室の扉が開き、

「提督く！執務終わった？」

「早く次のクエストやろうよ!!……あ、叢雲ちゃんおつかれ〜！」

「お疲れ様……クエストって、二人もクリハンやってたの？」

「うん、提督のオススメって事で最近始めてね〜。今ランク8なの。」

「それで提督にも手伝ってもらってるって事！そしてその口振りだと叢雲ちゃんもやっていると見た！」

「ええ、やってるわよ。あ、ならこれから4人でやらない？手伝うわよっ。」

「あー……ゴメンね叢雲ちゃん、実は初雪ちゃんもいつも手伝ってくれて……。」

「あー……なるほど、4人までだからね。」

「ここで使えるあの名言!!ここで使わずいつ使おうか!?

「悪いな叢雲、このゲーム、4人用なんだ。」

「アンタはそれが言いたかっただけでしようが!!」

決まったと思った。後悔はしていない。

「まあ叢雲、冗談だ冗談。もうすぐラスボスだからそれ終わったら3、2でクエスト回そうじゃん。こいつらの2人の装備作るの手伝ってやってくれ。」

「あーOK。なんかそんな話してたら初期の頃が懐かしいわね……私も作り直そうかしら?」

「いいんじゃない?早く追いついてきてくれよ。」

「そこは手伝うとか言いなさいよ!」

その後、5人で消灯時間過ぎてもクリハンをやってた為、大淀さんと間宮さんに怒られたとかなんとか……。ゲームは程々にね、妖精さんとの約束だよ?

『間宮さん、お願い、します……。っ!明日からは、消灯時間までに寝ます、から……。っ!コントローラーを……。』

『待つて淀姉さん、芝刈り機は流石に待つて……。待つてっ!!ストップ!!』

## 就活戦争27日目

時は7月後半……気温はぐんぐん上がり連日真夏日が観測されるようになった。

俺は明石から貰った大本営実印付きの休暇届でとある場所に来ていた。

え？そんな5日も休んでて良いのかって？大本営から各鎮守府交代で休めってお達しが来てんのよ。

だから今は舞鶴第1鎮守府と第3鎮守府が俺らの担当区域もこの5日間担当してくれてんのさ。

同様に艦娘達も5日間の休暇が与えられた。実家に帰った奴、仲のいい仲間と旅行に行く奴、そのまま鎮守府に残って過ごす奴とそれぞれだ。

だが俺の場合行先は既に指定されている。まあ明石……もとい明希姉の仕業だろう。休暇なんだから好きな所に行かせると言いたいのは山々だけど、休暇届の行先欄に書かれていたのは俺の爺ちゃん婆ちゃんが運営する小さな旅館。

まず京都まで電車で移動、そこから新幹線で東京まで、そこからまた電車に乗り換えて2時間ほどそこから更にバスで移動……距離的に結構移動しなきゃ行けないのが大変である……。

そんなんだから昼頃出たらもう夕方ってに笑っちゃう。

この行先を見る前までは正直どっか出かけないで部屋で寝たいと言う感情が脳内円グラフで八割を占めていたが、よくよく考えたら鎮守府で寝ようとしたところで誰かが俺の部屋に突入してきてどっか行きたいだ、何かしようとして引きずり回されるのは確定……それならば、明石が用意した爺ちゃん婆ちゃんの旅館でゆっくりするのがありだろう、そう考えたのだ。

だから行先指定だったが全然嫌じゃなかった。

俺は親が色々ハッピーな方々だから爺ちゃん子、婆ちゃん子だったし、それに爺ちゃん達が元気かどうかとも気になる所だしな。

何より嬉しいのは艦娘達が居ないという事、めっちゃ気楽だ。

いつもなら世間が思うオカン並みにオカンしてる初期艦様や最近風邪でダウンしてて、後日お見舞いに行ったら「僕だけ除け者にして楽しそうなことしてたらしいじゃない…？」とハイライトオフにしてる奴とか、いつ参加してたのかお願い券を持って「こーちゃんに何お願いしようかな〜！」とぼいぼい言ってる奴とか、ドロ刑終盤で乱入してきた重雷装艦2人組とか特にヤバイのは大本営からおいでになったダークホースでもある元帥の娘さんとかエトセトラエトセトラ……。

そんな奴らが居ないと思うだけでああ〜心がぴよんぴよんするんじゃないか。

……ん？これって、脱走のチャンスじゃありませんこと？

艦娘は誰も居ない、俺一人の旅館、お金も着替えもまあまあある………行けるやんけ!?

まあ待て落ち着け俺よ、まだ焦る段階じゃない。まずはゆっくり温泉に浸かって疲れを癒し、最終日鎮守府に帰らずそのままドロンスればいい……。

流石俺！最高かよ！

てな訳で久しぶりの爺ちゃん達だ。元気にしてっかな〜？

「爺ちゃん婆ちゃん、久しぶり〜航希だよ。」

入口の引き戸をガラリと開け中に入るとそこには……

「あ、遅かったですねこうちゃん、皆さんもう到着してますよ？」

………え？何故淀姉さん？Why?

「鎮守府の外でお泊まりなんて久しぶりっぽ〜い！」

「夕立、宿で騒いじゃダメだよ。」

「ここにアイツのお爺さん達が……。」

「ん？大井っち、何そわそわしてるの？」

「き、ききき北上さん!? な、なんのことですか!?!」

いつもの面子もいらっしやるんですがそれは……。

「お？こうちゃん……フッフ、よくぞここまでたどり着いたな我が

弟よ……。どうやら四天王の1人を倒してきたようだな？奴は四天王の中でも最弱、四天」





ま、待ちなさい！夕立、私も行って良いかしら？ほら、間宮券  
上げるから……？

ちよ、ちよちよちよつと待ってくださいよ!?

皆さん集まって何してるんです？

あー、大淀さん、実はかくかくしかじかでねー。

あれ？皆さんは行かれないんですか？私はこうちゃんが絶対脱  
走を試みるから監視するため今から私達も連絡して部屋を予約して  
置こうと思ったのですが……もし、行く方がいらっしやるなら一緒に  
予約しておきましょうか？

「お願いします!!」

つてのが真実ですけどそれを言うのは野暮なので、工作艦明  
石、端折ります!!

5連休だつてさ。

皆どこか行く？

うーん、特に無いわね……。実家は来月帰るし……。

そう言えばこーちゃんはこの連休どーするとかみんな聞いてな  
いっぼい？

あー、聞いてないね、そう言えば……。

はいはい！こーちゃんのスケジュールならこの明石にお任せ

!!こうちゃんはこの連休なんと、私達のお爺ちゃんが運営する旅館で2泊3日への旅行に行くことになってます!

?

・あれ? 皆さんは行かれないんですか? 私はこうちゃんが絶対脱走を試みるから監視するため今から私達も連絡して部屋を予約して置こうと思っただのですが……もし、行く方がいらっしやるなら一緒に予約しておきましょうか?

?

・「「お願いします!!!」」

「って感じでしたね!」

この事が明石によって端折られた真実だとは思っていないようです。

「嘘だドンドコドーンー!!!」

ざっけんな!! みんな好きな所に行ってきたくれよ!

しかも淀姉さんめっちゃ警戒してるじゃん!!

……まあそのまま脱走しようと考えてたけどさ。何でそんなに勘がいいの? 怖いよもう。

てか淀姉さんには偽の情報を流してた筈なんだけどな……。まあ大体こんなの流した奴なんて……明石からダイレクトか、青葉經由だろうな。むしろこのぐらいの奴しかしない。

やっぱ帰っ

「あ、因みにもう駅まで行くバスが無いんで帰れないですよ?」

は? まだ17時30分だぞ? 一応人が住んでるエリアだろう? 1本ぐらいあんだろ1本ぐらい。とりあえず調べりや1発よ……?

ハイ、ナビじかーん!!

「うわ……マジで無いわ。」

「言っただじゃない、無いって。」

ウソ、私の爺ちゃん家、田舎すぎ……? ここで暮らしていくなら子供は自転車、大人はバイクか車必須じゃん。

実際田舎、本当に田舎。

すると奥から爺ちゃん婆ちゃんが現れた。

「おお、明希に航希、それに恵ちゃんもよく来たの。ほら上がった上がった。」

「皆様も遠い所ようこそお越しくださいました。長旅でお疲れでしょう？ さあさあ、中へどうぞ。」

仲居さん達がササツと現れ、荷物を持つと部屋に運んで行った。上がるとロビーに通され、お茶を出してもらいそのまま宿泊手続。

「にしても本当に久しぶりだねえ……前に来た時は明希が艦娘になる前だったっけね？」

「そうそう！ 3年前だっけね！ 暫く来れなくなるからーってね。でもこうちゃんは来なかつたんだっけ？」

「ああ、1年はひたすら艦隊運用の筆記と実技に追われてた。」  
「かーっ！ すっかり大きくなっちゃまってよ！ ちよつと前まで二人ともこーんなちっちゃかったのに。」

爺ちゃん婆ちゃんは小柄で笑顔の素敵な老人って感じの二人だ。例えるなら七福神に居そうな感じ。

「恵ちゃんもすっかり美人になってねえ〜！」

「あはは、ありがとうございます源蔵さん、初枝さん。お二人共お変わらないようで。」

「あつはつは！ まだまだ現役じやよ！」

「航希も提督さんになったんだってね〜！ って事は皆さん艦娘さんって事かしら？ 別嬪さん揃いね〜！」

「そうそう、口うるさゲシツ……く俺を支えてくれる優秀な部下達だよ。」

口うるさい連中って言おうとした瞬間に俺の後ろにいた叢雲に足を蹴られたのと淀姉さんからヤバめのオーラを感じ取ったので慌てて路線変更。

「それはそれは、いつも孫の明希と航希がお世話になっております。これからもよろしくお願いしますね？」

挨拶1番を取ったのは白露、は居ないが姉妹艦である時雨が1番になった。

「こちらこそ！僕は時崎雨音、艦娘では駆逐艦時雨と言うんだ。今日からお世話になります。」

まあコイツ、普通にしてれば真面目なんだよなあ……普通にしてれば。

「わ、私は南雲凜香です。艦娘としては駆逐艦叢雲、一応コイツの秘書艦をやってます。よ、よろしくお願いします！」

ん？叢雲さん噛み噛みじゃないっすか？あれれ？もしかして緊張しちゃってまげシツ……何で分かったんだよ。

「はいはい！私は立川夕香！艦娘としては駆逐艦夕立つぽい！！よろしくお願いしますっぽい！！」

こんな時も元氣わんわんお夕立さん。

「……提督にはお世話になっております。大川井乃（おおかわめぐの）です。艦娘では重雷装巡洋艦大井と言います。どうぞよろしくお願いします。」

そう言えばこいつの本名そんな名前だったな……。と言うかこいつもちよつとソワソワしてる？

「こんにちはー、アタシは北見佳穂（きたみかほ）。艦娘ではアタシも大井つちと同じ重雷装巡洋艦の北上です、よろしくお願いします。」

お前はほんとブレないって言うかなんて言うか……。

まあコイツの強みだよな。

「あらあら、ご丁寧にありがとうございます。さ、手続きも済みましたしお部屋のご案内致しますね。お部屋は2部屋をご用意してますので4人1部屋、3人1部屋でございます。」

「お？こうちゃん入れれば丁度4：4になるじゃない？

って事で…部屋割り決めね!!このくじ引きで勝負が決まる!!」

「決まらねーよ!!」

明石からくじを奪い取りデコピン。

「あだっ!？」とか言いながらうずくまる姉、やめろ見苦しい。

てか何お前らしく引こうとしてんだよ!!これは没収したもの!!淀姉さんも落ち着いて!!くじ引きしないから!!

「大丈夫よ〜こうちゃん、小さい頃女の子の格好とかしたじやない？また女装、する？」

復活してくんな!!そして俺のトラウマを抉るな!!

そもそもアンタが無理やり着せたんだろぅが!!

再びデコピンに沈む明石、コイツの生命力はG並みだわほんと。

この後、明石によって俺の小さい頃の写真がコイツらに公開され、いいように遊ばれたの言うまでもない。

噂の女装させられた時の写真がこの場に無いのが唯一の救いだった。

「お、部屋一緒にするかい？一応出来るけど？」

「爺ちゃんも乗らんでいいから!!俺も部屋行くから部屋教えて!!」

「わかったわかった。まあ予約順でみんな隣の部屋だけだね。

……ところで航希、どの娘狙いじゃ？」

………何言ってるんですこの人？

「は？」

「惚けんでもええわい、こんな別嬪さん達連れてきて何も無いってことはないじゃろぅ？」

「いや、ないです。」

「恥ずかしがりおって……恵ちゃんか？それとも最初に自己紹介した娘か？」

やめろやめろ！アイツらはそういう話に敏感なんだ！血の匂いを嗅いだサメの如くすぐ来るんだから！

「あのね爺ちゃん、一応アイツらは俺の部下、そう言うのは」

あれ？爺ちゃん居ないし。

ふと、後ろを振り返ると淀姉さん達に何か話しかけている。

「そう言えば皆さん丁度いい時期に来ましたのー！明日、地元の祭りの日なんじゃよ？もし、皆さんお時間があれば行ってみるのもありじゃと思えますよ？」

爺ちゃんが指さす先には壁に貼り付けられたポスターには夏祭

り、花火大会と書かれている。

その言葉とポスターを見た瞬間皆の目の色が変わったのが分かった…。

「こーちゃんこーちゃん!!明日夕立と回るっぽい!!」

「さ、相良くん!僕と一緒に……。」

「ちよ、ちよつと待ちなさい!アンタがどうしてもって言うなら私も……。」

「おー、お祭りねえ、こうちやんアタシ綿あめ食べたーい。」

「き、北上さんが行きたいって言ってますから仕方ないですけど付いてってあげます!」

「勿論私と、ですよね?」

「おおー、これが修羅場って奴ですね!こうちやん明日は頑張つてねく!!」

ああ、面倒くさい事になった……。

後、明石はっ倒す。

その後、全員部屋に通された。俺は勿論一人部屋、だがさつき抵抗しなかったら四人部屋に通される所だった。部屋で寛いでたら隣の部屋から『こうちやくん、こつちの部屋においでよこうちやくん』という不気味な声(明石)が。

他の客にも迷惑になるからやめろ。

なので静かな場所で、奴らが居ない風呂に行こうとしたがそこで1人になれるとは言っていない。

「なーんで君らまで付いてきちやうかなー?」

「提督さんが、中々構ってくれないからですよ。」

なんだよ構ってちゃんかよ?

現れたのはいつもの妖精さん達。前までは日向から貰った瑞雲(護身用)をみんなでシェアして乗っていたが、遂に全員分の瑞雲を揃えたらしい。

とりあえず話しかけてきた構ってちゃん妖精のほっぺをぶにぶにする。めつちや柔らかい。

「お風呂に行くのもいいけどさー、ちよつと外を散歩してからにしようよー。」

「良いですね探照灯妖精さん。」

……コイツも当たり前の様に付いてくるようになったよなあ。

とりあえず大型探照灯を持ち歩くのはやめろ、せめて普通の探照灯にしろ。

「まあでも散歩か……。久しぶりにこの辺り歩くのも良いか……。」

そもそもここに来たのが何年前だったかな……？

まあいい、早くしないとすぐ暗くなっちまうし、辺りでブンブン飛び回ってるコイツらが喧しくて敵わん。

—————

聞こえるのはセミの鳴き声、カエルの鳴き声、なんかよくわからん虫の鳴き声と様々だ。見せつけてくれるね田舎。

夕暮れの田んぼ道に行くのは俺と回りを飛び回る妖精さん達だけ。

何もない。けど何もないのが田舎のいいところだろう。

「そう言えば源爺が風奏ちゃんが会いたがってたとか言ってたな……。今家に居るかな？」

「お？風奏ちゃんとは？」

「……確か従姉妹の方でしたっけ？」

妖精さん達が瑞雲をブンブン言わせながら尋ねてくる。

正直蚊や蠅と間違えて叩き落としそうになるから耳元で飛ばないで欲しい。

「あー、君はその時から居たんだったっけか。そうそう、従姉妹の山屋風奏（やまやふうか）ちゃん。前あった時は……。あの子が7歳とかだったから7年ぐらい前って所か……？」

俺も14だか15だかぐらいの歳だったはず。

「ってかもう7年も前なのか……。そう考えると7年って早いもんだよなあ。」

「提督さん提督さん、発言が年寄りですよ？」



「そろそろ育毛剤も考えてみては……?」

「これ見えます?」

探照灯妖精さんが腕をCの字にしてみせるけど見えるからそんなぐらい。え?てか俺老けて見える?

「……………」

え?何で目逸らすの?え?そんな事ないよね?…マジ?

ま、まあいい。今は風奏ちゃんだ。叔母さん、叔父さん、風奏ちゃんに挨拶していこう。家はすぐそこだ。

さらに歩くこと3分、目的地である山屋宅に到着。

呼び鈴こそあるものの、田舎では呼び鈴どころか日中、誰も居ないが鍵を掛けてない所もままあるのが現実。

なので軽くノックしてから名前を告げて戸を開ける。

「こんちわー!相良茜の息子の航希ですー!ちよつとご挨拶」…お兄ちゃんっ!!」ぐえふっ!」

バタバタと家の中から足音がして扉を開けた瞬間、緑のモフモフが突っ込んできた。

何とか受け止めたものの、鳩尾にダイレクトアタックされたので中々のダメージを食らった……っ!!

「…お、おう、元気みたいだな風奏ちゃん……。」

「…うん、お兄ちゃんがこつち来るって聞いてたから元気にした。」

俺来なかったら元気にしてないみたいない言い回しやめたげて。

その風奏ちゃんはそのまま俺の腰にがっちり掴まって離してくれない。無理に振りほどくのも気が引けるし、まあいいか。

続いて出てきたのは叔母の奏恵(かなえ)さん。この人は俺の母、茜の妹に当たる人だ。

「あら、こつちに着いてたのね、いらっしやい航希君。……にしても、立派な大人になったわねえ〜!前会った時は中学生ぐらいだったかしら?」

「多分そのぐらいだったと思いますね〜。」

「お、来たか!おおく航希君、立派になったじゃないか!今は海軍

で提督やってるんだってねえ〜!」

「あ、あはは〜、いや、そんな大したものでも……。。」

早く辞めたいとか言いづらい。この人は叔父の和一（かずひと）さん。結構テンション高めだけど凄い優しい人だったのを覚えている。

「なーに言ってるんだ、この国の平和を守ってるんだ、立派だよ! 物腰もしっかりしてるし、これならこれからの日本も安泰だな!…… 航希君ならうちの風奏をやってもいいよ?」

「あはは……ありがとうございます。でも和一さん、風奏ちゃんに後で怒られますよ〜? 勝手に決めないでって。」

「…大丈夫、私はお兄ちゃんと結婚するから。」

「…そうそう、大丈夫大丈夫……?!?!?!」

「ふ、風奏ちゃん!?!ちよ、何言ってる!?!」

「…ところでお兄ちゃん、お兄ちゃん回りを飛び回ってるのは何なの?」

「お? 私達の事が見えるのですか?」

「…わっ、しゃべった……。」

ちよいちよいちよい待ち! 色々一気に起こりすぎて訳分からなくなってきた、とりあえず……

「風奏ちゃんさ、この飛び回ってるのが見えるの?」

「…うん、見えるし、私達の事が見えるのか? って言ってたし」

「……。」

あちやー、こりや艦娘適性有りって事かよ……。 どうしたもんか……。

「……風奏ちゃん、落ち着いて聞いてね、風奏ちゃんが見ているのは妖精さん。それで俺たち海軍ではこの妖精さんが見える人達を艦娘候補って呼ぶんだよ。」

「…つまり、私に艦娘の適性があるって事?」

「そういう事、前の適性検査では何も無かったの?」

「…特に何も無かった。」

うーん、本当に妖精さんってのは謎なんだよなあ……。この適性も何かきつかけがあって出るのかはたまた別の理由なのか……。

ともかく適性者を見つけて何もせず放置すると処罰を受けるんで聞くことは聞いておこうね。

「一応職務上こういう場面に出くわしたら確認しなきゃ行けないことがあってね、風奏ちゃん、艦娘になる気はある？」

「…うん。」

「即答っ!?! いやいやいや、もうちよつとよく考えてから…。」

「…お兄ちゃんと一緒に居られるなら、構わない。」

和一さんも奏恵さんもヒューヒューじやないですって!!

山屋風奏、後に駆逐艦山風となる人物である。

## 就活戦争28日目

ちよつと気が重いんだが、部屋に戻ってきた。

「お、やっと帰ってきたわね？一体どこまでほつつき歩いていたのよ？」

「いや、ちよつと親戚の家まで挨拶にな……。」

と言うかコイツら何で当たり前の様に人の部屋に居るんだ……。

「にしてはちよつと遅かったね。」

「この人の事だから脱走経路でも探してたんじゃないですか？はい北上さん、あーん！」

「こうちゃん、もう夜なんだからあんまり外をウロウロしないでください。こうちゃんの脱走経路なら把握済みですから諦めて下さい。」

さらつと淀姉さん俺の今後の行動を潰してくるのやめようよ。夢も希望もないじゃんか。

「まあ遅れたのにも理由があつてだな……とりあえず、俺の従姉妹に当たる子で山屋風奏ちゃんです。」

後ろからコソツと現れてみんなに挨拶する風奏ちゃん。

「……はじめまして。」

「「……はじめまして。」」

急な新キャラに大半はびっくりしてるなこりゃ。

まあこの中で面識あるのは淀姉さんぐらいか？

「……確か昔1度お会いしましたね、覚えていらつしやらないかと思ひますが。」

「……何となく顔は覚えてるけど名前が……。」

「ですよ、では、改めまして私は淀川恵、艦娘大淀として海軍で働いています。これからよろしくお願ひしますね風奏さん？」

「……よろしくお願ひします。」

その頃、面識ないグループではひそひそ話が開始されていた。

『……随分可愛いらしいのが出てきたね〜？男の人ってああいう

子に保護欲唆られるんじゃないかなかったっけ?』

『私は北上さんの方が可愛いと思います。……でも親戚でしたよね?それなら妹的な感じじゃないんですか?』

『従姉妹、って言ってたね。幼なじみと同じように面倒なポジションだよ。見たところ距離も近いし、私達のライバルになる可能性も……。』

『…アンタ、さらつと大淀さんに喧嘩売ったわね……。分からないけど。まあ、従姉妹から好かれるって言ってもあれでしょ?男兄弟がいなくて親戚のお兄ちゃんが来て嬉しいって奴でしょ?流石にそれは……。いや、ありそう。』

「さっきからみんな何話してるっぼい?」

「ううん、何でもないよ夕立。」

「そうそう!なんでもないわ!……とりあえず座ったら?お客さんを立たせたままはまずいでしょう。夕立、湯のみ取ってくれる?」

「っぼい?」

今回のひそひそ話に夕立は参加させてもらえなかった。

後でボロが出ると困るからという事らしい。

「はー!良いお湯だった〜!あれ?他にも誰か来てる感じ〜?」

俺達が席に着いたと同時に明石が帰ってきたようだ。

「あ!?風奏ちゃんじゃない?久しぶり〜!!3年ぶりかしら〜!!」  
「……………どうも。」

風奏ちゃんは挨拶もそこそこに俺の後ろに隠れてしまった。

うわあ……。すげえ嫌そうな顔……。明希姉、風奏ちゃんに何したんだよ……。?

「明石さん、アンタその3年前に何やらかしたのよ?」

「凄く嫌そうな顔されてるね。」

「え〜?普通にお話ししてただけなんだけどなあ……。?」

『『多分そのせいだと思う。』』

満場一致だった。明希姉の普通は普通じゃないから。

恐らく風奏ちゃんにマシンガントークを浴びせたり、過剰なスキンケアをしたんだろう……。黙ってれば美人なんだけどなあ。

「あ、そうそう淀姉さん、風奏ちゃんなんだけど、妖精さんが見えるらしいんだ。」

「…声も聞こえた。」

「あら、風奏ちゃんにも艦娘適性が出たのね。こうちゃん、ご両親と本人の了承は得ましたか？」

「…どっちも取ったけど、本当に良いんだな？今ならまだ変えられるぞ？」

「…問題無い。」

マジで風奏ちゃんも艦娘になるのかよ……。

さっきの言動もあるし、面倒な娘が増え……いや待て、まだ俺の鎮守府に配属になると決まったわけじゃないか。

それに適性が見つかったからつてすぐ艦娘になる訳じゃない。そこから海軍学校で色々身につけて初めて艦娘になるんだ。

まあ風奏ちゃんが正式に艦娘になるのは一年後、早くても半年はかかるだろう。

因みにここ10年の間に最速で艦娘になったのは淀姉さんらしいです。

知識は自分の親が海軍元帥だけあって問題なし、スキルも抜群、艦の気との同調率も非常に高い数値を叩き出した淀姉さんは2週間で艦娘になったそうです。

まあ、偶に1ヶ月ぐらいで出てくる人もいるけど、これもそうそう無い。ウチの鎮守府で強いて言うなら加賀、赤城はその類だったらしい。赤城が1ヶ月、加賀が1ヶ月半と聞いた。

……ドロ刑の時の赤城を見てると果たしてそうなのかとも思っ  
てしまうがね。とりあえず今は風奏ちゃんだ。

「じゃあ淀姉さん、確かに伝えました。」

「はい、確認しました。では風奏ちゃん、私が休暇から帰ったらと書類を準備して送りますね。多分来週までには封書で届くと思いますので。」

「さて、夕飯も食べたし、提督はお風呂に行つたし……。」

大淀さんは大本営に風奏ちゃんの適性発現の報告、明石さんは酔い潰れたので隣の部屋に寝かしてきた。

残された僕達と風奏ちゃん。

「私は駆逐艦夕立っぽい！よろしくね！風奏ちゃんって呼んで大丈夫？」

「…うん、問題無い。よろしくね夕立。」

おお、夕立が行った。無邪気、純粹無垢の塊みたいな子だからね。流石だよ。

「僕は時雨、夕立とは同型艦で姉妹みたいなものさ。よろしく。」

「…よろしく。」

なんと言うか掴みどころのないというのが山屋風奏ちゃんの第一印象だ。

この娘はまだ本性を隠してるんじゃないや…？とも思っている。

私達に続いて叢雲、大井、北上も挨拶していく。

「そう言えば風奏ちゃんはこーちゃんと従姉妹なんだよね？…小さい頃の風奏ちゃんとこーちゃんってどんなだったっぽい？」

あー悪い顔、いたずらっ子の顔だね。後で相良くんに昔のネタを振る気満々って感じた。

だけど僕も気になるので止めない。むしろもつとやれ。

「あ、それ僕も気になるな。提督、普段から自分の事話さないからさ…。それにこれから仲間になる風奏ちゃんの事も知りたいな。」

「どんなって…？？」

「うーん…あ、思い出とか!?こーちゃんが面白いことした話とかないっぽい？」

「…お兄ちゃんとの思い出…。」

他の3人を見れば口には出さないもののチラチラ見たり髪の毛をいじったり、興味ないフリして聞き耳をバッチリ立ててるのが丸わかりだ。

少しでも相良君の情報が欲しいのは誰もが同じという事らしい。

「…お兄ちゃんは凄く優しくカッコよくて、私に色んな事を教えてくれた。…私、一人っ子だからっていうのもあるかもしれないけ

ど、本当に私のお兄ちゃんのような人だった。」

け、結構言うね。でも分かってるじゃないか。ふふん！だけど提督の魅力はそれだけじゃないんだよ！色んな事が出来てそうだけどちよつとズボラだったり、そこがまた支えてあげたいポイントだったり、この間も執務中にお茶入れに行ったら相良くんが居眠りしててその顔がまためっちゃ可愛いかったなあ……

「……よそ見してて田んぼに落ちたり、好物の唐揚げを一気に食べて喉に詰まらせたりおつちよこちよいな所もあった。」

「あー……相良君らしいね。」

「こーちゃん食い意地はり過ぎっぽい。」

「……学校から出された宿題も『なんとかなる!!』って言ってギリギリまでやらなかったり……。」

「はあ、アイツのサボり癖は昔っからだってたってわけね……。」  
叢雲から大きなため息が出る。

確かに書類を溜める癖はなんとかして欲しいものだ、手伝う人の身にもなつてよ……。

「まあでも風奏ちゃんがこーちゃんの事、お兄ちゃんって言うのも分かるっぽい。確かに夕立もこーちゃんはお兄ちゃんって感じがする。」

「あー、確かにねえ。」

「言ってしまうえば何ですが姉の明石さんが『アレ』ですから……。」

「アイツもまだまだお子様だけどあの二人のやり取りを見てるとどっち上なのか分からなくなるわよね……。」

明石さんは自由奔放過ぎるといふかなんというか、ね……。

「……確かにお兄ちゃんはそそっかしいところもあるけど凄く優しい人。お兄ちゃんは私の救世主でもあるから。」

「へえ、その話気になるっぽい！」

「……あんまり聞いてて楽しいものじゃないよ？」

「そこまで言われたら気になるじゃない。でも、言いたくないなら言わなくても大丈夫よ？誰しも思い出したくない、言いたくないことなんてあるものよ。」



大井がそう言うのと風奏ちゃんはぽつりぽつりと語り始めた。

「…初めてお兄ちゃんと会ったのは私が6歳の頃、あの頃は家がこんな田舎にあるのが凄く嫌だった。」

……。

「…歳の近い子は近所にいない。小学校の友達と遊ぶうにも山一つ越えないと行けない。お父さんお母さんも仕事で居ない。遊んでくれるのはこの旅館の源じいと初さんや中居さんが空いた時間に遊んでくれたぐらい…。私は一人お人形やお手玉で遊ぶ毎日……。」

風奏ちゃんは目尻に涙を浮かべながらも続ける。

「…そんな毎日が続き、夏休み、お兄ちゃんがやって来た。…お兄ちゃんが私を孤独の牢屋から連れ出してくれた！毎日お兄ちゃんと一緒に遊んだ！川で釣りもした！夏祭りにも行った！花火も見た！本当に毎日が楽しかった！」

「……でも何事にも終わりは来ちゃう。お兄ちゃんは夏休みが終われば帰ってしまう。…したらまた私は一人ぼっち。でもお兄ちゃんは次の夏休みも来てくれた。その年の終わってしまったても次の夏休みが楽しみだった。」

「…だからお兄ちゃんが海軍学校に行くことになった時は凄く悲しかった。」

そう、海軍学校に入学すれば遠出するの事は難しい。学校から泊まりで出れるのは三が日とお盆ぐらいだからね。だから実家が遠い人なんかは帰らないという選択をする事もしばしばある。

「…でもお兄ちゃんはまたいつか必ず来るからって、そしてその約束を守ってくれた…7年も待ったけどね。」

確かに風奏ちゃんの一番楽しく、一番寂しかった相良君との思い出だったのだろう。

「…この7年間、私も艦娘になればと思ってた。そしてようやく、その願いが叶った！これからはお兄ちゃんと一緒に居られる。近くには艦娘の仲間もいる。もう一人ぼっちじゃないんだって！今はただだけ……。」

「何言ってるっぽい風奏ちゃん、風奏ちゃんはもう夕立達の友

達っぽい！」

「……え？夕立ちちゃん達と私は、もう、友達……？」

風奏ちゃんはポカンとした顔で私達を見つめる。

「当たり前っぽい！みんなでお話ししてお菓子食べればもう友達っぽい！」

「うん、そうだね。風奏ちゃんが正式に艦娘になったら友達どころか僕達の姉妹になるかも！」

「友達……姉妹……。」

「そうだ！風奏ちゃん、明日、夕立達と一緒に遊ぶっぽい！昼は川遊び、夜は夏祭りに行くっぽい！わたあめ焼きそばたこ焼きチョコバナ……うーん、どれも捨て難いっぽい！」

「…うん、うん行く。私も皆と、お兄ちゃんと遊びたい！わたあめ焼きそばもたこ焼きもチョコバナナも食べたい！」

「決まりっぽい！」

「夕立はそういうのでお金無駄に使うんだから程々にしなさいよ……。」

「うぐっ!?ま、まあまだなんとかなるっぽい！」

「…あ、今の宿題ギリギリまでやらなかったお兄ちゃんっぽかった。」

そして暫く談笑して時刻は22時……事件は起きた。

「じゃあそろそろお開きにしようか。僕はもう一度お風呂に入ってから寝るよ。」

嘘である！

時雨はお風呂に行くふりをしてタイミングを見計らい、相良の眠る部屋で一緒に寝ようと考えているのだった！

「私は喉が渴いたから飲み物買って外のベンチで夜風にでも当たってくるわ。ここは星も綺麗だし。」

嘘ではないが虚偽である！

叢雲が自販機で飲み物を買って向かうのは外にあるベンチなどでは無く、勿論相良の部屋！相良の寝顔を堪能しつつ縁側で待機。適当なタイミングで物音を立て、相良を起こす。縁側で星空を見上げ

る少女というロマンチックな展開（ソースは叢雲愛読の少女漫画から）しようとしているのだ！

「じゃーアタシ達は部屋に戻りますかー。」

「北上さんと二人っきりの部屋が良かったなあ……。」「嘘である!!」

北上が戻る部屋は相良の部屋！途中、相良が起きて何か言っても「あー、ごめん部屋間違えちゃった。でも動くの面倒だしこのまま寝るね。」と誤魔化す気満々である。

そして大井、大好きな北上さんに便乗して相良の部屋に行こうとしてるのは明白。布団配置的には大井・相良・北上さんになると想像してるが大井としては相良・大井・北上さんにならないかなー？と期待してたりしている！

各々が私利私欲の頭脳戦を展開していたその頃……

「風奏ちゃんは今日お家に帰るっばい?」

「…源じいをお願いして泊めてもらえる事になった。だからお兄ちゃんの部屋で寝ようと思ってる。」

「あー! いいなー! 夕立もこーちゃんと寝たい! 風奏ちゃん、私も一緒に良い!」

「…構わない。」

『『『………え?』』』』

これに焦ったのは残りの4人。

せっかく練った計画もこれでは台無しだ。

4人は瞬時に状況を理解した。まずやるべきはこの2人に釘を刺しておくことであると。

「駄目よ夕立、今日はアイツの休暇でもあるんだから。偶にはゆっくりさせてあげないと。」

「風奏ちゃんも寝るなら僕達の部屋で寝るといいよ。ちようどこっちの部屋は3人だったからね。風奏ちゃんがいればぴったり4人だ。」

「それにほらく、これから艦娘になるなら色々話せるし、多分駆逐艦だろうから夕立から色々聞けると思うよー?」

「それに提督とは明日遊べるし、提督と遊ぶなら提督にはしつかり休んでもらった方がいいじゃないですか？」

苦しい言い訳だが自分達の名目を保ちつつ2人を行かせない為にはこれしか無かった。

だがその程度で止まるような2人ではない。

「大丈夫っばい！静かにしてそのまま寝るっばい！」

「…お兄ちゃんには迷惑かけないしそもそも起こさないよ。じゃあ、おやすみなさい。」

サツと部屋を出ていく2人。

「ちよ、まつ！」

慌てて部屋を出るとそこには……。

「……………大淀さん、何してるっばい？」

相良の部屋の前に立っている大淀さんがいた。

「あら、夕立ちちゃん。こうちゃんがちゃんと寝ているかどうかの確認をね。」

嘘である!!この海軍元帥の娘さん、堂々と部屋に忍び込んで相良と一緒に寝ようとしていた所だったのだ!

(暴れられた時用の睡眠導入剤と手錠は常備。)

結局の所、全員が全員、似たような事を考えていたわけだったのであつた……。

妥協案で誰も提督の部屋に行かない(と言うかお互い牽制し合つて行けない)ことになったとき。

—————

※ここから先は彼女達がもし相良君のお部屋に行つてたらのifストーリーとなります。(実際は誰も行けなかった。)

if ① 時雨……

誰も見ていない事を確認して時雨は提督の寝ている部屋に入つ

ていく。

鍵はどうしたかって？そこはいつも相良君の近くにいる妖精さんに頼んで開けておいてもらったんだ。(対価としてカステラをあげた。)

幸いな事にみんな普段の疲れが溜まっていたのだろう。おしゃべりした後、みんなすぐに眠ってしまった。

本当のことを言えば僕も眠い。だけどこんな時じゃないと出来ないことだってある。

「…ふふつ、可愛い寝顔。」

相良君の隣に腰掛け、彼の寝顔を見る時雨。

普段はおちやらけてたり、大淀さんにビクビクしてたり

と大変そうだ。…まあ、大淀さんの件は書類溜めた提督が悪いんだけど。

でも眠る時ぐらいはゆっくりしてもらいたいな。

「僕は艦娘、この国を深海棲艦から守る兵器だ。」

「…でも、それ以前に一人の女の子でもあるんだよ。だから好きな人が出来たって不思議じゃないのさ。」

「君が僕の好意に気付いてくれるのはまだまだ先かもしれない。ライバルも、多いし。でも必ず…必ず僕は、君を、振り向かせて、みせるから…すう…すう…すう…。」

if ② 叢雲…

思った以上に事が上手く行く日だった。

時雨、大井、北上はお風呂へ。

夕立と風奏は部屋で寝ている。夕立ナイス。『風奏ちゃん、一緒に寝るっぽい!!』って言って引き止めてくれたからね。もし風奏がアイツと一緒に寝るとか言い出してたらどうしようかと思ってたわ。

とりあえず喉が渴いたのは事実、ロビー端にある自販機でレモンチューハイを購入し一口飲む。

滅多にお酒を飲まないが今日は飲みたい気分だった。

まあ明日仕事がある訳でもないし、1杯飲んだぐらいどうって事はないでしょう。

時間は有限なので早速アイツの部屋に向かうとしようかしら。そして2分後、部屋の前に到着。一応、辺りを見渡して誰も居ないことを確認し、部屋に入る。

音を立てないようにゆっくりと歩き、眠る航希を確認する。

朝、航希を起こすのは叢雲の役目……という訳でもないが、いつもやっている。

それ故に航希の寝顔は別段、珍しい訳ではない。

しかし珍しくないから見ない訳では無い。むしろ、起こしに行く時、偶に5分ほど航希の寝顔を眺めている事もある。

「……いつもふてぶてしい顔してるのに、寝てる時は可愛らしいものね。」

叢雲は暫く航希の寝顔を眺めていたが思い立ったように立ち上がり、縁側の窓を開け、縁に腰をかける。

梅雨が明け、一気に暑さが増した。普段は暑いと思うが今日は風もあつて、心地良い。

レモンチューハイを片手に星空を見上げる。

「……鎮守府から見る星空も良いけど、ここもまた素敵なものね。」

時折、風が叢雲の髪をさらりさらりと靡かせ、月明かりに照らされた銀色の髪は幻想的なものだった。

「……確かに綺麗なもんだな。」

「あら？起こしちゃった？」

「なんか物音がするもんでな。てかなんで俺の部屋に居るんだよ？」

「向こうはさつきまで騒がしかったのよ、だから静かな所に行きたかった訳、そんなところよ。」

「ふーん、そんなもんかい。」

「そんなもんよ。」

航希も縁側に移動してきて椅子に腰かける。

「……………」

「……………」

沈黙。しかし、その沈黙もまた心地が良いものだった。

「なんだお前、酒飲んでるのか？珍しい。」

「…………そうね、普段は誰かさんが面倒事を起こしてくれちゃうから中々飲む機会が無いのよね。」

「誰の事やら…………俺ももう一杯飲み直そうかな。」

航希が立ち上がろうとすると叢雲からレモンチューハイを投げ渡された。

「…………少しぬるくなっちゃったと思うけどあげるわ。飲むなら少し付き合いなさいよ。」

「流石初期艦様、気が利くことで…………。じゃあ、有難く頂こうかな。」

「感謝なさい、今日は月も夜空も綺麗で気分も良いから特別よ？」

「ああ、確かに綺麗だな…………それじゃあこの月に」

「この夜空に」

「乾杯。」

if ③北上、大井…………

「…………んで、なんだってわざわざこの部屋に来るわけなのよ君たちにはさ？」

「いやー、こうちゃん寂しがつてるんじゃないかなーって。」

「いやいや、もう寝ようとしてたんですがそれは。」

「まーまーいいじゃないですか、そーゆーわけでお邪魔します。」

「邪魔するなら帰ってくれ。」

「ドリフネタ、伝わる？」

「さあな。」

呆れたように、そして半ば諦めたような表情で私達を部屋に通してくれる。

「ほら、お前も上がってけよ。あれだろ、北上の暴走に巻き込まれたやつだろ?」

「……お邪魔します。」

「邪魔するなら帰ってくれ。」

「同じネタを2度使うのはウケませんよ。」

「1度目も滑ってるから気にすんな。」

私は上がるついでにお茶を入れる。

「ありがとう大井つち。」

「ほら、提督もどうぞ。」

「おー、ありがとう。」

3人同時にお茶を飲んで一息。

「はあく。」

「大井つちは将来良いお嫁さんになるよ。ね、こうちゃん?」

「ちよっ!?北上さん!」

「あー、確かに。大井、家事も出来るし料理も上手い。」

「それでいて可愛いところもあるし、なんでも出来ちゃうか思えばおつちよこちよいな所もあるし。」

「あ、あの……二人とも、もう……」

「いやだからさ、この間秘書艦の時に夕飯作ってきてくれたのよ。そんな時の飯が美味しいのなんの。あの肉じやがとか間宮や伊良湖に匹敵するぐらい美味かったぞ?」

「お、こうちゃんラッキーだねえ。肉じやは大井つちの得意料理なんだよ。それを作ってもらえるなんて愛されてるねえ〜!」

「え?マジ?それは……北上さん、北上さん、まずいですよ。」

「え?あ、まずいですねこれは……」

「……二人ともそこに並んでください。」

大井つちが貼り付けたような笑顔でこちらを見つめていたのであった。

if ④夕立、風奏……



控えめなノックと騒がしい声で俺は目を覚ました。

「こーちゃん、開けーけーてー!」

「…夕立ちちゃん、あんまり大きな声出しちゃ駄目。」

ドアを開けるとそこには想像通り夕立と風奏がいた。

「夕立、他のお客さんに迷惑かかるだろ。鎮守府じゃないんだから静かにしろ。」

「……ごめんなさいっぼい。」

「まあ分かればいいんだ……んで、どうした? 2人して俺に何か用か?」

「うん、お兄ちゃんと一緒に寝ようと思って。」

「っぼい。」

言われた通り声を小さめで話す2人。

「お前達部屋があるだろ?」

「それでもお兄ちゃんと一緒に寝たい。昔はいつも一緒に寝てたじゃない?」

「夕立、こーちゃんと風奏ちゃんのお話聞きたいっぼい。」

「うーん……。」

「……お兄ちゃん、ダメ?」

「……っぼい?」

うぐっ! そんな顔で見るなよ……。

「しょうが無い、今日ただぞ? 明日は自分の部屋で寝るように。」

「「やつ!……しー。」」

布団を敷いて早速ごろんと布団の上で転がる2人。

布団の配置は俺を挟むようにして夕立・俺・風奏という川の字になった。

夕立は最初楽しそうに話していたが、疲れていたのだろう、途中からすうすうと寝息を立て始めた。

俺も寝るかなーなんて思った頃

「…お兄ちゃん、起きてる?」

「ああ、起きてるよ。」

「…こういうの、懐かしいね。」

「まあ、7年も前だからな。久しぶりだろうよ。」  
少しの沈黙。

「…お兄ちゃん、私、友達出来たよ。しかも沢山。」

「良かったなあ。」

「…今まで早くお兄ちゃんが来てくれないかなってずっと思ってた。このまま寂しいのが続くんじゃないかって考えちゃうと寝れない時もあった。」

「……。」

「…でももう大丈夫、夕立ちちゃん達がいる。L I O Eも交換したからいつでも連絡出来るし。」

「……そう、か。」

「…でもね、思ったの。確かに一人ぼっちでは無くなった。でもお兄ちゃんと会えないのはまた別に寂しいんだって。」

「………う、ん。」

「…今度は待つ側じゃない、だから直ぐにお兄ちゃんの所に行くよ。」

「………すう………すう。」

「だからちよつとだけ待っててね、私の大好きなお兄ちゃん。」

if ⑤大淀……

どうしてこんな事になっちゃったんだろう？

そう思うことがよくある。

私は彼に怯えて欲しいわけではなかった筈なのに…。

大淀がいるのは暗い部屋の一角、相良の部屋だった。

目の前でこうちゃんはすうすうと寝息を立てて眠っている。

「幸せそうな顔……。」

4月頃よりは表情が柔らかくなってきた。

逃げる逃げる言ってるけどなんだかんだでまだ提督をやつてく

れている。

……確かに私が妨害してるのもあるけど、多少は提督を楽しんでる所もあるようだし。嬉しい事だ。

このまま提督辞めるつもりは無いとか言ってくれないかなあ……そしてあの時の約束も……いや、それは高望みよね。

変わらなければ生き残れない。何処かで聞いた言葉が今胸の奥に突き刺さる。

この戦いにはライバルが沢山いる、それも強者揃い。

「……まずは私が変わるべき、か。」

こうちゃんが跳ね飛ばした布団を掛け直す。

「……私も直ぐには変われないかもしれませんが、でもこうちゃんが昔みたい私に笑顔を向けてくれるように、私もこうちゃんに真っ直ぐに笑顔を向けられるよう頑張ります。」

「ですから、もう少し待ってて下さいね？私も待ってますから……。」

一瞬だけ、こうちゃんの頬と私の距離がゼロになった。

大淀は部屋を後にした。

静寂に包まれた部屋でポツリと呟く声。

「……ならば俺も変わるべき、か。」

頬の感触を確かめながら航希は再び布団の中に潜り込んだ。

## 就活戦争29日目

時は7月中旬、ジメジメした梅雨が明け、本格的な暑さ。太陽がジリジリと肌を焦がすこの感じ、梅雨は梅雨で嫌だけどこの焼けるような暑さも俺は苦手だ。

そしてここからもう一段階暑くなると考えたらしんどくなってくる。

更には耳をすまさなくても聞こえてくるミンミンジーというセミの喧しい鳴き声。

暑さのオンパレードとはこの事か。

……でも暑い暑い考えてもしょうが無い、日本はそういうところなのだから。

まあ、今日唯一の救いであるのが……

「川だー！！！！」

そう、涼しい涼しい川遊びである。

俺達は朝ごはんを食べた後、宿の送迎車を借りて旅館から10分程の川までやって来ていた。

……海だー！！！！なら分かるんだけど川で盛り上がるところが艦娘らしい。

一般的には川より海の方がテンション上がるかもしれないけど俺らは毎日腐るほど海見てるから……。

川も勿論あるんだけど、こういう感じに泳げるような川ではないからね……。

「わーい！夕立が一番乗りっばい！！風奏ちゃん行くっばい！！」

「……ちよ、夕立ちちゃん……！！」

「こら夕立いっ！まだテントとか準備できてないんだから手伝いなさーい！！」

「明希、そっちのシート引っ張って。」

「はいよ、あー淀、引いたらその辺の石を上に乗かないと風で飛ばされるわよ。」

楽しそうにテントの準備を始める奴ら

ただ大変なのは……

「はあ……はあっ……タンク、重っ……！」  
荷物を運んでいる奴らだ。20リットルのウォータータンクを2つが中々しんどい……。

この川は駐車場からまあまあ距離があり、坂になっているのだ。テント建設組と荷物運搬組に分かれて作業しているのだが荷物運搬がやたらと辛い気がする。

だがしかし、女子に荷物運ばせて男の俺が楽な事するのも流石に気が引ける……

「提督、大丈夫かい？少し持とうか？」

後ろから追いついてきた荷物を満載した時雨に声をかけられた。背中に背負ったドラム缶には大量の食材、両手には炭や火鉢を持っている。

……そういや、コイツらは艦娘だから艀装使えば超。パワフルになるんだっただわ。

まあ、今更か。

でもそこは男の意地というものがあるので重くても持つて行く。

「いや時雨、お前もそこそこ持つてるだろ。大丈夫、もうそこだ。」

「僕は艀装使ってるし、アクアシューズだから足元も大丈夫だけど……無理しないでよ？提督はビーチサンダルなんだから転ばないようにゆっくりでいいからね？」

「あいよ……さて、どっころしよっ……っつとつと。」

確かにビーチサンダルで足元が安定しない。

あー、こんな事ならアクアシューズとか買っとけば良かったなあとも思ったりした。

だが無い物ねだりをしては仕方が無い。タンクを両手にゆつくりと坂道を下っていく。

「へーい、こうちゃーん、大変そうだねえ。」

「……そう思うなら手伝ってくれよ北上い。」

続いてやって来たのは大きなスイカを抱えたハイパー北上様。ほんと重いなこれ、タンクを置いてちよつと休憩。

「北上さくん、待つてよお〜！」

そして大井こと大井つちがやつて来た。大井さん走ると自前のスイカ……いや、りんごが揺れ……

「……なんか一瞬イラツと来ました。提督、邪な事考えてませんでしたか？」

「滅相もございませぬ。」

なんでこの人達こういう事に鋭いんですかねえ…。

「大井つち大井つち〜。」

「なんですか北上さん？」

「もう持つてくる荷物無いよね〜？」

「……そう、ですぬ。」

「こうちゃんがタンク重いつて言うから手伝つてあげてよく。あたしはスイカ持つてるからさ。」

「え……？」

「いや、大丈夫だつて。もうそこだぞ？」

「まあまあ、そう言わずに手伝つてもらいなよく。」

「そういう事は大井に同意を得てからさ……。」

すると横からスツと手が伸びてきて置いておいたタンクを1つひよいと持つていった。

「べ、別に手伝わないとは言つてません！もう運ぶ物もありませんし、北上さんからのお願いなら断る訳にも行きませんが！あくまでも北上さんのお願いだからですからね!!……つて重いわね、これ……もうちよつと素直になつた方が……。」

大井は艀装を展開するとゴニョゴニョと言いながらスタスタと行つてしまった。

「あく勿体無いなく大井つち〜……。まああたしらも行きますか〜。」

「一体何だつたんだよ……。」

――――  
そして全ての荷物を川まで運び出した俺達、準備は終わったとなればみんな……

「きゃーっ!! やっぱり冷たいっぽいっ!! それっ!!」

「冷たっ!!? 夕立、やったね〜? お返しだよっ!!」

「冷たい!! 風奏ちゃんも……それっ!!」

「ひゃっ!?! ……夕立ちちゃん、覚悟……。」

水遊びのお時間である。白露型である2人は水着も制服カラーのビキニタイプ、風奏ちゃんは白青緑を基調としたホルターネック。よく似合っている……まあ面と向かつては言えないがな。

「全く、水遊びでこんなにはしゃいじゃって……折角の休みなんだからもつと静かに休み「叢雲にも……それっ!!」冷たっ!?!」

叢雲も白と黒を基調とする水着。銀色の髪がよく映える。

「よーし明石さんも交じっちゃうぞ〜? この明石特製水鉄砲で……ちよいちよいちよい!! 叢雲ちゃん、それはまだ早いつてバズーカ水鉄砲は締めに使おうと……って、冷たい!?! ……ちよつと淀!?!」

「ごめーん明希、手元が狂っちゃった?」

「なんでそこで疑問形なのよ! もう許さないわよ〜?」

淀姉さんは青と緑のパレオタイプの水着、なんかめっちゃ大人っぽ……いやいやなんでもない。そして明石はライムグリーンの水着の上に何故かエプロンという……後で聞いてみたら仕様との事らしい……?

「北上さ〜ん、日焼け止め塗りましょうか〜?」

「あー、日焼け止めかあ……面倒だし大丈夫だよ。普段海の上でも特にしてないしさ。」

「北上さん! 女の子にとってお肌のケアは大事ですよ! ほら、パーカー脱いでください!」

「お、大井っち……顔が怖いよ……?」

「うふふ……北上さん、大丈夫ですよ。」

……あそこはあそこで大変そうだ、主に北上が。

格好は二人ともパーカーを羽織っているのだが、恐らく北上は白の水着、大井は黄色の水着……かな?

因みに俺は少し離れたところで釣りをしている。いや決してコイツらの水着姿を遠くから眺めようなんて……思っていたりいな

かったり。

まあ近くにいればどうなるかなんてご察しの通りだ。

まずは夕立、時雨、風奏ちゃんの辺り、まあ確実にびちよ濡れにされ、その後遊びに振り回される。

続いて叢雲の近く、あのよくわからん特大バズーカ水鉄砲の巻き添えを食らってびちよ濡れになる。

明石と淀姉さんの近く、水鉄砲を入手する代わりに背後に立つ淀姉さんから水を食らう。

北上と大井近く、一見安地に見えて一番危険な場所だ。恐らく近づいた瞬間、『北上さんの柔肌を覗き見る輩は酸素魚雷を喰らいなさいな!!』ってぶん殴られる未来が見えた。

となれば安全地帯は必然的にこの少し離れたところで釣りをする。そして近くによる為には魚を釣り、持ってきた食材と共に調理をする事、流石に飯を作っている所にやって来て暴れる奴は居ないだろう。

お、噂をすれば早速一匹目が釣れたぞ！

良いニジマスだ。この調子でどんどん……ズルッ

あ……………

幸せは自分から歩いていかないと得られないものだけど災難というのは向こうから歩いてくるものである。

俺の浅はかな考えなど災難の前には無意味なのだろう。

だから想像もしてなかった。

アイツらの特に関わりない所で俺は普通に滑って川に落ちた。

落ちる瞬間、向こうでバズーカ水鉄砲を構えていた叢雲と目が合った。

やっぱり『……………あ。』って顔してた。

そしてドツポーン！と景気の良い音をたてて落ちた為、更にみんなの注目を集める事になったのだった。めちやくちや恥ずかしかった。

……………川にビーチサンダルは止めようね。



「くっ……ぶぶ、あははははっ!!アンタ、何にもない所でなんで落ちるのよ……ぶふっ、落ちる瞬間までばっちり見ちやったし……あーヤバい、思い出し笑いしちゃう……ちよつと川に入って落ち着いてくる……ふふっ!」

案の定、バツチリ見てた叢雲や明石は大爆笑、夕立と風奏ちゃんからは無邪気に、北上達からはケラケラ笑われた。

そんな中、時雨は心配してくれた。こういう時そういう配慮がありがたい。ほんと優しい子。ちよつとだけ心の痛みが和らいだ。

結局、びちよ濡れになった俺は焚き火に当たりながらビールを飲んでいた。

あービール美味しい。荒んだ心には酒が効くって隼鷹が言っていた。実際それはやばいけど、今だけは何となくわかる気もしなくもない。

「帰りは私の運転でもお酒を飲みすぎないで下さいね?この後はお祭りに行くんですから。」

「流石に1杯で済ませるよ淀姉さん……。」  
振り向こうとしたら頭にタオルが被せられた。

「いくら夏で、焚き火に当たっているとはいえ、そんな格好のままでしたら風邪を引きますよ?拭いてあげますからじつとしてくださいね?」

「ちよ、それぐらい自分でやるよ!」

「いいですからじつとしてください。それとも……恥ずかしいんですか?」

恥ずかしいってのもあるけどちよつと恐怖もある。

まあでも最近、淀姉さんのプロレス技もほぼ無くなった、というか脱走を試みても罰が良い所正座1時間か、執務室に連れてかれて一緒に書類やるぐらいになった。

まあ、ここで俺が変な気を起こさなければ多分大丈夫だと思う。

「……なんか今失礼な事を考えましたね?」

「い、いや、そんな事は……。」

あー淀姉さんからの視線が痛い。

「……まあいいです、ほら、拭くのでじっとしててくださいね。」  
「……ういっす。」

ゆっくりと丁寧に髪の毛や背中をタオルで拭いてもらう。なんか、こういうの懐かしいな……。

昔もこんな風に……あの時もこの川だったっけ……？

それから……ああ、川で遊んでじいちゃん家で風呂はいつて、えーつと……夏祭りに行つて……それから……それから……すごく眠くなってきた……。

「ごうちゃん。」

記憶が混濁する中、頭を拭いてくれている淀姉さんが耳元でこっそりと話しかけてきたのを覚えている。

「明日の夏祭り、もし、ごうちゃんが覚えているなら『あの場所で』待ってます。」

……？あの場所……？……っ!!そうだ公園で!!……誰かと……？あれは誰だったろうか……？

ハッと目を覚ますともう後ろには淀姉さんは居なかった。

辺りを見渡してみるとバーベキューコンロで肉を焼いてる明石と何か話しながら取り皿の準備をしている。

この状況だけ見ると淀姉さんがタオルで拭いてくれたのは夢なのではないかとも思えてくる。

夢か現か。真か幻か。ただ、あの時、あの淀姉さんの口振りから考えるならいつかの夢に出てきた女の子は淀姉さんの可能性が高い。

……しかし、俺はその女の子の顔が『全く』思い描けない。まるで『何かに記憶を操作されているような』……。

なのでその子が淀姉さんだという確証が出せないでいた。

不思議な気分だ。狐につままれると言うのはこういう感じなのかも知れない。

「ほんと、何なんだろうな……。」

ポツリと零れた呟きに答えるものは居ない。

もう一度声が聞こえ、答えを教えてくださいませんかもしれないと耳を澄まして、聞こえてくるのは彼女達の楽しげな声とセミの喧しい鳴き

声だけだった。

川で遊んでお昼ご飯も食べた舞鶴第2鎮守府一行は川遊び最後のイベントスイカ割りに突入した！

「よーし、皆の者!!スイカを割りたいかー!!?」

「「おー!!!!」」

「明希、手短にね。時間押し気味だから。」

「えく、しょうが無いなあ……まあ、気を取り直してみんな大好きスイカを食べようと思えますが!!ただ切り分けるだけじゃあつまらない!!そしてここは川!!ならやる事は1つ!!スイカを割りましょー!!!!」

「明希、長い。」

「えく……。」

こうして川遊び最後のイベントスイカ割りが始まったのだった。

「ほいほい、準備完了〜!じゃあ順番は公平にくじ引きで行こうか。ちよちよつと作ってくるから待ってて〜」

ビニールシートの上にスイカを置いた明石はくじを作るためテントに戻って行った

「変な細工とかしないだろうな?」

「何よ〜こうちゃん私の事を疑ってるの〜?この正直がそのまま生まれてきたような明石さんだよ〜?ないない!!」

「胡散臭さで言うならこの中で一番だよお前!よく堂々と言えるな!?!」

「まあ、大丈夫でしょう。このスイカ割りのくじに細工して得する人がいるとは思いませんし……。」

否、そんな事は無い!!

スイカ割り、それは夏の定番イベントとも言えるものだ。

親や大人が管理するスイカ割りなら棒を渡す人、目隠しをする人は基本親が行う。

しかし!!これは特にそう言った役目を全部担当する人はいない。となれば彼女達が考えるメリット、それは……提督に目隠しをする役

目!!

目隠し役は基本的にスイカ割りを行う人の次の人。  
当然、何も考えずにくじ引きに挑む彼女達ではない。

『……だー!』

『……ね!』

『……しかない!』

「くじなら作ってお(いたよ)(いたわ)(いたっばい)(きました)(おー、大井っちもか〜)!!!」

……だからこそ、手の内が同じという事も有り得る事なのかも知れない。

各自、自身で細工済みのくじを作る。

くじ引きで出来る細工なんてこんなものなのである。

「よーしお前ら、細工済みって事だな。俺が作ってくるからちよつと待ってろ。」

「……………」

「……まあ、これで公平にはなりましたね。」

「……………はい。」

「まあ、そんなもんだよねえ〜。」

因みに順番は提督が1番、2番時雨、以下省略で時雨は非常に喜んだ(影でガッツポーズしてた)が特に鎮守府のいざこざを知らない風奏がトコトコと航希に寄って行き、

「…お兄ちゃん、タオル巻いてあげる……………」

「お、風奏ちゃん、サンキュー。」

となつてしまった。

艦娘ではないし、会つて2日目の風奏に時雨も強く言えず、

「そ、そんな事って……………」

「分かる、よく分かるわ……………」

「時雨、元気出すっばい……………」

「まあ、お茶でも飲みなよ……………」

「こればかりは同情するわ、本当に……………」

と共に運を試したライバル達からの慰めを貰い、天国と地獄を味

わった時雨であつた……。

スイカは明石さんが元気よく叩き割つたとき。

「よっしやー！ー！！！！みんなー！！スイカが割れたぞおー！ー！！！！

……あれ？なんでこんなお通夜みたいな雰囲気になつてるの……

？」

「明希、あなたの知らないところでは戦いが行われていたのよ。

私も負けたけど……。」

「……はあ？」

こうして川遊びは幕を閉じたのであつた。

## 就活戦争30日目

……もし、貴方があの事を忘れてしまっても、私は忘れません。

貴方の為なら、私は神様にもう一度祈りましょう。

例え、この身が海の泡となって消えようとも……。

ひぐらしの鳴き声と、遠くから祭囃子の太鼓や笛の音が聞こえてくる。

夕方になり、昼間よりは幾分涼しくなっただろう。

そしてこれから始まるのはこの日を締めくくるメインイベントの1つ、夏祭りと花火大会だ。

……そして俺には確認する必要がある、淀姉さんとの『約束』だ。『思い出せば提督を辞めても良い』と、この鎮守府に来る時に言われたが果たしてどういう事なのか。

あれだけ俺を引き止め、海軍に入隊させたのに思い出せば辞めて良いと言うのも今思えば不思議な話だ。

……もしかして、俺はこれから自身の、そして淀姉さんのパンドラの箱をも開けようとしているのではないだろうか……？

考え込む俺を他所にコイツらはテンションアゲアゲだ。

まあそりやそうだ。コイツらには全く関係ない話だからな。

「コーちゃん見て見て!!この浴衣可愛いでしょー!?風奏ちゃんと一緒に選んだっぽい!!そして風奏ちゃんのも可愛いから見るっぽい!!」

「…い、いや、私は…その…っ!」

「ああ、二人ともよく似合っているぞ。夕立の浴衣姿なんて見ないから凄く新鮮だし、風奏ちゃんも小さい時以来で懐かしい感じもするな。」

ハハハと笑いながら2人を褒めてあげる。

「おおく、こーちゃんたら夕立達に見とれちゃうっぽい?」

「…は、恥ずかしくなってきた…!」

「ハハハ、2人とも可愛いんだからどっしり構えて…いや、女の子がどっしり構えてるのは変か…いつも以上の笑顔でいてくれよな?」

そう言うと2人は恥ずかしそうに笑いながら

「っぽい!!」

「…うん。」

と返事を返してくれた。

「ごめん!ちよつと着付けに手間取っちゃって…!」

「まあ、まだ時間あるし大丈夫でしょ?」

「おー、こうちゃんも浴衣じゃん。」

「北上さくん!髪留めがまだですよ!」

おーおー、続々とやって来ました浴衣連中。

後は明石と淀姉さんか…お、噂をすればなんとやら2人もやって来たな。

「おっ待たせろっ!!いや、浴衣着るのなんて久しぶりねえ!」

お、こうちゃん、私達浴衣の美女、美少女に囲まれて夏祭りと花火大会なんて羨ましい限りねえ!」

「サラッと自分を交ぜるな気色悪い。」

「酷い!!弟に罵倒された!!もう何かあってもこうちゃんの手助けしてあげないからね!」

面倒臭い姉だなあ…まあ、美人だと思うよ?黙ってればね…大事な事だからもう一度言うね?黙ってればね。

「はあ、分かった分かった。とてもお綺麗ですよ、明希お姉さま。」

「むきー!!馬鹿にしてー!!淀からもなんか言つてよ!!」

「あら?こうちゃん、浴衣よく似合っていますね。カツコイイですよ。」

「淀姉さんこそ、よくお似合いですよ。素敵です。」

青の浴衣と黄色の帯、柄は……なんだろう?なにになに?ハナキリンって言うのか、妖精さんありがとう。

ふと、視線を上げると淀姉さんと目が合った。

すると淀姉さんはニツコリと微笑む。

………いかんいかん!!変に意識してしまう!!一旦『約束』の話は忘れよう。

「なんだいなんだい!2人してノリが悪いなあ!ま、いいか。ほら、そろそろ行こうよ!」

「車、取ってきますね。」

祭り会場は昼に行った川とは反対方向の山で行われる。

こちらもちよつと距離があるので運転を淀姉さんに任せて行くことになった。

なんか度々お願いして申しわけないな……。

そんな事考えてると後ろから時雨に声をかけられた。

「あ、あの提督……因みになんだけどさ、僕の浴衣、どうかな?に、似合ってる?」

「勿論だ、よく似合っているぞ。その藤の柄なんか素敵じゃないか?」

時雨の浴衣は黒をベースに白いラインと藤の花柄が散りばめられた浴衣だ。時雨の雰囲気によく合っていて俺はいいと思う。

「そ、そうかな?ありがとう。……えへへ、良かった。提督も、浴衣よく似合っているね。……その、カツコイイ、よ……。」

「……お、おう、ありがとう。」

なんだコイツ、そんな風に馴染めながら言われたら……不覚にも少しときめいちゃったじゃねえか……。

い、いや、空気に流されるな……祭りはそういう雰囲気になりやすいとはよく聞けど、駆逐艦相手は不味いだろ。



完全に憲兵案件だからな、時雨もとい雨音の歳はまだ15……手を出そうものなら……15？逆に言えば来年になったらOKになっちゃうのか……いや、OKでは無いけど結婚年齢引き上げはあと何年か先だから大丈夫とか言っつきそうだからなコイツ……。

というか仮に、艦娘とそういう関係になつたら確実に海軍からは逃れられない。あくまでも俺は民間企業……あー就活中に淀姉さんに追いかけて回されてた頃が懐かしいな……。

……まあ、序盤こそあれだったが、ここでの生活も悪い事だけでも無かったなと思う。最近は割と自由な時間や休みもある。そして何よりも、間宮さんのご飯は美味しいし……。

鎮守府のみんなと関わっていると面白いこともある。この間は休みに空母勢とカラオケ行ったり、鈴谷と熊野がゲームやりたいと言うのでVRでバイオ○ザードをプレイさせてあげたり（良心）、何人か誘って人生ゲームしたりもした。

……いやいやいや！情に流されるな俺！お前は民間企業で働くんだろうが！

「……とところでさ、提督、何か今……悩んだりしない？」

「……悩みならお前達に振り回される事かな。」

「いやまあ、それはごめんと言うか……じゃなくて、それにしても提督いつもより元気ないというかいつもと雰囲気が違う気がするね……ちよつと気になったんだけど、何も無いならいいんだ。」

「……そうか。」

「大丈夫ならお祭りと花火大会を楽しもうよ！僕、かき氷が食べたんだ！特にいちご味！提督は何味が好き？」

「……そうだなあ、今はブルーハワイかな。」

「ブルーハワイかあ……確かに僕も結構好きかな……そしたらさ、僕が提督の分も買ってあげるから半分こしようよ、どうかな？……？提督？」

「……あ？ああ、大丈夫だ。」

「……よし。」

勢いで生返事しちゃったけどなんて言ってたかな？まあ多分大

したことじゃないだろう。

にしても女はカンが鋭いといつも思い知らされてるがこんな事もピンポイントに当ててくるんだなあ……。

……どうなるもんかね？

そう心の中で呟く。

「あー！行けない財布忘れた!!みんなちよつと待っててお願いだから!!」

「……分かったからさつきと取ってこい!!」

こうして俺は悶々とした気持ちのまま夏祭り会場へと向かうのだった……。

時刻は17時30分、日も大分傾き、もう少しで太陽も沈む頃、舞鶴第2鎮守府一行は祭り会場に到着。

途中、明石が財布を忘れて取りに帰るというアクシデントはあったが、無事に会場に着くことが出来た。

いや、ほんと焦りましたよ！道の途中とかに落としてなくて良かった！

……忘れてただけなら良かったですね、無くしてなくて、とりあえずナレーションに入ってこないでください明石さん、まだ出番あるでしょう？

ほいほーい、お邪魔しました。

……ナレーション妖精の身にもなってくださいよ、度々出演者がナレーションとか回想に入り込んでくるとか。特に明石さんは自由過ぎます。報酬の金平糖が減るじゃないですか全く……。

……さて、どんな時でも一悶着起きるのがこの鎮守府の運命。今も何か起こっているみたいですよ？

ではまたいつか。

やってきましたはお祭り会場、見てくださいこの人集りを。この祭りの為に色んな所から人が集まって来るんですよ。久しぶりに祭

りなんて来たけど、この感じ懐かしいな……。

提督、あれを見てみる!!

ええーっ!!?!?

って誰がお祭り男だ。乗らせんなそして回想に入ってくんな明石。

てへペロ。

後で殴る。

……馬鹿姉はともかく、祭り会場は既に多くの人で賑わっており、右を見れば金魚すくい、くじ引き、左を見ればたこ焼き焼きそば等々……祭りに来たんだなっていう気分になる。

かく言うコイツらもテンション爆上がりな訳でして……

「うわあ〜!!屋台っぽい!縁日っぽい!風奏ちゃん、綿飴買いに行くっぽい!」

「…夕立ちちゃん、走ると危ないよ。」

「あー射的かあ……一丁やってみますかあ。」

「きゃ〜っ!!北上さん、頑張ってる!!」

「うは〜!お祭りとか来たのいつぶりだろ〜?お、明石さんたこ焼き食べたいなく?こうちやくん、買ってくれてもいいのよ?……チラチラ!そして……こうちやくんのお好みの子はどんな子かな?あの子かな?向こうの子かな?」

まあ、大人しくしてくれたのは隣にいる時雨と叢雲と後ろにいる淀姉さんぐらいだ。

そして、とりあえずたこ焼き買ってやるから明石は黙ってようか。主にせっかく大人しかった隣と後ろにいる奴らの視線が痛いし片方はハイライト消しかけてるし、後ろでは黒いオーラが出てるのが分かる。

ともかく、このままコイツらを自由にさせておくと全員はぐれて大変な事になりそうだ。

さつきからうるさい明石にたこ焼きを買って1個口の中にねじ込んで黙らせ、綿飴を買って食べている夕立と風奏ちゃんを回収し、射的を楽しんでいる北上と大井の元へ向かう。

「いや、さすがにあのぬいぐるみは無理があつたかあ。まあ、駄菓子が回収出来ただけでも良しとしましょうかね。」

「北上さんがこんなに頑張ったのに……あの屋台、インチキしてるんじゃないでしょうね？ちよつと一言……。」

「はい、集合〜。」

「お、こうちゃん、いつの間に。あ、こうちゃんにもあげるよ、サメジャーキー。」

サメジャーキーとはこれまたピンポイントに珍しいもの持ってきたな。まあ結構美味いから貰うけど。

「北上さんの時間を邪魔するのであれば提督でも容赦しません……。」

お前は言うこと一つ一つが恐ろしいわ。俺、一応提督だぞ？

「はーい！注目〜！」

お、こういう時のリーダーシップに定評のある叢雲さん!!

「とりあえず全員確認よ、はぐれた時の集合場所は祭り会場の入口、後全員携帯電話は持つてるわね？」

そうそう、集合場所の確認と連絡手段の確保は大事だよな。

「そして最後、自由行動もするのはいいけど、私達はこの脱走癖のある提督がいる事を忘れては行けないわ。だから交代で提督の監視をすることにしたわ。」

そうそう、脱走癖のある提督を………は？

「確かにそうだね。」「叢雲ナイス！」

「まあ〜今までのパターンならね〜。」「こうちゃんに何してもらおうかな〜？」

「し、仕方ないですね!」「そ、そう!仕方なくです!脱走するのは違反ですからね!」

「夕立と風奏は2人でコイツの監視をお願いね。それと夕立、風奏を連れてあんまり遠くまで行かないこと、いいわね?」

……話が勝手に進んで行ったけど今回脱走するのはパスだな。まあ監視役がつかないわけではないか。それに今回は淀姉さんの件があるしな、気になるし逃げる訳にも行かないか。

「叢雲ちやくん！順番なら任せて！こんな事もあるうかと明石さんくじを……」

「順番はこの輪投げの順位で決めるから大丈夫よ。1位から好きな順番を選ぶ。同じ順位はジャンケン。」

……後、わたしが言うのもただけと明石さんそのくじに細工してたの見たし、そんなの使わないわ。」

「あ、はい………すみません。」

馬鹿な奴め、自分の考えが上手くいかなくて悔しそうな顔してるぜこの姉!!

「おおく、いいねえく。」

「ま、まあなんでもいいですけど……。」

「とりあえず、それならフェアですね。」

「うん、それで行こう。」

「夕立、負けないっばい！」

「…私も、頑張る。」

この屋台の輪投げは1人6投、10から100までの棒が立っており、今回景品は関係無いが合計が100点以上で景品が貰えるというものだ。

まあとりあえず順番は最早関係ないな。誰が来ようと脱走する気が今回は無いから純粋に祭りを楽しむとしよう。

そして種目は輪投げか……叢雲が輪投げをチョイスしたつても最近のアイツは命中率が高かったからそこを信じてのこれなんだろうな。

まあ運任せになると時雨とかの方が強いし、輪投げとなれば自身の実力次第だし、ましてやそこらの屋台なら仕込みも出来ない。いつも裏でなにか仕込んであるこいつらにしてはフェアな勝負だな。

……にしてもなんでこんな監視役の順番を勝負してるんだこいつら？

「提督さんと回りたいからですよきつと。」

「うお!?びっくりした……脅かすなよ妖精さん。」

「それはすいません、とりあえず皆さんの順番争いは提督さんと

イベントに行く為ですよ。ほらこのチラシに。」

「ほく、この祭り中にちよいちよい挟まれてるイベントに行きたいのか。」

なにになに？スイカ割り、流しそうめん体験、大食い対決、ビンゴ大会、盆踊り、ラストに花火大会か。はーはーまあ色々あるなあ……となるとスイカ割りは昼間やったから多分1番最初が不人気だろうな。

お、輪投げ勝負始まったな……最初は言い出しっぺの叢雲からか。

「なんか分かってそうでわかってない感じですねこれは。私としては皆さん素直になれないからああいう感じになってるけど実際は……って感じがしますけどねえ」

「はは、そうだったら嬉しいけどその後面倒な事になりそうな予感しかしないな。まあ無い無い、俺とアイツらは昔っからの腐れ縁みたいなものだからさ。」

「ソウデスネー……はあ、素直じゃない人達と捻くれ者の仲介は大変です……。」

「ん？なんか言ったかー？」

何か妖精さんが「そうですね」以外にも言ってた気がしたけど祭囃子と参加者の喧騒にかき消されてしまった。

しかも「そうですね」も棒読みだった気がするし、気になるところだがまあいいか。

お、叢雲の奴は360点か、まあまあ高得点だな。

俺も暇だしコイツらの後にやってみますかあ。

因みにこの後提督さんが輪投げをやった結果、180点という微妙な結果に終わりました。提督、飴ちゃんGETおめでとうございます。

『うっさいやい！飴ちゃんが欲しかったんだよ！』

皆さんの順位はまた次回に、では御機嫌よう。

## 就活戦争31日目

1番手、叢雲……始

「やっぱりこういうのは言い出しつpegが1番になるもんなのかね？」

そう言うのと叢雲はクスクスと笑いながら「かもしれないわね。ちよつと予定とは違つたけど、光栄に思いなさい？この私が最初にアントとお祭りを回つてあげるわ！」と言い返してくる。

とりあえず2人でスタスタと緑日の屋台を見ながら歩き出す。

叢雲の浴衣は白に薄い紫の花柄の浴衣だ。

全く、この初期艦様は……まあ、会つた時と比べればコイツも表情豊かになつたもんだよな……。

高校に入学したばかり頃の叢雲は周りを寄せ付けけないプレツシャーを放ちまくつて、演習の時も相手に合わせるなんて事はしない孤高の一匹狼みたいに尖つてたからな。

それがこうして仕事を手伝つてくれたり、身の回りの世話も焼いてくれたりする……まあちよつとやりすぎというか、もうちよい放任してくれてもいいかなー？

現在の叢雲がどんな人かと言われると舞鶴第2鎮守府に所属する全員が口を揃えて『鎮守府のオカン』という。

姉妹艦の初雪からは『私のお母さんよりもお母さんっぽい』との事だつた。

俺の脱走計画では淀姉さんの次に警戒すべきターゲットの1人でもあるので偶には大人しげフンゲフン……ゆっくりして貰いたい。

「……アンタなんか失礼な事考えてない？」

……叢雲がジトーつとこちらを見てきたのでこの話はおしまい。

「い、いや、そんなことは無いぞっ。」

「アンタっ……ま、いいわ もう……ほら、時間は限られてるんだからシヤキシヤキ歩くー！」

「へいへい。」

「返事ははい、そして1回!!それと……」

前を歩く叢雲が急に立ち止まる。ぶつかるところだったぜ。

「ん？どうした？」

なんかソワソワしてるな……トイレ……いや違うな、俺の手と自分の手を交互に見て……ああ、なるほど。

「ああ、はいはい、はぐれた拍子に逃げられちゃ堪らないって事か。ほれ、袖でも掴んどけよ。」

「そつ、そうよつ！アンタはすぐに碌でもないこと考えるからね！もし、逃げたりしたら憲兵隊と大淀さんに報告するから!!そのつもりでいなさい!!」

憲兵隊と淀姉さんのコラボはやバいですよ。

「わーったわーった！逃げませんよ今日は。」

「ふんっ！どうだか……とりあえずアンタ、手、出しなさい！」

「はいよ。」

5秒ほど叢雲は唸るように俺の左手を見つめる。なんか食われそうで怖い。

そして意を決し、俺を掴んできた……袖じゃなくて手を。

「……あのー叢雲さ」「とつ、とつとと行くわよつ！」

俺の言葉を遮るようにして叢雲は俺の手を引っぱり、ずんずん前を進んでいく。

叢雲の耳元が赤く見えたのは祭りの明かりのせいだろうか……。

それもそうだがそんなことよりも……

「叢雲そんなに急ぐと……」

「急いでなんか！……きやつ!？」

そういうや否や、パキツという音と共に叢雲がバランスを崩す。

「うお危ねっ!？」

航希は慌てて繋いでいた手を引き、間一髪叢雲を引き寄せることが出来た。

「あ、ありがと……。」

「叢雲今日どうした？いつものお前らしくないぞ……？」

2人はまだ気がついていない様なので補足しておくのと今の2人は航希が叢雲を抱き寄せる形で密着状態、人が大勢くるお祭り、その



大勢のど真ん中で抱き合っていれば目立つのも当然である。

「お二人さん見せつけてくれるねえ〜!」

「ヒューヒュー!!」

「ママー! 熱々カップルだー!」

「あらあら、初々しくていいわねえ〜。ほら、タクちゃん、迷惑になっちゃうからあんまり大声出さないの。」

「ばっ!? ちよ、ちよっといつまでそうしてるつもりよ!?! 離れなさい!!」

「い、言われなくても離れるわ!!」

バツと離れる2人、そこで叢雲は気が付いた。自分の履いていた下駄の歯がポツキリと折れており、少し後ろに転がっていた。

「急に転んだ理由はこれか……。」

「鼻緒が切れたら縁起が悪いって言うが歯が折れて縁起が悪いって聞かないし、まあ大丈夫だろ。何より怪我が無かったから良しとしようじゃねえか。」

「まあそうね。それはさておき、どう移動したのかしら……。」  
流石に壊れている下駄を履いて歩き回らせる訳にも行かないだろう。

しよーがないと一言言うと航希は叢雲の前でしやがみこむ。

「祭りならその辺で下駄も売ってんだろ。ほら、おぶつてやるから乗った乗った。」

「ちよっ! 恥ずかしいわよそんなの!!」

「下駄が壊れて動けないお前の手を掴んで周りに見られ続ける方が俺としては恥ずかしいんだが……。」

再び周りを見渡す叢雲、屋台のおっちゃんや通りすがりの人、子供達と様々な人から見られていると理解した叢雲は壊れた下駄を手におずおずと航希の背中に乗った。

「よーし、掴まってるよ……にしても懐かしく感じるな〜。」

「……何がよ。」

「いやほら、俺が鎮守府来て最初の日、お前が鎮守府を案内してくれただろ? んで食堂に向かう時、おんぶしたってやつ。」

「……あー、あつたわね。とりあえず恥ずかしいから忘れなさい。」  
「それは難しい相談だ。友人と飲みに行つて帰りにコンビニで明日の朝飯の食パン買おうとしたらいきなり拉致られて、気がついたら鎮守府に居た。」

懐かしい記憶が脳裏に浮かぶ。コンビニ店員に変装した淀姉さんがあんな所まで追っかけてきてるとか思う？

「……ものの例えだけとお前が初めて明石を見たとしてあのハイテンション馬鹿の顔を忘れられるかつて話と同じよ。そんな日の出来事を忘れられると思うか？」

「……無理。だけどアンタは忘れなさい。」

ふうー、むちやくちや言つてくれるぜコイツう……。

こうして叢雲をおぶつて5分ほど歩いていると下駄を売っている露店に辿り着いた。

「ほれ、着いたぞ。買ってやるから好きなの選べ。」

「え!?だ、大丈夫よ!それぐらい自分で払うから!」

「いーつての……じゃあまああれだ、普段執務を手伝つてくれる初期艦様へのお礼つて事で。」

「……なんか今日のアンタ変ね。いつもならそんなこと言わないと思うけど……変なものでも食べた？」

「食つてねーよ!……まあ、祭りの時ぐらいはつて事だよ。……

早く決めないと俺が適当に決めちまうぞ?」

「……そういう事ならアンタに選んでもらおうかしら?ちょっと選んでよ、この叢雲様に合いそうな素敵な下駄を。」

「なんだよ全く……俺のセンスにあんま期待すんなよ……?」

「じゃあ、期待しておくわ。私は目をつぶってるから選んだら教えなさい。」

やめてくれよ俺プレッシャーに弱いんだから……。

航希はじつくり一つ一つ下駄を見て選ぶ。

そして数ある下駄の中から一つを見つけた。

直感的にこれだと感じたのだろう。

露店のおばちゃんにお願いしてお勘定してもらおう。

なんか察したようにおばちゃんがニコニコしながら小指を立ててきた。

違うんです、そういうんじゃないかもしれません部下なんです。

まあそんな事も伝わるわけはなくおばちゃんから下駄を受け取る。

「毎度ありがとう、大切にするんだよ?」

おばちゃん、二重の意味を込めたその言葉は俺は聞かなかった事にするよ……。

まあ、しない訳じゃないけどさ……。

さてここからが本題、この下駄が初期艦様のお眼鏡にかなうかどうか……。

「ほれ、買ったぞ。どつか座るところは……。」

近くにあったベンチに叢雲を下ろし、足元に下駄を置く。

「それじゃあ、司令官直々に選んだ物を見せて貰おうかしら!」

叢雲は閉じていた目をパチツと開き、足元に目を向ける。

「どうだ?正直、女物はよくわからんから……。」

「……意外ね。もっと微妙なのが来ると思ってたのだけれど、可愛らしいのが来たわ。」

どうやら、彼女のお眼鏡にかなったらしい。

俺が選んだのはヒール型で黒の漆塗りに桜色と赤い紐を合わせたの鞆柄の下駄だった。

「そいつは良かったよ……うっし、じゃあどうする?交代の時間まで適当にぶらつくか?」

「そうねえ……あ、アンタちよつと向こうで売ってるりんご飴買ってきてくれるかしら?今度のお金は私が出すからさ。その間に私はこの下駄が履きやすいか試してるから。」

チャリンと叢雲から小銭を受け取る。

「ああ、オツケーオツケー。んじゃちよつくら行ってくるからそこから動くなよ?」

ベンチから50メートルほど離れたりんご飴の屋台に向かい、屋台のおっちゃんからりんご飴を2つ貰う。

そして先程いたベンチに戻るとそこに叢雲の姿は無かった。さっきの下駄屋に居るのかと振り返るとそこにもいない。

「おいおい……叢雲の奴、動くなって言ったのに……。」

探しに行こうか迷っている後ろからトントンと肩を叩かれた。帰ってきたか。

「叢雲、あれほど動くなって……おい……。」

振り返ると叢雲はそこに居た。ただ振り返るとほっぺたに指が当たるあれをしてきた。

「何ぼーつとしてるのよ、ずっと後ろに居たわよ?」

……意地の悪いことで。コイツ俺の視界の後ろに回り込んで遊んでやがった訳だ。

「まあまあ、良いじゃないの。それよりほら、どうかしら? 似合う?」

正面向いて叢雲を見てみると先程購入した下駄と頭には狐のお面を付けていた。

「……………」

「航希? 何か言いなさいよ?」

「あ、ああ! よく似合ってるぞ!」

「アンタねえ……もうちよつとあるでしょう……まあいいわ。

……それともさっきの間は、私に見惚れてた?」

「う、うっさい! 違うわ!」

「……………ぶつ、あははは!! アンタも可愛らしいところあるのね!」

くっそくなんか負けた気がしてならねえ……。

……確かに見惚れてた所はあるけどよ、だって買ってあげた下駄を履いてくれてあの叢雲に狐のお面は反則だろ……。

そんな事を考えていたら腕を掴まれてぐいっつと引かれた。

「ちよつ! 叢雲危ない危ない!! 飴飴!!」

「ほら、行くわよ! グズグズしないの! 時間は限られてるんだから!!」

彼女に腕を引かれるまま2人は祭りの人混みに消えていった。

提督さんは叢雲さんという狐に化かされたのかもしれませんがね……。  
まあそれは叢雲さんも例外ではなく、提督という狐に化かされているかもしれませんが、2人共に耳まで真っ赤にしていたのですから……。

1番手、叢雲……終

2番手、時雨……始

その後、時雨達と合流し叢雲は夕立達に引っ張られる形でイベントの盆踊りに参加して行った。

「じゃあ次は僕だ。よろしくね、提督。」

「物は試しで聞くけど、今日は脱走する気はないって言ったら1人にさせてくれる?」

「無理だね。」

「ぼっさり言われた。まあそりやそうだよな。」

「そんな事考えないで普通に祭りを楽しもうよ?こんな時ぐらいでしか羽を伸ばせないんだから。」

「切ないねえ……帰ればまた書類地獄が待ってるなんて考えたら逃げたくもなるわ……。」

「その時は監視がてら僕も手伝ってあげるよ。」

「そりやどーも。」

「やっぱりこの鎮守府から逃げ出すのはまだまだ難しそうだ……。」

-----  
こうして俺と時雨はとりあえず露店を見ながらぶらぶらするこ  
とにした。

目に入つて気になるものがあれば呼び止め、店に寄つていき、食べたり、遊んだりした。

……射的とかやったけど、時雨の奴めちやくちや上手かった。

……俺も大学の講義で多少は銃を扱う事はあったから行けるかなくなんて思つてたけど常日頃から海の上で主砲撃つてる訳だから上手いのもしれない。

格好つけようとしたら向こうは色々取つてて、対して俺は何とか手に入れたよくわからんキーホルダーだった……何でキリンが主砲と魚雷発射管を装備してるんだろ?……キリン改二?何それ?

「あはは!中々面白かったね!」

「まあ俺は惨敗だったがな。流石に艦娘と射的は勝てないか。」

「これ勝負だったのかい?」

「……まあ、あれだ。男には負けられない物つてのもあつたんだが……まあそれはいいとして、次はどうするよ?また適当に回るか?」

時雨は「うーん……」と考え込む。暫くすると何かを思い出したように顔を上げた。

「そうだ!かき氷!提督、ちよつとそこのベンチで待つてよ!」

「お?おお、あんまり遠くに行くなよ。」

「すぐ戻つて来るから!」

言葉通り時雨はすぐ戻つてきた。かき氷を2つ手に持ちながら。

「はい、提督の分。」

「え、いいのか?」

「このぐらいどうつて事ないさ、ブルーハワイ好きって言つてたし、ブルーハワイで良かったかい?」

「あれ?俺、ブルーハワイ好きつてお前に言つたっけ?」

「もー!お祭りに行く前にかき氷の話をしたじゃないか!忘れちやつたの?」

「……あー、すまんすまん。」

「とりあえず溶けちゃうから食べようか。」

「それもそうだな、頂きます。」

「頂きます。」

シャクシャクとかき氷を頬張る。ブルーハワイのシロップが適量かかってて良かった。偶に全然シロップかけない店とかあるからな……。

「……提督、僕との話を忘れてた罰としてそのかき氷、少し僕にちようだいよ。」

「そりゃ、元々お前が買ってきた物だから幾らでも……。」  
ブルーハワイのかき氷を時雨に差し出すが手で止められる。

「出来れば、あーんって食べさせて欲しいんだ。」  
マジか、時雨の奴も大胆に来るなあ……。

幸いここは通路から少し外れた場所、人通りも多くはなかった。時雨がジーツと見つめてくるし、観念した。パツと終わらせよう。

「……分かった分かった。ほれ、あーん……。」

「あーん……うん、ブルーハワイも美味しいね。じゃあお返しに僕のいちご味をあげるよ、はい、あーん。」

「いや、俺は「あーん!」……はあ、あーん。」

口の中にいちごシロップの味が広がる。これはこれで美味しい。「いちごもいちごで美味しいな……。」

「でしょ?もう一口あげるよ。」

そして、お互いのかき氷をあーんで食べさせてあげるといふ傍から見ても甘ったるい空間が暫く続いた。

2人がその事に気がついたのはかき氷が無くなってふと顔を上げてからだった。

—————

かき氷を食べ終えた2人は恥ずかしさを誤魔化すかのように歩きだし、すぐ近くにある神社の階段で腰を下ろした。

「……なんであんな恥ずかしいことを暫く続けていたんだろう俺は。」

「ま、まあいいじゃないか。人の噂も七十五日って言うじゃない

か。というか噂になる事もないと思うけどね。」

「そうだ、忘れよう。さっきのを見ていたやつ、忘れろ。」

「そうすれば全て丸く収まる。」

隣の時雨を見れば、先程までニコニコしていたのに今は神妙な顔をしている。

「何か考えてるのかな?」と思った矢先、時雨が口を開いた。

「……相良君はさ、この仕事と言うか、提督を辞めたいかい?」

「……。」

「確かに押し付けがましいとも思ってるし、大淀さんから無理矢理連れてきちゃったって言うのも聞いている、僕としても罪悪感を感じてるんだ。……当の本人である大淀さんは僕なんかよりもそう思ってるんじゃないかな……。」

時雨の顔を見れば今にも泣きそうな顔をしていた。

「……誰にも言わないか?」

「勿論。」

確認を取り、一呼吸置いて俺は口を開いた。

「……辞めようとは思っている。」

「……そっか。」

時雨は悲しそうに微笑み、空を見上げた。

そこで相良の言葉は終わらなかつた。

「だけど、最近それが分からなくなつた。」

「……え?」

「確かに辞めたいと思ってる。朝は早い、仕事もめっちゃやる、休みも中々取れない、淀姉さんも……最近はお優しくしてくれるけど、最初の頃は怖かつた。」

時雨は黙って俺の言葉に耳を傾けてくれた。

「辛い事の方が多かつたと思う。でも辛い事だけでは無かつた。」

「……楽しい思い出も沢山あった! 飛龍達とゲームしたり、ドロケイしたり、みんなボロボロになりながらも海域を解放した時なんか達成感が凄かつたし、紆余曲折あつたけどお前達と京都市内やこうして田舎に遊びに来てる!……だからこそ分からない、俺はもう軍関係の仕事



には就かないって思ってたのに……っ!」

自分の心の中の言葉を話す度に感情が制御出来なくなっていた。もしかすると、俺は泣いていたのかもしれない。

時雨は立ち上がり、しっかりと10秒待ってから口を開いた。

「なら、今は分からないでいいんじゃないかな?」

そのまま時雨は俺の後ろに回り込み、そっと抱きしめてくれた。

「急がなくてもいい、ゆっくりで良いんだ。僕は相良君が答えを見つけられるまで傍に居るよ。例え、それが提督を辞めるという答えだったとしても、僕は傍に居る。笑って『また遊びにおいでよって』言っただけだから……。」

「しぐ……雨音え……っ!!」

そこで改めて俺は涙を流している事を理解した。

背中に雨音の優しい温かさを感じながら。

2番手、時雨……終

## 就活戦争32日目

3番手、北上&大井……始

時雨に話を聞いてもらい少しスッキリした。

あれからお互い無言で空を見上げて過ごし、時間になったので合流地点まで戻ってきた。

「お、きたきた。こうちゃん遅いよ。」

「北上さんを待たせるってのは何事ですか!」

「すまんすまん、時雨と空見てぼーっとしてたら時間ギリギリになっけてさ……。」

「……は?」

「え、何それうらや……ゲフンゲフン、まあいいよ大井っち、あたし達もその時間が回ってきたわけだしさ。」

「……そうですね、じゃあ提督、行きますよ。」

「おう、じゃあ時雨、夕立と風奏ちゃんを頼んだぞ。」

その件の2人は現在、すぐそこにある金魚掬いの屋台に夢中だ。

「うん、任してよ。……それと提督、もし、また何かあったら僕に話してよ。話、聞くからさ。」

「……ありがとな。」

なんやかんやでこの時雨と回った時間が名残惜しい気もしなくないと思っていた俺だが背筋に冷たいものを感じるのだった。

「こうちゃん?」「提督さ?」

嫌な予感を感じながら振り返ればすぐ後ろに大井・北上コンビが黒いオーラを放ちながら立っていた。

「ぬお!?びっくりした、脅かすなよ……。」

「提督、女の子を待たせるのは良くないよ。ほら、行った行った。夕立く風奏ちゃん、二人とも調子はどうか?……って、夕立!取りすぎ!!取りすぎだ!!」

……風奏ちゃんはともかく、夕立の動向が心配になってきた。

ともかく、これ以上2人を待たせる訳にも行かない。あの二人は

時雨に任せよう。

「すまん、本当に待たせたな。」

「……ええ！本当に待たされました！」

「そうだね〜大分待たされたね〜。こうちゃん、これはこうちゃんの身体で支払ってもらうしかないようだ…。」

「き、きききき北上さん?!?!」

なんか一人勘違いしてる奴がいるぞ。誤解といて北上さん。

「……北上。」

「はいはい分かってますよー。でも待たせた分、残り時間はあだし達を楽しませてよねー。」

「か、身体で……提督の身体で……。」

全っ然分かってねーじゃん!!はいはい、じゃねーよ!!

「大井の誤解を解けての!!分かりましたよ!!身体つてのは俺がエスコートしろってことだろ?!射的でもわたあめでも好きな所連れていきますよ!!」

「……へ?」

「おー、こうちゃん太っ腹ー。」

この2人と回るのは疲れそうだ……。

さて、エスコートする、と言い切ったは良いがはてさて何をしたらいいもんか……。

件の2人は近くの縁日の屋台でよくあるパンチボックス(番号を選んでその中身の景品が貰えるやつ)やらに夢中だ。

実際、この2人は俺抜きでも楽しめる筈だしな。

あれ?俺、いらぬ子?

なーんて思っていると不思議そうな顔をして2人が戻ってきた。どうせ当たった景品がしょぼいとか……またお前かボクカワウソ。

「こうちゃん、これなんのキャラか知ってる?」

「俺もなんなのか詳しくは知らないんだが、ボクカワウソとか言

う奴らしい……。」

「謎だわ……。」

ここまでよく見かけると何かの縁を感じざるを得ない。なんなんだよボクカワウソって。

いや待て、コイツ魚雷を持ってるぞ……大本営、なんかこのキャラに1枚噛んでる感じですかね？

「物は試しだしさ、こうちゃんもこのくじみたいなやつやってみてよ。もしかしたらまた別のボクカワウソ？が出るかもしれないし。私達ももう1回引いてみよつか。」

「北上さんがやるなら次は私も引いてみようかしら……にしても何度見ても謎ね……。」

「みんなでやるのか……まあ構わんけど、流石にもうないだろ……。」

1回300円なのでついでだからこいつらの分も払ってやった。  
—————

「ほんとなんなんだよボクカワウソって……15種類＋シークレットverが3つあるとか聞いてねえよ……。」

俺と大井はそれを見て止めたが、北上は

「なんかやつてるうちに可愛く見えてきた、ちよつとコンプリート目指すわー。」との事で諭吉を屋台のおっちゃんに渡して箱をパカパカ開けていた。

流石ハイパー北上様、謎感性だわ…。

てか何これ？ボクカワウソ専用のボックスなの？

主砲とか魚雷は分かるんだけどさ、俺が当てちまったシークレットverの1つであるボクカワウソ改（一航戦）とかもうカオス過ぎる訳分からねえ。

「とりあえずどうするか……あの状態になった北上を動かすのは難しそうだし……かと言ってあんまり遠くまで行く訳にもいかんしな。」

近くの壁に寄りかかって隣で同じように壁に寄りかかる大井に

話しかける。

「そうですね……あ、あそこにある綿飴でも食べませんか？」

「お、いいな。そうしよう。」

とりあえず北上に一声かけての近くの綿飴屋台へと向かう。

「さっきの所で出してもらったので今度は私が出しますよ。」

「別にそんなぐらいい気にしなくてもいいって。」

俺の財布を押し退けて、自らの財布を取り出す大井……財布を

……

巾着をポンポンゴソゴソ、そしてパタパタと自分の至る所を叩く大井つち。

「お、おい、まさか……。」

ぽかんとした表情から一変、じわじわと目に涙を溜める大井つちがそこにいた。

「お、お財布……落としちゃった……。」

あー、やっちゃいましたかあ……。

「よし、ひとまず落ち着こうか。心当たりは？」

しかし大井は首を振るばかり。

「とりあえず、来た道に戻ろう。北上がいる店に落ちてるかもしれない。」

泣きじやくる大井を連れて地面に目を向けながら来た道を引き返す。

道に戻ればさっきの店の少し先に祭りの本部があるからそこに届いているかもしれない。

少し歩いて店に戻ればそこには北上の姿が無い。

「まじかあー、入れ違いになったか？」

スマホを取り出し北上に連絡、しかし出ない。この賑やかな人混みに着信音がかき消されてしまったのかもしれない。

向こうもこちらがない事に気がつくだろうし、待っていれば折り返して連絡が来るはずだ。

仕方が無いので、もう少し先にある祭り本部まで移動。

結果として、財布は届いていなかった。

本部の人がアナウンスで呼びかけてくれるとの事でこの場で待機することになった。

「にしても珍しいな、お前が財布を落とすなんて。」  
泣き腫らした目でキツとこちらを睨む大井。

「……あなた、デリカシー無いってよく言われませんか？」

「すまんすまん。いやな、いつもしつかり者のお前も偶にはミスをするんだなって。」

大井はちらりとこちらを見ると大きな溜息を吐いた。

「はあ、高校の頃の私を知っててそれを言うんですか？」

「んー、魚雷の命中率が低かったって言うのはミスに入るものなのかね。」

「ミスですよ！ほんつとあなたはデリカシーの欠けらも無い人ですね!!だから大淀さんにいつも折檻されるんですよ!!」

「その勢いだ。」

「え？」

「勢いの無い大井つちなんて大井つちらしくないからねー。  
……つて、今の北上に似てない!？」

「……ぷつ、全然似てないですよ！北上さんを汚さないでください!!」

うがー！とぼかぼか殴られた。  
その手がピタリと止まる。

「……どうしてそこまで私にしてくれるんですか？私、性格もきつしい、めんどくさい女だと思っんですけど……。」

潤んだ目でこちらを見つめる大井。

「なんで、だろうな？」

「ちゃんと答えてください。」

これは何かしら答えを出さないと解放してくれないパターンだな。  
な。

「……大井が放っておけないから、かな。」

「……本当にそれだけですか？」

「……どうしてそう思う?」

「……女の子からそれを言わせます？……いや、これはめんどくさい女ですね、ごめんなさい。」

2人の間に沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのは大井からだった。

「私ですね、北上さんが大好きです。可愛らしい顔、憎めない行動、全てが大好きです。」

「ああ、そうだな。」

「そして、私にはもう1人大切な人がいます。」

「……へえ、あの鎮守府にか。」

「そうですね。」

「……。」

「出会った時はなんて面倒な人だろうと思っていました。やたらと突っかかって来るし、指示も不可解。でも、私を、私と正面から向き合ってくれた。」

「私と同じようにめんどくさくて、サボり癖がある、デリカシーも無くて何度もムカつきました！でも……いざと言う時は頼りになって優しい人で……。」

「私はそんな人の事もあいし……」 p r r r !!!

幸か不幸か鳴り出したのは俺の電話だ。

「……電話ですね。」

「いや、でも……。」

吃る俺に大井は誤魔化すように笑った。

「出ないと電話が切れちゃいますよ!!さっさと出る!!」

大井から急かされるようにして電話に出る、相手は北上だった。

「…北上、いや、なんでもない。今どこにいる?」

『そういうこうちゃん達こそ、あたしを置いてどこ行つたのさー。』

「ちゃんと向かいの綿飴屋に行くって伝えただけだな……まあ連絡がついて良かったわ、今祭りの本部に来てるからそこまで来てくれ。」

『祭りの本部……あー、あれか。おーい、こうちゃん、大井っちー。』

「なんだ近くに……お前そのボクカワウソの量は頭おかしいわ……。」

見れば大量のボクカワウソのキーホルダーを巾着に付けた北上が現れた。

「いやー、最初の店でコンプリート出来なくてねー、おっちゃんに聞いてほかの店ハシゴしてたんだわ。おかげでほら、こうちゃんに貰ったシークレット含めて3種類揃ったし。」

デデン!と掲げた3種類のボクカワウソ達。

正直、もういい。

「右からボクカワウソ瑞雲祭りVer、秋刀魚漁Ver、」

「北上、いい。もういいんだ……。」

「なんだよう、実はこのシリーズ、第2弾もあって……」

「だーっ!!もういいわ!!それより今大井が財布無くして困ってるの!!俺は探してくるからお前は大井と一緒に……」

「大井っちの財布?……ああ、ならあたしが持つてるよ?」  
今まで俯いていた大井が顔を上げる。

「……え?北上さんが……?」

「だってほら、こうちゃんと一緒に回る前に大井っち射的するか持つててーって……もしかして、忘れてた?」

「……良かったああ〜っ!!」

え?結局、大井のおっちょこちよいつて事?

「……まあ何はともあれ見つかって良かったわ。お前気をつけろよな。まだまだ大井もおっちょこちよいだな。」

「……ムカツと来ました。今度、酸素魚雷の刑に処します。」

「理不尽過ぎるッ!!」

まあ、何はともあれ財布が見つかって良かったわ。

ホツとしたのもつかの間、元気な声が俺の耳に飛び込んできた。

「あー!!こーちゃんっぽい!!そろそろ私達の時間ー!!って何してるっぽい?迷子?」



「…夕立ちちゃん、ちょっと、待って…!」

「夕立!!ステイ!!ストップー!!」

夕立と風奏ちゃん、そしてそれを止めるべく時雨が向こうからダッシュしてくる。

風奏ちゃんが今にも転びそうで怖い。慌ててテントの外に出る。

「夕立くー!危ないから走るなく!風奏ちゃんが転んじまうぞ!」

全く騒がしい奴だ……。次はこいつらと回るのか、持ってくれよ俺の身体……ッ!!

「……ねえ、大井っち。」

「なんですか?北上さん?」

「こうちゃんに告るなら、私も一緒にさせてねー。」

「うぐっ!……すいません、気持ちが先走っちゃって……。」

「まー、しちやったらしちやっただで私もするから良いけどねー。」

『『これからも3人で過ごせたら良いなあ……。』』

—————

神社の奥を更に進み、道を進む。

木々に囲まれた道を抜ければ私の思い出の場所だ。

私の生まれ故郷。そして、彼と初めて出会ったあの場所。そう、

こうちゃんと初めて会ってから12年経つのだ。

夏休み三日目、1人神社の奥から伸びる道を進んでいたらまたま今回の目的地である公園を見つけた。

そして夏休みに源蔵さんの宿に泊まりに来て、ジャングルジムから海を眺めているこうちゃんと出会ったのだ。そしてその日から毎日のようにその公園に集まり一緒に遊んだ。

懐かしいこの道最後の階段を上り、思い出の場所へと足を踏み入れる。

「……変わってないわね、ここも。」

所々塗装が剥がれたジャングルジム、誰かが下から登ったであろう足跡の付いた滑り台、崩された山だけが残る砂場、風で揺れるブランコ、ここだけ時間が止まっていたかのようにも感じる。

あれから何年もの月日が経っているのにまるで昨日の事のようにも思えてくる。

……まるでおばあちゃんね。って、私はまだ20代じゃない。クスツと心の中で笑う。

私は数々の遊具の中で、ジャングルジムに向かって歩みを進める。

この時間は止まっているように感じた。しかし私の時間はしっかり進んでいる。あの頃は大きく見えたジャングルジムも今となっては私の背より頭2つほどしか大きくない。

今となってはジャングルジムの頂上に登らずともいつか見た海が見える。隣町の港に煌めく明かりともうすぐ沈む夕日に輝く水平線が美しかった。

たった数日海を見ていなかっただけで久しぶりに見るような気がした。

そこは私と彼のお気に入りの場所。彼とそこで色々な事を語り合った。学校での事、くだらない事、自分の事、そして、将来の事……。

様々な思い出が詰まったこの場所。

彼との約束の時刻はもう少し先。

私は沈んでいく夕日を眺める事にした。

でも夕日は霞んで見えない。

私は私が泣いているという事に今、気がついた。

「昔を思い出してる？」

突然耳元で声があったのでビックリしたが振り返ると瑞雲に乗った妖精さんが居た。いつもこうちゃんの傍に居る妖精さんだ。

そして、こうちゃんが初めて出会った妖精さんであり、私に『艦娘』の『大淀』としての適性を与えた妖精さんでもある。

「そう、みたいです。ここに来たら色々込み上げてきたみたいで……。」

「無理もないよ。ここは君達にとって思い出の場所でもあり、忌まわしい記憶の場所でもある。」

丁度今頃ではなかっただろうか。もうすぐ夏休みが終わろうかと言う12年前の夏、この辺り一帯は深海棲艦の襲撃に遭っているのだ。

狙いは向こうに見える隣の港町、深海棲艦の攻撃は日没、黄昏時に行われた。

こうちゃんが何故この記憶を鮮明に覚えていないか、それはこうちゃんが深海棲艦の攻撃で命に関わる怪我を被った事から始まる。

私は彼を誘い、いつもの様に2人で公園に集まり遊んだ。そろそろ帰ろうかと言う時、この公園から突如として町の至る所から爆音と共に火の手が上がっていくのを目撃した。

最初は花火かなと思っていたが、爆発と火の手は一瞬で街全体を覆い尽くす。

子供ながらにとんでもない事が起こっているとその状況を理解した。

深海棲艦の攻撃は隣町だけに収まらなかった。

異形の者達から放たれたカラスのような、はたまた白い玉、黒い玉が空を覆い尽くし、こちらへと向かってくる。

その場が危険なのは頭では理解出来た。しかし体が全く動かない。迫り来る爆発、動かない身体、そんな時私の腕を引いたのがこうちゃんだった。

こうちゃんは我が身を盾にして私を庇ったのだ。

私が次に見た光景は大量の血を流して地面に横たわるこうちゃん姿だった。

そんな彼が息絶えだえで言った言葉、それは

「淀姉ちゃん、ごめんね……約束、守れそうにないや……。」

その言葉に私は生まれて初めて『死』という言葉を実感した。

誰も助けは来ない。このままではこうちゃんが本当に死んでしまう。

そんな時現れたのがこの妖精さんだ。

そしてこうちゃんは妖精さんの力によって一命を取り留めた。  
涙を流して妖精さんに感謝を伝えた。ありがとう、こうちゃんを  
助けてくれてありがとう。」と

しかし、妖精さんから告げられた言葉に衝撃を受けた。

妖精さんはこうちゃんを助けるのにあるエネルギーを彼の身体  
に与える事で命を救った。そのエネルギーは異形の者達、深海棲艦達  
にとって喉から手が出るほど手に入れた代物であるという事。

エネルギーの力でこうちゃんの身体は保たれているが、深海棲艦  
がこうちゃんの身体にそのエネルギーがある事を知ればそれを狙っ  
ていずれ深海棲艦から狙われる事となる事。

そのエネルギーが奪われればどうなるか、エネルギーの力によつ  
て保持されていたこうちゃんの命は今度こそ確実な死となる。

何とかこうちゃんを守る術はないのかと妖精さんに詰め寄った  
ところ、深海棲艦に対抗出来るのは『艦娘』しかない。

こうちゃんの笑顔が好き、おちよこちよいな所も好き、その優  
しさが好き、挙げていけば尽きることの無い想いの数々。

そして、彼を救う選択肢は1つ、こうして私は『艦娘』となる事  
を決めた。

彼を守るため、そして何よりも彼が好きだから。

「でもそれは、こうちゃんを提督へと縛り付ける理由となつてし  
まった……。」

妖精さんは何も言わない。黙って私の言葉に耳を傾けてくれた。

「私を庇わなければこうちゃんが命の危機に晒されることなく普  
通に暮らせていた！それでも私は彼を愛してしまった！本当なら提  
督なんてやらないで普通に一般人としての人生を歩んで行くはず  
だった！でも……。」

「……離れたくないんだよね。」

「我儘だつて分かっています……でも私はこうちゃんが好きなん  
です、この気持ちに嘘はつけないんです。」

妖精さんは目を閉じフーッと息を吐いた。

「それは素直になった今、本人に直接言つてあげた方がいいかも

ね。それじゃ、邪魔者は撤退するよ。」

そう言つて妖精さんが姿を消した先にこうちゃんがいた。

あの時と同じ、私が好きな笑顔で。

「……今は夕立ちちゃん達と一緒に祭りをお祭りを回っている時間ではありませんでしたっけ？」

「その予定だったんだけどね、神社の奥に道を見た途端、行かないといけない気がしてさ、夕立と風奏ちゃんにはこの後焼きそばとチョコバナナ、イカ焼き、ヨーヨー釣りに射的をやつて、花火大会を見て宿に戻ったら一緒に寝るつて契約で順番を後にしてもらつたよ。」

「あらあら、モテる男は辛いですね。このペースだとお祭り終わつてしまいますよ？」

「茶化さないでくれよ、淀姉さん。」

しばし沈黙が辺りに立ち込める。

そしてその沈黙を破つたのはこうちゃんだった。

「…さて、俺はどこから話せばいい？」

「どこからとは……いえ、こんな事言うのは野暮ですね。では、1から行きましょうか？いつでもどうぞ。」

まあまあ焦るなど言いたげにこうちゃんは首を竦める。

「淀姉さん、俺達が話し合うなら取つておきの特等席に移動しようじゃないか。」

「こうちゃん……もしかして……」

「おっと、それより先は特等席に座つてから話そう。」

こうちゃんはジャングルジムに登ると手を差し伸べた。

あの時、約束をしたの時の様に。

私は下駄を脱ぐと彼の手を掴みジャングルジムの頂上まで登る。着物だと少し登りづらかったがこうちゃんが手で支えてくれた。

「懐かしいな……ここで淀姉さんに会つてからもう12年、になるのかな……。」

頂上に腰掛けて開口一番こうちゃんがポツリと呟いた。

「そうですね、長かったような短かったような……。」

その言葉を聞いただけで涙がこみ上げてくる。しかしぐつと堪えて続きを促す。

「12年前のあの日、俺は淀姉さんに電話でこの公園に呼び出されて、いつもの様に遊んで、夕方になればこのジャングルジムで夕日を見ながら色々なことを話した。」

私は黙ってこうちゃんの話を聴く。その言葉を一言一句聴き逃さぬように。

「色々話をしてそろそろ帰ろうかと言う時……ここは深海棲艦の襲撃が行われた。」

「……はい。」

「俺はあの空襲の時、淀姉さんを庇ってその後病院で目覚めて、その日の記憶が曖昧だった事に気がついた。」

こうちゃんは懐かしむように悲しげに話を続ける。

「いつもの様に淀姉さんと遊んでいたのだろうということは想像していたのだけど、具体的な内容を思い出そうとするとモヤが掛かったようにその時の記憶が思い出せなくなっていた。」

「……ええ。」

私の心が締め付けられる。

あの時に体が動いていれば、という懺悔が頭をよぎった。

苦い顔をしている私の肩にこうちゃんは優しく手を置く。

「……でも、偶に夢を見るんだ。」

「……え？」

顔を上げ、こうちゃんの顔を見ると彼はニツと笑顔をつくる。

「その夢では、場所は公園、夕日が綺麗な場所なんだ。顔はモヤが掛かって分からなかったけど、いつも最後に約束をするんだ。」

「……こうちゃん。」

お互い一呼吸置くと、こうちゃんは話し始めた。

私は耳に全神経を集中する為目を閉じた。

「淀姉さん、あの時の約束の言葉は」

言葉を遮るように爆音が辺りに響く。

「ドンッ!!!」

私は閉じた目が開けられない、いや、開けたくない。

その音は普段から聞き覚えのある音。全身に警戒信号が走る。目を開けた時それが花火であればどれだけ良かっただろうと思っただろう。

しかし現実とは違った。

「淀姉さん、淀姉さん!!」

彼の声に呼び戻されるように目を開ける。

そこには、

『忌まわしい過去の記憶の光景が目の前で再び起こっていた。』

数々の異形が沖に姿を現した。私は怒りを覚えたが私の今すべき事を思い出す。私は『艦娘』、『大淀』だ。どんな時でも焦りはしない。

「こうちゃん、今すぐに大本営に連絡して横須賀近辺鎮守府から応援を呼んでください。貴方はそのまま車で大本営に向かって下さい。」

「何言ってるんだ！俺も一緒に行くに決まってるだろ！淀姉さん、車まで行こう！俺は大本営に連絡するから淀姉さんは祭り会場にいるみんなに連絡して車まで来るよう」

「ごめんなさいこうちゃん、私はやらなくては行けないことがあるの……。」

「やる事は連絡……まさか、淀姉さん!?!」

私は軽巡『大淀』とリンクする。

浴衣は制服に変わり、身体に艦装を展開、どこも異常はない。

「私はここから出ます。早く駆けつけないと間に合わなくなってしまうからね。」

「正気か!? 単艦である数の深海棲艦とやり合えばどうなるかわかるだろ!! 一度みんなが集まって」

「こうちゃん、今この間にも深海棲艦の攻撃は行われています。私は軽巡『大淀』、深海棲艦と戦う為、襲われている人を救う為、大切な人を守る為に居るの。」

「淀姉さん、待ってください！俺はまだ、あの時の約束を……」

「大丈夫よこうちゃん、私は沈まないわ。必ず戻ってくる。……」

でもその前に『淀川恵』として我儘を許して。」

「ああ、なんでも言つて――」

唇に温かく柔らかい感触、全ての時間が止まったかのように思えた。このままずっとこの時間が続けばいいとさえ思えた。

けど私は行かなきゃ、町を守る為にも、そして彼を守る為にも……。

「じゃあこうちゃん、みんなの事、頼んだわよ。約束の答えは私が帰ってきたら聞くわ。」

「……待つて！待つてくれ!!淀姉さああん!!!……ズルいなあ、自分だけ我儘言つて行くなんて……俺も行くか。」

私は沈まない、約束の答えを聞くまでは、沈めない。



## 就活戦争33日目

…悲劇は繰り返させない。

…同じ過ちを繰り返さない。

…あの約束の為、あの笑顔の為。

…あの日、あの場所で誓った想い。

そう、私は、彼と交わした『約束』を彼の口から

この耳で、頭で、心でその言葉を聞くまでは死なない、死ねるわけが無い。

夢にまで見たその言葉をどれだけ待っていたか恋焦がれたか……。

…そんな大事な言葉を奴らは遮った。

だからこそ……

「今、私は『久しぶりに本気』で怒っているのです。再びこの地に現れ、私の大事な時間を奪った事を、覚悟して下さい……。」

私は立ちほだかる異形の群れに言い放つ。

さあ、ダンスを始めましょう。

襲撃より数刻前……

「だーっ!!何なんだよあの強さ!?アタシらの砲撃をヒョイヒョイ  
躲すしよお〜!!?」

「それが大本営直属の部隊って事だろ。そうムキになるな摩耶。」  
俺は神谷、佐世保第三鎮守府の提督をやっている。

隣のヤツは高雄型重巡洋艦3番艦の摩耶だ。俺の地元の居酒屋  
『宝船』で働く親方の娘さんでもある。

どうも、先程行った大本営艦隊との演習内容がご不満の様だ。

…普段はサバサバしてて良い奴なんだけど、ちよつとカツとなり  
やすいのが難点だが、まあ、すぐ落ち着いてくれるので問題ないだろ  
う。

「うっさい!…いや、わりい、これじゃあ八つ当たりだな。はあ、  
頭では分かっているんだけどなあ…。」

「また演習する機会はあるさ。そんなときまでにもう一度戦況デー  
タを確認して対策しよう。」

摩耶も練度的にはそこそこ高いはずだが向こうはそれ以上とい  
う事だろう。まあそれぐらい無いと日本の要は務まらないよな。

「そうよ〜摩耶さん、あんまりカツカしないの。可愛い顔にシワ  
ができちやうわよ?」

「余計なお世話だっつーの!!第一よ、瑞穂、お前手を抜きすぎなん  
だよ!!早々に撤退して行きやがって!!」

「ですけど〜、提督さんと離れるのが嫌だったのです。」  
それでこっちは水上機母艦の瑞穂。コイツの話をするると長くな  
るから今は大部分は省くが元深海棲艦だ。

まあ紆余曲折を経てウチの鎮守府にやって来た奴だ。

明確にアピールしてくるのは嬉しいのだが、押しが強すぎる所が

あつてそこに苦勞している。

あとこの2人はいつもぶつかつてゐるからその仲裁をするのも一苦勞だ。

「コイツの前だからつて猫被んな氣色悪い。」

「あら、私は猫ちゃんなど被つていませんよ？トリッターで猫ちゃんを頭に乗せて被つてゐるみたいなのは見ましたが、摩耶さんも見ました？可愛いかったですよねえ〜！」

「くだらねえこと言つてじゃねえつての！人をおちよくるのも大概にしやがれ！」

「きゃー！摩耶さんに襲われるー！」

「仲がいいのか悪いのかやら…あ、提督、この道右だつてさ。」

この子は瑞鳳、真面目な子で今日の秘書艦でもある。今現在、演習場から大本営に移動中で、その道案内をしてくれている。

お姉ちゃんつ子な所が玉に瑕。

「…提督、そろそろ止めた方がよろしいと思ひますが…。」

ウチの鎮守府のお母さんのポジション。瑞鳳の姉という事も納得である。

「まあ、喧嘩するほど仲がいいつて言うしねえ。あ、これ美味しー！」

「…阿賀野さん、そのお菓子1つ貰つてもいいですか？」

「もつちろん！弥生ちゃん、あくん！」

…まあ、お菓子大好きの2人だ。正確には弥生は甘い物好き、阿賀野は全般的。

「このやろ…いや、分かつた。お前の手の平で踊らされるのもムカついてたんだ。お前がその氣なら」

「あら、その氣なら？」

「お前の恥ずかしい話から、お前が悩んでるポイントをコイツに一つ一つ丁寧に説明していく。」

「……………は？」

「まずお前、最近鏡の前やら体重計の前でウロウロ…」ガツシツがつしりと摩耶の肩を掴む瑞穂からはドス黒いオーラが出てい

る。

「摩耶さあくん？それは卑怯ではなくて…？」

「お前が売ってきた喧嘩だろ？言い値で買ってやっただけだろ？」

「やりますか？構いませんよ？」

「いい加減頭に来てんだ、いつでも来いよ。」

これ以上ヒートアップしても困るな。

「お前らもう止めろ、ここで騒ぐなら置いていくぞ。」

ピシツと2人にチョップをかます。

「いだっ!」「ひゃん!」と後頭部をさする2人

「お前らなあ…わかつてるとは思うけどこれから元帥に会うんだ。頼むから大人しくしてくれよな。」

2人とも「へいへい…」「はあくい」と返事をしてくれたが最近分かった事だがこの2人の返事は割と当てにならないという事だった。

—————

控えめにノック。

中から秘書艦らしき、女性の「どうぞ」という声。

「淀川元帥、失礼致します！佐世保第三鎮守府、神谷、入ります！」

神谷を先頭に祥鳳・瑞鳳、摩耶・瑞穂、阿賀野・弥生の順で部屋に入る。

席には淀川元帥、後ろには先程演習で相手をして頂いた艦娘達と秘書艦らしき人が控えていた。

「おお、待ってたよ。神谷君、さあ君達もそこにかけてくれ。」

淀川元帥に促され、神谷達は席に腰掛ける。

「神谷君、神谷君、そうガチガチになるんじゃない。君の部下達を見習って。」

祥鳳と瑞鳳は大本営艦娘の空母の装備に目が釘付け。

阿賀野と弥生は預かったお菓子に視線が向いている。

摩耶は瑞穂にメンチ切ってる。

比較的まともそうに見えるのは摩耶にメンチを切られている瑞穂がしやなりと俺の隣の席で腰掛けていた。

「お、おいみんな、もうちよつとしっかりしてくれれ！元帥の前だぞ!?!」

「いいんだよ神谷君、私から見れば君の方がガチガチになりすぎてて話しづらい位さ。彼女たちくらい楽にしてくれ。」

楽にしてと言われても海軍省トップの人物を前にして緊張しない新人提督はそうはいないだろうと思いつつも神谷は1つ深呼吸して気持ちを落ち着かせた。

「本当に硬くなるような内容じゃなくてね、まあ、演習お疲れだったと言うぐらいなのだよ。……天城君、君から見てもこの子達の戦いぶりはどうだったかね？」

天城と呼ばれた瑞鳳達が釘付けだった空母がずっと前に出る。

「そうですね、個々の強さはそれなりにありますが協調性という観点で見れば、きつい言い方かもしれませんが杜撰の一言でしょうか。」

天城はズバツと言いつ切る。

これには佐世保第三鎮守府の艦娘達が瑞穂を除いて悔しそうな顔をしているのを神谷は見ずとも雰囲気で察した。

瑞穂も笑顔こそ保っているが、また黒いオーラが出ている。

『何ナラ今スグココで沈めテ差し上げまシようカ?』と言わんばかりだ。

天城は「ですが…」と付け加える。

「佐世保第三鎮守府の提督さん、貴方の指示には驚きましたね。圧倒的不利な状況でも私達が何を考えているのかわかっているかの如く打開策を考え、クセのある艦隊をまとめていた…」

「…お褒めの言葉、ありがとうございます。」

「第1部隊の航空隊で陽動、大きく回りませた第2部隊が本隊を狙う。反対側からはおいさんが魚雷攻撃。」

「いや〜驚いたよ、進もうと思った所に爆雷がどんどん落ちてくるんだから〜。」

しおいと呼ばれた潜水艦はケラケラと無邪気に笑う。

「こちらの防衛には秋月さん、どうでしたか？秋月さんから見て彼女達は」

「祥鳳さんと瑞鳳さんの艦載機達も凄かったですね！天城さんの戦闘機を掻い潜って来たのは久しぶりでしたよ。しつかり撃墜させて頂きましたが…。」

ちよつと申し訳なきように秋月と呼ばれた艦娘ははにかんだ。

「その後は、私、由良が先制魚雷攻撃。今は居ませんが高雄さんが観測手を務めてました。」

薄いピンク色の髪をした由良と名乗る艦娘が呟いた高雄という言葉に摩耶が小声で「うっ…あの姉さんじゃありませんように…」と呟いたのが聞こえた。

そして一際オーラを放つ艦娘が前に出る。

「…そして最後は後方に下がるお前たちをこの武蔵が主砲で叩く予定だったのだが…上手いこと躲されてしまったな。」

まさかの名前が出てきて佐世保第三鎮守府の面々にざわめきが起きた。

『戦艦武蔵が1演習に参加…？』

『あの距離から、かつ正確な砲撃が、きたのには驚いたけど、そう言う事…。』

阿賀野と弥生の呟きにも納得だ。

今回の演出は両方、艦娘同士の試合前の顔合わせなどは行わず、どんな艦種が来るか分からないという実戦を想定して演習が行われた。

演習時、通常なら空戦をしている距離だったが、今回はその距離の砲撃で挟差コースの弾が飛んできたのだ。

この砲撃で大本営艦隊に戦艦が居るのは間違いないと踏んでいた神谷だが、その艦が武蔵だとは思いつかなかった。

そもそもというもの、大和型という艦の適合者はほとんどいない。何故なら、最強と言われた戦艦、その膨大なエネルギーを受け止

められる『器』がそうそういる訳では無いからである。

収まる器の持ち主が見つかったとて、そのエネルギーが暴走でもしようものなら辺りは火の海、器の持ち主も無事では無いだろう。そういった観点から大和型という艦はその特殊性故、一般国民には存在すら秘匿とされている。

大本営には大和型が居るといふ話は海軍学校時代から聞いていたがそんな武蔵が目の前にいるのだ。

神谷も驚きを隠せない様子だった。

「にしても早々にやられて撤退して行ったその水上機母艦、お前は何者だ？」

そんな武蔵が、瑞穂を呼びつける。

「…あら、申し遅れました。水上機母艦、瑞穂です。

どうぞよろしくお願いしますね、武蔵さん。」

「とぼけるな、艦娘名なら先程名簿で確認した。私が言ってるのはお前の本性だ。」

「武蔵さんも変わった事をおっしゃいますわね。ですから本性も何も、私は水上機母艦瑞穂ですよ。…『今はですけど。』」

「ふん、白々しい…いや待て、佐世保第三鎮守府…ああ、お前があの報告にあつた『転化体』か、なるほどな…。」

「はて、なんの事でしょうか？」

「…まあい、次は『手を抜くなよ』？この武蔵を楽しませてくれ。」

瑞穂はただ微笑み返す。神谷は一刻も早くこの部屋から出たかった。この2人の間に居たくない、寿命が縮む。

「うーん、私は演習相手同士交流を深めて欲しかったからこういった席を用意したんだけどなあ…すまないな神谷君、うちの艦隊の子、血の気が多くて。」

「い、いや大丈夫です…。」

「もっと和やかな感じで話しがしたかったんだけどねえ…さて、本題に入ろうか。一応新人提督にはこうして大本営まで来てもらい大本営艦隊との演習をしてもらってるんだ。近況の報告も兼ねて

ね。」

神谷は内心ホツとしていた。大本営に呼び出されるなど最初何かやらかしたのではないかとビクビクしていたのだ。

「どうだい神谷君、提督の仕事は慣れたかね？クセのある子も居るから大変だろう？」

「ええまあ…でも、そんなクセのある子達に助けられて何とかやって行けてます。」

淀川元帥は嬉しそうに笑った。

「そうかそうか、実に良い事だ。君達も神谷君とはコミュニケーションは取れているかい？」

淀川元帥は佐世保第三鎮守府の艦娘達に尋ねた。

神谷自身も艦娘達とコミュニケーションは取ってきたつもりなので大丈夫だと思いたいが、面と向かってダメ出し等を言われたらと考えると心にくるものがある。

「んー、そうだなあ…。」

まずは摩耶か！無難な事言ってくれ！

「強いていえば、口煩いというか真面目というか…あ、学校で言う委員長みたいな感じ！」

……褒められてんのか貶されてんのかどうなんだそれ。

「まあでも、頑張ってると思うなアタシは…：親父からも話は聞いてたし。…あー！なんか本人の前で言うのは背中がむず痒いわ。」

「瑞鳳もそう思います。新人提督さんって聞くときちよつと頼りない気がしますけど、神谷提督は細かいところキチンとしてますし、あの程度執務もこなしてましたし。ね、お姉ちゃん。」

「そうですね、偶にサボっている姿も見受けられますが…：概ね私も瑞鳳と同じ意見です。」

「そうだね、提督は怒ると怖いけど基本優しいと思います！偶にお菓子もくれるし！」

「弥生も、そう思います。睦月型の、他の子達とも、話に来てくれたり、しています、はい。」



「私は勿論、そんな提督が大好きなので問題ありません！」

だー！ー良かったあー！！適度にコミュニケーション取るって大事だなあー！！1人愛の告白して来たヤツいたけど

とりあえず内心ウルつと来ていた神谷提督だった。

「なるほどなるほど、なら大丈夫そうだな。いや何、今は無いと思いたいが昔はブラック鎮守府なんて言われていた所もあってだな、そういう心配はなさそうだね。」

その後も元帥からは海域の状況、施設の環境等様々な確認を行い、シートの項目にチェックを入れて秘書艦である天城に手渡した。

「さて、業務的な話はこれで終了だ、お疲れ様。」

「いえいえ、お忙しいのにあの大本営艦隊と演習までさせて頂けたんです。光栄極まりないですよ！」

「そう言ってくれるとありがたい、せっかく佐世保から大本営まで来てくれたんだ。ささやかだがこの後、食事の席を設けてある。改めて艦娘達の交流を兼ねてどうだい？」

「それは勿論、光栄——」

そんな会話を遮る様に勢いよく扉が開いた。

「お話し中の所失礼しますッ！淀川元帥！」

「何事だね高雄君。」

息を切らして部屋に飛び込んできた艦娘

先程まで優しげだった淀川元帥の顔付きが一変し、鋭い表情となった。

一瞬で辺りに戦闘中のような緊迫感が走った。

「ほ、報告させて、頂きます！神奈川、静岡県沿岸にて大規模な敵艦隊が確認されました！！付近の町まで20キロもありません！」

「なんだと!?!沿岸警備隊は何をしていたんだ!!今すぐ各所に連絡を取り、避難警報を出せ！天城君、至急、付近の鎮守府に出撃要請を!!秋月君達は準備が出来次第出撃準備に掛かれ!!武蔵君はここに残れ!!」

部屋の中は一気に慌ただしくなる。映像を見せる高雄、無線で連絡を取る天城、出撃準備に向かう秋月、由良。

神谷は声を上げた。

「淀川元帥!!」

すると淀川元帥は少し表情を和らげ笑顔を作る。

「すまんな神谷君、食事はまたの機会になりそうだ。」

「その時を楽しみにしております。それよりも私達にも何か手伝わせて下さい。こんな話を聞いて黙ってはいられません!!」

「しかしだな……。」

すると無線連絡をしていた天城が慌てた様子で元帥を呼んだ。

「元帥!!今、町が敵航空隊からの攻撃を受けたとの報告が!!」

「クソっ!!被害状況は!？」

「現場が混乱しているので詳細は分かりません!しかし、居合わせた艦娘が現在1人で応戦しているとの事です!!」

「くっ!!迎撃隊を急がせろ!!」

「元帥!!今電話にて連絡が!!舞鶴第二鎮守府の相良提督からで現場に居合わせたと!!それで……現在舞鶴第二鎮守府所属艦の大淀が単艦にて応戦中との報告が……」

「……なんて事だ。……恵。」

淀川元帥の顔には焦りが見て取れた。相良の所に所属している大淀と言ったら元帥の娘である大淀に間違いない。

「……淀川元帥、やはり私も参加させて下さい。私の友人が巻き込まれたと聞いては居ても立ってもいられません。」

淀川元帥は少し黙ると、ゆっくりと口を開いた。

「……危険な戦いになるがその覚悟はあるか?敵は映像を見る限りでは前回の大規模攻勢と同じぐらいの戦力だ。分かると思うが戦場では覚悟なき者からやられる……それでも来るか?」

真剣な眼差しで元帥は問う。

「私の覚悟は決まっています…皆はどうだ?無理にとは言わない。だが、俺の願いとしては手を貸してもらいたい。俺の友が困っているんだ……。」

神谷は振り返り、自分の部下達に頭を下げた。

「……そんなに頼まれちゃあやらない訳に行かないよな、アタシ

は行くぜ！」

「提督の頼みとあれば行かないわけ無いですよ！」

「そうですね！」

「ええ！」

「任せて、下さい。」

次々に立ち上がり、賛同してくれる部下達。

「どうした瑞穂、お前まさか、怖気付いたのか？」

「もう少し面白い冗談を言ってください。他ならぬ提督さんの頼みですよ？行かないわけありません。でも離れるのは嫌ですし、困りましたね……。」

チラチラとこちらを見る瑞穂。最近言いたい事は何となくわかって来た。

「瑞穂、頼む、お前の力を貸してくれ。お礼に何か1つ言う事を聞こう。」

「かしこまりました！瑞穂、全力を尽くさせて頂きますね！！」

「元帥、という訳です。我々佐世保第三鎮守府の今作戦に参加させて頂きます。……御命令を。」

「よろしい、佐世保第三鎮守府、神谷提督、現時刻を以て君の艦隊を大本営艦隊に組み込む。神谷提督に第三艦隊の指揮権を移行。準備が出来次第出撃し、敵を撃退せよ！！」

「はっ！！謹んで御命令をお受け致します！！」

一同揃って敬礼をし、退出しようとした所を瑞穂に止められる。

「……さてと、出撃する前に高雄さん、少しそちらの映像を見せて頂いてもっ。」

「ええ、どうぞ。」

高雄はタブレットを瑞穂に手渡す。

「……この艦載機、やっぱり貴女でしたか空母棲姫。」

――――  
出撃準備の為、佐世保第三鎮守府の面々は退出して行った。

残されたのは無線連絡をしている秘書艦の天城と待機命令を出された武蔵のみとなった。

忙しなく無線にて連絡を取り合う天城を他所に武蔵は窓際によりかかり、外を眺めていた。

「……さて、提督よ、どうする？ 私は奴を呼んでくれば良いのか？」

「ああそうだ、武蔵君、社にいる大和君を呼んできてくれ。君達、巫女の力が必要だ。」

「……あいわかった。」

武蔵も一言述べるとゆっくりと部屋を退出して行った。

部屋には符号を打つ音と

「……恵、どうか、無事で居てくれ。」

淀川元帥がポツリと零した言葉のみが響いた。

――――  
…もう失わない。

…もう忘れない。

…もう逃げない。

…その約束を伝える為。

その為に俺はここに居る。

「早く帰ってきてくれないと民間企業に就職しちまうからな

……。止めたいなら必ず帰ってきてくれよ、なあ、淀姉。」

さあ、俺達の戦いを始めよう。



## 就活戦争34日目

…まるで12年前の悪夢を見ている様だ。

燃える街、空と海を覆う黒い影。

全身から嫌な汗がシャツを湿らせ、警報と避難を呼びかける放送の音がそれを現実だと改めて教えてくれる。

俺、相良航輝は公園から祭り会場へと繋がる林道の坂を駆け下りていた。

今この時も淀姉さんは1人で敵と戦っている。不安ではあるが俺が活路を開いてくれると信じて出撃した淀姉さんが無事である事を信じるしかない。

「くっそー！携帯さえ繋がれば、直ぐにでもみんなに連絡出来たのに！」

何とか海軍大本営には事態を報告することが出来たが、仲間たちに連絡を取ろうとした瞬間、これも敵の攻撃なのか電波障害が起き、祭り会場にいるみんなとの連絡がつかなくなってしまっていた。

「連絡は取れないけど、アイツらの事だ、会場の入口辺りに集まってる筈だ！」

不安に押し潰されぬよう自分を奮い立たせるよう叫びながら坂道をひたすら下る。

そんな俺を何かが追い抜くように飛んできた。

「提督さん、お急ぎの様ですね。」

案の定、いつも俺の周りにはいる妖精さん達だった。

「ああ！めちやくちや急いでるよー！ついでに急ぎすぎてお前達を叩き落とす所だった！」

最初、コウモリか何かかと思っただよマジで、一瞬気がつくの遅かったらぶつ叩いてた。まあこいつらの事だし何とかなる…

「もし、叩き落とされてたら提督さんが寝ている間に、耳を齧ってたよ。」

前言撤回、間違っても手を出すのは止めておこう。

結構強いんだよこいつらの噛む力。

というかこんな時まで能天気な奴だ。ちよつとイラついたから後でデコピンしておこう。

「皆さんの場所はお分かりで？」

「携帯が繋がらないからどうだか分からないが多分アイツらの事だから入口辺りに居ると思う！」

「誘導しますよ。私達は艦娘の気配が分かるので。」

おお、ありがたい妖精さんの謎スキル！

「しかしもう暗いですね、何か灯りがあれば…」

「お？96式？96式？」

お前じゃねえ工廠妖精さん、座ってる。

お前もこれ解決したらデコピンな。

「ぶー、分かりましたよ。流石に今回は真面目で行きますよ。：ハリウッド映画ばりの照明やってみたかったなあ…。」

そんな眩きと共に、どこからともなく現れた信号拳銃を工廠妖精さんが上空へ向けて照明弾を発射する。

「どうだ、明るくなつただろう…？」

いつだかの成金風刺画じゃねーんだよ明るくなつたけど…

「工廠妖精さん、こんな時につまらないネタはもう止めておきなさい。提督さん、皆さんいらっしやいましたよ。」

1人まともなのがいてよかつたと思う。こうして林道を掛け出ると俺の休暇に付いてきた舞鶴第二鎮守府の仲間たちと風奏ちゃんの様子があつた。

「提督ー！！」

時雨達が向こうから駆け寄ってくる。

「ここだ！すまない！」

「ちよつとちよつとこうちゃん!? 一体全体何事よ！」

「アンタこの緊急時に何処ほつき歩いてるのよ!というか大淀さんは!？」

明石と叢雲が息を切らせながら叫んだ。

「俺の事は後だ、その淀姉さんが今1人で深海棲艦と戦ってる!こんな状況だがみんな行けるか!？」

「当たり前っぽい！」

「そういう事なら早く大淀さんを助けに行かないと！」  
夕立と時雨が頷く。

他の奴らを見渡せば同じように頷いた。

「とりあえず移動だ。説明は移動しながらする、行くぞ！」

「了解!!」

「皆さん、少しお待ちください。」

駆け出そうとする俺達を呼び止める声があった。

振り返れば先程のまともそうな妖精さんだった。

「どうした？移動しながらじゃダメ…ってどうしたお前…身体がめっちゃ光ってるんだが…」

照明弾、程明るい訳では無いが先程の妖精さんに光が灯っているのだ。

「提督さん、私は貴方達の覚悟を知りたいのです。本当に、大淀さんを助けたいですか？」

「当たり前だ！」

「ここに居る皆さんを信じますか？」

「勿論！」

「これからも鎮守府の皆さんと共に歩んで頂けますか？」

みんなの視線が俺に集まるのが分かる。

つまりはそういう事だ。

お前はここで身を固める覚悟があるのかと。

この妖精さんは俺にそう問いかけてるのだ。

沈黙が辺りに立ち込めた。

じっ…と妖精さんは俺を見つめる。

すつと肩に手が置かれた。振り返れば時雨がいた。

「提督、僕は君の意見を尊重する。でもひとつ言うとなれば…僕は君を信じてる。だから提督も僕を信じて欲しい。こんな時だけでも僕は言うよ、ううん、今しかない。『僕は君が大好き。』これから僕達と共に居て欲しい…その為なら僕は頑張れる。」

時雨…



「アンタの事、まあ、嫌いじゃないっていうか…ってそういう事じゃないか！アンタは私が支えてないとダメダメなんだから！！じゃなくて、く〜く〜っ！！ああもう、1度しか言わないから心して聞きなさい！！」アンタは私が支えてあげる！だからアンタも私を支えなさい！！」ふんっ！！」

叢雲…

「夕立、難しい事は言わないっばい。だから2つだけ確かな事を言うわね。夕立はこーちゃんの為なら、こーちゃんが夕立を信じてくれるならもつともつと強くなれるっばい！そしてね、『夕立はこーちゃんの手がだーい好きって事！』」

夕立…

「なーんか駆逐達に先越されちゃった感じ？でもまあ、これもワビサビよねえ。『あ、アタシはこーちゃんの事、大好きだよ〜なんせ、ハイパー北上様と大井っちだからね』ねー、大井っち。』」

「…ふえ!?ちよ、ちよつと北上さん!?私、心の準備が…おほほほ…はあ、でもこんな所でこんな雰囲気私だけ引つ込む訳には行かないわ…。はあ、提督、良く聴いてくださいね?『私、大井は提督の事も、愛してます。』」

北上、大井…

「アタシは、まだお兄ちゃんの、事を、みんなほど分かってない…だから、艦娘がどうあるっていうのは、分からないけど、お兄ちゃんの力に、なりたい、なれたらいいな…お兄ちゃんはアタシの、恩人で『アタシの、想い人だから…』」

風奏ちゃん…

「うーん、私的には全然ウエルカムなんだけど、お姉ちゃんって言う家族関係もあるから流石に言い難いんだけどなくでも！こーちゃんが望むなら私もー「あ、そう言うの大丈夫なんで…」ちよつとこーちゃん!?タンマタンマ!!流石にこんな時までこういう落ちを持たせるのよくないと思うよ!?お姉ちゃん…いや、『明石は提督の事大好きですよー?!?!?』」

…まあ、そういう事なんだろう賑やかなお姉様です事。

「…さて、提督さん、貴方はどうですか？」

妖精さんは静かに、改めて問いかけた。

その問いに俺は、一呼吸置いて答える。

「…そうだな、俺の答えは『———』だ。」

「ゴアアアアアッ!!」

「ふっ！」

グシヤリと音をたてて軽巡水級が吹っ飛ぶ。

一体、また一体と潰していく。しかし数が数だ。

数も多いが中には駆逐イ級が燃料満載のドラム缶を啜えて特攻を仕掛けてくるのだ。

弾の消費を抑える為、特攻艦には主砲、近接戦闘は明石の工廠からパクった、元い、借りてきた大きめのハンマーで対処する。

第1スロットの15・2cm連装砲の弾が無くなる。

すぐさま15・2cm連装砲を投げ捨て、2番スロットの20・3

cm3号砲を取り出す。

海も敵だらけだが、空にも敵は溢れている。

蝙蝠の群れのように蠢く敵艦載機には艀装の甲板上に取り付けである3番スロットの12cm30連装噴進砲を叩き込んだ。

「…全く、キリが無ければっ！休む暇もありませんねっ！」

そう言った矢先、敵の攻撃が止まった。

凌げたか？と思ったが、それは違った。

ゲームで例えるなら、ボス戦の始まりだ。

それまでの雰囲気とは違う個体がゆっくりとこちらに近づいて

きた。

深海棲艦達はそれに道を空けるよう左右に別れていく。

「…ツクツク、シブトイモノダナカムストイウモノハ…。」

「……空母棲姫。」

お互いに睨み合ったその雰囲気には周りの深海棲艦達も思わず後ずさる。

「タントウチヨクニユウニキコウ、オオワタツミノユビワハドコダ。ユビワノアリカイエバオマエハミノガシテヤル…。」

『大綿津見の指輪』はるか昔、大綿津見神が海の調和を保つ道具の1つとして伝えられるもので、現在はとある場所で祀られている。

伝説では、この指輪を付ければ穢れを払い、海の力を操る事が出来る…と言われている。

それならば私達、艦娘が使えば戦況を有利にする事が出来るのはと過去に指輪を嵌めて出撃する試みはあったが何か効果があるという事は無かったのだ。

「…さあ、存じませぬね。仮に知っていたとしても教えて差し上げる気はありませんが。」

当然、すつとぼけるに決まっている。

敵が狙っている物をわざわざ教える阿呆は居ないだろう…ウチの鎮守府には居ないと信じたい。

「フ、シラントイウコトハナイダロウ？カイグンゲンスイノムスメトモアロウカムスガ。」

っ!?コイツそんな事まで！

思わず動揺する。そんな情報まで知られているとは…。

「…マアアイ、ユビワノケハイモコノチカクニアルヨウダシ、マチヲヤキハラツテサガセバイイ…イヤ、オマエヲイタメツケテゲンスイノマエニモツテイツテヤルノモイイカモシレナイナ…。」

…近くに反応？そんな馬鹿な。指輪は横須賀の大和さん達が…っ!?

私は直感に従い慌ててその場から身を引く。

次の瞬間、私が先程まで居た足元が爆ぜ、辺りに水飛沫を撒き散

らす。

空中、海上に動いたものは無かった……となれば！

「アラ？ハズシチャツタカシラア……ザンネンネエ、アタツテレバクルシムコトナクシズメタカモシレナイノニ……」

音もなく忍び寄り、敵を倒す深海の暗殺者がそこに居た。

「……潜水棲姫」

考えうる最悪の状況とはこの事かもしれない。

しかし、どんなに最悪だったとしても、私は諦めることは出来ない。

この国の為にも大好きなこうちゃんの為にも。

眼鏡に付いた水飛沫を拭い、主砲を握り直す。

「ソウダ、ソノメダ……ソノメニゼツボウヲウカベルスガタガマチ  
キレナイ……ダカラ、カンタンニシズマナイデクレルカシラア!!」

こうして、宵闇の祭りは幕を開けた。

-----

鎮守府の裏にある山道を少し行くと鳥居が現れる。

鳥居を潜り、また少し歩けば今度は洞穴が口をぽっかり開けている。そんな洞穴の入口に私を待ち構える者がいた。

提督の命令通り、この社で祈禱を行う姉を呼びに来たのだ。

普段であれば、私があるとニコニコしながら掃除をしたり、握り飯を頬張っている姉だが今日ばかりは凜とした面持ちで私を出迎えた。

「…大和、薄々勘づいているとは思いますが、奴らが動いた。」

「…12年前、だったわね。」

「ああ、まだ先代の大和達の時だ。」

夕陽が差し込む境内でポツリと呟いた。

前回の大襲撃は先代の大和達が命を賭して、この国を守り抜いた。

「…場所も12年前と同じあの場所なの？」

「ああ、やはりあの場所には何かあるのかもしれないな。」

深海棲艦が2度も狙った場所だ。何かがあつた場所に隠されているのかもしれないと武蔵は睨んでいたが、大和の考えは違った。

「…私はあの場所と言うよりは、何か別の要因があつたのではないかと思つています。彼の地には私もあの戦いの後赴きました。ですがあの土地自体からは大綿津見神の気配は感じられませんでした。」

私は巫女の仕事よりは艦娘としての仕事が多い。私、武蔵には武の才、姉の大和には巫女の才が色濃く出た。

色濃く出ただけで私にも巫女の力はあるし、大和も戦えない訳では無い。もし、戦に出れば十二分にその力を振るえるだろうが、神社を守る巫女の立場としては中々戦場に行かせることも行くことも出来ないのだ。

私が海域攻略に出ている間、大和はあの場所に訪れていたのだろう。

ですが…と大和は少し濁すような言い方をする。

「…大和にしては珍しいな、何か引つかかるのか？」

「…ええ、確かに彼の地自体には気配は感じられません。ですが、確かに大綿津見神の気配、残り香と言うのでしょうか。その気配はあつたと思います。」

「…武蔵も分かると思いますが、今の社に大綿津見神は居ると言えれば居らっしゃる。」

「…しかし、大綿津見神の大部分の気配が無い。」

「私は思うのです、深海棲艦があつた場所を狙うのはあの場所自体

に何かがある訳では無く、何かが来たから大綿津見神もその場所に現れているのではないかと…。」

「……まさか、大綿津見の指輪の適性者が現れたとでも言うのか!?」

洞穴の中にある社を見れば大綿津見の指輪がそこにあつた。以前に大綿津見神の力を使えないかと、指輪を付けて出撃するという試みがあつたが指輪は何も反応しなかつた。

「確証はありませんが、私はそう睨んでいます。大綿津見神の力を感じればその力を狙う深海棲艦も現れる…そして大綿津見神も自身の適性者を探している…その適性者が現れたと。」

「……ならば、真相を確かめに行かねばな。大和よ、提督から私達に出撃命令が下つた。彼の地へ向かうぞ。」

海に夜の帳が下りてきました。大綿津見神よ、願わくば暗い私達の航路を照らして頂けますか…?」

無人となった社には指輪が海を眺めるのだった。